
～ 銀魂しんちゃん～ 大嵐を呼ぶ！ 踊る暇がありゃ映画を救え！！

虹純晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「銀魂しんちゃん」 大嵐を呼ぶ！踊る暇がありや映画を救え！！

【Nコード】

N1846D

【作者名】

虹純晶

【あらすじ】

人気アニメのクレヨンしんちゃんと銀魂がコラボ！クレシンの映画を見ようとしていた銀さんたちは、どういうわけか映画の中の世界に取り込まれてしまう。おまけにお妙や真選組まで……。実は映画に、恐るべき危機が迫っていたのだ！みんなのしんちゃんたちを守るため、頑張れ銀さん！

その壱：子供の時興味なかったアニメが大人になると妙に面白かったりする（前）
クレヨンしんちゃん、銀魂という、二大下ネタアニメをコラボさせた、めっちゃくちゃな作品です。読み終わったら是非感想をお寄せ下さい

その巻：子供の時興味なかったアニメが大人になると妙に面白かったりする

「おいー、神楽！ちゃんとしてビデオ買って来たかあ？」

「大丈夫アル。録画用ビデオ買って来たアルヨ。」

「ここは、江戸・かぶき町の一角にあるスナックの二階に位置する「万事屋銀ちゃん」の中。主の坂田銀時さかたぎんときとバイトとして働く神楽の会話を耳に止め、神楽と同じくここで働いている志村新八しむらうしんぱちは顔を上げた。

「銀さん、今夜見たいテレビでもあるんですか？」

時刻はもう夕方。新八は今日は万事屋に泊まるつもりだったが、時々姉のお妙たえがいる亡き父の道場へ帰るようにしている。

「おう、今日はどーしても見逃せない番組があるんでな。なあ神楽。」

「ハイアル。」

「で、何を見るんですか。」

「これだ。」

銀時は新八の前にテレビ欄を突きつけ、ある一箇所を指差した。新八は顔を近づけ、読んでみた。

『午後7：00』 映画クレヨンしんちゃん 伝説を呼ぶ！踊れ！アミーゴ！』

「……………」

「な？見逃せねーだろ。」

「…銀さん、神楽ちゃんはまだしも、その年でこんなもの見たいんですか。恥ずかしいと思わないんですか？」

「るせーな、お前だってお通ちゃんつうちゃんのライブに変な格好で出かけて何か大声で叫びまくってバカなことして、恥ずかしくねーのか。」

「バカとは何だ！僕らはお通ちゃんを守る聖軍なんだ！！」

「黙ってる、ダメガネ！」

「てめーも黙ってる！ていうかあんたら、いつもはそんなの見てないじゃないですか。どうしてまたいきなり…」

「あー、神樂が先にハマっちまってよお。何か主人公のちんのすけとかいうやつ、大親友っていうガキのファンになちゃって。何だっけ、風見くん？」

「風間くんアル！それにちんのすけじゃなくてしんのすけアルヨ、銀ちゃん。いい加減覚えるアル。」

「いや、俺ネネちゃん以外の名前は大して覚える気ないから。」
「ネネちゃんって誰ですか。」

「しんのすけのお友達アル。銀ちゃんはその子のファンアルヨ。はつきり言っであんな性格悪い暴君女のどこがいいか、私分らないネ。」

「うるせー！その暴君っぽくてもウサギのぬいぐるみ殴るところがちょっと可愛かったりするのがいんじゃないかねーか！大体てめーだって、あんなエリート気取りのマザコンオタク幼児のどこがいーんだよ！お前オタク嫌いだろうが！」

「マザコンもオタクも、6歳未満ならOKアル。エリート気取ってるけどやっぱり普通の男の子みたいなのが可愛いアルヨ！」

「何だとテメー、ネネちゃんはなあ…」

「あのちよつと、二人とも…」

「部外者は黙ってる、ボケエ！」

「いや、そうじゃなくて……………」

新八は困った顔で、時計を指差した。

「いいんですか？もう7時5分前ですけど。」

「大丈夫か、新八？ちゃんと録画してるか！？」

「大丈夫ですってば、しつこいなあ。僕の言うこと信用できないんですか。」

「新八みたいな地味顔は、頼りなく見られやすいアルヨ、覚えておくアル。」

「余計なお世話だ！」

新八が言い返した時、CMを流していたテレビ画面がぱっと切り替わった。

『今日は2時間スペシャル！2006年公開の映画踊れ！アミーゴをお送りするゾ！最後にお楽しみがあるかも知れないから、見れば』。

「これがしんのすけアルヨ、新八。」

「『見れば』って、何かいい加減そんな感じの子ですね。」

「仕方ねーよ、そういうキャラが売りなんだから。それより映画始まるぞ。確か始めは、よしなが先生たちが…」

「そうアル、よしなが先生がニセモノに捕まるアル。」

もはや話についていけない新八は、黙ってテレビ画面を眺めていた。

ところが。

「あれ？」

「どうしたアルか。」

映画が始まるどころか、テレビには何も映らず、さあつと白い光を放ち始めたのである。

「おい新八、やっぱお前何か間違えたんじゃないのか。」

「間違つてないですよ。大体おかしいのはビデオじゃなくて、テレビの方でしょ。」

などと言い合っているうちに…………。

ピカアアアアン！

「うわっ、まぶしっ！」

「目え開けられないよお、銀ちゃん！」

「何かで顔隠せ…って神楽てめ、どこに顔突っ込んでんだコラ!!」
「一体どうなって…」

そこまでだった。あとは目を潰すような閃光に頭の中を塗り尽くされ、銀時たちの意識は逆に、闇の中へと落ちていった。

三人とも、まるで予想していなかった。これが命がけの戦いの、序章であることを……。

その忒：同じものが好きな奴は自然に寄り合うもんだ（前書き）

『銀魂』のあのキャラもあのキャラも登場して、ますますにぎやかに！銀さんたちは一体どうなってしまったのか！？第2章の始まりです！！

その式：同じものが好きな奴は自然に寄り合うもんだ

新八は意識を失った時と同じく、強い光の中で目覚めた。
ただし、今度は真つ赤な光に照らされて。

「うつ…ん？」

うめきながら起き上がって、新八は愕然とした。どこだ、ここ？
ついさっきまでは万事屋でテレビを見ていたというのに…何で、こんな狭い路地の中に寝てるんだ？

辺りを見回し、今度は少しほつとした。新八は一人ではなかった。
すぐそばに銀時がだらしなない格好で横たわっており、神楽も銀時の服の中に顔をつ込んだまま、倒れている。二人とも盛大にいびきをかいているので、怪我をしたりとかいうことはなさそうだ。

「ちよつと銀さん…起きて下さい、ほら起きて。」

「あ…？」

銀時はぼんやりした声と共に目を開け、そして新八と同じように起き上がって辺りを見回し、新八と同じようにびっくりした顔つきになった。

「おいっ、新八！何でオレたち、こんなとこにいるんだ…！」

「知りませんよ。僕が逆に知りたいですよ。」

「んもおゝ、何アルか。二人でギヤーギヤーやかましいアル……
アレ、ここどこアルか？」

「あ、神楽ちゃん気がついた？」

「俺たち三人まとめてこんなとこへ…一体何でだ？」

「全く分かりません。確かみんなで、テレビを見ましたよね。何かを録画しようとしたような。」

「はっ、そうアル！クレヨンしんちゃんの映画はどうなったアルか！？」

「やべー、俺あの映画大好きなのに。歴代映画の中で一番好きなのに。借りるのも買うのも金かかるんだよ。」

「いや、そんなこと気にしてる場合ですか。」

新八が冷静に突っ込んだ。

「今はもつと考えなくちゃいけないことがあるでしょ。僕らは何でこんなとこにいるのか、そもそもここはどこなのか…」

「かぶき町じゃないみたいアル。ゴミもないしきれいだし、建ってる建物も違うアルヨ。」

神楽の言う通りだった。かぶき町の路地はビールの空き缶やら色んなものが落ちていて汚らしいが、ここはそんなことがない。両側に建つ家々も、木造の日本式家屋よりコンクリート製の近代的住居の方が多いようだ。

「おいおい、かぶき町じゃないとすると、どこなんだ？」

「あ…それに、時間も変じゃありませんか？僕らがテレビを見ていたのは、夜の七時頃。でも今は、明らかに夕方ですよね。夕日出てるし……」

そう、新八の目を覚まさせた赤い光の正体は、夕日だったのである。

「新八、まさか俺ら、一日近くここで寝てたんじゃないだろうな。」

「いや、それはないと思いますね。そんなに寝てたら誰かに見つけられてますよ。神楽ちゃん、どう思う？」

「うーん、クレしんの録画は大丈夫アルか…心配アル。」

「まだ気にしてんのかい！」

新八がまたまたツツコミを入れた、その時だった。何やら重い、しかし柔らかない足音が聞こえてきたのだ。

しかも、近づいてくる。

「ん？何だ？」

音がする方を振り返ると、まさにとんでもないものがやって来るところだった。

でっかい白い犬。一言で表してしまえばそうなるが、それにしてもでかさが半端でない。ライオンよりも熊よりもでかく、恐らく中型の象くらいはあるのではと思わせるぐらいの巨体だ。

こんなものがのっしのっしと近づいてきたら、誰でもびっくり仰天

するだろうが、この万事屋に限ってそんなことはなかった。

なぜというに…このデカ白犬は、万事屋のペットだったからである。

「あ、定春。^{さだはる}お前も来てたアルカ。」

「そういえば、僕らと一緒に後ろでテレビ見てましたっけ。」

「じゃああのテレビ見てたせいでこんなとこ来たったのか？わけ分かんねーよ。」

「こつちだつてわけ分かんねーですよ。でもそうと考える以外に…

……」

「新ちゃんの言う通りよ。私もそれを見ていてここに来てしまったんだもの。」

万事屋一行は思わず顔を見合わせ…それからおそろおそろ、定春を見上げた。今の声が、明らかにそちらからしたからだ。

「さ、定春がしゃべったアル…！」

「おい、そりゃあねーだろ。大体こいつはオスだぜ。女の声でしゃべられてたまるかってんだ。いくら宇宙生物だからって…」

しかし銀時が最後まで言わないうちに、またさっきの音がそれを遮った。

「やだ、バカね。違うわよ、あたし、あたし。」

定春の大きな耳と耳の間から、ひょこつと突き出した顔があった。新八が目をまん丸くした。

「あ、姉上！？」

「驚いた！姉上までここに来ているなんて。」

「私だって、ここで新ちゃんたちに会うなんて思ってたわ。」

「姉上も好きだったんですか？クレヨンしんちゃん。」

新八はできるだけ丁寧な口調で言った。姉・お妙は新八より二歳年上の18歳。いつもにこにこした優しいような美人だが、それとは裏腹にかなりの凶暴性を持つ、恐るべき女性でもある。怒らせでもしたら、それこそ手のつけようもない事態になるだろう。

「ええ、そうなのよ。最近ハマっちゃって。私、風間くんが大好きなの。」

「姉御もアルカ！」

神楽が嬉しそうな声をあげた。なぜか神楽はお妙を尊敬しており、『姉御』と呼ぶ。

「そうなのよ。だって新ちゃんの小さい頃にそっくりなんだもの。ああ、思いつきり抱き締めた後、女装させてみたい。」

「いや、何考えてんですか、姉上。」

「まあとにかく。」

銀時が割り込んだ。

「俺たちはクレシんの映画を見ようとして、そしたらここに来ちゃったわけだ。どうしてだ？一番肝心な謎が解けてねーぞ。」

「それに、あの映画を見てた人はまだいっぱいいたはずですよ。どうして僕らだけなんでしょう？」

「…おめーらだけじゃねーよ。」

「！？」

一同は突然降ってきた声に、ぱっと顔を上げた。

声の主は、銀時の真後ろにたたずんでいた。しかも、一人ではなかった。

「ちつ、まさかこんなところでまで、てめーらに出くわすとはな……」

…」

「ひ、土方さん、ひじかた 沖田さん、おきた 山崎さん！」

いつも何かと関わり合うことの多い、江戸の警察・しんせんぐみ 真選組の三人だった。

「一体どうして…あ、もしかしてあなたたちもクレヨンしんちゃんを見てて？」

「そーだ。」

「あーあ、マサオくんの活躍を楽しみにしてたのに。わけ分かんねエや。」

沖田がぼりぼり頭をかいている。

「マサオくん？」

「しんのすけの友達アル。泣き虫で弱虫でネネちゃんに振り回されっぱなしの、オニギリ頭少年ネ。」

「オニギリ頭？」

新八は一人、理解に苦しんでいた。

「お前、マサオくんのファンアルカ。ホモアルカ。」

「いや、俺はただ、マサオくんをいびって楽しんでみたいだけださア。」

可愛い顔立ちに似合わずドSな沖田は、さらりと残酷なことを言った。

「土方さんはネネちゃん派。そうっスよね、土方さん？」

「うるせー、黙ってる。」

「銀ちゃんとおんなじアル。」

「何イ、てめーもネネちゃん好きかよ。ネネちゃんのリアルおままごとに惹かれたクチかよ。」

「いや、俺はネネちゃんがウサギのぬいぐるみを殴るシーンに惚れた派だ。おい、お前もネネちゃんファンか？」

「え？いや、俺は違いますよ。」

と、山崎が慌て気味に首を振る。

「俺は近藤局長にバレないよう、土方さんと沖田さんの後ろで見張りしてただけで……」

「……おいお前、何だそのラケットは。」

「……ハッ！しまった！」

「山崎イイ！てめーまたミントンしてやがったのかこのヤロオオ！！」

「ギヤアアアア！！」

土方にボコボコにされるミントン好きの山崎。いつものパターンである。

「そういえば近藤さんがいませんけど……」

近藤勲は部下たちの信頼を一身に集める真選組局長であり、そしてお妙のストーカーでもある、お人好しの豪傑だ。土方と沖田が、彼なしで一緒にいるのは珍しいことだった。

「ああ、近藤さんには内緒でさア。この前クレしんの漫画を見てたら、『そんなもんを幕府を守る警察が読んでるって知れたら、江戸の民の信頼を失うだろーが！』ってどやされちゃいまして。」

それは真選組局長としては、当然の気持ちと言えよう。

「それなのにとんでもないことになっちまったぜイ。ねえ土方さん。」

「まったくだ。せつかく買うのメンドクセーから録画してたっつていうのに……」

「いや、あんたらもそつちのことはどうでもいいですから。」

いい加減ツツコミ疲れてきた新八であった。でも少なくとも、近藤がいないことでは少々助かった。姉がブチ切れるシーンを見なくて済むからだ。

「そーいやお前、何でうちの定春に乗ってきたんだ？」

銀時がお妙に尋ねた。

「あら、それはほんの偶然よ。テレビを見てたら急に画面が光り出して気を失っちゃって、気がつくとこの子の上に落ちてたってわけ……あら？あのワンちゃんは？」

その時新八たちは、初めて気がついた。定春の姿が見えないことに……。

「オイイ！ヤベエぞ！あいつが外に出て暴れでもしたらえらいことだぞ！高層ビル崩しちまうぞ！」

「ゴジラじゃないんですから。」

こんなところでもツッコミが出るのは、さすが新八である。

「とにかく野放しが危険なのは確かですから、早く捜しに……。」

その時、新八の後ろに誰かが立つ気配がした。

「あのお、すみません。この子あなたたちの飼ってるワンちゃんですか？」

その忒・同じものが好きな奴は自然に寄り合つもんだ（後書き）

銀さんたちの前に現れた人影は！？次章からは銀魂とクレしんのキ
ャラクターがいよいよ本格的に接触（？）！お楽しみに！！

その参：あたふたするより事実を受け入れる（前書き）

銀さんたちの前に現れた人影の正体は？読んだら感想、是非よろしくお願いします！！

その参：あたふたするより事実を受け入れる

「はい？」

振り向いた新八は、目の前に巨大な鼻面が突き出されたのでぎょつとしてのけぞった。

「おう、定春、帰ってきたか。」

「定春がまたしゃべったアル！」

「いえ、違いますけど。」

定春の後ろから、小さな人影が進み出た。定春がでつか過ぎて気づかなかったのだ。5、6歳ぐらいの男の子である。

「ああ、そうなんだよ。この子うちの犬なんだ、どうもありがとう。」

「どういたしまして。」

そう言つて、少年が頭を下げる。年齢の割に礼儀正しい子だな、と、新八は感心した。

「にしても、大きい犬ですね。僕初めて見ました。」

それはそうだろう。

「ごめんね、連れてくるの大変じゃなかった？」

「いえ、別に。ここを通つて帰ろうとしたらうろつろしてて、邪魔だからどいてよつていったらここに來たんです。だから僕が連れてきたわけじゃないですよ。」

「そうか…良かったですね、銀さ……」

言いかけて、しかし新八は口をつぐんだ。

銀時の顔が固まっている。神楽もお妙も真選組の三人も、みんなみんなその場に凍りついて、何も言わずに少年を見つめている。

何があつたんだ？

戸惑つたのは少年も同じらしく、ちよつと後ずさりして、顔をしかめた。

「えー…あの、僕の顔に何か、ついてますか？」

神樂が叫んだのは、その時だった。

「風間くん！この子、風間くんアルヨ！！」

「はあ？」

「えっ？何で僕の名前を……」

少年が最後まで言い終わらないうちに、神樂が新八を押しつけて前に飛び出し、ぱつと傘を広げた。

「ちよっ………神樂ちゃん、何すんの！？」

新八は慌てて神樂を止めようと手を伸ばした。神樂の傘は、実は鉄砲になっている。彼女が少年を撃つつもりなのかと思ったのだ。

しかし、神樂の次の言葉は意外なものだった。

「サインちょうだいアル。」

「へ？」

新八と、少年の声が重なった。

「ここんとこに名前書いてほしいアル。風間トオルって。」

「あ、ちよつと待って、神樂ちゃん。」

突然お妙が割って入った。さすが姉上、姉御らしく神樂ちゃんを叱ってくれるのか…と思った新八だったが、間違いだった。

「ごめんなさい、私にもサインをいただけないかしら？紙がないから下駄の裏で…」

なんと少年の目の前に、自分の履いていた下駄を裏返して差し出したのである。

「姉上エエエエエ！」

新八は大慌てで二人に飛びかかり、何とか少年の前から引き離れた。

「何よ新ちゃん、せっかくサインもらおうと思ったのに。」

「邪魔はいけないネ。」

「いきなりあんなことしちゃダメでしょ、子供相手に！ほら、何か困ってるじゃないですか！大体あの子、誰なんです？」

「だから風間くんアル。」

「いや、僕知りませんよ、そんな人。」

「んもおゝ、新ちゃんったら鈍いわねえ。クレヨンしんちゃんの風間くんに決まってるんじゃないの。」

「ええっ！？…でもクレヨンしんちゃんって……アニメでしょ？風間くんってあくまで架空の人物なんじゃ……」

「あーそうさ、でもここにいらっしゃるんだからしゃーねーだろ。」

銀時がようやく言葉を発した。

「銀さん！まさか銀さんまで、この子を風間くんだと……」

「だってどう見ても風間くんだもん、この子。そっくりなんだもん。」

「

「ああ、間違いねえ。」

「真正正銘の風間オトルくんでさア。」

「トオルです。」

土方と沖田の言葉に、少年の怒った声が重なった。

「もう何なんですか、あなたたち。何で僕の名前知ってるんですか。クレヨンしんちゃんって何なんですか。とりあえず早く帰りたいんで、そこどいて下さい。」

「あつ、ちよっ……！」

新八が呼び止める間もなく、少年は銀時たちを押しつけてずんずん歩いていってしまった。神楽が名残惜しげに叫ぶ。

「ああーん、待ってえー。サインしてアル！」

「もうやめなよ、神楽ちゃん！怒っちゃったじゃないか。」

「だって本物の風間くんアルヨ。今度いつ会えるか分かんないアル。」

「

「だから、その子はアニメの中の人物なんでしょ？実在してるわけじゃないですか。きつと偶然似てたか何かですよ。」

「でも名前も同じだったみたいだぞ。」

銀時が頭を掻きながら言った。

「あれは間違いなく風間くんだ。新八の眼鏡をかけてもいい。」

「何で僕の眼鏡！？かけるもの間違ってるだろーが！」

「でも確かに新ちゃんの言う通りだわ。」

「姉上！」

新八はほっとした。やはり姉はしつかり者だ。

「私もあの子はどう見ても風間くんだと思う。でもアニメの中の登場人物が目の前に現れるなんて、絶対にありえないことよね。一体どうして…………？」

「サンタさんからの贈り物じゃねーのか。何ならネネちゃんもここに連れてきてくれよな。」

「何でクリスマスでもないのにサンタさんがプレゼントしてくれるんですか。もつと真面目に考えて下さい。まだここがどこなのかも分からないだし…あ、あそこに電柱がある。もしかしたら住所が書いてあるかも知れないから、ちよつと見てきますね。」

「お願いね、新ちゃん。」

お妙が声をかけるより早く、新八は立ち上がり小走りで、電柱に近寄っていった。しばらくそこに書かれたことを読んでいたかと思うと、今度はますますわけが分からなくなったという顔をして戻ってきた。

「どうした？新八。」

「いやそれが、どうもここは江戸ですらないみたいなんですよ。見たこともない地名で。」

「だから、何ていうとこなんだ。」

「ええと、確か……………春日部市、かすがべし双葉町ふたばちょうだとか。」

「な、何だとお？マジでか！？」

「本当アルカ、新八！」

「はあ…え、二人とも、何か知ってるんですか？」

新八は他の面々を見回して、またしても自分一人が、話についていけないことを悟った。全員一様に驚いた顔をしている。

「説明してもらえませんか。春日部って一体どこなんです？」
新八の問いに答えたのは、お妙だった。

「春日部は実在するけど、双葉町はね、新ちゃん。実在しないはずの場所なの。…クレヨンしんちゃんの、舞台になってる所なのよ。」

「……………え？」

あまりに予想外な、そして理解しがたい答えに、新八は目を見開いた。

「冗談でしょう!？」

「本当よ。ねえ、銀さん。」

「ああ。」

「じゃあ…どうして…一体僕らは…？」

もはや新八、わけが分からなくなってきた。

「ここ、もしかしたら映画の中なんじゃないですかね、土方さん。」
沖田が発言したのは、その時だった。

「何だと？」

怪訝そうな表情をしたのは土方だけではなかった。銀時たちも一斉に、沖田の方を見る。

「いやですからね、ここはクレヨンしんちゃんの映画の中じゃないのかなあって…どうしてか知んねエが、俺たちが見てたあの映画の中に、引き込まれちゃったんじゃないんですかイ？」

「総悟そうご：お前よく、そんなことを思いつくな。」

土方が感心とも呆れともつかない顔で、沖田を見つめる。

「でも俺はその考え、いい線行ってると思うぜ？」

銀時が言った。

「何でかはまるで分からねーが、多分俺たちはクレしんの映画の世界に入り込んだ。だからここは埼玉県春日部市双葉町で、クレしんの中のキャラも実在してるってわけだ。」

「でも…どうして？」

「だから分からねーって銀ちゃんが言ってるろーが！」

新八はいきなり神楽の肘鉄を食らって、地面に沈んだ。

「うつつ………おいっ、何なのこの理不尽な暴力は!？」

「イラッときたアル。何回もおんなじこと繰り返すからイラッときたアル。」

「とにかくだな、今から俺たちがやるべきことは…」

銀時が億劫そうに立ち上がった。

「…ネネちゃんのサインをもらいにいくぞ。」

「やらんでええわアアア!!!」

新八、神楽、お妙の三人分のアイアンキックを食らって、銀時は夕焼け空をバックに3メートル吹っ飛んだのだった。

その参：あたふたするより事実を受け入れる（後書き）

ちよつとだけ次回予告…………クレしんの映画に入り込んでしまったらしい銀さんたちが、さらなる騒動に！？映画のストーリーと違って、なぜか風間くんにいきなり危機が迫る…………！？どうぞお楽しみに！

その四：犬は耳と鼻がめっちゃいいけど目が悪い（前書き）

偶然にも風間くんと遭遇してしまった銀さん一行。そして家に帰った風間くんに迫る危機……！？そして定春が、ちよつとだけ（？）役に立つちゃいます！！？

その四：犬は耳と鼻がめっちゃいいけど目が悪い

その夜、ベッドの中で、風間トオルは悩んでいた。

理由は二つある。母親のこと、そしてもう一つは塾の帰りに出会った、あの妙な人々のことだ。

本当に変な人たちだった。格好もおかしかったし（チャイナ服や和服、袴はかまを着ている人もいたようだ）、一人はなぜか、まだ若いのに髪が完全に銀色だった。染めるにしても、普通ならあんな老人っぽい色に染めたりはしないだろうに。あのでっかい白い犬も気になるし……。

それに何で、自分の名前を知っていたのだろうか？ 考えれば考えるほど分からなくなる。

そして……ママのこと。

もえPビを見ていた時、トオルは見えてしまった。はつきりと目にしたわけではないが、不気味な、何か引きずるような音と共に、赤黒い長い物体が、母親の切っていたチキンの一切れを持ち上げていくのを……。

その後振り返った母親は何の変わりもない様子だったものの、トオルは不穏なものを感ぜずにはいらなかった。今もその気持ちは、消え去っていない。

（……ったく、一体何なんだよ……）

勉強は得意だが、こういう未知の、意味不明な現象について考えるのは好きではない。幼稚園でも二セモノとやらの話を聞かされたし……。

（ふんっ、そっくりさんか……ばかばかしい。）

そう考えて嫌な気分も捨て去ろうとしたトオルだったが、うまくいかなかった。これではとてもじゃないが眠れない。何か冷たいものでも飲むか……。

それにしても、あの変な人たち。どうしてか分からないが、見覚え

がある気がする。会ったような感じはしないのに……どうしてだ？
…ダメだ、これじゃいつまでも頭がこんがらがったまま。もうやめにしよう。

早く水を飲んで…寝なきゃ…。

考え込んでいたせいだろう、タオルはいつのまにか後ろに立った影に気がつかなかった。

足音がなぜか重なることに気づき、反射的に後ろを向く。それが幸運だった。黒い影が、すごい勢いでつかみかかってきたのだ。

身をよじるようにして逃れるのと同時に、タオルは大きく悲鳴を上げていた……。

「ちくしょー、腹減ったぜ……………」

「まずいですね。誰もお金持ってませんからねえ。」

「こうなったら、私の身体で払うしかないアルナ。」

「神楽、早まるな！とにかくだな、戻る方法が分からない上に、金がないとなると…何とかここで、仕事を見つけるしかねーな。」

銀時たちは、夜の春日部を闊歩していた。

もちろん定春がいるのだから、表通りを堂々と歩くわけにはいかない。あくまで目立たぬよう、最初目覚めた時にいたような路地裏を選んでいるのだが、定春がでかいだけにあまり楽なことではなかった。

そして全員、春日部^ニに来てから何一つ口にしていない。これが何よりこたえるのである。

「こうなりやどつかへかっぱらいにでも行きますかイ、土方さん。」

「早まらないで下さいつ、沖田さんも！」

目に殺気が宿ってきた沖田を、山崎が必死でなだめている。

「困りましたね、本当に……………」

「今はとりあえず、寝る場所を探さなくちゃいけないわ。」

新八とお妙がため息混じりに話し合っているとその時、思いもかけないことが起きた。

定春が顔を上げ、耳をピンと立てた。しばらくその態勢で固まっていたかと思うと、

「わん！」

大きな吠え声を上げ、一直線に走り出した。こんなでか犬が狭い路地を駆け抜けていくのだから、当然色んなものが次々と倒れ、跳ね飛ばされ、どんがらがっしょんと音を立てる。たまったものではない。

これにはさすがの銀時たちも度胆を抜かれた。

「さ、定春う！待て、ちょっと待て！！」

「定春！何かおいしいもの嗅ぎつけたアルカ！？」

全員慌てて定春について駆け出した。定春が嗅ぎつけたのが何か、

知る由もなく。

「うっつ……くそ……！」

トオルは悔しげなうめきを上げたが、どうにもならなかった。

まるで悪夢のようだ。いや、いつそ悪夢であってほしい。自分の母親に襲われ、抵抗した挙句こうやって押さえつけられているなんて……。

こんなの、現実じゃない！

頭上から、母親の息づかいが聞こえる。何とも不気味な呼吸音だった。

「フシューウウウ……全く、てこずらせてくれたわね。」

そう言う声も、何だかおかしい。今のママは、一体どんな顔をしているんだろう。想像したくないのに思い浮かべてしまい、トオルは身震いした。

「本当はもっと遅かったんだけどね……あのお方に感謝しなくちゃ。こんな楽しい思いをさせてくれたんだもの。」

「……………」

トオルには、その言葉の意味がまるで分からなかった。何が言いたいんだ？

「まあいいわ、とにかく私と……………」

ドガシャーン！！

「…！何！？」

母親の、慌てた声が響いた。

「何なの！？」

押さえつけられたままの体勢で、トオルも音のした方向へ顔を向けた。

あんぐりと口が開いた。

ベランダに通じる窓のガラスが割れ、そこに人影がたたずんでいる。月光と街灯に照らされたその姿から、少女と判断できた。傘を持ち、中国風のドレスをまとった少女…。

トオルは目をしばたかせた。え？中国服？

「あ、あんた、何者よっ！？」

母親の問いかけに答える代わりに、少女の身体がこちら目掛けて飛んだ。信じられないスピードで。

「ほあたアアアア！」

威勢のよいかけ声と共に、傘が大きく振られた……。

「大丈夫？」

「は、はあ……………」

眼鏡をかけた少年の心配そうな問いに、トオルは困惑気味に答えた。今風間家は、この時刻にしては異常なほどの人口でにぎわっていた。しかも全員、あの時出くわした変な人たちばかりだ。銀色の髪の男、眼鏡に袴の少年、チャイナ服と傘の少女、和服を着たきれいな女人、制服みたいな同じ服装をした三人の男に、そして……………巨大な白い犬。

本当ならここはペット禁制なのだが、助けてもらったからには文句は言えなかった。

さっきまでトオルを押さえていた母親は……………完全なまでに叩きのめされた上に縛り上げられ、制服みたいな服を着た三人のうち一番若そうな茶髪の青年に、さんざんいじめられているところだった。今は小さなチューブ入りマヨネーズらしきものを顔に突きつけられ、なぜかさるぐつわの下から悲鳴を上げている。何であんなに怯えているのかと不思議に思ったが、よくよく見ると……………赤いキャップの上に火が灯っていた。

（えっ……………何で！？）

その時、突如怒鳴り声が響いた。

「総悟オ！てめっ何俺のライター持ち出してんだアア！！」

怖い目つきの、茶髪の青年と同じ服装をした男が怒った顔で走って

くる。たちまち逃げ出す茶髪。部屋の中がますます大騒ぎになった。
「おいやめろ、お前ら。他の住民さん方に聞かれたらどーするよ。
またトオルくんに説明させる気か。」

銀髪が、たしなめるように言った。そうなのだ。あの窓ガラスが割れる音を聞きつけたマンションの住人に、トオルはいちいちもってもらい説明をせねばならず、大変だったのである。二度もするのはごめんだ。

そして…彼らには聞きたいことが、たくさんある。

「あの……………」

「ん？」

「聞きたいことがあるんです。どうして僕を、助けにきてくれたんですか？」

どういうわけか、それを聞いた眼鏡の少年の顔が、すこしほつとったのをトオルは見逃さなかった。

「ああ……………こいつのおかげさ。」

銀髪が、巨大犬の頭をぼんぽんと叩いた。

「定春が…あ、こいつ定春っていうんだけどね……………何か感じたらしくてさ、一目散にここまで走ってきて、お前んちの窓を見上げて吠えたんだ。それで神楽が助けに行っただけ。」

「神楽？」

「私のことアル。」

チャイナ娘が振り返った。きれいな青い瞳をしている。

「そうですか…」

はつきり言っただけよく分らなかったが、トオルはそれ以上突っ込んで聞けなかった。もっと大事なことがある。

「じゃあもう一つ聞きます。……………何で僕のことを知ってるんですか？」

そう聞いた瞬間、眼鏡の少年の顔が変わった。しまったぞ！という表情に。

「ええ……………え、どうしても説明しなきゃダメ？」

「はい。」

「もえPの特製ストラップあげるからさ、それで勘弁してくんない？」

「え、本当………で、何で僕がもえP好きなこと知ってるんですか！ちよつと！！」

…このままでは、いくら頑張っても会話が泥沼化してしまうだけだと悟ったのだろう。眼鏡の少年がため息をつき、銀髪の男の肩を叩いた。

「銀さん、やめましょうよ。この子、賢いんでしょう？ごまかしてもダメですし、多分説明すれば分かってくれますって。」

その四：犬は耳と鼻がめっちゃいいけど目が悪い（後書き）

風間くんを助けた銀さんたちは、彼に真実を語ることに……。それを聞いた風間くんの反応は？そして、次回はなんと銀さんが、幼稚園の……？どうぞお楽しみに！！

その伍：幼稚園の先生志望の男って意外と多い（前書き）

風間くんを助けた銀さんたちが、彼らの関係はどうなっていくのか？そして銀時に加え、あのキャラまで ！に……！更新遅れてしまい、申し訳ありませんでした。では第5部、どうぞお楽しみくださいっ！

その伍：幼稚園の先生志望の男って意外と多い

朝の双葉幼稚園は、昼間からは想像できないほど静かだ。ここで寝起きする、組長：ならぬ園長だけが知っている、しんとした静けさ。しかし、今日の園長は何だかいつもと違った。一人早々と起き出して何やら考え込んでいる。

（これで春日部の半分以上が我々の手の内に入った……………）

その怖い顔に、あまり気持ちのいいものでは笑いが浮かんでいた。

（フツ…まったくあのお方は素晴らしい。あの人のおかげで、サンバを踊りまくるだけのバカバカしい人生などより、はるかに楽しい未来が我々を待っているのだからな。）

（しかし、命令が来るまではおとなしくしてろということだったが…それまでは少し、退屈だな……………）

ため息をついた時、後ろに何かの気配を感じた。てっきり自分の妻が起きてきたのだと思った園長は、

「ああ、おはよう…。」

と言いながら振り返った。

そして次の瞬間には、ちっとも退屈でなくなっていた。

幼稚園で顔を合わせるなり、トオルは予期していたが、なるべく避けたかったこと　　しんのすけたちからの質問攻めに襲われることになった。

「風間くんち、昨日の夜大変だったんだって？」

一番最初に聞いてきたのは、やはり桜田ネネだった。恐るべき情報収集能力と好奇心を合わせ持つ彼女の耳にいったんこういう噂が届いたら、1時間後には幼稚園中の子供たちに知れ渡っていると思われる方がいい。

「は、はあ……まあ、ちよつとね。」

トオルは無理やりな笑みを浮かべて応じた。

色々と大変なことがあったのは確かだが……。

「ドロボーに入られて、風間くんのママが乱暴されて入院中らしいわね。」

「ええ！？」

その時トオルは、もう一つ大切なことを思い出した。ネネには聞きつけたことに関して勝手な想像を膨らませるという、たちの悪い癖があったのだ。

「ち、違うよ！泥棒なんかじゃなくて、誰かにいたずらで石を投げ

込んだらしいんだ。だからママも無事だよ。」

「何だ。」

と、ネネがっかりして（！）、
「でも風間くんの家ってかなり高い所だったでしょ？よく届いたわね。」

こういうところで鋭いのも、ネネの困ったところだ。

「う、うん、確かにね…………でも本当にただのいたずらだってば。」

「でも今日は風間くんのママ、いなかったみたいだけど。」

佐藤マサオが、突然口を挟んできた。追い打ちをかけるように、しんのすけも言う。

「今日風間くんと一緒にいたおねいさん、若くて可愛かったゾ。あの誰？」

「あ、ああ、あの人はね、僕の従姉^{いとこ}で…妙子さんっていうんだ。今まで春日部じゃなくて、もっと遠い所に住んでたんだけど、ママが旅行に行ってる間、僕といってくれることになってさ。」

「へえっ、風間くんのママ、旅行中なの？それに従姉がいたなんて聞いたことないけどなあ。」

マサオが彼にしては珍しく、不信感をあらわにして言った。ネネも、ボーちゃんも眉をひそめている。トオルは冷や汗が顔に出ないようにと必死になっていた。

ただししんのすけは、一人別のことに怒っていた。

「風間くんっ！」

「な、何だよ。」

「ひどいゾ、あんなに素敵なおねいさんをオラにしよーかいしてくれないなんて…………オラたち、大親友なのにいっ！」

「うるさいっ！誰が大親友だっ！」

「じゃ、小親友！」

「何だよそれ？とにかく、そうする暇がなかったんだから仕方ないだろ！」

実際、紹介する暇など全くなかったのだ。

なぜというに、彼女は実に昨日の夜にできたばかりの従姉だったのだから！

く昨夜く

「じゃ、要するにあなたたちはこことは別世界の人間で、どういう

わけか映画の中の世界である春日部の中に入り込んでしまったというわけですか？」

銀時と新八から話を聞かされた時、そのあまりの内容にトオルはとも信じることはできなかった。

「そう…だから俺たちは、日頃からテレビでお前らを見ているために、お前のことを知っている。お前の友達のしんのすけやオニギリくんや鼻水も……そしてネネちゃんのこととはとりわけよく、な。」

「マサオくとボーちゃんアルヨ。」

神楽という名のチャイナ娘が横から口を挟んだが、銀時は無視した。

「どうだ、信じたか？」

「正直あんまり。」

「だろうね。」

眼鏡少年・新八がうなずいた。

「銀さん、いきなり自分の住んでいる世界がアニメの中だなんて言われても、信じられるわけじゃないですよ。何か証拠がないと…」

「証拠ねえ…でも俺今、クレしん関係のもの何にも持ってねーんだよな。おい、お前ら何かねーのか。」

銀時は神楽やお妙、真選組の三人の方を向いて尋ねた。しかし全員一様に、残念そうな表情で首を振った。

「そーか、困ったな…どーすればいいもんだか……」

銀時が首をひねる姿を見つめていたトオルの脳裏に、何かがぱつとひらめいたのはその時だった。

（ま、まさか…！）

会ったことはないのに、どこかで見たような感覚。その原因に、今突然思い当たったのだ。

「ちよつとすみません。」

一応ことわって、トオルは今まで銀時たちと向き合って話していた床から立ち上がり、テレビの前のテーブルへと走った。

「おい、どうしたんだ？」

銀時の言葉を見殺して、テーブルの下を覗き込む。目的のものは、予想どおりそこにあつた。

『テレビチャンネルガイド』

月ごとに、家へ送られてくる雑誌だ。新聞に載っているようなものとはわけが違い、注目の番組や映画などを取り上げて、見所や内容を紹介したりしてくれている。トオルの母親もお気に入り、気になる番組の載ったページに赤いしおりを挟むようにしていた。

トオルも同じように、青いしおりを挟むことにしていたが、大抵はもえPや魔女っ子マリーちゃんの載っているアニメページに挟むことが多かった。今月号のも一つ、マリーちゃんの番組内容が取り上げられているページに一枚挟んであつたのだが……。

そこを開いた時、トオルは鼓動が痛いほど激しく打つのを感じた。マリーちゃんのせいではない。そのすぐ隣に載せられた番組のせいだ。

（あつた……でもそんな……！！！！）

「どうしたんだい、大丈夫？」

新八の心配そうな声がした。トオルは慌てて顔を雑誌から引き離れた。

「は、はいっ、大丈夫です！……あの、ちょっとこれを見ていただけませんか？」

「んん？どした？」

銀時がトオルの方に身を乗り出した。

「何だそれ、チャンネルガイド？あ、それマリーちゃんの番組じゃん。お前ほんとにおタクな……ぶっ！！」

「風間くんをバカにする奴は許さないネ。私の傘でお仕置きアル。」

「いてえな、ったく……で、トオルくん、見てほしいもって何よ？」

「ええ…実は……」

トオルはしばしためらっていたが、やがて決心したように雑誌を銀時たちの方へ突き出した。

「…ここに、あなたたちが載ってるんです。」

「へ？」

銀時の死んだ魚みたいな目が、一瞬見開かれた。

「何言ってるの？そんなわけ……」

言い返しかけた銀時の言葉が、雑誌の開かれたページに目を落とすと同時に消えていった。他の面々も、息を吞んでそれを見つめている。

マリーちゃんの項目の横にあるアニメの項目。その題名には『^{ぎん}銀魂^{たま}』と書かれ、それについての説明が書き連ねられている。そして、その隣のアニメの絵の中には……。

「僕がいる……」

新八が、無意識に眼鏡を上げ下げしながら言った。

「私もいるわ。」

「私………実物の方が美人あるナ。」

「ふうん、なかなかうまく描けてるじゃねえか。なあ総悟。」

「どうだかねエ………あ、近藤さんもいらア。」

「俺は……いない………（泣）」

「そんで…これが何だって言うの、風間力オルくん？」

「トオルです。」

明らかに動揺している銀時であった。

「つまり、あなたたちの方が、アニメの中の人物だってことですよ。僕たちじゃなくて。」

「はっ？ははははは！！」

銀時が笑い出したが、やや引きつった声だった。

「何言つてんだよ！アニメの中の人物が実在するわけ…」

「さっきまで僕に対して、あなたたちがそう言ってたんですけど。」

「で、でも、証拠が……………」

「この雑誌が証拠です。僕も信じたくありませんけどね。」

「……………」

トオルの論理的な意見に、銀時は言い返せなくなってしまった。神楽たちも互いに顔を見合わせた。今まで自分達がアニメの世界に來たつもりだったのに、その逆ではないかという事実を突きつけられたのだ。さすがの彼らも、ただ混乱して黙り込むしかなかった。

ただ、一人を除いては。

「トオルくん、こんな考えはどうか？」

落ち着いた声音に、銀時たちは驚いて顔を上げた。
新八だった。

「ここでは僕たちがアニメになつてるみたいだけど、僕たちのいた所では君たちがアニメになっているんだ。つまりどっちもアニメなんだけど、そのアニメの中の世界というものがお互いに独立してできている……………別の時空に存在しているとも言えいいのか。その独立した世界が、何でか知らないけどお互いのアニメをその世界で放送することによって繋がっていた。そしてこれもどうしてか分からないけど、僕らはその繋がりを通してここへ來てしまった……………」

しばらくの間しんとして、誰も、何も言わなかった。やがてトオルが、ぽつつと呟くように言った。

「僕らのいる世界も、あなたたちのいる世界も……………両方お互いにアニメの世界で、実在していると言っんですか。」

「そっなんだけど……………納得できないかい？」

「全然アル。もっと分かりやすく説明するヨロシ。」

神樂がきつい口調で言った。もともと眼鏡嫌いな神樂は、新八に少々厳しい。

しかし、トオルはこう言った。

「いえ、論理的でとても分かりやすい説明でした。どうもありがとうございます。」

「あ、そう?」

「はい、僕も新八さんの言う通りじゃないかと思ってきましたよ。」
銀時を始めとする男たちは、一様にショックを受けた顔をした。彼らのうち誰一人として、新八の言うことを理解できなかったのである。それなのに、五歳児のトオルが納得したと言っただ。

いい大人の彼らが落ち込むのは当然であろう。神樂とお妙はトオルに対する目の輝きを、さらに増したただだったが……。

「じゃあ僕らのした話も、信じてくれるかい?」

トオルがうなずくのを見て、新八は大いにほっとした。

しかしすぐに、別の心配事が頭をもたげてきた。

「しかし、これからどうしましょう、銀さん。帰る方法も見つからないし、何とかここで暮らしていかないことには……まさか段ボールに住むわけにもいかないでしょ。」

「そんなこと言われてもよ。」

銀時の声には、いつもに増して生気がなかった。

「俺、IQ五歳児以下だし。」

「ちよつとオ！ひねくれてないで真面目に考えて下さいよ!!」

「あの……。」

トオルが口を挟んできた。

「もしよかったら、僕の家で暮らしませんか?」

「えっ?」

新八たちは一瞬、聞き間違えたのではないかと思った。

「もちろん全員がここに住むことはできないけど、実は今、両側の家で売りに出されていたのが二つあるんです。つい最近、何かに使えるかもってママが両方買ったんで、僕たちが自由に使ってい

ですよ。」

「ひょーっ、マジかよ！やっぱ金持ちは違うねイ。」

沖田が感嘆とも皮肉ともつかない声を出した。新八が、ふと思いついたように言う。

「最近つて…それって君のママが、ニセモノに替わられる前、それとも後？」

「それは………分かりません。………あれ？ママのそっくりさんは？」
トオルが思い出したように目を見開いた。

「あっ！」

沖田が口を押さえて叫ぶ。

「やべっ、もつと色々するつもりで縄ほどいて、そのまま忘れちま
つてた！」

「んだとオ！」

慌てて一同が戻ってきた時には、当然ながらトオルの母親のニセモノの姿はなくなっていた。見れば、ドアが少し開いている。そこから外へ逃げ去ってしまったのだ。

「総悟オオオ！てめっ、何でほどこいたりしたんだバカヤロオ！」

「すいやせん、土方さん。でも俺はもつと………」

「分かった分かった、もーしゃべんな！分かった！」

土方は荒々しく遮った。サディスティック星から来たサド王子である沖田が実際に縄をほどいてから何をするつもりだったのか、聞くつもりはない。

「ちっ、奴らのアジトがどこか、聞き出すつもりだったのに………」

「

残念だったアルナ、姉御。」

こぶしをゴキバキ鳴らす二人を見ながら、ある意味逃げたのは正解だったかも知れないなと山崎はひそかに思った。

「まー逃げちまったもんは仕方ねーが………」

銀時が言いかけて言葉を止め、ちよつと眉をひそめた。

「？どうしました、銀さん。」

「……………あ、いや……………」
「ぼーっとしないで下さいよ、まったく……………さ、それじゃこれからのことについて、話してから寝ましょう。なるべく早く済ませなくちゃ。」

「…風間くん？風間くん、どうしたの？」
「……………ん？あ、な、何？ネネちゃん？」
「何？じゃないわよ。ちゃんと人の話聞きなさいよね。」
トオルは頭を振った。それで何とか、回想から現実に戻ることができた。
「ごめん…で、何の話をしてたの？」
「それがねえ、よしなが先生が今日から少しの間お休みになって、」

代わりに新しい先生が来るそうよ。」

「ええっ！？本当！！？」

トオルは思わず聞き返したが、こういう情報に関して、ネネはガセネタを持ってきたことがない。現実の問題が、束の間頭の中から吹っ飛んだ。

「よしなが先生がどうして……昨日はあんなに元気だったのに。」
実際、元気過ぎるくらいだったのだ。

「それは分からないけど……新しく来るのは、男の先生らしいわよ。」

「なーんだ。」

五歳にして無類の女好きであるしんのすけは、目に見えてがっかりした。

「かつこいい人だといいのに……。」

夢見口調で言うネネに、

「椎造先生みたいな？」

と、マサオが柄にもなくからかうように言った。一度教育実習として双葉幼稚園に来ていた熱練椎造^{あつくるしいぞう}を、ネネは当初嫌っていたのだが、あることをきっかけに大好きになってしまっていたのだ。

「やだ、マサオくんってば……変なこと、言わないでよ。」

ネネの顔が、ぽっと赤くなった。

「と、とにかく、どんな人かはもうすぐ分かるわ。園長先生が、園庭で集会をするらしいから……。」

ネネの言葉が終わらないうちに、ばら組の担任、まつざか梅先生が園庭へ出てきて、大声でふれ回った。

「みんなー、園庭に並んでちょうだい！大切なお知らせがあるからー！！！」

「大切なお知らせって…多分新しい先生のことだよな。」

「ええ、それによしなが先生のことよ、きっと。」

ネネとマサオが、ひそひそ話し合っている。二人共何だか不安そうなのは、よしなが先生のことを心配しているからだろう。

トオルも心配だった。何しろ昨日の夜あんなことがあったばかりだ。僕みたいな目に合った人が、他にもいるかも知れない…………。

その時、しんのすけが話しかけてきた。

「ねーねー、風間くん。」

「ん？何だよ、しんのすけ。」

「なんかまつざか先生と上尾先生、困った顔してるゾ。」

しんのすけの言う通りだった。二人とも困惑した、戸惑いの表情を浮かべている。やはりよしなが先生に何かあったのだと思ったが、それならもつと深刻そうな顔をしていそうなものだ。

しかしその原因は、すぐに判明した。

「…ん？あれがもしかして、新しい先生かな？」

幼稚園から出てきた人物に気づき、マサオが首をかしげた。その人物　若い男は、ためらいもなく子供たちの前に進み出て、こちらをじろりと見下ろした。

「うわっ、あの人、髪が真っ白よ。すごい悩みでも抱えてんのかしら。目なんか全然活気がないし…………。」

「死んだ、魚みたいな目。」

「そうそう！」

トオルはひまわり組の列の、一番後ろに座っていた。それが幸運だった。酸欠状態になりかけているところを、誰にも見られなくて済んだからだ。

今、自分たちの前に立っている男。それはまぎれもなく、昨日の夜

家に乱入してきた者たちの一人の、銀髪の男、坂田銀時だったのだ！
(なんで？なんで？なんで？)

何でこの人が、こんな所にいるんだ？朝になったらいないと思った
ら……。

「何で園長先生、出てこないんだろ？」

トオルの心境に気づかないマサオが言うと、それが聞こえたかのよ
うに、 とりあえず眼鏡をかけて服装も先生チックに決めた

銀時が答えた。

「どーも、今日から臨時の園長になりました、坂田銀八です。銀
八先生と呼んで下さい。」

「ええっ！？」

子供たちの仰天の叫びが、園庭に響き渡った。

「組長は……怖いお顔の園長先生はどーしちゃったのー！？」

さすがのしんのすけも、これには驚いたらしい。すると銀時は頭を
かきつつ、かつたるそうに答えた。

「あー、お前らの園長先生はな、どっかの天然パーマに襲われて行
方不明だそうだ。」

沈黙と共に、それ明らかにお前だろ的な空気が流れ出したが、銀時
は見事に無視した。

「あとよしなが先生も行方不明になった。でも二人とも、命に別状
はなかったらいいのにな。」

「あれ？その言い方ってただの願望じゃないですか？」

「まあとにかく。」

マサオの言葉も完全にシカトされた。

「ひまわり組に新しい先生が来ることになった。……おい、出てこい
！何してんだボケ！！」

幼稚園からもう一人、男が出てきた。

トオルの背中をいや々な感触が走った。もしかして……もしかして
………！

「えー、熱烈マヨラー先生の、
土方十四郎^{ひじかたとしろう}くん^だだ。」
トオルは失神寸前だった。

その伍：幼稚園の先生志望の男って意外と多い（後書き）

銀さんと土方が、幼稚園の園長と先生に！しかしこれにはある真面目な理由があった……。そして次回はしんのすけと、あの意外なキャラが接触！？今まで登場機会のなかったしんのすけの暴走ぶり（？）が見たい方、どうぞお楽しみに！！あと、どうぞ感想をお寄せください。あまり送られてこないのも悲しいです……。ぜひお願いします！！

その六：老化はお肌と髪の毛から（前書き）

久しぶりです！どうも申し訳ありませんでした。では第6話、どうぞっ！！

その六：老化はお肌と髪の中から

「一体、どーいうことなんですか！」

誰にも見咎められる心配のない茂みの奥深くで、トオルはできるだけ声を低めて叫んだ。相手はもちろん、勝手に幼稚園に居座ってしまつた二人の先生　　銀八ならぬ銀時と、土方である。

「まあ待て。落ち着け。」

「落ち着けるわけないでしょうが！」

トオルの興奮は、高まる一方だった。

「朝になつてから隣の部屋に行つたらいなくて、心配していたのに……　心臓止まるかと思ひましたよ！」

トオルは両側の空き部屋二つを、銀時、神楽、真選組たちに貸してやることにしていた。

ちなみにトオルの家に住むことになつたのは、新八とお妙の二人。彼らはトオルの従姉兄いとこという設定になっている。そしてさっきんのすけたちに説明したように、母親は旅行中でしばらく帰つてこないということにしておいた。

そして翌日になるといきなり、銀時と土方の姿が消えていた。神楽や沖田に尋ねてもさっぱり要領を得ず、気がかりに思っていたのだが……。

トオルは自分を落ち着かせようと、大きく深呼吸をした。

「大体、よしなが先生たちをやつつけたのってあなたたちでしょ？」

「何っ!？」

二人はとても驚いたような顔をした。

「何で分かつたんだ？」

「誰だつてそう考えますよ。だつてもろに怪しいですもん。」

実際、ネネは二人の素性に非常な興味を抱き始めている。これはよくない兆候だ。

「ネネちゃんに嗅ぎつけられたら、あなたたちの正体は瞬く間にバ

レちゃいますよ。」

「ふーん、そりゃ困るな。」

他人事みたいな銀時の返事。

「何ですかその言い方。第一職を得るにしても、もっと目立たなくて適切な仕事があるでしょう？何でよりもよってこんな……。」

「まあ待てつて。別に俺たちだって、遊びでここの先生になったんじゃないよ。」

銀時が、鼻をほじほじしながら言った。千歩譲ったとしても、幼稚園の園長と言えるような格好ではない。

土方など、タバコを吸う気満々でライター（マヨネーズ型）とタバコの箱を取り出しているのだから、論外である。

「そーは見えませんがね……ていうか、遊びのつもりでここに来たら、死にますよ、あんたたち。」

「えっ、死ぬの？」

「何？実は手榴弾とかミサイルとか隠し持つてる子がいの？なかったぜ、そんな設定。」

「いや、そういう意味じゃなくて。」

新八ほどツツコミ慣れていないトオルは、二人をさばくの苦労していた。

「しんのすけみたいな問題児がいますからね、そういうのに付き合ってたら、疲れ切ってしまうってことですよ。死ぬってというのは、あくまでたとえですから。」

「あ、そう。」

簡単に返事して、再び鼻ほじを始める銀時。見れば、ほじっている鼻の穴から赤い液体が……。

「……銀時さん、鼻血出てますけど。ほじり過ぎじゃないですか？」

「あー？いや、こりゃ違うよ。この前板チョコ30枚食ったせいだよ、きつと。」

「さ、30枚い！？」

前代未聞の板チョコ消費量に、トオルは目をむいた。

「ダメでしょ、そんなに食べたら！ていうか鼻血ぐらいじゃ済みませんよ、糖尿病になりますよ、絶対！」

「心配すんな、もうなりかけてるから。」

「余計にダメでしょーが！…って土方さん？ちよつとオ、タバコ吸っちゃダメですよ、幼稚園で！即刻クビになりますよ！第一タバコは体に毒だし、それに何そのライター？どこで売ってたんですか！？」

「つっこむところが、いくらでもあるのだ。」

「ちつ。」

土方は舌打ちしたが、一応タバコはポケットにしまった。

「ちよつと待てや、トオル。そもそもお前は最初に、何で俺たちが幼稚園の先生になったのかって聞いたな？つまりは、それが一番知りたいことなんだろう？」

「あ…は、はい、そうです。」

冷静な言葉に虚をつかれた形になり、トオルはたじろいだ。でもおかげで、頭の中の混乱と興奮が少しおさまってきたようだった。

「じゃあ教えてやろう。いいか、ここが『クレヨンしんちゃん』というアニメの、『踊れ！アミーゴ！』の映画の中の世界らしいってことは昨日話したよな？」

「はい…。」

「でもな、何だかおかしいんだよ。」

「え？」

あんたたちがここに来たこと自体がおかしいんですけど、と言ってやりたいのをこらえ、トオルはもう一度聞き返した。

「おかしいって？」

「お前は登場人物なんだから知らねーだろうがな、実際の映画のストーリーと、今ここで起こってることが違うんだ。」

「???？」

「つまりだな、実際の映画では、あらすじは大まかに言うと、こうなっている。」

銀時が、箇条書きを読み上げるみたいな感じで説明を始めた。

- ・まずよしなが先生が誘拐される。
- ・翌朝、よしなが先生のハイテンションに、みさえと園長がドン引き。

- ・明らかにおかしいあいちゃん。マサオくんに優しい。
- ・ボーちゃんがしんのすけたちにそっくりさんの話をして、びびらせる。

- ・よしなが先生が園長先生を、今夜会おうと誘う（怪しい意味じゃないからね）。

- ・風間宅にて、風間くんがもえPを見てると料理中の母親の顔が怪物化。風間くんはその後ろ姿を見て、不穏なものを感じる。

- ・野原家はいつも通り。

- ・翌日幼稚園で悩む風間くん。

- ・よしなが先生ががびょうを踏むが、何も感じてない。

- ・怪しい園長先生も出現。風間くん大ピンチ！

- ・しんのすけが助ける（本人無意識）。

- ・ママは本物だと言い放つ風間くん。でも母親の顔がまた…。

- ・野原一家、新しいデパートへ。そこで謎の美女を見かける。

- ・全員ばらばらに。しんのすけが謎の美女をナンパ。

- ・そこへみさえ登場。妙に優しいと思ったら、やはりニセモノ。

- ・謎の美女、ニセモノを撃退！ニセモノは物体X化して逃亡。

- ・謎の美女、サンバボイスルを拾う。

- ・みさえとひろしは自分に見られていた気がする不安げ。

- ・翌日、しんのすけはみんなにそのことを話す。

- ・春日部音頭のカセットがぐちゃぐちゃにされて放棄。

- ・しんのすけの大人マンモス発動。

- ・サンバの曲がかかった途端、ニセモノたちが踊り出す。

- ・曲をかけている間に逃げようとするも、ニセ黒磯の誘惑で上尾先生捕獲。

・マサオくんもニセあいちゃんの誘惑を受けるが、振り切る。
・門をふさがれ、まっさか先生は自分を犠牲にしんのすけたちを逃がす。

・川口の異変に気づき、帰りの電車内で怯えるひろし。

・風間くんが帰宅決意。

・春日部駅で待ち受けていた川口のニセモノ。追っ手をかけられ、ひろし逃亡。

・しんのすけたち帰宅決意。

・風間くんニセ風間親子に捕獲される。

・みんな家へ帰る。

・ひろし、ひたすら逃亡中。ところが…。

・野原家にて、しんのすけとひろしが入浴中。ひろしはやたらと上機嫌。

・そこへひろしが帰宅！どっちが本物だ？

・結局アソコを痛がるかどうかで決着。ニセモノは追放。

・一安心する間もなく、家を取り囲む川口たちニセモノの群れ。シロを中に入れようとするが、入らない。

・このひろしもニセモノかと思いきや、ニセモノはなんとしんのすけでした。ハイ、フェイント

・ニセしんのすけもいなくなり、車で家に突っ込まれ、敵に囲まれた野原一家（しんのすけ不在）。

・そこへさらに車が突入！乗ってたのは本物のしんのすけと、あの時の美女。名前はジャッキー。車で野原一家逃亡！

・ニセ風間くんたちに捕まりかけていたネネちゃんたちを救出。

・春日部、春日部山と大爆走。でも結局ジャッキーとシロ以外は捕まる。

・春日部山のコンニャク芋畑の中にある地下アジトへ連行されるしんのすけたち。

・ニセモノの正体は、コンニャクを元に作られるコンニャククローンでした。

・ラスボス、アミーゴスズキ出現。目的は世界をサンバ一色にすること。

・ジャッキーが、シロと仲間と一緒に現れる。

・変なピンクの液体でニセモノを撃退。ジャッキーは水着姿でアミーゴスズキとサンバ対決へ。

・しんのすけたちはニセモノを蹴散らしつつ大爆走。勢いつき過ぎて扉に激突する。

・中には捕われてサンバを踊らされる春日部の人々。曲を止めて踊りも止める。

・ジャッキーはサンバ対決で劣勢に。そこへしんのすけたちが駆けつける。

・みんなでサンバを踊り、春日部音頭も踊って、アミーゴスズキを圧倒。

・アミーゴスズキの部下に撃たれ、ジャッキーが倒れるが、胸に入れたサンバホイッスルのおかげで無事だった。

・アミーゴスズキの正体は男で、しかもジャッキーの父だった。

・しんのすけはジャッキーから、例のサンバホイッスルを渡される。

・最後はニセモノたちが次々と花火となって舞い上がり、みんなでサンバを踊って終了。

「……と、いう感じだ。何か質問あるか？」

「はあ………何とかその、めちゃくちゃですね、内容が。何でサンバなのかも分かんないし、大体こんなのに文章費やすの無駄じゃないですか？」

「いーんだよ、もっといっぱい文章書いて、目立たなくすればいいだけの話だ。」

筆者に思いやりのない銀時であった。

「大体何ですか、しんのすけのニセモノのところの『ハイ、フェイント』って。なんかムカつくんですけど。」

「あれは演出だよ、話を盛り上げるための。」

「いらんわ、そんな演出！」

「まあとにかくな、トオル。」

土方が、うまいこと会話の舵を握った。

「お前が母親のニセモノに捕まるのは、もつと後の日のはずなんだ。それなのに、つい昨日に襲われた。それだけじゃねえ。」

土方は自然な動作で、再び取り出したタバコに火をつけ、吸い始めた。あまりにその動きが自然だったので、トオルは注意するのを忘れてしまっていた。

そして土方は、急に改まった様子で、地面に座り直し、トオルを真正面から見た。

「お前、覚えてるか？母親のニセモノに捕まった時、何を言われたか。」

「何って……………」

あまり思い出さたくない記憶を無理やり呼び起こし……………そしてトオルは思わず、あつと声を上げた。

『本当はもつと遅かったんだけどね……………あのお方に感謝しなくちゃ。』

「思い出したか。」

土方が、にやつと笑った。

「あの時、俺もあいつの言ってたことを耳にした。『本当はもつと遅かった』ってな。気になるじゃねえか、え？」

「……………」

「しかもあいつは『あのお方』とも言った。ということは、トオル、分かるか？奴らニセモノを支配してる誰かがいて、そいつが映画の本来の話とは違うように事を運ぼうとしていると考えられるんだ。何のつもりかは知んねーがよオ。」

トオルは頭がややこんぐらがってきたが、何とか持ち直そうと努力した。

「どういうことです？映画の話じゃ、アミーゴスズキって人がサンバで世界を支配しようとして、二セモノを作ったんですよね？それがどうして変わっちゃうんですか？」

「分からねえ……………」

土方が眉を寄せた。

「でもあの二セモノは…今奴らを使っている敵は、サンバで世界を支配なんて平和なこと考えちゃいねえと思うんだよね。なんかもっと、どす黒くて危険な香りがする……………」

土方の開き気味の瞳孔が細められ、鋭い光を放っているのを見て、トオルは背筋が寒くなった。この人、向こうでは警察みたいな仕事をやってたっていうけど、こんな怖い警察の前なら、どんな凶悪犯も降参して捕まっちゃうだろうな……………」

それにひきかえ、銀時は相変わらず死んだ魚みたいな目をして青空を見上げていたが。

「じゃあ園長先生や、よしなが先生は……………」

「それまでの話の筋に従えば、二人共確実に替わられている。もしかしたらお前の母親みたいな、狂暴な奴に取って替わられてるかも知れねえからな、先手を打ったんだ。二セモノに色々吐かせようと思ってたんだが、足が予想以上に早くてな、逃がしちまった。」

「昨日のよしなが先生…いつもとは違ったけど、別に危険な感じじゃ……………」

「お前の母ちゃんもそうだったんじゃないのか？」

銀時にそう言われると、トオルも返す言葉がない。しばらく考えてから、小さく言った。

「じゃあ…僕たちを、守ってくれますか？僕を助けてくれたみたいのに、二セモノから守ってくれますか？」

「は？」

銀時と土方が、同時に戸惑いの声を上げた。トオルはひるまず、続けて言った。

「子供たちを危険から守るのは、先生の仕事ですよ。できないんですか？」

「はあ、そりゃあ……それぐらい、できるさ、なあ？」

「つたりめーだろ、俺を誰だと思ってる。お江戸を護る真選組副長だぞ。」

「え？何組ですって？」

トオルが聞き返したが、その件はそれ以上追求されずに終わった。マサオがこちらへ走ってきたのである。

「先生っ、大変ですっ！」

「ど、どうした？」

茂みをかきわけ現れるマサオに見られる前に、土方は慌ててタバコを地面に落とし、ひたすらぐいぐい踏みにじって火を消した。幸い（？）マサオは取り乱していて、土方の不審な行動に気がつくどころではなかった。

「しんちゃんが……いなくなりました！」

「ええええええ！？」

銀時、土方、そしてトオルの叫び声が、見事重なった。

「何でえ！？誘拐？かどわかし！？」

「土方さん、最後の言い方古いです！かどわかしながら、今時の子供は知りませんから！！！」

「お前知ってんじゃねーかア！」

「マサオくんが悪いのよ！」

突如甲高い声が割り込んできた。マサオの後ろからやって来た、ネネである。

「マサオくんがネネの打ったシャトルを、ちゃんとキャッチしなかったからよ！」

その時トオルは、二人がラケットを手に持っているのに気がついた。テニスのものにしては軽くて、細い。バドミントンのものだろう。「だ、だってネネちゃん、あれ僕の倍の高さぐらい飛んだよ？あんなの取れっこないじゃん！！」

「そんなことないわ！おもつきりジャンプすればいけたわよ、絶対！！」

「そーだ、マサオくんが悪い！」

ネネちゃんラブの銀時と土方が声をそろえて叫んだので、トオルは慌ててマサオくんに質問を向けた。

「それで、何でしんのすけがいなくなったの？」

「そ、それが……ネネちゃんの打ったシャトルが塀を飛び越えて、すぐ横に停まっていた車の上に乗っちゃったの。それをしんちゃんが取りに行つて……。」

トオルは顔をしかめた。話の展開が、分かった気がしたからだ。

「しんちゃんが車の上に乗った途端、車が動き出したの。それでそのまま……」

「やっぱりそう来たかああ！！！」

「どうしよう……。」

マサオはおろおろするばかりで、ネネはそんなマサオをにらみつけている。トオルは先生方二人を振り返ってみた。

「てめーが探しに行け、俺はネネちゃんとおままごとしてるから。」

「あア？何言つてんだてめえ、ネネちゃんの夫役は俺だ。」

トオルは頭が痛くなってきた。気絶しかけたり頭痛を起こしたり、忙しい一日である。

「困ったなあ。」

全然困ってなさそうな口調で、そう呟いた小さな人影があった。

そう、我らがヒーロー（！？）、天才おバカ五歳児の、野原しんのすけである。

前述の通り、バドミントンのシャトルを取ろうとして上に乗った車に運ばれ、何とか飛び降りた時には幼稚園から大分離れた所に来てしまっていた。

でもいつでもマイペースなしんのすけのこと、バドミントンのラケットを背負ったまま、ひよこひよここと当てもなく歩き出した。別にどこという当てもなかったのだが……。

しんのすけは不意に、なじみのある場所が目の前に現れたので驚いた。

『かわのそば公園』

いつも防衛隊のみんなと一緒に遊ぶ公園だ。当然ながら、しんのすけの思考は『遊ば遊ば!』という方向に向かう。しかし足を公園の中へ進めたしんのすけは、再びぴたっと立ち止まるようなものを目にするようになった。公園は、無人ではなかった。

「フンッ、フンッ、フンッ!」

荒い呼吸音と共に、汗みずくになってラケットを振っている男。それも一人きりの。

しんのすけの目には、それが怪しい人物の姿としか映らなかったようだ。

しかしじりじりと、公園から出て行こうとしたその時、二人の視線が見事にかち合ってしまった。

「おわっ!」

「うわっ!」

仰天したのは、男も同じだったらしい。お互い大声を上げてしまった。

しかし男の方は、相手が子供だと分かれると明らかに安堵の表情を浮かべて胸をなで下ろした。

「何だ……副長かと思った……。」

そして、しんのすけをまじまじと見つめる。しんのすけはその場に固まったまんまだった。

「…君、どうしてかちんこちんになってるんだい?」

男に首をかしげて尋ねられ、しんのすけはようやく声を発した。

「お兄さん、怪しいゾ!」

「えっ、俺のどこが?」

男は本当にびつくりしたらしく、自分の身体を上から下まで眺め回している。しんのすけが追い打ちをかけるように言葉を続けた。

「だってさつきから変なもの持って振り回して、フンフン言ってるんだもん。気持ち悪いゾ！」

「き、気持ち悪い!!？」

完全に面食らった様子で、男は自分の手にあるものを見た。

「別にこれは変なものじゃないよ。ミントンの時に使うラケットさ。…ってあれ？君も持ってない？」

「お？これ？」

と、しんのすけは背負っていたラケットを眺めた。

「おお、確かにお兄さんのとおんなじ奴だゾ。」

「へえ、じゃあ君もミントンやるんだね。」

「違うもーん、オラたちそんなのしてないもーんだ。」

「えっ？じゃ、何に使うの？」

「えーとね、羽根みたいな変なのをこれで打ち合うの。落としたら負け。」

「いやそれだよ！それミントンじゃん!!」

「お？」

つつこまれて、目をパチクリさせるしんのすけ。

「ミントンって…何？」

「バドミントンのことだよ。」

「バドミントン？それってクリキントンの一種？」

「君、知らんとやってたの？」

男は心の底から呆れた声を出した。

「でもやつぱり一人でやってるのは変だゾ。そういうのはみんなでやるもんだゾ。」

「うん…それはまあ…そうなんだけどね…」

「あつ、分かった！」

しんのすけがぽんと手を叩いた。男がきょとんとしてしんのすけを見る。

「お兄さん、友達がいないんだな？だから一人ぼっちでそんなことしてるんだ！」

「はあ？」

「んもー、それならオラがお友達になつてあげるゾ。しょーがないなー、じゃ、一緒にキントンやろう！」

「…ミントン、だからね。」

最後に男が一言、弱々しくツツコミを入れた。

何なんだ、この子は？

やまこきさかろ

山崎退は戸惑っていた。

彼は土方や沖田と違い、クレヨンしんちゃんのアニメをほとんど真面目に見ていない。だから目の前にいる少年が、あの人気アニメの主人公だということなど分からなかった。

それでも、変わった子供だということはよく分かった。

（困ったな…でもまあ、やってあげるか…。）

向こうは親切心から行っているのだ。それをむげに断ることはない。

山崎はミントンの体勢をとろうとした。

が、すぐに目をむいた。

「…君、どこにラケット挟んでんの!？」

少年は今まさに、自分のラケットを自分の尻の間に挟んでいるところだった。もちろん尻は、丸出しである。

「さあ、オラのケツさばきを見せてやるゾ！」

ラケットを尻に挟んだまま、しんのすけがやる気満々の様子で叫ん

だ。

「……………」

みるみるやる気の失せていく山崎であった。

「どーしたの、お兄さん、早く始めてよー!」

「…その格好、きつくない?」

「んー、正直きついけど、老化は尻からっていうし……………」
「言わねーよ。」

山崎は内心、大きくツツコミを入れたが、言っても通じないと感じて何も言わなかった。

「お、そうだ! オラお兄さんのお名前聞いてないゾ!」

「え? 名前?」

「そうだゾ! オラが剣道の試合に出た時も、ちゃんと名前言ってからだったんだゾ!」

剣道とミントンは全然違うけどな、と思いつつ、山崎は笑みがこぼれてくるのを感じた。まあいいか。相手は子供だものな。

「俺は山崎。山崎退つていうんだ。」

「ふーん。」

しんのすけは何か納得したようにうなずき、言った。

「オラ、野原しんのすけ5歳。最近おケツが割れて、困ってるんですう。」

しんのすけも、山崎も、まるで気づいていなかった。二人の出会いが、これからの展開に大きく影響していくことを……。

その六：老化はお肌と髪の毛から（後書き）

おバカなしんのすけと真面目な山崎が、ミントンを通して遭遇……。次の話では、沖田が職業探しに遁走します。そして彼にも、素敵（！？）な出会いが……。感想も待ってます！！

その七：就職活動って時々大学受験より苦しい（前書き）

久しぶりの投稿です。今回は沖田がメインな感じですが、ちょっとキャラが変わってるかも…。あとクレしんのあのキャラが沖田と遭遇します。映画アミーゴを見てないと、イマイチ分からないところがあるかも知れませんが、そこは受け流してください（汗）。

その七：就職活動って時々大学受験より苦しい

風間家の夜は、これまでにないほどにぎやかなものになっていた。

「新八さん、お料理上手なんですね！」

「え？あ、うん。まあね……」

「新ちゃんたら、一人でご飯作るって言って聞かなかったのよ。私も手伝ってあげようと思ったのに……」

「いやいや、姉上は掃除とかお買い物を頑張ってくれてるんですから。」

なんて言いながら、新八の本心は別のところにあつた。

姉・お妙は、驚異的なまでに料理が下手なのだ。どういうわけか、お寿司を握っても黒焦げにしてしまうという破壊的腕前の持ち主なのである。

住む所を用意してくれたトオルに、そんなものを食べさせるわけにはいかない！

「ん？神楽、お前今日はあんま食わねーな。どーした？」

「え……いや、銀ちゃん、私いつもこのくらいアルヨ。」

「このくらいじゃねーよ。いつもはその千倍くらい食ってるよ。」

銀時の言う通り、今夜の神楽の食欲は異様なほどにおとなしかった。食べる物の嗜好は地味な神楽だが、その身体のどこにそれだけの量が入るんだと思えるくらいよく食べる。それなのにまだご飯のおかわりを一回しか頼んでいないばかりか、えらくちびちびと食っているのである。

「あれれ、本当にどこも悪くないの？神楽ちゃん。」

「大丈夫アル！これでいつも通りアルヨ！！」

なぜか怒ったように言い返す神楽。新八はおや、と思った。神楽の視線が、ちらちらとある人物の方を時折向いていたからだ。銀時もそれに気づいたらしい。

「ん？神楽おめ、何さつきからトオルのことじろじろ見てるんだ、おい。」
それを聞いた途端、神楽ときたら白い顔を真っ赤にしまった。
そこへさらにたたみかける銀時。
「ははーん、お前さては、愛しのトオルくんの前で醜態をさらすま
いと、猫かぶりの努力を……………」

バシン！

銀時の言葉はそこで止められた。

神楽のとびきり痛い平手打ちを食らい、椅子から転げ落ちてしまっ
たのである。

「いてええええええ！」

「お、女の子をそんなふうにからかうなんて、サイテーアル！」

「神楽さん！食事中にケンカはやめて下さい！！」

間接的な原因が自分とはまるで知らないトオルが、神楽を控えめに
叱った。

「ハイアル！」

にこにこ顔で応じる神楽。どんな状況であれ、トオルに話しかけら
れるのはとても嬉しいらしい。新八は誰にもバレない程度に苦笑を

漏らした。

「おーいて……」

頬に赤い手形をくつきりと残し、鼻血を垂らした銀時が再び食事に参加した横では、山崎がこれまでにないほどの食べっぷりを見せていた。土方が目を丸くしている。

「山崎、お前………今日はよく食べるな。どうした？」

「いえ、別に………なんともないですよ。」

「ふうん………」

内心、こいつまたどこかでミントンにいそしんでたんじゃねーかと思っていた土方だったが、あえて言わないことにした。五歳の少年の前で暴力を振るうのは、いかに鬼の副長といえども気がひけるし、何と言っても山崎はちゃんと仕事を見つけてきたのである。お妙の言い方を借りれば『チンカスみたいな』給料しか出ない、コンビニのバイトとはいえ………。

そう、お妙と新八がトオルの保護者代わりとなり、銀時と土方が幼稚園での、神楽と定春が日常生活でのボディガード（？）役となり………そして山崎に課せられた役目とは、適当な仕事を見つけて生活費を稼ぐことであった。

トオルの家はかなりお金持ちな方だが、さすがに金にはがめつい銀時も、母親がいなくなってしまった子供の脛すねをかじって生きようとするほどプライドを失ってはいない。しかし幼稚園の方の稼ぎは、銀時が園長になってしまったから皆無であり（まっさか先生たちには自腹で何とか払うことにしている）、誰か他の奴が働かなくてはならないのだ。何とも地味な役回りだが、もともと地味なことで定評がある山崎にとっては、別に不満でもなんでもなかった。

あと念のために言うておくと、山崎がミントンをしていてしんのすけと会ったのは、ちゃんと仕事を見つけてからである。

そんなふうにして、銀時ファミリーと新選組を加えた風間家での夕食時間は、のどかに過ぎていこうとしていた。

いや、一人だけのどこかにしてられない人物がいた。

「総悟：おめえはもつと食ったらどうだ？」

土方が言う横では、沖田が食事にほとんど手をつけようとせず、とある冊子を丹念に眺めていた。

トオルもそんな彼に向かつて、少し心配げに言った。

「あの、沖田さん。そんなに悩まなくてもいいですよ。明日だって探す時間はたつぷりあるし……。」

沖田は山崎と同じく、何かの職に就いて家計を助ける役目をおおせつつあったのだが……。

まあ自己中心的な沖田のこと、そうすんなりと性に合う仕事が見つかるわけもなく、すごすごとここへ舞い戻ってきたのである。

それまではいつもどおり、へらへらしていた沖田だったが、山崎が首尾よく仕事を見つけてきたことを知ると、態度が一変した。

ともかく沖田にとっては、部下である山崎にそういう面で負けたのが悔しかったらしい。何としてでも（山崎より）いい仕事を捜してやるうと、さつきからろくにご飯も食べず、熱心に求人雑誌を読みふけているのだった。

「ねえ、沖田さん……。」

「トオル、ほつとくアル。このアホがからっぽの頭を回転させてる貴重な時間をつぶすのは、もったいないネ。」

いつもならば神楽のその言葉に反応し、なりふりかまわず大ゲンカをおっぴじめる沖田だったが、今夜はもう何も耳に入っていないのか、雑誌のページから目をあげようともしていなかった。

「まあ、そうかもな……。」

土方も何やら納得（？）し、ご飯の上に、さらにたっぷりとマヨネーズをかけまくった。

氣にくわねエ。

沖田は川原をぶらぶらしながら、むしゃくしゃした気持ちをもてあましていた。

畜生、山崎のやつ。俺より先に仕事を見つけてきたからって、あんなに得意そうな顔をしゃがって…………。

別に山崎としては得意げにしているつもりはなかったのだが、沖田の目にはどうもそのように映ってしまうようだった。

しかし、仕事に就けないのが自分の性格のせいだということも、何となく分かっている。これまでは新選組一番隊隊長として、何も考えずに犯罪者相手に剣を振り回していればよかった。普通の店とかと違って、警察は潰れる心配がないからだ。

でも、ここでは違う。沖田は警察でも何でもない、ただの18歳の青年だった。

「ハアア、だりイ……」

結局今日も、収穫はなしだった。らしくもなくため息をつきながらぼんやりと道を歩いていく沖田は、気がつくまでつかい堀の前に立っていた。

「……………？何だ、ここ？」

どこか、大きな家の堀らしいということは分かる。ここ春日部で、そんな大きな家に住んでいる奴といえば……。

堀に沿って歩いていき、やがてこれまた巨大な門の前に出た。

やっぱりだ。これには見覚えがある。

「すおとめ 酢乙女邸か……………」

しんのすけに一方的な恋心を抱くお嬢様・酢乙女あいのお屋敷だ。でもこの映画の中では、彼女はもうニセモノに替わられているはず……………。

「あのお……………」

「あア？」

後ろから聞こえてきた声に、沖田は顔だけねじ曲げて振り返った。

びっくりして、束の間声が出なくなった。

「お、お前は…」

オニギリくん！」

「えっ？どうして僕のことを………ていうか、僕そんな名前じゃないですよ！佐藤マサオです！」

「あ、そうだよな…ごめん。」

「ところでお兄さん、どうして僕のこと知ってるの？」

さて困った。考えるより先に身体が動くタイプの沖田は、こういう時のうまいごまかしが思いつけないのだ。土方への嫌がらせ方法を考え出すのは得意だが…。

「そ、それはだな…俺の妹が、お前と同じひまわり組だからでイ。」

「ふーん…」

どういうわけか、マサオはじーっと沖田の顔を見つめてくる。不愉快な視線ではなかったが、沖田は思わず後ずさりした。

「な、何だ？」

「いや…お兄さんの顔に、なんか見覚えあるから。どこかで会ったことあるっけ？」

会ったことはあるけど毎週テレビでお前の顔は見てるぜ、なんて言えない沖田は、黙って答えなかった。頭の中ではどうやってこの状況から抜け出そうか、彼なりに必死で考えていたのだが。

幸いなことに、二人の会話はここで打ち切られた。

門の所に取りつけられたスピーカーから、聞き覚えのある声がしてきたのである。

『あらマー様、来て下さったんですのね。そちらの方は、どちら様

ですの？』

そちら様？

一体誰のことだと一瞬考えて、沖田はようやく自分のことを言っているのだと理解した。こんなんだから銀時や土方や神楽に『頭が力ラッポ』と称されるのだ。

「あ、俺は通りすがりの沖田つてもんだから、気にせんでいいですぜ。そんじゃ。」

マサオを残し、さっさと歩み去っていく沖田。その背中を見つめながら、マサオは少し首をかしげた。

「沖田……………」

やれやれ、あんなところでマサオに会うとは。

沖田はだいぶ離れた所まで来ると、もう一度酢乙女邸の方を振り返った。

門が開いている。もうマサオの姿はそこから消えていた。

門が閉じていくのを眺めながら、沖田は次第に、何とも言えない不安な気持ちに襲われるのを感じた。

酢乙女あいはマサオのことを、『マー様』と呼んだ。ということは、やはり彼女はニセモノにとってかわられているのだ。

そしてマサオが、酢乙女邸に一人で呼ばれている…………。

どうも引つかかる。映画の中には、こんなシーンはなかった。それとも単なる偶然だろうか。いや、それが…………。

沖田は頭を振り、再び歩き出そうとしたが、数メートルも進まないうちにまた立ち止まって振り返った。

そして、辺りに誰もいないことを確かめると、酢乙女家の屋敷の高い塀の一角へ、踵^{きびす}を返して走り始めた…。

「沖田さん、大丈夫かなあ……」
神楽にああ言われても、トオルはまだ沖田のことを心配し続けていた。

（無理しないでくれるといいけど……）
窓から外を見下ろして、ため息をつく。日曜日の空は、彼の心の中とは裏腹に、きれいに澄み渡っていた。
トオルはもう一度、沖田がいい仕事を見つけられますように、と祈った。

当然、彼が職探しよりもつと厄介なことへ首を突っ込もうとしていることなど、まるで知る由もないのだった。

その七：就職活動って時々大学受験より苦しい（後書き）

風間くんの心配をよそに、酢乙女邸へ走る沖田……。その中では、一体どのような展開が？肝心の仕事探しはどうか？次回は沖田とマサオくんが、大活躍の予感！！どうぞお楽しみに！！久しぶりでしたが、感想もどんどんお願いします。これまでも暖かい応援メッセージ、ありがとうございます！！

その八…どうせ選ぶんなら儲かる仕事に就け（前書き）

酢乙女邸へ招待されたマサオくん…。それを目にして酢乙女邸へ潜入する沖田…。彼の仕事探しにも決着が？第8部、スタートですっ
！！

その八：どうせ選ぶんなら儲かる仕事に就け

巨大な広間に通されながら、マサオは嫌な胸騒ぎを押さえ切れずにいた。

ずっと恋焦がれてきたあいの家に呼ばれたというのに、あまり喜べないのにはわけがある。ここ最近のあいの様子が、明らかにおかしいからだ。

いつもはしんのすけに夢中で自分になど目もくれないあいが、やたら優しくしてくれる。これまでとは打って変わって……。

そんなの、僕の好きなあいちゃんじゃないっ！

それにどうして、しんのすけたちと一緒にではなくたった一人でここへ呼ばれたのだろうか？マサオはただ招待に応じただけで、その目的までは知らなかった。

何であいちゃんは、僕だけに来てほしかったんだろう？

ふかふかした豪華なソファに下ろした腰を、マサオはもう早々に上げてしまいたい気持ちになっていた……………。

「おい、何者だ貴様！」

酢乙女邸の庭先では、あいも予想せぬ大騒ぎが繰り広げられていた。

一人の青年が、何人もの男たち相手にこぶしを振るい、足を振り回して暴れまわっているのである。

そうしながらも彼は、着実に屋敷の方へと近づきつつあった。

沖田総悟である。

「待てーっ！」

怒鳴りながら追いかけてくる男を飛び蹴りで片づける。

それでもまだ押し寄せてくる男たちの集団を見やりながら、沖田はため息をついた。

（ちっ…あの塀に、あんな厄介な仕掛けがあるとは思わなかったぜイ。）

酢乙女家を守る塀を難なく乗り越え、首尾よく屋敷に潜り込めるかと思っていたのに、実は塀にセンサーらしきものが仕掛けてあったのだ。それに見事引つかかった沖田は、今こうして追われているというわけであった。

それにしてもキリがない。何とかしてこいつらを振り切らなければ。沖田は屋敷の方をちらりと見て、マサオが今どんな接待を受けているのかと思いをめぐらした。

「こいつめ！」

ブロロロロロ！

「……………」

振り返った沖田の目に、黒いバイクに乗り自分目がけて走ってくる男たちの姿が映った。

ちよつとだけ驚いた表情を見せた沖田が、すぐに口の端を吊り上げて性悪な笑みを作ってみせた。

「沖田さん、遅いですね……」

「そうか？ まあ気にすんな。 あいつなら心配せんでも大丈夫さ。」
時刻は既に、三時を回ろうとしている。

おやつの時間にはいったん帰ってくると言っていた沖田がいつまでも現れないので、トオルは気をもんでいた。

しかし銀時たちの反応は、何とも冷めたものであった。

「トオル、来ないんならあいつのクッキー、食べてもヨロシ？」

「ダメですよ！沖田さんが帰ってきた時に可哀相でしょう！！」

「ハリアル……」

しゅんとして引き下がる神楽。なにげにこの子すごいな、と、新八はトオルを眺めていた。宇宙でも恐れられる夜兎族の怪力娘に、一言で言うことを聞かせられるとは……。

そんなことができるのは、こっちではお妙だけだ。

「でも心配だな、確かに。」

「土方さん！」

トオルがほつとしたように、土方を見る。

土方はクッキーの上にいちいちマヨネーズをかけながら（生クリームではない）、低い声で続けた。

「今頃あいつ、やけになつて強盗でもしてんじゃねーかな……」

「そつちの心配ですか！？」

トオルは沖田という人間の評判の悪さに、あらためて驚いた。

「……でも心配するな。場所の分かる方法ならある。」

「！本当ですか？」

「ああ。ほら、これに……」

と、土方が取り出したのは、小さな液晶スクリーンのついた装置みたいなものだった。画面上で、ピコン、ピコンと赤い点が点滅している。

「この赤い点が、あいつだ。」

「へえ………何で分かるんですか？」

「最近から、あいつの髪に高性能の小型発信機を取りつけたんだ。風呂に入っても大丈夫なやつをな。やっとその性能を試す時が来たぜ……」

土方の言葉を聞きながら、トオルは考えていた。

土方さんに発信機をつけさせるほど用心させる沖田さんって、一体………普段、どんな性格なんだろう？

トオルの頭の中にも少し、別の心配が頭をもたげてきた………。

「むっ!？」

土方が、眉をひそめてうなった。

「ここは、もしか………!」

「た、助けて……」

マサオはまさに、絶体絶命のピンチというやつに陥っていた。

屋敷内のサングラスをかけた男たちに捕われ、床に押さえつけられているのである。

目の前に立って顔色一つ変えずにそれを眺めるあいの姿が、今の状況をさらに悪夢的なものにしていた。

「あ、あいちゃん………これは……一体………?」

「ごめんなさい、マー様。」

あいが変わらぬ口調で言った。

「でも、あいはマー様を捕まえなくてはなりませんの。本当はもっと遅いはずだったんですけど、仕方がないですわ。」

「…何を言ってるの？」

「そのうち分かりますわよ。」

あいはくすくす笑うと、男たちに命じた。

「マー様をアジトへ連れていきなさい。」

「はい。」

男たちはうなずき、マサオを乱暴にかつぎ上げようとした。抵抗するマサオを、一人が殴りつける。マサオは床に倒れ、痛みにあえいだ。

あいの呆れた声がする。

「もう、力もないくせに抵抗したりして。まったくなんて下等な動物なのかしら、人間は……………」

マサオは目をつぶり、涙を流しながら祈った。誰でもいい、何でもいい、助けに来て下さい。悪魔でも大魔王でもかまわなから……………。

ドガアアン！

「…ええっ！？」

祈りが通じたのか、突如扉がぶち破られて何かが飛び込んできた。
悪魔でも大魔王でもない。目の前に現れたそれは……。

ブロロロロロ…！

バイクであつた。

「な、何なの！？」

金切り声を出すあいだったが、そんな場合ではなかった。進み続けるバイクが、こちらの方へ向けて突進してきたからだ。

「あつ…ちよ、ちよつと待って！止まって！！」

「ええー、そんなこと言われても…」

バイクにまたがり、顔をしかめる茶髪の青年。
沖田であつた。

「止め方、分かんねエ。」

「いやあああああ！」

あいの絶叫が、部屋の中に響き渡った。

ドガッ！

跳ね飛ばされたあいは、壁に叩きつけられて動かなくなり、そしてバイクはまだ止まらない。爆進を続けている。

「ああもつ、めんどくせえなア。」

沖田はそう呟くと、ひょいとバイクから飛び降りてしまった。

操縦者のいなくなったバイクは、壁へと激突し、ようやく動かなくなった。

しかも見事、あいの倒れていた場所で。

「き、貴様…！」

男たちが一斉に沖田めがけて殺到したが……。

ドゲドゲドゲ、ドゲン！

数十秒後には、全員床とお友達になっていたのだった。

「あ、あの…」

マサオは、自分を助けてくれた(?) 謎の青年に、おそろおそろ声をかけてみた。そして青年がこちらを向くより早く、気づいた。

「あ！さっき門の所にいた……」

「ああ…大丈夫だったか？」

「は、はあ…」

殴られた所が少し痛い、別に我慢できないほどでもない。

(誰なんだろう、この人……別に泥棒って感じでもなさそうだし……それにどつかで…見たような……)

「お兄さん、名前は何て言うんですか？」

「ん？えーと…沖田総悟。」

「えっ！」

マサオが驚愕して目を見開いた。

「もしかして…『銀魂』の真選組一番隊隊長の、沖田総悟？」

「なっ！？お前なんでそんなことを…」

今度は沖田が驚かされる番であつた。

「信じられない！僕、あの漫画とアニメ大好きなんですよ！！ちょっと下品なところあるから、ママとかみんなには内緒にしてるんだけど……………」

「へえ……………」

そういえばここでは、俺たちの世界の出来事がアニメとして放送されてるんだっけな、と、沖田はトオルの言っていたことを思い出した。漫画まであるのか、知らなかったぜ。

そして何より意外なのは、マサオが『銀魂』のファンであるらしいことだった…。

「でも何で……………」

ゴッ！

背後から飛んでくるものを感じ、沖田はとっさにマサオを抱いて横に飛びすさった。

「危ねエ！」

ドガアアア！

「な…何なの！？」

マサオが震えている。さっきまで二人のいた所の床に、大きなえぐれができていた。

「よくもやってくれましたね…」

扉のところに、黒磯が立っていた。

いや、これはどう見ても二セモノだろう。人間ですらないようだ。腕の部分が盛り上がり、巨大な鉄砲みたいな形を作っていた。

「…何だ、その腕は。」

沖田の言葉に、黒磯は答えず、大砲型に変化した右腕を向けた。

ドン！

先端の穴から、目には見えないがものすごい圧力を持った弾が放射された。マサオを抱えたまま、素早く横に転がってよける。またしても床に穴が開いた。

なるほどな、と、沖田は妙に納得していた。ドラえもんに出てくる、空気砲みたいなやつか……………。

とにかく、狭い室内では不利だ。外へ逃げようと、窓に向かって走った。

「させない！」

「うおわっ！？」

間一髪だった。

今度は何か細長いものがいくつも飛んできて、もうちょっとで沖田の足に刺さるところだったのだ。何とか横ざまに倒れるようにして、

回避する。

酔乙女あいだった。

可愛い顔に似つかわしくない憎悪の笑みを浮かべ、沖田をにらんでいる。そして黒い髪の毛がざわざわと伸び、今沖田を串刺しにしようとした細長い刃物状のものに変化しつつあった。

嘘だろ？何だ、この化け物は…。

「許しませんわよ…よくもあいの腕を……」

バイクを押しつけ、あいは立ち上がった。

「あっ……」

マサオが思わず、叫び声を発した。

バイクが激突した時に吹っ飛んでしまったのだろうか、あいの左腕がなくなっている。それでいて、一滴の血も流れていなかった。

それだけではない。付け根から、肉の芽とも言っべきものが植物のように生え出してきて、みるみるうちに腕を再生していくのである。

さすがの沖田も、言葉を失うより他になかった。

「お返しは……百倍にさせてもらいますわよ！」

言葉が終わるか終わらないかのうちに、さっきの細長い刃が恐ろし

いスピードで襲いかかってきた。

「……………！」

次の瞬間、沖田の身体が風のように動き、すれすれで全ての刃をかわした。かなり息が上がっている。

その時、沖田に抱えられているマサオが悲鳴をあげた。

「沖田さん！後ろ……！」

二セの黒磯が、巨大空気砲を構えていた。

しまった……よけきれない！

沖田は歯噛みした。バズーカ砲か、せめて刀が一本でもあれば……！

ズガアアン！

轟音が響き……しかし何も起こらないので、とっさに目を閉じていた沖田は首をかしげた。

（あり？そーいえばさっきと発射音が違うよーな…）

目を開けて黒磯のいる方を向き、そして、束の間息が止まった。

「土方さん……………」

「まったく…………相変わらず好き勝手なこととして大暴れしてんだなア、このガキ。」

バズーカ砲を構えた土方が、もくもくと煙が立ち込める中で、煙草をくわえて立っていた。よく見ると、左足で何か黒焦げになったものを踏みつけている。

バズーカ砲撃を背後からまともに浴びた、ニセ黒磯のなれの果てだった。

「あ、あんた、よくも……………」

ニセのあいが怒りの叫びをあげ、刃を土方に向けようとしたが……………。

ドガアアッ！

「きゃあああああー！」

本日二度目になるバイク突入に（今度は窓から飛び込んできた）、ニセあいは再び跳ね飛ばされたのであった。

「どうもお、万事屋ですっ！本日は人助け参りましたあ！！」
銀時が、ヘルメットを上げてにやりと笑ってみせた。

「本当に知らないのよ！」

「嘘つけ！！」

今、傷だらけ、穴だらけになった酢乙女邸の居間では、ぐるぐる巻きに縛り上げられた二セあいの尋問が行われていた。

いくらなんでも刀とバズーカ砲を突きつけられた状態では、もう抵抗するわけにはいくまい。ここには万事屋と真選組のメンバーを加え、トオルまで勢ぞろいしていた。

トオルと新八は、混乱気味のマサオを部屋の隅に連れていき、これまでのことの説明をしてやっているところだった。

そして残る面々は尋問というわけだが…。

「アジトの場所を知らねえわけねーだろ！お前らの本拠地だろーが！！」

「残念だけど、あたしたちは自分の記憶操作が自由にできるのよ。だから忘れたと思ったことを、完全に忘れ去ることができるの。」

敵に知られちゃまずいこととかもね…」

「何だとしてめえ、いい加減なこと言ってやがると…」

沖田がバズーカ砲をさらに近づけたが、ニセあいはせせら笑うだけだった。

「殺したいんなら、どうぞ。別にかまやしないわ。また酔乙女あいの代わりが新しく作られるだけ……どっちにしろ、あたしからアジトや黒幕の正体を聞き出すのは、あきらめることね。」

「ちっ…」

敵が本気で言っていると分かったのか、沖田は舌打ちと共にバズーカを少し引つ込めた。

一方マサオは、トオルと新八の話をどうにか理解することができていた。

「へえ、あるんだねえ、そういうことって…」

「うん……でも知らなかったよ。マサオくんが『銀魂』のファンだったなんてさ。」

トオルの言葉に、マサオはちょっと照れ笑いを浮かべた。

「えへへ、みんなには内緒にしてたんだよ。ちよっとお下品なところがあるから……でもいつも古本屋さんとかで、漫画の立ち読みしてるよ。」

「僕たち、漫画にもなってるのか…」

いまいち実感のわからない新八であった。

「ねえ、よかったら風間くんも今度一緒に行かない？すっごく面白いんだよ！」

「ほんと？じゃ、暇があつたら行くよ。」

こんなに個性的な人たちが活躍する漫画なのだ。さぞ面白いに違いないとトオルは思った。

それに、銀さんたちのことをよりよく知ることにもなるしな……。

「銀さん、姉上。どうでしたか。」

新八の問いに、残念そうに首を振るお妙。

「ダメよ……ケツの穴にコンパスぶち込むって脅しても言わないの。本当に忘れられるみたいね……。」

「ちよつとお妙さん、そんな下品な言い方……あれ？それ僕のコンパスじゃないですか！返して！」

「まあとにかく、今の問題はこいつをどうするかだな。」

銀時がニセあいを、あごで示した。

「そうだな……野放しにするわけにもいかんしな。」

と、煙草の煙を吐く土方。まともに浴びた山崎が、げほげほ言っている。

「やっぱり殺つちまうしかないアルヨ、銀ちゃん。」

「そうでさア、旦那、土方さん。俺アこいつのせいで職探しを邪魔されたもんでさ。」

「いや、だからそれはお前が勝手に首突っ込んだんだろ。」

「あの、ちょっと待って下さい。」

「？」

おずおずとした声に、銀魂一行は話をやめて振り返った。

マサオがみんなに見つめられ、もじもじしながら言う。

「あの…総悟さん、仕事を探してるんでしょ？」

「？そうだけど。」

沖田も他の面々も、マサオが何を言おうとしているのか分からない。そこでマサオは、思い切ったように言った。

セキユリティーボリス

「じゃ、このニセモノのあいちゃんに、SPとして雇ってもらったかどうか？だって、黒磯さんのニセモノは…やられちゃったみたいだし。」

マサオの目は、黒焦げになってしなびているニセ黒磯の残骸に向けられていた。

「給料もいっぱいもらえると思いますけど。」

マサオのこの言葉に、沖田たちは初めのうちは驚きの眼差しで互いを見つめ合っているだけだったが、やがてそれぞれの顔に、あまり人のよくない笑みが浮かんできた。

「なるほどなあ、こんな豪勢な家だから、金もたんまりあるだろうしなあ……」

「なっ……」

銀時の不気味な呟きに、ニセのあいがぎくりと目を見開いたが、無視された。土方も重ねて言う。

「こいつを見張ることもできるしな。」

「お前、案外悪知恵働くじゃねえかい。」

沖田に言われて、マサオは顔を真っ赤にした。

「いえ………ただの思いつきですよ。それに、助けてもらったんだし。」

「ちよつと、ふざけないでよ！誰があんたなんか……！」

ニセモノのあいが最後まで言えないうちに、沖田のバズーカ砲が顔面に押しつけられた。

「嫌ってんならこれ食らわせる前に、さっきのお返したっぷりさせてもらうぜい。身体で払うか金で払うか、どっちにする？」

「ねえ、あいちゃん。」

双葉幼稚園で、ネネがあいに話しかけた。

「ボディーガードの人が変わってるじゃないの。黒磯さんは？あの人だあれ？」

「ええ、その…黒磯が急用で実家に帰ることとなりまして。臨時に雇ったんですの。」

そう答えるあいの表情が、微妙に引きつっている。

「ふうん、そーなの…………でも、結構イケメンじゃない？良かったわね。」

「…いえ、いいのは顔だけでして…………」

「あん？あいお嬢様、今何かおっしやりましたかい。」

臨時のボディーガードなる茶髪の若者が、茂みの中から顔を出した。あいの身体がびくつと緊張する。

「い、いえ、何も…」

「ダメっすよお嬢様、言いたいこと黙ってちゃ。ささ、二人でじっくり話でもしましょうや。」

「え…あっ…ちよっ…！」

茂みの中へ引きずり込まれるあい。それを見送りながら、しんのすけ、ネネ、ボーちゃんの三人は腑に落ちないという顔になっていた。

「何か、変…」

「そうよね…ボディーガードって感じがしないわ。」

「なんか脅かされてるみたいだゾ。」

「やあね、しんちゃんてば、嫌なこと言わないで。」

後ろの方で見守っていたトオルとマサオは顔を見合わせ、そして思わず、ぷつと吹き出した。

その八：どうせ選ぶんなら儲かる仕事に就け（後書き）

マサオくんも仲間に加わり、沖田も無事仕事（？）を見つけてようやく一安心……と思いきや、いよいよ敵が本格的に動き出す！？次回からはデパート編に突入予定！アミーゴを見てない人は予習しておいた方がいいかも……。お楽しみに！！

その九：似てないもの同士の方がうまくいくことが多い（前書き）

今回から、敵が本格的に姿を現していく予定です。この話はまだ序章っぽい感じですが、これまでボケ役でしかなかった銀時たちも活躍していきますので、お楽しみに！

その九：似てないもの同士の方がうまくいくことが多い

沖田の収入　　というか脅迫金（？）のおかげで、風間家の財政は充分以上に潤っていた。

おかげでますます地味な役割になってしまった山崎だったが、別に不満はない。幼稚園に出ている昼間は土方の目が届かないので、好きだけミントンにいそしむことができるからだ。もちろん仕事も真面目にやっているが……。

しかも最近は一緒にやってくれる相手が見つかったので、ますます熱が入っている。

言うまでもない。しんのすけのことだ。

今日の夕方二人は、人気のない公園で打ち合っていた。

「ふう…今日はこれぐらいにしておこうか。」

「ほーい。」

しんのすけも山崎も、汗だくだくになっている。山崎にとっては驚いたことに、ミントンでのしんのすけの『ケツさばき』は、侮れぬほどのものであった。時には山崎から、一点を奪うほどだ。

ただし本人は、自分のやっていることがミントンだということ自体、あまり分かっていないのだが。

「おおつ、もうこんな時間！オラ、そろそろ帰らなきゃ、母ちゃんに怒られちゃう。」

「へえ…今日はまた、素直に帰るじゃないか。」

いつもなら、山崎が困るくらいにもっとやりたいとせがむしんのすけなのである。

「何かあるの？」

「うん！」

しんのすけがうなずく。なぜか、とっても嬉しそうだ。

「明日ね、休みの日で暇だから、家族みんなで新しいデパートにお買い物に行くの！」

「ふうん、そうなんだ。」

山崎も、そのデパートのことは知っている。確か最近できたばかりの、とても大きな所で、新八がとても興味を示していた。

「オラ、絶対お菓子いっぱい買ってもらうんだ！あと新しいアクション仮面のおもちゃも……………」

「あんまり欲張らない方がいいよ。買ってくれるものも買ってもらえなくなるかも知れないからね。」

山崎は苦笑しながら、しんのすけの頭をなでた。

ちなみにまだ彼は、しんのすけがクレしんの主人公であることを、知らないのであった……………。

「山崎、今日もよく食うな。」

「え？…あ、はい。仕事で色々大変なもので……」

「それだけじゃねえだろう。」

「は？」

土方の声が、突如凄みを増した。

「楽しいか？毎日ガキとミントンするのはよお。」

山崎は身体中の血が、一気に凍りつくのを感じた。

「ふ、副長……」

やっぱりバレていたのだ！

「コンビニの店長にも確かめてきたぜ。お前のバイト時間は朝九時から昼の三時まで。それなのにお前が帰ってくるのはいつも五時。

やっぱりこんなことしてやがったんだな……。」「

「土方さん、何もそんな怖い目でにらまなくても……」

「てめえはちよっと黙ってな、トオル。こいつに言わなきゃなんねえことがある。」

山崎は目を閉じ、覚悟した。子供の前から手加減はしてくれるだろうが、きっと今にも、こぶしの嵐が……。

……あれ？

何も起こらないので、目を開いてみる。

目の前には土方の顔。しかし、その顔は……。

え！？笑ってる？

鬼より怖い真選組副長の、タバコをくわえた口元が、確かに笑みを浮かべていたのだ。

はつきり言って、怒っている時よりもっと不気味だった。

「…フン。本当ならボコボコにしても済まねえところだが……今日は特別だ。おもしろ面白えもん見せてもらったからな。」

「……？」

頭の中が疑問符だらけになったのは、山崎だけではなかった。

「面白いものって何アルカ。」

神楽が大好物の酢昆布をくわえながら、首をかしげた。駄菓子屋で見つけたらしい。

「いや、今日の帰りに公園の前を通りかかったらよ、こいつが例のごとく、ミントンしてたわけだ。」

山崎は首をすくめた。見られてしまったのか……。

でも、それならおかしい。どうして副長は、自分をいつものようにボコボコにせずにほうっておいたのだろう？

「怒鳴ってやろうと思って公園の中に入って、びっくりしたよ。相手になってる奴が、まさかあの野原しんのすけだなんてなア。」

「ええーっ!？」

新八と山崎を除く、全員の大声が上がった。二人はぽかんとして顔を見合わせる。

「あの、副長、何であの子の名前を……」

「野原……しんのすけって、なんかどこかで聞いた名前みたいだけど。」

「なんだ新八、忘れたのか!？」

銀時が割り込んできた。

「『クレヨンしんちゃん』のアニメの、主人公だろうが！」

「あ…そーいえばしてましたね、そんな話。じゃあこの映画の世界の、主役ってことになるわけですか。」

「そして、トオルの大親友アルヨ。」

「いや…別に親友じゃありませんから。」

小声で否定して、トオルは少し心配そうな表情になり、山崎の方を向いた。

「あの、あいつ迷惑とかかけませんでした？」

「いや…変わった子だけどね。」

山崎は苦笑いした。

「まあ色々、面白い子だよ。」

「だろうな。」

土方が再び会話に参加した。

「特別サービスだ……他の場合は許さんが、あいつの相手をしてやるんなら、やってもいい。」

「マジすか!？」

「そのかわり、何であいつに会ったのか説明してもらおうか。」

山崎はなるべく、事細かに話した。しんのすけと公園で出会った時のこと。ミントンをやるうちに、意気投合してしまったこと。それからは暇があることに、二人でミントンをやっていたこと。

「へえ…あいつ、いない間にそんなことしてたのか。」

トオルは目を丸くした。車の上に乗っかり行方不明になってから、しんのすけが帰宅した時にはもう夕方になっていて、大騒ぎしていたのだ。そういえば、それまで何をしていたのか聞いていなかった。それより何よりトオルは、あのしんのすけと山崎の意外な組み合わせに驚いていたのである。

「にしても、お前としんのすけがお近づきになるとはなア…類は友を呼ぶっての、あれは嘘だな。」

銀時と同じ意見らしく、山崎をじろじろ眺めながら言った。

「ははは……あ、そういえば。」

山崎は何気なく、しんのすけが今日言っていた話を口にした。新しいデパートに行くとかいう話だ。
ところが、別に他意あって言ったことではないのに、みんなが（新八とトオル除く）深刻そうな顔で黙りこくってしまったので、山崎は少し焦った。

「え？お、俺、今何かまずいこと言いました？」

「そうか、明日か……………」

「え？」

土方の呟きに、山崎はわけが分からず首をかしげた。

「副長、明日がどうしたんです？」

「ああ、それはな…っ！かお前、ちゃんと映画見とけよ！話進まねえだろうが！！」

予期せぬところでパンチが飛んできて、山崎はひっくり返った。

「土方さん、子供の前ですよ！」

「大丈夫です、新八さん。もう慣れましたから。」

慌てる新八を安心させるように、トオルが言った。銀時たちのキラの濃さにも、もういい加減慣れてしまったようだ。

「でも土方さん、ここでは我慢してるんですね。」

「ああ？何のことだ？」

「マヨネーズですよ。漫画の中じゃ、かけたものが見えなくなっ
て気持ち悪いぐらいですからね。」

今でも充分気持ち悪いけどな、と、マヨシチューの異様な色彩を眺めながら新八は思った。

トオルはマサオの提案を受け入れ、古本屋から『銀魂』の漫画を安く買い込んできて、暇があれば読むようになった。新八やお妙が試しに見せてもらうと、本当に自分たちについての話がページの中で展開していて妙に感動したものだ。あまり公表したくないエピソードまで描かれているのには、少々閉口したが。

そんなわけで、今のトオルはある意味本人たちよりも、銀時らについてのことをよく知っていたのである。

「フン……それよりもだな、問題はデパートのことだ。」
土方が話を引き戻した。

くわえていたタバコに無意識に目を点けようとするが、お妙と神楽のとびきり怖いにらみを受けて手を止める。最強の女二人分の怒りに立ち向かう勇氣は、さすがの真選組副長にもないらしい。

二人がこうして怒るのは、タバコの煙がトオルの害になるかも知れないからだ。お情け程度というか、くわえタバコだけは許されていた。

土方がイライラ気味なもの、この辺に原因があるのかも知れない……。

「トオル、お前には一度説明したはずだ。…この映画のあらすじの中に、野原一家が新しいデパートに出かけるという話があるんだが

……」

「ああ、ありましたよね、そういう話。」

トオルが何か思い出したような顔になって言った。

「そっぴや、しんのすけのママのニセモノが出てきて、それを女の人を追ひ払ってくれるとか。」

「女の人？」

「この映画の中だけのキャラクターよ。しんちゃんや、他のみんな

を手助けしてくれる人で、ジャッキーっていうの。本名はジャクリン・フィーニーっていうんだけどね。」

お妙が弟に説明してやった。トオルが首をかしげる。

「でも、その人に助けてもらえるんでしょう？ だったら大丈夫じゃないですか。」

「かも知れねえ……でも、そうでもないかも知れねえ。」

「？」

銀時の発言だった。

「今までもそうだった。お前が実際のあらずじより早く捕まりそうになったりとか、それにマサオのことだ。あんなふうになせもの酢乙女あいに襲われるようなシーンは、映画の中じゃない。何かおかしいことが、映画で起こっているのは確かだ。だとすると……」

「明日のデパートでの出来事でも、何か変化があるかも知れないということですか。」

山崎が、銀時の言葉を引き取った。まだ鼻血が出ている。

「まあ必ずとは言えねえが。」

「しんのすけにも、危険が迫っているっていうんですか？」

トオルの顔が、不安げに曇った。

「だから必ずとは言えねえって言うてんだろ。でも何か起こる可能性は大だな。」

「さ、そこでだ。」

土方が再び、山崎の方へ向き直った。びくつと緊張する山崎。

「お前に任務を与えるぞ、山崎退。」

「へ？」

「いいか、お前は明日そのデパートに行つて、野原一家の様子を見張つてるんだ。なんなら一緒にいてもいい。それで怪しい奴が来たら、しんのすけたちを守つてやれ。」

「ええーっ！」

「なんだ、文句あんのか。」

「それつて…俺一人でやるんですか？」

「ああ、しんのすけと仲いいんだろ？それにミントンを特別に許可してやつてるんだ。それぐらいやつて当然だろうが。」

ミントンは関係ないんじゃない？と思つたものの、口に出せない新八であつた。

「俺……一人ですか？」

「バカかお前。この大人数でぞろぞろ歩いてみる。目立つてしよーがねえよ。」

それはそうだが、せめて誰か一人ぐらいは一緒に……。

と思つたのだが、副長のにらみにあつて声が出なかった。そこへ素つ気ない声がかかる。

「精いっぱい頑張れよ、ザキ。」

「殉職したら、ちゃんと死体は持つて帰つてやるネ。」

「二人とも、その言い方はひどいですよ……。」

本当にひど過ぎる扱いに、山崎は風邪でもひいて寝込みたくなつてきた……。

「あ、もうこんな時間だ…それじゃ沖田さん、僕もう帰りますね。」
「ああ。」

その頃の酢乙女邸では、夕食に招待されたマサオが、ちょうど辞去しようとしているところだった。

もつとも、彼を招待したのは酢乙女あいではなく……。

「またいつでも来いよ。」

一応あいのSPである、沖田総悟は言った。

「本当においしい夕食でした。ありがとうございます。」

「いやア、うちのコックの腕がいいからさ、なアお嬢様。」

「…ええ。」

酢乙女あい……の二セモノは、沖田をにらみながら小声で答えた。実質沖田に脅迫されているような状況で、二セあいとは終始見張られ、いじめられ、それでも給料を払わねばならない。もちろん腹を立てずにいられるわけないのだが、沖田にいつ斬られるか、それともバ

ズーカ砲をぶち込まれるか分かったものじゃないので、とても言い返せないのである…。

「そうだ沖田さん、僕明日、お出かけするんです。」

マサオがどこか嬉しそうな様子で言った。

「へえ、どこに？」

奇妙なことだが、あの事件以来、沖田とマサオは妙に気が合ってしまい、ことあるごとにこうして会っては、話をするようになった。時には、沖田がマサオの家へ行くこともある。

自己中心的でドSな沖田と、泣き虫で気の優しいマサオ。ここにも意外な組み合わせが誕生したわけだ。

「うん……ママが言ってたけど、最近できたばかりのデパートだとか。」

マサオはそのデパートの名前を言った。

「デパート？」

その時、沖田の頭の中を不吉な予感が通り過ぎた。

それはほんの一瞬よぎっただけだったが、気持ち悪い後味を残すほどに強烈なものだった。

なんだ？これは。

「沖田さん？どうしたんですか、難しい顔しちゃって。」

「…ん？あ、いや…何でもねエよ。」

結局そのままマサオを帰した沖田だったが、さっきの嫌な感覚はまだ消えていなかった。なぜだ？マサオがデパートに行くことに、何かまずいことでもあるのか？そう感じる理由を、沖田は思い出せなかった。

よし、それなら。

不意に彼の中で、心が決まった。

明日はそのデパートに行くでしょう。二セのあいだは縛りつけておいて。

マサオに危機が迫った時のために……。

「……………いよいよ、明日だな。」

「はい。」

「全員捕まえるよ。これで春日部の奴らは全員、我々の手に落ちたことになるんだから。」

「分かっておりますわ。」

「ただし……………」

あいつだけは、特別サービスでとっておいてやるけどな。」

笑い声が、ひそやかに広がっていった。

まだ、誰も気づいていない。恐るべき敵が、ついに本格的に動き始めたことを。

彼らのうち一人に、死の危険が迫っていることも……。

その九：似てないもの同士の方がうまくいくことが多い（後書き）

最後に登場した敵の正体は誰か、そして彼の狙いは？次回には、敵も予想しない展開が待ってるかも！？乞うご期待！！

その拾：欲張りで最終的に得する奴はいない（前書き）

デパートに一人向かうことになった山崎、マサオくんを心配し勝手に行くことにした沖田、そして野原一家やマサオくんの運命はいかに？そしてなぜか、今回はあいつが大活躍！！

その拾：欲張りで最終的に得する奴はいない

「へえ、こりゃ予想以上に広いなあ……」

予想外の大きさにびっくりしながら、新しいデパートの中を歩いている人物がいた。

志村新八である。

「こんなに大きかったら、迷子になる子とか出るよなあ……」
なんて心配をしているところが、いかにも新八らしい。

新八がここにやって来たのは、夕食の材料の調達（今日はみんなでお鍋の予定だった）のためであつたが、あともう一つ、山崎のことが心配でたまらなかつたからだ。

初めから、新八は山崎が一人だけでデパートに行くことに反対だつた。得体の知れぬ敵が相手なのに、危険過ぎる。

それなのにあまりにも冷めた銀時たちの様子を見て、愛想を尽かしてしまつた新八は、一人でも山崎の手助けをしてやる決意をしたのだつた。

もちろん、みんなには内緒だ。銀時たちには、どこかで買い物してくるとしか言つていない。

「それにしてもしくじつたな……」

こんなにでかいとは思わなかつた。デパート自体がでかいだけでなく、中にいる人の数も半端でない。この中で山崎と野原一家を見つけ出すなど、至難の技である。

第一自分は、野原一家がどんな顔をしているのか知らないのだという事実、新八は今さらながら気がついた。

これじゃ本当に買い物だけで終わっちゃうじゃないか。まったく情けない、もう少しよく考えてから来るべきだつた……。

……ん？

えっ！？なんであの人が、ここに……！！

新八の見開かれた目に、思いもかけないある人物の姿が映し出されていた。

「母ちゃん！両方買って！！」

「ああもう、あんたなんか連れてくるんじゃないかった……………」

野原みさえは、一つ大きいため息をついた。このデパート行きを、しんのすけがあれだけ楽しみにしていたのは、お菓子や新しいおもちゃを狙ってのことだ。

それぐらいのことは、誰にだって予想がつく。

それでもやはり、面と向かって大はしゃぎでこう言われると、どんな親だって気が滅入るというものだ。

さらにお菓子を選ぼうとしているしんのすけを呆れた目つきで見やると、みさえはカートを進めようとした。少しぐらいほっておいでも大丈夫だろう。何しろこいつは、迷子にかけてはベテラン（？）だ。

ところが本当にしんのすけから離れるより先に、自分がいる場所と

しんのすけを挟んで反対側から、声がかかった。

「やあ、しんのすけくん。」

「お？」

またもう一つお菓子を取ろうとしていたしんのすけが、手を止めて声のした方を向き、そしてみさえの驚いたことに、ぱつと顔を輝かせて飛びついた。

「山崎お兄ちゃん！」

「しんのすけ…この人、知り合いなの？」

突然現れた人物に、みさえは当然のごとく少し警戒心を抱いた。全く見覚えのない人だ。一体誰だろう？

「山崎退お兄ちゃんだゾ！最近毎日、オラとクリキントンしてるの。」

「バドミントンだよ。」

苦笑しつつ突っ込む青年。恐らく今まで何度も、この間違いを修正してきたのだろう。

「母ちゃん、安心していいゾ。」

しんのすけが重ねて言う。懇願するような口調だ。

「お兄ちゃんは悪い人じゃないゾ。ヘーぼんで地味で特徴あまりないけど、でもいい人だゾ！」

「…それ、ほめてくれてるの？」

ため息をつく青年。見れば、確かに地味で実直そうな、好感を持てる感じの若い男である。

みさえはほんの少しだけ、警戒を緩めた。ほんの少しだけ。人というのは、見かけによらない生き物だからである。

その時山崎なる青年が、しんのすけがいっぱい抱えているお菓子に目をやった。

「あれ…それ全部買ってもらうの？」

「うん！」

元気に答えるしんのすけ。

「でも母ちゃんがおケチだから…」

「何ですって!」

みさえが店内だということを忘れて、怒鳴った。人前でなかったら、げんこつ攻撃もあったことだろう。

すると山崎なる青年は、少し首をかしげてしんのすけを見ていたが、やがて言った。

「しんのすけくん、俺が昨日言ったこと覚えてるかな?」

「お? 何? 浜崎あゆみの新曲がどうなるか、心配で仕方がないってこと?」

「そんなこと言った覚えはないし。そうじゃなくてほら、君が買い物に行くって話した時のことさ。俺はこう言ったよな。」

『欲張ったら、買ってくれるものも買ってもらえなくなるよ。』

しんのすけが少し、あっという顔つきになった。

「確かに今はみんな欲しいかも知れないけどさ、お母さんだって買いたいものがあるし、君がそんなにしつこく言ったらきつと困るに決まってるよ。お菓子は別に今日買わなきゃいけないってものじゃないんだから、今回はどれか一つだけにしておいたら? 他のはまた別の時に買うとしてさ。」

そこまでいっぺんに言つと、初めて山崎の声に、からかうような調子が混じった。

「それにお菓子を食べ過ぎて太ったら、もう女の子にもてなくなる

よ。」

その一言が、しんのすけの心を決めたようだった。

「母ちゃん！オラ、チヨコビだけにしとくー!!」

「えっ？…あつ、そう……」

みさえは驚きでぼんやりしながら、しんのすけがかこの中にチヨコビだけを投げ入れ、あとのお菓子を棚に戻そうとするのを見ていた。そしてそれを手伝う山崎の姿も。

何だか分からないけど、確かにいい人みたいだわ。しんのすけをいさめる時の言い方が気に入った。心がこもっていないと、あんな言葉は出ない。

みさえの心の中で、一つ鎧よろいが脱げた。

「あの……」

気がつくと、声をかけていた。

「よかったら、ご一緒にませんか？」

しんのすけが今にも、浮気だ浮気だと騒さわぎそんな発言であった……
…。

「沖田さん！」

新八が呼びかけながら走り寄ると、沖田は本当にびくつとしたらしく、ものすごい勢いで振り向いた。

そして新八だと分かると、少しだけ肩から力を抜いた。

「なんだ、おめえか………何でこんな所にいる？」

新八は山崎が心配で来たことを話し、同じ質問をぶつけた。

「沖田さんこそ、どうしてこんな所に？」

「そ、それはだなア……」

沖田は昨日、マサオがこのデパートに行く予定だと聞いたことを説明した。そしてその時、妙に嫌な感じがしたことも。

「そのマサオくんは、映画の中でもデパートに出かけることになってるんですか？」

何気ない質問のつもりだったが、沖田はさらに表情を険しくした。

「……いんや、違う。そんなシーンはなかった。だから、なんか……」

「不安で見に来たというわけですか。」

新八が先回りをして言った。

「う……ま、まあそういうことだ。」

この人、本当にマサオのことが気に入ったんだな、と、新八は改めて驚いていた。自分勝手にサディストな沖田の心に、このような一面があったとは。

「それで、マサオくんはまだ来てないんですね？」

沖田が出入り口付近でうろうろしているということは、彼は明らかにマサオがやって来るのを待っているのだ。当然、マサオはまだ来ていないということになる。

しかし、答える沖田の口調は彼らしくもなく不安げで、迷いがあつた。

「だと思うが……俺がここに来たのは開店の30分ぐらい後だ。時間を勘違いしちゃってなア。もしそれより早く来てたら……」

顔を曇らせている沖田を見ているうちに、新八の胸の内にも不安がきざし始めた。何よりも、いつもへらへらして何物にも動じないと思っていた沖田が不安をあからさまに見せたことに、新八は動揺を感じたのだった。

ふと目を横へやると、一人の怒った顔をした女性が、すぐそばを通り抜けていくところだった。通り抜けるひょうしに彼女の腕が少しぶつかったが、女性は謝りもせずになんとも行ってしまう。本来穏やかな性格の新八は、何かよっぽど腹の立つことでもあつたんだろ

うなと思いながら、その後ろ姿に目をやるだけだった。するとその時、沖田がはっと息を呑んだ。その視線が、さつき新八にぶつかった女に、ぴたと当てられている。どうしたんですか、と新八が尋ねるより早く、その女性を待っていたかのように、玄関フロアにある大きな噴水の陰から、現れた人物がいた。

「あいつ……」

沖田が、ほとんど聞こえないぐらいの小声で呟いた。

「あいつは……」

むしゃくしゃする。まったく、なんてことだ。

「一体どうしたの？そんなに怒った顔をして。」

噴水のそばで待っていた相手が、自分の顔を見て、少し驚いた顔になる。

「それに、あの子は？」

その問いに答えようと口を開いた途端、またさっきの煮えくり返るような気持ちが襲ってきた。

「計算外だわ！」

「しっ！声を小さく！！」

「ああ、ごめんなさい……」

怒りのあまり、つい我を忘れてしまうのだ。

「何があつたの？」

「それがね……邪魔が入ったのよ。」

「何ですって？でもあいつは捕まえたはずでしょ、あの何とかいう女……」

「ええ、でもまた違うのがでてきたのよ！」

「また殴られたりしたわけ？」

「いえ、そうじゃないわ。今度出てきたのは、なんだか地味くさい若い男だった。あんな奴、いなかったはずなのに……。とにかくあいつが割り込んだせいでしんのすけが一人きりにならなくなって、私の出番がなくなっちゃったのよ！」

「嘘でしょう？その男、本当に覚ええないの！？」

「ないわ。それに多分、春日部の住人でもない。住んでるといっても、ごくごく最近に引越してきたのよ、きっと。あいつのせいで、

計画は全てめちゃくちゃだわ!」

「まあ落ち着いてちょうだいよ。ここじゃ目立つわ。」

「ええ…それはそうと、そっちはうまくいったんでしょね?」

「ええ。」

答えた相手の顔に、人のよくない笑みが浮かんだ。

「今倉庫に閉じ込めてあるわ。縛りつけて、気絶させておいてね。」

どう、見に来ない? 大丈夫よ、あの一家を捕まえるチャンスは、いくらでもあるんだから。」

「そうね…そうしましょうか。」

話しながら、歩き始めたこの二人の姿を野原一家が見たら、さぞかしびっくりしたことだろう。

なぜなら二人は、野原みさえとマサオの母親にそっくりだったのだから…。

「いやー、今日は本当にありがとうございました。」

「いえいえ……」

山崎は野原ひろしの感謝の言葉に、軽く手を振って応じた。

もう時刻は昼に近い。山崎を付き合わせ、たつぷりと買い物をした山崎は、一家が車に買ったものを詰め込むのまで手伝っていた。

この、ある意味現代では珍しいほど地味な青年を、一家はいたく気に入ってしまったらしい。なんなら昼食も一緒にどうかと誘われたくらいだ。さすがにそこまでずうずうしくはなれないので、山崎はやんわりと断った。

ま、これで土方さんの言ってた任務は果たしたことになるな、と、

山崎は軽くため息をついた。

結局なんの危険も現れなかったし、はつきり言っただけで彼らと買い物するのはとても楽しいことだった。こんな任務なら、もっかいやりたいくらいだ。

「ばいばーい、お兄ちゃん！」

「たやいやーい！」

走り出した車の窓から身を乗り出し、しんのすけとひまわりが（ひまわりはちゃんとしんのすけに片手でしがみついていた）手を振っ

た。山崎は、笑顔で手を上げ、それに応えた。

そう、彼もまた、平凡そうでいつぶう風変わりな、この野原一家を好きになり始めていたのである。

向こうにもし帰れたら、俺もクレしん見よう……ひそかにそう誓った山崎であった。

やっぱりだ。見失ってしまった。

「畜生！」

沖田が珍しく感情をむき出しにして、悪態をついた。今日は沖田さんの、意外なところばかり見せられるなあと思った新八だが、当然口に出しては言わない。

噴水から歩き出した二人の女性が、野原みさえとマサオの母親だと

告げた沖田は、すぐさま後をつけ始めた。どうしようかと一瞬迷った新八も、置いてけぼりは嫌だなど考えて彼の後を追いつつ始めた。ところがこうして、5分とたたないうちに見失ってしまったというわけであった。

しかし、決して不用心だったのではない。ただ単に人が多すぎて、その中にまぎれてしまった二人を見つけることができなかったというだけのことだ。

「くそ！」

沖田は再び吐き捨てると、設置されているベンチにどさつと座り込んでしまった。

「沖田さん……」

「マサオの母ちゃんが、あんな所で一人でいやがったということは……間違いねエ。あいつアニセモノだ。マサオをどこかにやりやがったんだ！」

「沖田さん、落ち着いて下さい！」

興奮し、憤慨する一方の沖田を見かねて、新八が言った。

「そうだ、僕がコーヒーか何か買ってきましょう。自動販売機があるはずですから。少し待ってて下さいね。」

沖田は返事をしなかった。少し離れてから振り返ってみると、さっきと同じ姿勢で、ベンチに身体を投げ出していた。

ゴロゴロ、ガッシャン！

自動販売機から缶を取り出し、新八は軽く息をついた。

「僕のはカルピスで…沖田さんのは濃い目のコーヒー。これでよし、と。」

沖田がコーヒーを飲むかは知らないが、気持ちをしづかせるには熱いコーヒーが一番である。新八は沖田のいるベンチのある方向へ、歩き始めた。

にしても、なんか変だな、このデパート。

新八は今さらのように違和感を感じた。いや、ずっと感じていたのだが、色々あったので気にする暇がなかったのかも知れない。

何がおかしいんだろう？普通のデパートにある何かが、ここには欠けている。

そう…活気だ。これだけの人の数なのに、まるで活気が感じられない。そういえばさっき沖田が大声を上げた時も、誰もこちらを見なかったっけ……。

もしかしたらデパート中の人間が、もう二セモノなのかも知れない。このぞつとするような考えを、新八は振り払えなかった。

そんなことを考えていたからだろう。すぐ前を通りかかった扉の中から、微かな声が聞こえてきた時、新八は反射的に立ち止まった。普通の声ではない。

泣き声だった。

「……………」

深く考えるより先に、身体が動いていた。重そうな大きい扉を、ぐいと押し開けていたのだ。

倉庫だ。一目見て、新八にはすぐ分かった。

広々とした空間の中、色々な品物が、箱づめになって雑多に積み上げられている。清掃係の誰かが置いていったものらしい、一本の箒ほうきが床に転がっていた。

しかし、そんなものはどうでもよかった。新八の目をとらえていたのは、倉庫の奥にたたずむ二つの人影だった。

両者はお互いに、凍りついたようになって見つめ合った。

新八は、彼らの足元に横たわっている小さな影に目をやった。暗く見えにくい、そのシルエットには見覚えがある。

「…マサオくん。」

新八がそう呟いた瞬間、みさえと、マサオの母親…の二セモノが、一斉に襲いかかってきた。

「遅エなア、あいつ……」

沖田はベンチに座って悶々としたまま、すでに10分以上は待ち続けていた。彼にしてはよく我慢した方である。

「並んでるのか？自動販売機って並ぶもんなのかイ。」

そして何より気に入らないのは、目の前を通り過ぎていく人々の雰囲気であった。

なんて活気のねエ野郎どもなんでイ。もうちょいしゃべったり、余所見したりしたらどうなんだ。どいつもこいつも、前向いてばかりで………全く不愉快でしょうがねエ。

「沖田……さん。」

すぐそばでか細い声がして、沖田は通り過ぎていく群集をにらみつ

けるのをやめた。

「おい、お前遅エ……」

「すみません……でもそれどころじゃなくってね。」

沖田は言葉を失い、大きく目を見開いた。

新八の腕の中には、今日沖田が何よりも捜し求めていたもの……マサオの姿があつたのである。

「マサオ……お前、何で……？」

「いや、色々あります……」

新八は倉庫の前を通りかかった時に泣き声を耳にし、入ってみたところ中にいた二人の二セモノに襲われたことを順序だてて話した。

「運よく手元に筭がありましてね。何とか二人とも、叩き伏せました。」

「そうだったのか……マ、マサオは無事なのか!？」

「ええ、気絶してますけどね。それほど大した怪我はしていませんから。」

ちなみに言っておくと、新八は家が道場ということもあり、剣術はかなり使える方だ。その年頃の男の子としては、相当強い部類に入るかも知れない。ただ周りがとんでもない奴ばかりなので、目立たないだけである。

「う、うーん……」

「!」

二人は話をやめた。マサオが顔をしかめ、うめき声を上げている。今にも目を覚ましそうだ。

「マサオくん？」

新八が声をかけると、マサオはうつすらと目を開いた。ぼんやりとこちらを見上げる。

「うーん……誰？」

変な質問だな、と新八は一瞬首をかしげた。この近さで、自分の顔が見えないはずはないのだが……。

それとも、地味過ぎて忘れられた？ いや、いくらなんでもそんなことは。

「マサオくん、僕だよ。新八だよ。分かるかい？」

軽く揺すって呼びかけると、マサオはさらに大きく目を開いた。

「あ、新八さん…マ、ママは？ ママの二セモノは？」

「大丈夫。僕がやつつけたから、もう心配いらないよ。」

安心させるような口調で、語りかける。しかし、マサオの顔から怯えの表情は消えなかった。

「そうですか…あの…ここから出してくれませんか？」

「え？」

「僕、真っ暗なところ嫌いなんです。」

今度こそ、新八は本気で当惑した。沖田と目を合わせると、彼もわけが分からないという顔をしている。

その時新八は初めて、マサオの視線が新八の顔ではなく、その右肩辺りにずれていることに気がついた。恐ろしい認識が、心の奥から這い上がってくる。

「マサオくん、君もしかして……………」

目、見えないの？」

くそっ、なんてことだ。

冷たい床に倒れ、みさえのニセモノは悔しげに舌打ちを漏らした。

あの女を捕らえ、あのお方に力を頂いたからには、スムーズに任務をこなせると思っていたのに。何で邪魔ばかり入るのだ？

あの時しんのすけが迷子にならずにやがった男かと思ったが、違ったようだ。自分たちを痛めつけたのは、そいつより若い、むしろ少年みたいな感じの奴だった。

どっちにしろ、奴らは我々の任務を妨害したのだ。自分たちのことを知っていたのか、それとも知らずにやったのかは分からないが。身体が動かない。何とかして、あのお方にこのことをお知らせしなくては…………。

倉庫の中に、誰かが入ってくる気配がした。

起き上がるうとした瞬間、背中に鋭い何かが貫通する音を、みさえのニセモノは確かに聞き取った。

ほとんど声を上げる間も、痛みを感じる時間すらなく、彼女は絶命した。

その拾：欲張りで最終的に得する奴はいない（後書き）

新八と沖田の会話シーンを書くのが大変でした。この二人、原作ではほとんどまともに会話してないんで…これでよかったかな？次回はさらなる展開が待っている予感…どうぞお楽しみにっ！！あと感想待ってます。最近来ないので、ちょっと寂しいです…。どんどんお寄せ下さい！！

その拾巻：やたらと他人を責める奴にはロクなのがない（前書き）

マサオくんが失明：思わぬ事態に銀さんたちはどう動く！？そして
いよいよ敵が、本格的に動き出す！

その拾巻：やたらと他人を責める奴にはロクなのがない

「お呼びですか。」

薄暗い部屋の中に、無表情な声が響いた。

「ああ、ごめんね急に。」

それに答える軽い調子の声。天井の淡い明かりに照らされた小さなテーブルの上に、とん、と何かが置かれる。

二枚の写真だった。

「でもちよつと、注意しなきゃいけない事態が起こったかも知れなくてね。それで至急君を呼んだわけ。」

「……………この二人を、どうしろと？」

「うん、なんかそいつら、俺たちの計画の一部を邪魔したらしいんだよね。わざとかたまたまか知らないけど、またそんなことされちゃだもんね。」

そこで一息つく。そして…。

「というわけでそいつら、消しちゃってくれる？」

声の軽い調子は変わらなかった。まるでちょっとスーパーに行っておつかいをしてきてくれないかとも言うような、平坦な口調だった。

「ああ、それにもう一つ、やってほしいことがあるんだ。」

「……………」

「この子をここへさらってきてくれないかな。」

もう一枚、写真が机の上に置かれた。

「君一人じゃ大変なら、あいつらにも手伝わせてやりなよ。久しぶりだから、きつと喜ぶよ。」

「…承知いたしました。」

一拍の間をおいて、もう片方の無表情な声の主はそう答えると、片手で三枚の写真のうちの一枚を取り、もう片方の手の指をすつと二枚の写真の上にそえた。

写真が、燃え上がった。

揺らめく赤とオレンジの中で、新八と山崎の顔が崩れていった。

「大丈夫？一人だけで…。」
「うん、へーきへーき。」

双葉幼稚園では、ここのことろついぞない光景が繰り広げられていた。

マサオが失明したという話は、恐ろしいほどのスピードであちこちに知れ渡り、もちろん幼稚園中の子供たちが知っていた。

ネネもすぐにそのことを耳にしたらしいが、今回ばかりは性質の悪い好奇心を発揮することがなく、ただただ心配のためだけにマサオ宅に駆けつけ、お見舞いしてくれた。そしてマサオの目が、本当に完全に見えなくなったことを知ると、なんとぼろぼろと涙をこぼし始めたものである。これにはトオルやボーちゃん、それにしんのすけさえもがびっくりさせられた。

しかしさらに驚いたことには、ネネはマサオが幼稚園に来るようになって、決してリアルおままごとをしなくなった。

しかも見ることでなくなったマサオのそばにくっついて、手助けするようにすらなっていた。その献身（そう呼ぶのがふさわしいほどの身の尽くし）ようだった（ぶりは、沖田ですら凌ぐほどのものであった）。

マサオが失明した原因は、身体的な怪我というよりも、精神へ加え

られたショックやストレスだろうと医者は言っていた。少し時間がたてば、すぐに戻るだろうとも。これには銀時たちも、大いに安堵のため息をついたものだ。

ショックの理由は、分かり過ぎるほどに分かっている。今はマサオが、立ち直るのを待つしかなかった。

一方マサオは、思いのほか気丈だった。沖田に導かれ、自分の家の中を隅々まで歩き回って場所を覚えると、すぐに自宅中での移動には不自由しなくなった。春日部の中よく行く所や、そこに続く道のりなども、まさに身体で覚え、体得しているようだった。

一つの機関が潰されると、他の機関がその働きを補うために鋭敏になる。というのはよく聞く話だが、マサオの場合もそうだ。視力を失った代わりに、彼の耳や鼻は格段に鋭くなった。今や足音を聞いただけで、誰が来たのか分かるまでになっている。

もちろん普通にそうなったわけではない。マサオが苦しい練習を、積み重ねてできるようになったことだ。トオルもよくそれに付き合っていたが、ある時マサオがこう言ったことがあった。

「僕、こうやって目が見えなくなって、初めて分かったんだけどさ。人間って耳とか鼻よりずっと、目に頼ってるんだね。だって大体見た目で判断することが多いでしょ？でも、そのせいで間違っちゃうこともあるんだよね、きっと。」

トオルは、特にその最後の言葉に、はっと胸をつかれるような気持ちになったのだった。

幼稚園に来るようになって、もちろんマサオは噂と好奇心の的になったが、しんのすけたちが団結して彼を守った。特にネネはすごかった。一度マサオをからかいに来たいじめっ子たちを、ウサギのぬいぐるみで叩きまくって追い返したという武勇伝がある。

もつともマサオ本人は、普通に過ごす分には全く支障がない様子だった。机の周りやロッカーの中は相変わらずきちっと片づけられていたし、トイレにだって自分で行けるし、声の聞こえる方向で誰かのいる場所を正確に感じることもできる。はた目には目が見える時

とまるで変わらなかった。

それでもネネは、マサオのそばに続けた。周りには二人をさかんにやし立てる、バ力でおせっかいな奴もいたが、それでもずっと離れなかった。トオルたちだけでなく、マサオ当人が戸惑うほどになぜだろう？トオルは頭の中を疑問符でいっぱいしながら考えた。なんでネネちゃんは、こんなに一生懸命にマサオのそばにしようとするんだろう？

驚いたことに、その答えを持ってきてくれたのは、ネネ本人であった。

「マサオくん、一人で本当に帰れる？危なくない？」

夕暮れの公園。赤い光が遊具を染めている。

二人はもう誰もいない公園を出て、帰途につこうとしているところだった。ブランコに座って何となくゆらゆら揺れていたら、いつの間にか他の子供たちは誰もいなくなってしまったというわけだ。

マサオはネネを安心させるように、ちらりと笑った。

「本当に大丈夫だってば、ネネちゃん。いつも一人で帰ってるもの。平気だよ。」

それに、正直ついてこられては困るのだ。本物も二セモノも、ママがいなくなってしまったので、最近トオルの家で夕飯を食べることにしている。今日はそのまま彼の家へ行くつもりだった。

ちなみに朝ご飯は、新八が夕食の時に一緒に準備してくれた料理を温めて食べることにしており、お弁当もトオルが新八に頼まれて持ってきたのを、みんなにバレないようこっそり受け取るようにしていた。簡単な料理なら自分でも作れるが、やはり目の見えない状態で包丁やコンロなどを扱うのは、かなり危ないことだ。それに新八の作る料理が、言っちゃあ悪いが自分やママの作るものよりおいしい、ということもあった……。

「ネネちゃん…本当に心配いらないんだよ。どうしてこんなに気をつかってくれるの？」

実際、どうしてネネだけがこんなに心配そうな様子でい続けているのか、マサオも周りの人たちも不思議がっていた。確かに友達が失明するというのは、ショッキングな出来事かも知れないが……。

「…ごめんね。」

「えっ!？」

一瞬ネネが何と言ったのか分からず、マサオは戸惑った。

「ごめんなさい。」

今度はさつきよりはつきりした口調で、ネネが言葉を口にした。

「……なんで謝るの？」

ネネは気が強い分、あまり人に弱みを見せないタイプだ。従って軽々しく謝罪の言葉を話すような性格でもない。

それなのに、理由も分からないままいきなり謝られたものだから、マサオは完全に面食らってしまった。

本当にどうしちゃったの？ネネちゃん。

「だって…」

ネネが、ほとんど聞こえないほど小さな声で言った。

「マサオくんの目が見えなくなったのは、あたしのせいなんだもの。」

「ええ？」

マサオは聞き間違えたのではないかと思った。どうしてそんなことを言うのかと尋ねるより早く、ネネがしゃべり出した。

「あたし、マサオくんにもいつもひどいことしてたわよね。リアルおままごとを無理やりさせたり、悪口言ったり。」

「？」

一体何を言い出すのだ。

「きつとあたしが嫌なことばかりしてたから、マサオくん、ストレス溜まっちゃってたのね。でも、ネネ全然気がつかなかった。それでとうとうこんなことになって……全部あたしのせいよ。」

聞いているうちに、マサオは思わず笑い出しそうになった。なんてことだろう。ネネはまるで見当違いの予測をして、自分を責め続けていたのだ。

「ネネちゃん、それは違うよ。」

「いいの、ごまかさなくなつて。だつてそれ意外に考えられないじゃない。みんなだつてそう思ってるわ。」

一瞬、マサオはネネの言葉の意味を考えなければならなかった。

「みんなもそう思ってるって？」

「そうよ。」

ネネの声に、突如うるみがかかった。泣きかけているのだと分かって、マサオは慌ててポケットからハンカチを取り出し、差し出した。

「ありがとう。」

ネネがハンカチを受け取るのが分かった。

「少なくとも、幼稚園の女の子はみんな知ってるわ。男の子たちは……あまり知らないみたいだけど。」

「……………」

聞いているうちに、マサオの頭の中で一つの考えがまとまってきた。しかしすぐには言わず、かわりに尋ねた。

「ネネちゃん、そのこと誰に聞いたの？」

すぐさま答えが返ってくる。

「あいちゃんよ。」

マサオは束の間絶句した。あいちゃんだって!?

「あいちゃん、最近マサオくんのことが好きになりかけてるでしょ？だからあたしのこと、すごく怒ってた。どうしてくれるのよって、すごく責めてたわ。」

それは違うよ、ネネちゃん。

マサオは心の中で囁いた。あのあいちゃんは二セモノで、僕を捕まえるためにああやってただけなんだ。ただの演技だったんだよ。

君を責めるのは、ただ沖田さんに捕まってる鬱憤^{うつぶん}を、そうやって晴らしたいからだけさ。

「それにね、マサオくんとはかりいるのはそのせいだけじゃないわ。」

「どういうこと？」

「もう幼稚園の女の子は、誰もネネと遊んでくれないの。」

またしても、マサオは言葉を失った。

「声かけても無視されるし……寂しいから、ずっとマサオくんやしんちゃんたちのそばにいたのよ。」

そこまで言つと、ネネはフツと笑った。自嘲的な笑い方に聞こえた。「結局あたしって、自分勝手のままね。自分の寂しさをまぎらわすために、マサオくんのそばにいたんだもの。今までと変わらないわ。」

「ネネちゃん……」

マサオはかけるべき言葉が見つからなかった。どんな慰めも、宙に浮いてしまいそうだ。

その時一っだけ、マサオは効果的かも知れない方法を思いついた。

「ネネちゃん、これから風間くんちに行かない？」

「えっ？何言ってるのよ、迷惑じゃないの。」

「実はね、僕風間くんの家に、夕食に呼ばれてるんだ。」

マサオはなるべく慎重に言葉を選び、土方先生、銀八先生が風間家

の両隣にあること、それをきっかけに互いが交流し合い、一緒に夕食をとっていること、そして今日、母親が留守なためマサオもそれに招待されたということを説明した。あながち嘘というわけでもない。

「へえ、そんな偶然って、あるのね。」

普段ならそういう話を耳にすると、ここぞとばかりに好奇心を発揮するネネであつたが、今回は純粋に驚いた表情を浮かべただけだつた。

「でも…ママに何も言つてないし……」

「大丈夫大丈夫。風間くんちについたら、電話すればいいんだよ。」

そう言つてネネを説き伏せ、二人は公園を出た。

夕日の光が作る二つの長く伸びた影が、どちらからともなく互いに手を伸ばしてつなぎ合つた。

ネネとマサオが公園を去った約一分後、そこに再び二つの影が現れていた。マサオはもう公園に誰もいないと思い込んでいたが、それは間違いだったのだ。

しかも、その二人は顔も身体つきも服装でさえも、ネネとマサオの姿に瓜二つであった。

二人はしばし黙り込み、ネネたちの消えていった方向を眺めていたが…………。

「予言に、間違いはないのね？」

ネネそっくりの少女が、感情のこもっていない声で尋ねた。もちろん隣の少年への言葉なのだが、そちらを見ようもしない。

マサオそっくりの少年は、いつこうに気にする様子もなく声を返した。

「そりや大丈夫さ。あいつの予言は外れない………… お前だって、よく知ってるはずじゃないか。何でそんなに怪しむんだ？」

マサオのものと同じその声には、自信と怪訝そうな響きが入り混じっていた。

「念を入れてるだけよ。怪しんでるわけじゃないわ。」

相変わらず話している相手には目を向けず、ネネと同じ姿をした少女は無機質に答えを返した。声はおるか、夕日の赤い光を反射している瞳にすら、なんの感情も映し出されていない。まるでただのガラス玉のようだった。

「とにかくあいつは、あの男に連れられて家に送られてくる。その時に捕まえて、男の方は始末しまえばいい。簡単な仕事だ。」

マサオに瓜二つの少年が、鼻を鳴らした。つまらなそうな感じにとれなくもない。

「まったく何で、あんな何でもなさそーな二人を殺らなきゃなんないのかね？俺たちがやらなくても、他のザコどもに任しとけば充分じゃないか。何でわざわざ俺たちが出る必要がある？退屈しのぎさ

せてくれるためなのか？」

「それもあるかもね。」

ネネそっくりの声が、ただし本物なら決して出さないような冷え切った声で告げた。

「でもあのお方は、少しでも障害になるものは消しておかないと気がすまない方だし、あいつらに任したら何かとんでもないことするかも知れないし。」

「ああ、バカだからな。」

「ええ、バカだからよ。」

束の間、沈黙が満ちた。既に夕日は落ちかけ、辺りは柔らかい闇の中に包み込まれようとしている。

再び、マサオと同じ声が言った。

「それじゃあ仕方ない。奴らが来るまで、我慢して待つとするか。退屈だけど、あとでいっぱい楽しめばいいからな。」

「そうね……」

少女は、そっと目を閉じた。

「少しは手応えあればいいけどね……」

その拾巻：やたらと他人を責める奴にはロクなのがない（後書き）

新八と山崎：敵の矛先は意外な方向へ！ネネちゃんを風間家に招待したマサオくんだけど、果たしてどうなっちゃうのか？いよいよ敵も現れ、危険が目前に…次回は急激な展開が待ち受ける予感！感想もどうぞお寄せ下さい！！

その拾貳：マンションの壁ぎわの部屋って何かと不便（前書き）

命を狙われた新八と山崎の運命は……！？一部の敵の名前を明らかに
なり、事態は突如急展開を見せる！どうぞお楽しみ下さい！！

その拾貳：マンションの壁ぎわの部屋って何かと不便

桜田ネネは、幸せな気持ちでいっぱいだった。こんないい気分になったのは、久しぶりのことだ。最近では家でも幼稚園でも、嫌なことばかりあったから……。

そのせいだろう。ネネはもう少しで、新八に曲がるべき角を教えそびれるところだった。

「あ！お兄さん、そこ曲がって！！」

「そうなの？ごめんごめん。」

自分が悪くもないのに頭をかいて謝るこのおとなしそうな青年に、ネネは好感を抱いていた。今は彼に家まで送ってもらっているのだ。風間くんの従兄だっというけど、あんまり気取ったところのない、むしろすごく地味な人だわ。でもそこがいいのよね…。

夕食は、予想以上ににぎやかで楽しかった。何より面白かったのは、土方先生と銀八先生が口ゲンカを始め、やがてそれが酒の飲み比べに発展し、挙句の果てに二人とも酔いつぶれて寝込んでしまったことだった。しかも、せいぜい5杯ぐらいのワインだというのに。

あれじゃうちのパパより弱いわ、と、ネネは思い出し笑いをしていた……。

しかしふと、現実の問題が頭の中に浮かび上がってきた。

「マサオくんは、誰が送ってくれるんですか？」

「ああ、マサオくんね。神楽ちゃんが送ってくれるから、大丈夫だよ。」

「神楽さん…あの色白で青い目した、チャイナ服のきれいな人？」

「そうそう。」

「服はアレだけど、中国人じゃないわよね？青い目の中国人なんて見たことないもの。」

「う…うん、まあ…そうだろうね……」

新八の返答がやや鈍ったが、幸いネネは気づいていなかった。楽しそうにしゃべり続けている。

「ネネ、神楽さんみたいに綺麗になりたいな。青い目は無理だけど、ああいう白い肌、すっごく憧れるの。」

本当に憧れている口調だった。新八が内心、頼むから中身まで憧れないでくれよと懇願しているなどとは思ってもいない。

「でも……大丈夫なんですか？神楽さんと一緒だと、逆に狙われるかも。」

「大丈夫大丈夫。」

新八は心をこめて言った。神楽がついていれば、変なサングラスのボディーガードを一団雇うよりもずっと安全だろう。これに定春がついたら、もう手のつけようがない。

ちなみに定春は、始めは春日部山のある場所に嚴重に繋がれていたのだが、沖田が酢乙女家に入ってから、その庭を好き勝手に荒らし回っている。たまに沖田にけしかけられ、ニセあいの頭にかぶりついたりしているとかいいう話だ。

「家はあと少しかい？」

「うん！」

その間も、二人は笑いを交えつつ、色々とおしゃべりしていた。ネネの顔から、今日の夕方見せていた暗い表情は、消し飛んでしまったかのようだった。新八もそれが嬉しく、ネネと話をすることに熱心だった。

そのせいもあっただろう。ネネはもちろん、新八は少しばかり間をおいてついてくる影に全く気づいていなかった。

もっとも、辺りはほとんど暗闇で、光源といえば家々からの明かりと、ぼつんぼつんと立つ街灯ぐらいなものだ。気がつかない方が普通だったかも知れない。

後をつけているのはもちろん、数時間前に公園にいた、ネネとマサオにそっくりな二人組であった。

「どうだ、やっぱり预言通りになっただろ？」

「ええ、そのようね。」

ネネそっくりな少女の態度は、先刻と変わらず冷淡だった。

（ちっ…少しは感情を表に出したらどうなんだ、この不愛想女が。）
内心、不快な呟きを漏らしたマサオそっくりな少年だったが、声に出しては言わなかった。何と言っても、彼女はあのお方の右腕的存在だし、我々の中では一番恐ろしく、そして強大な力を持っているのだ。

「…で、どの辺りでやるんだ？」

先を歩いていく二つの背中を眺めながら、マサオと同じ声の少年は低く尋ねた。

「そうね、ちようど……あの角を曲がって、すぐの所にするわ。あそこなら電灯の光が届かないし、すぐそばに家もないし。」

そこまで言くと、ネネと瓜二つの少女は初めて隣の少年の顔を、真正面から見た。少年はびくっとなり、無感情な視線から自分の目をひっぺがすことができなかった。

「あたしがまず、先に攻撃をしかけるわ。十中八九、奴はその攻撃

で死ぬから……あとはもう一人をゆつくり回収すればいい。」

「何だ、あっさりやつちまうのか？つまんねえ。」

言ってしまったって、少年は後悔した。たちまち氷のような視線でらまれてしまったからだ。

「あんた、勘違いしてるみたいね。これは命令なの。任務なの。遊びでやってるんじゃないのよ。つまらないとか楽しいとか、そういうことはどーでもいいの、だって仕事なんだから。」

そして、と続ける少女の目つきが、さらに凍りついた。

「仕事を怠ったら、待っているのは『死』だけよ。」

「分かってる、分かってるよ、そんぐらい。」

少年は慌て、弁解するような口調になった。

こいつがカツとなるなんて、まずありえないが、それでもなるべく怒らせることは避けたい。彼女はまさに言葉通り、にらむだけで人を殺すことができるのだから。

前に行く二人が角を曲がり、少しの間続く暗がりに入った。やはり不安なのだろう、少し足早になっている。

かわいそうに。少年は哀れみに近い表情すら浮かべて、それを見ていた。そんなに急いだって、無駄なものは無駄だというのに…。

「行くわよ。」

ネネそっくりな声がそう言って、冷え切った瞳が、前を歩いていく二人のうち男の方の背中にぴたりと当てられた。

数秒後には、全てカタがつく……少年はそう信じて、何の疑念も抱いていなかった。いや、それは少女の方も同じだったであろう。

二人は全く足音を立てていなかったし、呼吸音も最小限にしていた。話すのだって、囁くのより小さいと言っている声量でだ。

だから気づかれるはずがなかった。どう考えても。

「……………」

少女が突然顔をしかめたので、少年は不思議に思った。

「どうした？」

「いえ…何だか頭の内側で、妙な感覚がしたのよ。すうつとなでられたみたいなの…」

「頭の内側？」

少年が聞き返す。

まさにその瞬間だった。前を歩く青年が、くるりと振り向いたのは。

あまりに突然の動作で、二人は隠れる暇がなかった。しかも間の悪いことに、二人は角を曲がったばかりで、まだ街灯の光が届く所にいた。

青年　いや、少年と言った方がいいかも知れない　の目が、まっすぐに後ろの二人をとらえた。

その目が大きく見開かれる。隣の小さな人影に、何か慌ただしく叫ぶと、16歳ぐらいのその少年は走り出した。小さな人影の手を引いて。

「く……………」

マサオに瓜二つの少年が追いかけてようとしたが、

「ダメよ。」

少女に素早く腕をつかまれた。

「何でだよ！？今ならまだ間に合うじゃないか！今狙って攻撃すれば……………！！」

「落ち着きなさい、イリス。」

名前を呼ばれ、少年はびくりと押し黙った。今の少女の口調から、明らかに殺気じみたものにじみ出ていたからだ。

少女は低く、小さな声で囁いた。

「普通に考えて、あいつが感づくはずがないのわ。きっと、誰かが教えたのよ。」

「教えた？でも奴のそばに近づいたものは、何も…」

「あんだ、忘れたの？」

少女の声は、今やマイナス以下まで温度を下げていた。

「こういうことができる奴が、一人だけいたでしょう。」
言われて、少年　イリスの目が、大きく見開かれた。

「まさか……………」

テルか。」

少女がゆつくりとうなずく。

「…それ以外には、考えられない。」

「あいつ、閉じ込められてるのに生意気なマネを…」

イリスの声には、明らかに怒りがこもっていた。

「どうする？ルビー。」

呼びかけられた少女は、堅く凍った瞳の方向をぐるりと変え、元来た方向を振り返った。

マンガースマンションの方へ。

「……………少し、お仕置きが足りないらしわね。」

そう言う少女 ルビーの声は、今までで一番寒々としていた。

「あー……………」

マンガースマンションの一室で、盛大にだみ声を上げながら寝転んでいる男がいた。

土方十四郎である。

別に下手くそなカラオケに挑戦しているわけではない。ただ酒の飲み過ぎで、苦しいだけのことだ。飲み過ぎたって、ワインをグラス五杯、飲んだ程度のことなのだが。

まあ、要は二日酔い、であつた。

酒は好きなのだが、実はあまりアルコールに強くない。それは宿敵（？）の銀時にも言えることだつた。花見の時も、二人で飲み比べをした結果醜態をさらしてしまったことがある。

そうだ…確かネネちゃんが出来たんだよね……で、あの野郎と言い争っているうちに……。

それからの記憶はまるでおぼろだが、起き上がってみるとここは自分と山崎の部屋の中だつた。とすると、自分は酔いつぶれてから誰かにここへ運び込まれたわけだ。多分山崎だろう。

しかし、当の山崎の姿は見えなかった。よく聞くと、隣のトオルの部屋から水を流す音や皿がカチャカチャ鳴る音がする。片づけを手伝いに行っているようだ。

頭が痛いのと身体がだるいせいで、寝返りを打つのに苦勞するほどだつた。まったく情けねえ、これが真選組の副長か……。

ふと土方は、だみ声を上げるのをやめた。

音が聞こえる。

それは、土方の寝ているベットが寄せてある、つまり土方が背中を向けている壁の辺りから、聞こえてくる。

微かな物音だつた…常人なら、気がつかないくらいの。

しかしあいにくなことに、土方はいわゆる『常人』ではなかった。そちらの壁は、トオルの家がある側とは反対側だ。逆側に誰が住んでいるのか知らないが、その住人がさっきの物音を立てたのだから。

それにしても、妙な音だった。まるで何か重いものが、壁に押しつけられたような。

そつ…例えば、人間が。

土方は目を閉じ、布団を引き寄せた。色々あったからといって、そこまで勘ぐることはない。首を振ろうとした途端、頭が割れるように痛んだので、土方はかろうじて大声を上げそつになるのをこらえた。

くそつ、ちよつとカツコつけ過ぎちまったか。ワインなんざやめて、ビールにしときゃよかった…。

そんなことを考えているうちに、土方は再び意識が遠のいていくのを感じた…………。

トン、トン。

またしても、物音だった。

土方ははつと目を開けた。驚くほど気分がよくなっている。おそろおそろ頭を動かしてみたが、何の痛みもなかった。

随分治るのが早いな、と、土方は心の中で一人ごちた。いつもは翌朝まで苦しんでいることが多いのに…よく寝たせいかな？

そういえば真選組では、色々な理由で夜中に叩き起こされたり（普通土方は叩き起こす側だが）張り込みで徹夜したりすることが普通で、こうやって安眠をむさぼる機会はありませんかった気がする。土方自身も、ここまで気を緩めて眠ることができたのは久しぶりだった。

それでもほんのわずかな音で目が覚めてしまうのは、彼の戦士としての本能が衰えていない証拠であろう。

トン。

また、さっきの壁から聞こえてくる。

先程よりは大きい、やはり控えめで、辺りをはばかっているような音だ。まるで隣室の人に迷惑をかけてはいけないとでもいうような。

だったらなぜ、わざわざ壁を叩いたりする必要があるんだ？

土方は起き上がった。だるさも、頭痛もどこかへ消えていた。壁を小さく叩く音は、まだ小刻みに続いている。誰か知らねえが、ふざけた奴だ。せめて隣の家に言って、苦情を……。

そこまで考えて、しかし土方はとんでもないことに気づいた。

風間家は、このマンガースマンションの8階にあった。エレベーターからは遠く、廊下の端っから数えて2番目の場所に位置している。

風間家のドアに、外側から向かい合って右側が、銀時と神楽の部屋だ。

そして土方たちが暮らす所は、風間家を挟んでその反対側、廊下の一番端ここに位置しているのだった。

つまり風間家と反対側の壁の向こうには、隣室などない。誰もいないはずなのだ。

土方の全身から、どっと冷や汗が吹き出してきた。

必死で隠しているが、実は土方は幽霊とかお化けとか、そういった類のものが大の苦手だ。酒に強くないのと同様、これも銀時と共通していることで、真選組で幽霊騒ぎが起こった時にはやっぱり二人で恥ずかしい様子をさらしまくっていた。ついでに言くと、好みは違うとはいえ味覚の異常さでも二人は共通点を持っている。

だからどう考えても、向こう側に何もなければずの壁から音が聞こえてきたのだと理解した時、土方は文字通り蒼白になってしまった。

いや、『聞こえてきた』のではない。

音は、今も続いている。

悲鳴を上げて風間家に助けを求めたりしなかったのは、さすがに真選組の鬼の副長としてのプライドがあるからだ。それに沖田や銀時に、後でネチネチいじられるのもごめんである。あいつらにバシるくらいなら、それこそ死んだ方がましだ。
でもいつまでも、この音を聞いている気にもなれない。

そこで…というか、半ば自暴自棄になって、土方はベッドに座ったまま足を伸ばし、壁を蹴りつけてみた。

ドンッ！

隣室の風間家に届くほどではないが、かなり大きな音がした。壁を向こうから叩いていた音が、ぴたっと止まる。

その沈黙の中で、土方は誰かが……あるいは何かが、じっと息をひそめている気配を感じ取っていた。

間違いない。向こうに、何かがいる。

一分ぐらい沈黙が続くうちに、土方はだんだん落ち着いてきた。それが何であれ、壁の向こう側にいるものが、幽霊みたいな超常的な存在の類ではないということを、ほとんど勘らしきもので理解したからだ。

今度はもっと、大胆な行動に出てみた。

「おい。」

自分の声が、沈黙の中で意外と大きく聞こえた。

「そこに誰がいるのか。」

沈黙。

土方が再び声をかけようとした時、不意にまた、壁を叩く音が始まった。ただし、今度はさっきよりも大きい。隣室に誰がいるのが、分かったからだろうか。

土方が何か言おうとすると、それを遮るかのように叩く音が強くなる。黙ってこれを聞いてくれ、というように。

土方は困惑し、考え込んだ。何者かは不明だが、向こうに誰がいるのは確かだ。反応しているということは、こちらの声が聞こえないとか、言葉が分からないというわけではないらしい。それなのに、しゃべらずに壁を叩き続けているということは……。

突如、ひらめいた。

「お前、ひよつとして声が出せないのか。」

すると壁の叩き方が、力強くなった。肯定の意味がこもっていることが、すぐに分かる叩き方だ。そこで土方は言った。

「いいか、これから俺の質問することに『はい』なら一回、『いいえ』なら二回、壁を叩いて答える。分かったか？」

トン、と一回、返事が返ってきた。

「お前は…そこに住んでんのか？」

いいえ。

「じゃあ、監禁されたのか。…その、誰かに閉じ込められたのかってことだよ。」

はい。

土方は我知らず、ごくりとつばを呑んで、質問を続けた。なぜ閉じ込められているのかとストレートに聞けないもどかしさで、早口になっていた。

「閉じ込められているのは、お前一人か。」

いいえ。

「何人いるんだ？その数だけ壁を叩いてくれ。」

壁が叩かれた回数は、2回だった。

「二人、か…」

土方は束の間、考え込んだ。もし実際に、この壁の向こうに誰かを閉じ込めるとしたら、監禁される側は相当狭苦しい思いをしなければならぬだろう。しかも二人。それなのに壁を叩けるような余裕があるということは、閉じ込められてる者はよっぽど小さい可能性が……。

そうだ、子供だ。

「なあ……正直に答えてくれよ。」

お前、本物の人間なのか？」

今度は、返事はなかった。

「おい、どうなんだ。」

返事なし。聞き方を間違えたのか、それとも答えられない質問だったのか。

「おい……」

言いかけて、土方はびっくりして口をつぐんだ。

声がしたのだ。壁の向こうからではない。頭の中に、直接。

『僕は、あなたたちのいう二セモノといったところですが……もう一人は違います。』

あんまり驚いたので、土方は彼らしくもなく、しばらくぼうつとしていたらしい。気がつく、壁が繰り返し叩かれていた。もしもし？聞いてますか？大丈夫ですか？

「い……今のは……」

なんだ、と言いかけて、それでは相手が答えられないのを思い出し、土方は途中で質問を変えた。

「……テレパシーみたいなもんか？お前がやったのか。」
ほとんど間をおかずに、肯定の返事が返ってくる。土方は混乱する頭をなだめ、質問を続けた。

「お前は二セモノ……でももう一人は……本物なんだな？」

はい。

「そこへ行く方法はないのか？お前ら、どれぐらい閉じ込められてんだ。叩いてみる。単位はこっちで考えるから。」

少し間があった後、壁が叩かれた。1回だった。

「1週間か？1日？」

両方外れだった。

「じゃ、1時間か。」

今度はかなりきつめの否定が返ってきた。

「冗談だよ。…じゃ、一ヶ月か？」

当たり前であった。

「一ヶ月…そんなに長い間、か…」

土方は腕を組み、わずかにうなった。一ヶ月。そんなに長い間、ここに閉じ込められていたとは。もちろん自分たちがこの世界へ迷い込む、だいぶ前のことだ。それにしてもなぜ、わざわざこんな所へ？　そういうば、トオルがこの家のことについて、何か言ってたな…土方はいまいち、詳しく思い出せなかった。まあいい、それはあとで本人に聞くとしよう。

もしそんな長い期間監禁されていたのなら、当然飲み食いなしには生きていけないはずだ。ニセモノが食料をどれぐらい必要とするのかは知らないが、少なくとも本物の人間には要るに違いない。つまりどこか、出入り口があるということになる。

壁の向こう側は沈黙して、土方の問いかけを待っていた。

「…なあ、お前らだって、食べなきゃ生きてけないんだろう？」

少し虚をつかれたような沈黙が返ってきたが、すぐに壁が一回叩かれた。

「そういう食事は、敵が持ってきてくれるんだよな。」

はい。

「じゃあもちろん、そこへ出入りする所があるってことになる。」

かなりの間をおいて、はい。

「どこだ？少なくとも、どこか見当はついてねえか？右か、左か、敵がいつもどこから入ってくるのか。」

答えはない。土方は聞き方がまずかったのだと気づき、急いで言い直した。

「じゃあ俺がその方向を言ったところで、叩いてくれ。右・左・前・後ろ・上……………上か。」

聞き返すと、小さな音で『はい』と返ってきた。

上。なるほど、上なら納得できる。少なくともこの壁には何の仕掛けもないように見えるから、ここから入ろうと思ったら、沖田のバズーカ砲を借りてぶち壊さなくてはならないだろう。そんなことをしたら、大騒ぎどころではない。

上の部屋だ。ここの真上の家。そのどこかに、壁の向こう側へ通じる入り口があるのに違いない。

少なくとも、試しに行ってみる価値はある。

「…今日は、これくらいにしておく。」

まるで殺人犯を尋問している時みたいな口調で、土方は言った。向

こうは黙っている。

「もしうまくいったら、明日にはお前らを助け出せるかも知れねえ。」

今度は向こうの雰囲気、明らかに活気づいた。

「だが、あらかじめ言っておく。俺は：ここに住んでるのは、本物の人間ばかりだ。こつちには武器があるし、使うのにも慣れてる。」

もしこれがニセモノの罠だったら、俺はためらいなくお前らをぶつた斬るからな：理解したか？」

意外にも、かなり力強く『はい』の答えが来た。

「いいだろう。そんじゃ、さっさと寝な。」

言い捨てて、壁に背中を向ける。向こう側の誰かも、もう壁を叩いてはこなかった。

しかし、土方は眠らなかった。

その顔に、普段の彼が戻ってきていた。ひまわり組の土方先生ではなく、真選組の鬼の副長・土方十四郎に、彼は戻っていたのである。無意識にタバコとライターを取り出し、火をつけて吸い始めた。深く吸い込んで、ふーっと煙を吐く。部屋の中に漂いながら四散していくそれを、瞳孔の開いた目つきでにらみながら、土方はまた一吸い、タバコを吸った。何か考え込んでいる顔で。

しばらくして我に返った時、土方は山崎がまだ帰っていないことと、時計がもう午前1時半過ぎを指していることに同時に気づいて顔をしかめた。

何してんだ？まさかこんな夜中にミントンをやってるわけも……。

それに答えるかのように、玄関の扉が開く音がし、足音と共に、山崎が寝室に入ってきた。ベッドの上に、土方がしゃんとして座っているのを見ると、少しびっくりした顔になる。まだ二日酔いで寝込んでいるとも思っただろう。

そして土方が何か言う前に、彼は告げた。

「土方さん、新八くんが、話したいことがあるそうです。もし大丈夫なら、今すぐトオルくんの家へ来てほしいと……。」

その拾貳：マンションの壁ぎわの部屋って何かと不便（後書き）

えー、本話とは大して関係ないんですが、私、最近yahoo!ブログにて自分のブログを開設いたしました。yahoo!ブログで『青き水晶は月光のごとく』と検索すると出てくるはず……。そこでクレしん、ドラえもんズ、銀魂の小説を公開していく予定です。更新はかなり遅いですが、ここで連載してる小説の後の展開の鍵になるかも知れない話もたまに載せますんで、ぜひ覗いて下さると嬉しいです。既に1話、そうしたのを載せております。現時点ではどう関連するのやら分かんと思いますが（汗）、でも使う予定の話なので、見て損はない……と、思います（アピールし過ぎてすみません）。もちろん無関係の短編や連載小説もやっていきますよ。ブログだから読みにくいと思いますが、お付き合いいただけると幸いです。どうも長々と申し訳ありませんでした……。感想も、まだまだ待ってます！

その拾参：携帯電話を開けっ放しにするとすぐ電池切れるぞ（前書き）

新八は襲われずに済んだものの、事態はさらに深刻さを増していき……。
土方の行動にも、注目すべし！

その拾参：携帯電話を開けっ放しにするとすぐ電池切れるぞ

「ああ？」

土方の言葉に、さすがの銀時も顔をしかめた。

「今日は幼稚園を休ませてほしいだと？」

銀時だけではなかった。新八もお妙も神楽も山崎もトオルも……つまり風間家の食堂にいる全員が、朝食を中断して信じられないというように土方を見つめていた。

「何で休まなきゃならないんですか。」

「二日酔いだ。」

新八の問いに、土方は素っ気なく答えた。

「いや、全然平気だったじゃないですか……」

控えめながらも、反論したのは山崎だ。途端に神楽の罵詈雑言が飛んでくる。

「オマエ、新八の話聞いたばかりなのに幼稚園に行かないとは、どういう根性してるアル！さてはオチ気づいたアルナ！！怖いから行きたくないっていうアルナ！！」

「怖じ気づいた、です。」

トオルの訂正が入った。

「るせえ、ガキは黙ってる。」

土方は、怒鳴りつけこそしなかったものの、幾分声を低めて神楽をにらみつけた。

「こつちにや色々な事情があるんだ。一日ぐらい休んだだけで潰れるような幼稚園じゃねえだろうが。ごたごた言っな。」

そう言い捨て、土方は立ち上がり風間家からさっさと出て行ってしまった。まだ半分も食べていないというのに。

「……………行っちゃった。」

新八が、ぽつりと呟いた。

「ひどい男ネ！私はガキじゃないアル！！」

神楽はまだぷりぷりしていた。

「ったく…敵がいよいよ現れ始めたかも知れねえってのに、何考えてんだ、あいつは。」

銀時が頭をぼりぼりかいて、フケを数個落とした。それをトオルが、どこか不安げな目で見ていた。

昨夜ネネを送っていく最中に見たネネとマサオにそっくりな人影のことを、新八はマンションに帰ってくるなりすぐお妙たちに話した。銀時は完全に酔い潰れ、トオルは熟睡していたので、この二人は朝起きてきてからこの話を聞かされたのだった。

正直銀時はともかく、トオルにこのことを話すのはどうかという懸念も新八の中にはあった。しかし隠しておいて、トオルがもし敵の手にかかったりしたら取り返しがつかない。それよりは、始めから話しておいて用心させる方がいいと思ったのだ。

トオルはやはり衝撃を受けたようだったが、比較的落ち着いて聞いていた。

「…後をつけていたってことは………そいつらの目的はなんなんでしょう。やっぱりネネちゃんでしょうか。」

「でしょうね。」

お妙がうなずき、他の面々も同意した。

全員新八と山崎がロックオンされているなどとは、夢にも思っていないのである。

「いずれにせよ、新ちゃんが気づかなかったらどうなっていたか分

かないわ。よく気がついたわね。」

この、姉にしては珍しいとも言える誉め言葉に、しかし新八は微妙な表情で答えた。

「はあ…それがなんか、おかしいんですね。僕が振り返ったのは、耳元で声がしたからなんです。」

「声？」

「危ない、とかなんか叫んでるみたいな…すっごく差し迫った感じだったんで、考えるよりさきに振り向いちゃったんです。」

「ネネちゃんじゃないアル力。」

神楽が尋ねた。

「あの子じゃ僕の耳元には届かないよ。違う声だったし、念のために確かめた時もきょとんとしたからね。………それに今思うと、あれは耳元っていうか、頭の中に直接語りかけてきたって感じだったな。」

「頭の中に？まあ、それじゃテレパシーみたいじゃない。」

「………！テレパシーか。そうだ、そういう感じだったな。」

「で、誰がそのデレパチンを出したネ。」

「それが分かりや苦労しないよ。あとどういう耳してんの？」

いかなる時もツツコミを忘れない新八であった。

「でも神楽ちゃんの言う通りよ。助けてくれたことに間違いはないけど、それ、誰が伝えてくれたのかしら。新ちゃん、自分の声だったってことはない？たまにあるじゃないの。自分の心の声が助言してくれて、助かったって話。」

「いえ…」

新八は残念そうに、でもきっぱりと首を振った。

「全然違いますよ。確か女の人の声だったと思います。若い女の人です。」

「あ、分かったヨ！お通の声アル！！」

「ち、違うよ、神楽ちゃん！」

慌てて否定する新八。顔が赤くならないよう、懸命に努力する。今はお通ちゃんのことを考えている場合ではないのだ。

「本当に知らない人の声だったよ。きれいな声だったけど……それに聞こえたのは、ほんの一瞬だったし。」

「……でも、どうしましょう。」

「えっ？」

トオルが突然、深刻そうな声を出したので、さらなる問題が発生したのかと思った新八たちは一斉に向き直った。

「どうしたんだい？」

「あれ、どうすればいいと思います？」

トオルが指差す先では、土方が残っていた『土方スペシャル』トーストとコーヒーが、まだ半分以上も残っていた。

「…おい、起きてるか。」

土方はベッドに座り、壁に向かって話しかけた。

傍目から見れば頭がおかしくなったのかと思われそうだが、そうではない。

壁が、返事を返してきた。

トン。

「もう一人も、起きてるか？」

はい。トン、と一回叩くことが、肯定の意味になるのだ。

土方はふと思いつき、昨日は聞きそびれたことを尋ねた。

「そういえば、もう一人の奴は何で話しかけてこない？そいつも口がきけないのか。」

少しためらうような間があった。

「それとも、猿ぐつわをかまされたりしてるのか。」

トン、トン、トン、と、三回も壁が叩かれた、そう、そう、そんなんです！

「そいつあ穩やかじゃねえな……まあいい、あとは静かにして、待ってる。うまくいけばそっちに行つてやるからな。」

トン、と壁が鳴った。心なしか、昨日よりは元気な叩き方だった。

「風間くん、マサオくん、昨日はありがとう。」

「あ、ああ……楽しんでくれたんならいいけど。」

「もっちゃんよ。また行きたいわ。」

二人は曖昧に笑って、顔を見合わせた。マサオにも、昨夜新八が目撃したものを話してあった。もしネネの二セモノがネネをつけ狙っているとしたら、また暗い夜道を歩かせるような真似は、なるべくしたくない。

しかし本人に面と向かってそういうことを言うのも、何だか気がとがめることだ。もう来ないでと言っているみたいに聞こえてしまうに決まっている。せつかく元氣を取り戻してきてくれてるのに……。

「ほほーい、みんなー。」

その時まさに絶妙のタイミングで、しんのすけが会話に割り込んできた。見れば、後ろにボーちゃんもいる。彼は常に誰かが何かの陰にいたので、近くに来ないと存在が視認できないのだ。

「なんの話してたの？」

「ううん、何でもないの。今日はどうして土方先生がお休みなのかなあって、思っただけ。」

すらすらと言うと、ネネはしんのすけたちが見ていない隙に、トオルとマサオに向かって（マサオはどっちにしろ見えないのだが）、ちよっとバツの悪そうな笑みを浮かべて人差し指を口に当ててみせた。昨夜招待されたことは、秘密にしておいてくれと言うのだ。

これはトオルたちにとっては願ってもないことだった。またごまかし話をする手間が減る。昨日の夜も、新八はうまくネネをごまかし追っ手から逃げたらしいが、そういう話をするのは彼らの得意な領域ではなかった。腹黒い沖田あたりが適任だろう。

「そうですね、まったくだらしがないですなあ、土方先生は。」

「あら、しんちゃんだって人のこと言えないんじゃない？」

「ボー……」

「ひ、ひどいゾネネちゃん……ボーちゃんまでうなずくなんて……」

やはり、みんなと一緒にいる時間は楽しい。

トオルとマサオは考えていた。

特にしんのすけは、嫌なことを忘れさせてくれる達人だ……逆に嫌な思いをさせられることも多いが。

……それなのに、落ち着かないのはなぜだろう？

しんのすけだけじゃない。ここには銀時だっているのだ。だからもしニセモノたちが襲ってきても、きつと守ってくれるだろう。新八が、不真面目だけどとても強い人だと言っていたから。

それなのに、なんで今日だけは、こんなに不安なんだろう？

分からない。考えてみても頭が混乱するだけだ。今できるのは、ただできるだけ用心すること。無力な自分たちにできるのは、それしかない。

それだけしか…。

「…風間くん。」

「どうしたの？」

「僕、怖いんだ……目が見えないからかも知れないけど、感じるんだよ。誰かが…誰か悪い奴が、すぐそばで僕らを見張ってるのを。いつもはそんなことないのに、今日は怖くて怖くてたまらないんだ。」

「まさか、気にし過ぎだよ。それに銀さんだっているだろう？あの人といれば、きつと大丈夫さ。そんなに具合悪そうにしていると、またネネちゃんに心配かけちゃうよ。」

「うん………思い過ぎだといいいんだけど。」

怖くて不安でたまらないのは、実のところマサオをなだめるトオルも同じことだった。

そしてそれは、決して思い過ぎなどではなかった。

実に簡単だった。簡単過ぎて、つまらないほどだ。

「ここか…」

感覚的にここら辺だろうと思ったまさにその場所の床に、真新しい落とし戸みたいなのがあった。

それを覗き込む土方の足元に、この部屋の住人が…いや、恐らくそのニセモノが、気絶して転がっている。

初めは堂々とチャイムを鳴らし、

「お前の部屋から水漏れしてるみてえだぞ。」

だの何だのと苦情をつけて上がり込もうと考えていた土方だったが、しばらくするうちに考えが変わってきた。

もしそんな悠長なことをしていたら、相手が仲間に連絡し、大勢の敵を呼び寄せるか、あるいは閉じ込めてある二人を連れ出したりするかも知れない。別に敵が大量に押し寄せてきたところで怖いわけではないが、やはり敵に悟られないように、事を進めるのが一番だ。それが最も安全だ。

そこで土方がとった手段は……。

真選組はお江戸の警察だから、当然犯罪者を捕まえる役割を持つ。

逮捕される連中には、もちろん泥棒をした奴も入っているわけで、そういう輩を頻繁に尋問する仕事柄、土方も鍵のかかった家への侵入のし方や、その他もろもろの窃盗犯の技術を、それなりに知っていた。

無論あくまで『知っていた』だけのことだ。悪用したことは一度もない………はずである。

それがこんな時に役立つとは、まるで思いもよらなかった。

時刻は8時過ぎだった。

土方はドアの鍵を尖った針金みたいなもので開けてしまい、首尾よくその家の中に踏み込んだ。気づいた住人の二セモノが騒ぎ出す前に、当身を食らわせると驚いたことにあっさりと気絶してしまった。沖田と闘った、あの酢乙女あいの二セモノとはだいぶ違う。二セモノの中にも、格の違いがあるのかも知れない。

その二セモノは、ご親切にも落とし戸の所へ一直線に走ってそこを死守しようとしてくれたので、かえって探す手間が省けた。頭にもかなり違いがあるようだ。

とにかく、これで入り口が見つかったわけである。

試しに取っ手を握ってみたが、やはり鍵がかけられていた。どこかに鍵が隠されているかも知れないが、探し出すのが面倒くさいので刀を使うことにした。

真選組副長だけあって、彼の剣の腕前は常人の領域を超えている。沖田もそうだ。二つにぶった斬るほどの力の持ち主なのだから。そんな土方にとって、落とし戸の所の床を切り抜くのは気が抜けてしまうくらい易いことだったのである……。

「おい！」

ぽつかりと開いた穴の中へ、土方は声を投げかけた。

返事はない。穴の向こうは真つ暗闇で、なんにも見えなかった。でも下の方に、明らかに何かが動く気配が、した。

「いるんだな？来てやったぞ………ちょっと待ってくれ。今何か明かりになるもんさがしてくるから。」

その住人の部屋を引つ掻き回すのはさすがに気が引けたので、二セモノがポケットに入れていた携帯電話を借りることにした。あまり長く、強く照らしてくれないとはいえ、何もないよりはましだ。

穴の縁から、はしごを使って降りるようになっていく。土方は携帯を取り落とさないようにしっかりと口にくわえ（！）、慎重に降り始

めた。

幸い、闇に包まれてからそう長くたたないうちに、足がしっかりと堅い、平べったいものについた。

すぐそばで、ごそごそと動く音がした。でもただそれだけで、何も言わない。飛びかかってくる様子もない。

「ちよつくら、顔を見させてもらうぜ。」

そう言って、土方はカパッと携帯を開け、光を向こう側の闇に当てた。

土方のいつもは細い目が、大きく見開かれた。

「へえ、テルがそいつに知らせたのかい？」

「そうとしか考えられません。そんなことができるのは、テル一人しかない」と

「でもさあ。」

軽い口調が、早口の言葉を遮った。

「テルのテレパシー能力は、せいぜい30メートルが限度だろ？それに著しく体力を消耗する。そして奴が『見る』能力を使えないように、装置を取りつけておいたじゃないか。」

声が、ちよつと笑ってみせた。別に怒りは感じ取れないのに、なぜかぞつと身震いしたくなるような笑い方だった。

「やっぱり、君たちの不注意じゃないのかなあ？」

マサオそっくりな顔いっぱい冷や汗を浮かべ、イリスは隣にいるルビーをちらりと盗み見た。彼女は相変わらずの無表情な顔で、ただ軽い声の主の顔だけを、じっと見つめ続けていた。

何でこいつは、こんなに落ち着いてられるんだろう。いや、本当はこいつも、びびってはいるのか。ただそれを顔に出さないだけで。

「どうなの？」

返事を促す相手に、ルビーが無機質に返した。

「その可能性も、ないとは言いい切れません。しかしあのような急な振り返り方をするのは、少し妙だということを申し上げたいのです……あれはまるで、誰かに呼び止められたかのような振り返り方でした。」

「ふうん……」

椅子に座っているその人物は、ふとイリスに目を向けると、突然吹き出した。

「何青い顔して汗びっしょりになってんのさ、イリス。安心しなよ。君たちは他の奴らとは違う。僕の目的を達成するには、君たちの能力が不可欠なんだ。だからこの前の不良品どもみたいに、消しちやったりはしないよ。」

その言葉に、イリスの肩から一気に力が抜けた。それを見ようとせず、ルビーが話を続ける。

「しかし、なぜ桜田ネネを狙ったのです？」

「ああ、別に深い意味はないよ。」

相手は面倒くさそうに手を振って答えた。

「あいつを殺る前に、それに近い奴をさらってやったら、さぞあいつがびびるだろうと思ってね。……だってあっさり終わらせるなん

て、面白くないじゃないか。ねえ、イリス？」

「あ…は、はいっ。」

突然話を振られたイリスは、慌ててうなずいた。くすくす笑いがそれに続く。

「…でもまあ、ちょっと考え過ぎだったかも知れないね。おかげで敵を用心させちゃったかも知れないし。ストレートにいつちやうのが一番手っ取り早いや。」

相手が椅子から立ち上がったので、イリスとルビーは反射的に身を引いた。ルビーの声が、相変わらず何の感情も交えずに尋ねる。

「どこへ行かれるのですか？リオル様。」

「どこって？」

笑い声が響いた。

「そうだねえ…それは今から考えることにするよ。」

身体に電流が走った気がした。

びくんと身を震わせ、飛び上がる。その拍子に、尻尾で木を一本なぎ払ってしまった。

嫌な匂いだ…。

ここに来てから、ずっと『それ』の匂いが鼻について離れなかった。人間に見えるけど、人間とは違うものの匂い。次第に数を増していく、その生き物の匂いが…。

気にしないように努めてきたその匂いが、今、無視できないほどに強くなったのだ。

それに…雷が落ちたかのような、衝撃。

今までとは違う。その匂いは、明らかに何か恐ろしいものをはらんでいた。

殺意と憎悪。そう、それだ。

何をそんなに憎んでいるんだ？何を殺そうとしているんだ？

混乱と怯えと闘っているその時、ひんやりした風が頭の中に吹き込んだような感覚と共に、声がした。

耳で聞く声ではなく、頭の中に、直接話しかけてくる。思わずじっと黙って聞き入った。

そう、あなたの思った通りよ。恐ろしい危険が迫ってるの。あなたたちが、知り合いになった人たちの中に、憎しみを受けて理不尽に殺されようとしている人がいるわ。

だから、助けてあげて！

頭の中がすつきりした。首をしゃんと伸ばし、起き上がる。

そして耳を立て、体毛と尻尾を逆立てると、最初は遅めに、やがてだんだん速く、走り始めた。高い塀に向かって。

巨大で白い身体が強く地面を踏んで、酢乙女邸を囲む塀を飛び越えた…。

その拾参：携帯電話を開けっ放しにするとすぐ電池切れるぞ（後書き）

暗い穴の中に閉じ込められていた二人の正体は！？次回は銀さんと神楽が待望の大暴れ、双葉幼稚園に大騒動が巻き起こる！そして出番がなくて忘れられかけていた（！）アイツが、ついに春日部に乗り込んできた黒幕と……………！？大波乱間違いなし、意外な事実も明らかに次回に、乞うご期待！！

その拾四：お行儀の悪さは言葉じゃ直せない（前書き）

違う場所にいる、色々な人々のもとで、次々と事件が発生…。いよ
いよ本格的に異変が始まる！4部、どうぞお楽しみ下さい！

その拾四：お行儀の悪さは言葉じゃ直せない

「おい、リンド。起きてるか？」

「……………」

「……………寝てるな、やっぱり。おいルビー、こいつの頭に火い点けてやれよ。」

「無理よ。分かってるくせに。」

「冗談だっつーの……………おいっ、てめ起きろよリンド！水ぶっかけるぞー！」

バシャアアアン！

「……………本当にぶっかけやがった。」

「悪いの？」

「…別に……………」

「…ん？なんか冷たいなあ……………」

「リンド！やっと起きたかー！」

「おー、リスにビー、久しぶりぶり〜」

「イリスとルビーだよ……………」

「あと『ぶり』は一回だけよ。」

「そうともゆう。」

「そうとしか言わねえよ！」

「んもー、そんなに誉めしないで、照れるう〜」

「……………」

「さっさと頭動かしなさい、リンド。リオル様から命令よ。」

「えー、オラ、あいつ嫌い。」

「……怖いもの知らずだな、お前……………」

「ごたごた言わないで、さっさと行ってくれば？」

「そろそろよ。」

誰が言い出したのかは分からない。

一人の口から言葉が出た途端、短いその一言はあつという間に幼稚園中へ広まっていた。

「そろそろだ…」

「そろそろね…」

「そろそろ仲間はずれを、捕まえなくちゃ。」

不安な気持ちは、ピークに達していた。

「マサオくん、大丈夫？本当に顔色悪いわよ。」

ネネが心配そうに眉をひそめ、マサオの肩へ手を置く。その温かさ
に、マサオは少しびっくりした。

「大丈夫だよ、ネネちゃん。平気だか………！」

ら、とまで言わないうちに、マサオははっと口をつぐんだ。

何かを感じたのだ。

「な、何だ！？」

トオルは後ずさりした。ネネがぎよつとして小さく悲鳴を上げ、ボ
ーちゃんは身を堅くする。しんのすけでさえ、驚いた顔をした。

どこからともなく現れた幼稚園の園児たちが、ぐるりとしんのすけ
たちを取り囲んでいた。

「あの…銀八園長先生。」

「はい？」

まつざか先生は、花壇の縁に腰かけてぼーっとしている銀八先生の、少し離れた隣に腰を下ろした。

「こんなことを申し上げちゃ悪いかも知れませんが……あなたつて、幼稚園の先生になりたがるような人には見えませんか。」

「へえ、そうですか。やつぱ俺、そういう才能はねえのかな。」

「いえ、才能があるとかないとか、そういうのじゃなくて…その…まつざか先生は一生懸命、言葉を探している様子だった。」

「幼稚園の先生に限らずね、こういう定まった仕事にはむいてない気がするんですよ。一つの仕事にずっと就いているような人に見えないんですの。逆に言えば、その気になれば何でもできる人ってころになりますね。」

「誉められてんだかけなされてんだか、分からないね。」

まつざか先生がくすくす笑った。

「もし先生に一番ふさわしい職業を作るとしたら…そうね、『万事屋』^{ずや}ってところかしら。『万事悩み事承ります』、みたいな。」

銀八先生がかなりびくつとしたことに、幸いまつざか先生は気がつかなかった。花壇に咲く花へ目を向けたまま、しゃべり続ける。

「すみません、変な話して。でもここに来た時から、ずっと変わった人だなあって思ってた…そうそう、土方先生もそうだわ。あの人はむしろ、もっと危険な仕事にむいてるみたい。…警察みたいな。」

「……………」

銀八は何も言わなかった。

「先生。」

まつざか先生は顔を上げ、いつのまにか目の前にばら組の子供たちが勢ぞろいしているので驚いた。

「あらみんな、どうしたの？何か困ったことでもあった？」

「先生……」

不意に子供たちのうちの一人が、まつざか先生の身体にしがみついていた。

「えっ！？」

びっくりする間もなく、先生、先生と呪文みたいに繰り返しながら、子供たちが足に、手に、腰に、頭に、次々とつかまったりよじ上ったりしてきた。

「ちよ、ちよっと、やめて！」

立ち上がるうとして、逆に転んでしまった。うつぶせになったまつざか先生の身体の上に、さらに重みがかかる。

何なの？どうなってるの！？

不意に、重さが消えた。
変わりに悲鳴が聞こえ始めた。子供たちの悲鳴が。

「大丈夫か。」

力強い手につかまれ、助け起こされるのを感じた。起き上がると、銀八の死んだ魚みたいな目が、すぐ目の前にあった。もう眼鏡はかけていない。

「な、何だったの、今は…さっきの悲鳴は？あなた、子供たちに何かしたの！？」

「そう興奮するなって。俺があいつらやつつけなきゃ、あんたが何かされてたかも知れねーんだぜ。」

そして銀色の髪をばりばりかいて、ぼそっとつけ加えた。

「それにあいつら、どっちにしる本物じゃないしな。遠慮なんかいらねえ。」

え？何を言ってるの？その言葉が喉から出てこないうちに、

「先生！」

向こうから、しんのすけたち5人が走ってくるのが見えた。マサオはネネの手を引かれている。

その後ろには、十数人の園児たちがひしめいて、彼らを追いかけていた。

「銀さん！助けて！！」

トオルは銀八先生と呼ぶことも忘れ、叫んだ。一人の子供の手が、ネネの髪に届きそうになっている。

それを見た銀時は、服の中にこそごと手をつ込み、何かを取り出した。

木刀である。

ただの木刀ではない。『洞爺湖』と彫られており、その正体は『金剛樹』という樹齢1万年の大木からできている妖刀・星碎ほしくたきなのだ……と言いたいところだが、実際には通信販売で購入されていたり、折れるたびに買い直されたりしているというよく分らんシロモノである。

まあとにかく、この木刀こそ、銀時愛用の武器なのだった。

「さあお子さんたち、行儀作法を叩き込むお時間ですよ。」

そう言つて銀八：ならぬ銀時は、ネネの髪をいましもつかもうとした子供の顔を、こともなげに木刀で殴りつけた。
ぶぎゃ、というような、潰れた悲鳴が上がった。

「ちょっと、あんた：！！」

「いいんですよ、まつざか先生！早く逃げましょう！！」

怒鳴りかけたまつざか先生の袖を、トオルが引っ張って引き戻す。その時、ネネの大きな悲鳴が上がった。

何かと振り向いた一同は、凍りついた。

ぼろぼろになった上尾先生が、地面に倒れている。眼鏡が外れているところを見ると、凶暴化して相当暴れたのだろう。でも結局、大勢の子供たちの前に敗れてしまったのだ。

上尾先生の頭を踏みつけているのは、しんのすけたちもよく知っているばら組の生徒……………

チーター河村だった。

「上尾先生を離せ！」

飛びかかったしんのすけに、河村がこともなげに蹴りを入れる。慌てて身体をそらし、直撃は免れたが、その間に河村のニセモノは上尾先生を抱え上げていた。

「待つて…」

まっさか先生が駆け寄ろうとした、その瞬間だった。

河村のニセモノと上尾先生の姿が、一瞬ばやけた…と思うと、消えてしまったのだ。

「!？」

みんなは啞然として、さっきまで二人のいた所を凝視した。

何もなかった。二人は消えていた。

そっくり人間にはこんな力まであるのか？トオルは考えた。

他の奴らは、一体どんな力を持つてるんだ？

「あははははは！」

背後の笑い声にびくつとして振り返ると、なんとそこにチーター河村の二セモノがいた。上尾先生の姿は、ない。

「上尾先生はどこ？」

ネネが金切り声を出すと、河村の顔がにやりと歪んだ。

「さあな、教えるわけねえだろ？」

「この…」

飛びかかろうとしたしんのすけの前からまたしても一瞬で消え去り、今度は堀の上に、河村の姿が現れた。

河村は、トオルを見ていた。トオルだけを見つめていた。わずかに笑みの浮かんだ視線で、じっと。トオルは内心怖かったが、負けてたまるかという気持ちでにらみ返した。

チーター河村の二セモノは再び、大声で笑った。

「そう堅くなんなつて！安心しな、お前の相手をするのは俺たちじゃない。あのお方だ。」

あのお方？

トオルの脳裏に、何かが光った。そうだ、確かニセのママも、『あのお方』とか言っていたはず…。

「『あのお方』って、誰よ!？」

「まあ、そのうち分かるさ。」

ネネの言葉にバカにしたような口調で返して、河村のニセモノは再び姿を消した。

そして、今度はもう現れなかった。

「何なのよ…」

まつざか先生が座り込んだ。

向こうの方では、銀時がまた一人、子供を打ち倒しているところだった。

自室でまったりしていた神楽は、突然土方が血相を変えて飛び込んできたので、仰天して飛び起きた。

「な、何アルカ！年頃の娘の部屋にずかずか入ってくるなんて、最低アル！」

それなら鍵でもかけとけよ、と、新八ならつつこむだろう。

しかし土方は、神楽の言葉などまるで聞いていないようだった。

「お前しかいねえのか…新八たちは買い物に行っちゃまってるようだな。くそっ！仕方ねえ。お前、あの銀髪のとこへ行け！」

「えっ！？何でアルカ。銀ちゃんに何かあったアルカ？」

「まだないかも知れねえが……おい、これを見る。」

土方が彼の後ろから、『これ』を部屋の中に引き入れた。

神楽の顔色が、さっと変わった。

「これは………どうということアルカ。まさか………」

「くそお、どうなつてんだよ!？」

山崎退は、日中の街中を全力疾走していた。
仕事をさぼっているのではない。そうせざるをえなかったのだ。

いきなりコンビニの中で取り囲まれ、何とか逃げ出したものの、今
こうして街中の人に追われているのだった。

多少なりの覚悟はしていたとはいえ、まさかこんな唐突に、異変が始まるとは思ってもみなかった。

ちらりと振り向くと、追ってくる大勢の人々はさっきより近くなっていた。声も出さず、ほとんど無表情で、足音だけを響かせて走ってくる。しかも全員が全員、自分のことだけを一直線に見つめたまま。

その不気味さは、たとえようもなかった。

向き直ろうとした瞬間、疲れた足が思わぬ反逆を起こした。山崎はどういうふうにしてか、自分の足がからまり、身体ごと地面に倒れ込むのを感じた。息がつまるほどの衝撃が来た。

起き上がろうとしたが、膝が震えて力が入らない。畜生、少し無理して走り過ぎたか……………。

どっちにしろ、自分はもう終わりだ、と山崎は思った。

今日のお妙と新八は、えらくご機嫌だった。

「今日はいいいじゃがいもを、安く手に入れましたね。」

「そうねえ新ちゃん、いつもああやってうまく取れるか分からないもの。予算より少なく済んだのって、久しぶりよ。」

買い物に使った金額で気分を左右されたりするのだから、考えてみれば人間とは気楽な生き物である。

…しかし二人共、しばらくマングースマンションへの道を行くうちに、辺りの様子がおかしいことに気がついた。

「変ね。どうしてこんなに人がいないのかしら。」

お妙がやや首をかしげ、周囲を見回した。平日のこの時刻だ。もつと人がいたって不思議じゃない、いや、むしろその方が普通なのに……。

嫌な感じが、水が流れ込んでくるように一気に、新八の心を侵し始めた。

「おいおい、なんだい君は。」

場所は変わって、ここは春日部山。

リオルは、自分の前に突如姿を現したその生き物を、面白そうに眺めた。

でっかくて白い犬…といったところだ。大きさはえ普通なら、ただのつぶらな目をした可愛いワンちゃんと変わらないだろう。

しかし、その巨大な犬は、今自分の愛らしい目に険を浮かべ、リオルをにらみつけてうなり声を上げていた。

それだけならまだしも、その行き先へ続く道を妨害していた。

「行儀の悪いワンちゃんだねえ。」

一歩、前へ足を踏み出すと、巨大な白犬はびくつと後ずさりしかけ

たが、すぐに踏みとどまって、威嚇のうなりを上げた。

何でか知らないが、自分の邪魔をしに来るとはいいい度胸だ。彼は何者の命令も受けないし、どんなささいなことでも、自分にとって不愉快なことをしでかした奴は許さない。そして彼には、他の者たちにはない強大な力も備わっている。

憎悪という力が。

「…どいてくれないのかな？」

尋ねたその時、白犬の巨体が思わぬスピードで、こちらへ飛びかかってきた。

…ズシャッ。

甲高い悲鳴と共に、真っ赤な血しぶきが空へ舞い上がった。

「銀ちゃアアアん!!!」

「!？」

銀時は、一瞬耳を疑った。何で神楽の声が聞こえてくるんだ？
聞き間違いだろうと思ったがそうではなく、幼稚園に向かって走っ
てくる神楽の姿が目に入った。

ものすごいスピードだ。誰かが歩いていなくてよかった。はね飛ば
されていたかも知れない。

「おう神楽、ちょうどいいところに…」

「銀ちゃん、危ないアル！」

「は？」

「その子から、手を離すアル!!」

銀時は、まつざか先生をまず幼稚園の塀の向こう側へ降り立たせ、寄ってくるニセモノたちを殴ったり蹴飛ばしたりひっぱたいたりしつつ、カスカベ防衛隊の子供たちを抱き上げて向こうにいるまつざか先生に手渡ししていた。出入口はすっかり敵に包囲されており、危なくて手が出せなかったのだ。

そして今、彼は最後の一人の子供を抱き上げようとしたところだったが……。

その子供が、ぐるりとこちらを向いた。
はっとして身を離すより早く、無表情でのっぺりした顔についた小さな目が、ぎらりと光った。

ボーちゃんの鼻水が鞭のように動き、銀時に襲いかかった。

…あれ？

変だな……何で足音が突然、やんだんだろう？

おそろおそろ目を開き、半身を起こして後ろを振り返る。

なんと、大勢の追っ手たちは後退し始めていた。逃げるのとは違うが、波がゆっくり引いていくような感じで、山崎から離れていく。どうしたんだ？

視線を前に戻した山崎は、驚きのあまり息が止まりそうになった。

目の前に、しんのすけ、マサオ、ネネが立ち、自分を見つめていた。

「こんにちは、山崎さん。」

マサオが妙になれなれしい口調で、笑いながら言った。

「あなたの命をもらいに来ました。」

土方十四郎は、風間家の前でふんばっていた。

ザシュッ！

刀の一閃で、また一人の二セモノが絶叫を上げ、倒れる。
土方は辺りに立ちこめる異臭に、顔をしかめていた。マンションの
廊下はもう血だらけだ。死体がいくつも転がっている。

しかも気味の悪いことに、その血は紫色をしていた。

毒々しい紫の色彩は、土方の目の奥にしつこく残った。

不快感に、土方は眉をひそめ、次々押し寄せてくる二セモノどもを叩き斬った。敵は後から後から、まるでキリがないかのように現れる。胸くそ悪いゲームが何かみたいだ。そう思うと余計に腹が立ち、土方はなお一層激しく刀をふるった。

少なくとも、ここに入らせるわけにはいかない。こいつらがここにあるものを狙いにして襲いかかってきたのは、間違いないのだから……。
それにしてもこの紫色の血は不愉快だ。それだけでなく、前にも一度、こんなものを見た覚えがある。

いつだったか……と考えながらも、土方の刀は確実に敵を捕らえていった。

「くっ…………こいつぁ神楽、どーいうことだ。」

「そーいうことネ。」

答える神楽の声は、思いの他落ち着いているようだった。

しかし状況的には、落ち着いている場合などではなかった。周りをニセモノたちでぐるりと取り囲まれ、壁際に追いつめられて、目の前には氷のかげらのように冷たい目をしたボーちゃんがいるのである。

そして、銀時の肩からは血が流れていた。

「ど、どうして。」

トオルが動揺のあまり、少しどもりながら言った。

「どうしてボーちゃんが、僕らに攻撃を!？」

それに続く神楽の返答は、みんなを驚かせるものだった。

「ボーちゃんは一カ月ぐらい前から、ニセモノに替わっていたアル。」

その拾四：お行儀の悪さは言葉じゃ直せない（後書き）

幼稚園にあいちゃんのニセモノと沖田がないので、『あれ？』と思われた方もいるかも知れませんが、その理由は次回で明らかになります。更新が遅くなる可能性もあるので、すみません…。次回では沖田邸じゃなくて酢乙女邸にて、未曾有の恐怖が新八たちを襲う！？そしてあのキャラが……！！感想もどしどしお願いします

その拾伍：休みだからって昼寝で時間をつぶすな（前書き）

ボーちゃんがニセモノだった！？その上酢乙女邸や新八たちにも不
穏な影が……………！本っ当にお待たせしました！ようやく更新スター
トです！

その拾伍：休みだからって昼寝で時間をつぶすな

「ボーちゃんが……そっくりさんだったなんて…嘘……」

あまりにも予想外な衝撃に、口を押さえたネネの身体がぐらりと揺れた。マサオがその気配を察し、慌ててネネの肩をつかみ、支える。しかし、動揺しているのは彼もまた同じだった。

ボーちゃんが……一カ月も前から、ニセモノに替わられていた!?

じゃあ銀さんたちがここに来る前からってことになるじゃないか。そんなに長い間、僕らに気づかれることなくすりましてきたなんて……。

ボーちゃんがニセモノだと見抜けなかったのが、何よりショックだった。

「銀さん！大丈夫ですか？」

トオルが肩から血を流す銀時のもとへ駆け寄る。するとニセのボーちゃんの小さな目が、ぎらりとばかりに光ってトオルをにらみすえた。

「……風間トオルを、渡せ。」

「えっ？」

「風間トオルを渡したら……お前らは、見逃してやっても、いい。何も、手出し、しない。」

銀時や、マサオたちが何か言う前に、しんのすけと神樂が怒声を浴びせ始めた。

「そんなことできるわけないゾ！風間くんはオラの大親友なんだゾ！！」

「勝手なことぬかしてんじゃねえヨ、ボケエ！」

「そうか……」

ボーちゃんの声に、暗い殺気がこもる。

「じゃあ、お前から、死ね！」

「新ちゃん、大丈夫？顔色が悪いわよ。」
「はい……」

新八の中の嫌な感じは、おさまるどころかますます激しくなっていた。

相変わらず道を歩く人の姿はない。それなのに、家々の窓やあちことの物陰からこちらを見張っている視線を、強烈に感じるのだ。

「……！新ちゃん……！」

お妙が突然、金切り声を発した。

「どうしました、姉上……！」

返事をし終わらないうちに、新八もそれに気づいた。

前方から、白くて大きな何かが、ゆっくりゆっくりとこちらへやって来る。一步一步、身体を動かすのがいかにもつらいといった様子で。

定春だった。

「……！」

新八は目を見開いた。

定春の右わき腹が、真っ赤に染まっていた。そこからぼたぼたと血

がしたたり落ち、地面に赤い道を作っている。

「定春！どうして…！？」

新八とお妙が駆け寄ると、定春は力尽きたように、その場に倒れ込んでしまった。

「ひどいわ、一体誰がこんなことを…」

「定春にこんな傷を負わせるなんて…誰にそんなことが…」

定春は一見ただのかい犬みたいだが、実際は狛神^{いぬがみ}というとてもない力を持つ宇宙巨大生物である。銀時や神楽にさえ、時折手におえなくなることがあるのだ。

そんな定春にこれほどの傷を負わせるとは、一体どれほどすごい奴なのか…。

「これはどこかで手当てしないと…姉上、酢乙女邸に連れていきましよう！あそこなら薬とか包帯とか、あるでしょうし。」

「そうね…獣医さんに連れて行くわけにもいかないものねえ。」

確かに見てもらうどころか、獣医の方が倒れてしまいかも知れない。

「それにしても、本当にヒドイことするわよね。」

「……………さ、酢乙女邸まで乗せてって、定春ちゃん！」

「いや、姉上も何気にヒドイことしてますよ。」

「…………くっ！」

ちょうど新八たちが酔乙女邸へ向かい始めた頃、酔乙女あいの二セモノは、頭の痛みに必死で耐えているところだった。
(くそっ、あいつ、ただじゃおかないんだから…)

頭の痛みの原因は、庭で好き勝手に駆け回る定春であつた。

もともと銀時その他の人々の頭にかじりつく癖のあつた定春だが、沖田にけしかけられて一度彼女の頭に食らいついてからは、その噛み心地（？）が気に入ってしまったらしく、二セあいが見せるたびに飛びかかつて噛みつくようになつてしまった。

おかげで外に出ることもままならない。全て、あのいまましいドS青年のせいだ。

今日はあまりにも噛まれたところの痛みがひどくなつてきたので、一日休むことに決めたのだつた。

沖田は意外にも、あっさり承知してくれた。自分も一日休めるので、嬉しかったようだ。

（何とか、あいつをこらしめる方法はないかしら……？）

いつものように、頭の中で復讐方法を考える二セあいだったが、バズーカ砲と定春のことを考えると、どうも気力が萎えてきてしまうのだつた……。

リビングの扉が、ぎいっと音を立てて開いた（あの一件の後、再び直したのである）。

沖田が入ってきたのだと思つた二セあいは、そちらへ不機嫌な顔を向けたが、それがすぐ、驚きの表情へと変わった。

そして、恐怖に凍りついた。

「リオル、様……！」

沖田はリビングの自分の部屋で、熟睡していた。

顔には愛用の、赤字にぱっちりおめめが描かれたアイマスク。だからどんな表情をしているのかいまいち分かりにくいけど、すーすーと安らかな寝息を立てているところを見ると、そう悪い夢を見ているわけではなさそうだな。

「……………」
「？」

何か聞こえたような気がして、沖田は突如眠りから引き戻された。うつすらと目を開けてみる。

真っ暗で、何も見えない。そりゃそうだろう、アイマスクをしたままなのだから。

アイマスクを押し上げ、沖田はぬぼーとした寝起きの表情で起き上がった。

「…んー……今、何時だ？」

この部屋には時計がない。沖田はポケットから携帯を取り出し、開いて画面に表示された時刻を見つめた。

そして、驚いた。

「もう三時過ぎかよ…」

今日、沖田は二セあいが休むと聞いて、朝食を食べてから再び嬉々として眠りについた。その時八時ちょっとだったから、七時間近く眠っていたことになる。

そう、沖田は昼飯も食べずに、眠り続けていたのであった。当然ながら、お腹はぺこぺこを通り過ぎてしまっている。今日が覚めたのも、多分身体が食物を欲してのことに違いない。

いつものように、何か台所に行つてうまい昼飯でも用意させるか。いや、この時間帯ではおやつと言った方がふさわしいかも知れない

が……。
とりあえず、居間へ行ってみよう。

沖田は寝ぐせの目立つ髪を直そうともせず、自分の部屋から出た。

沖田の部屋は、リビングの真上にある。そして階段にも近い。そこを降りていけば、リビングの扉は目の前だった。

だから階段を降り始めた時点で、沖田は下から漂ってくる異臭にいち早く気がついた。

（……気に入わねエ匂いだ。）

知らず知らずのうちに、沖田は顔をしかめていた。何の匂いかは分からないが、いやに不快感をかき立てる匂いだ。

それだけではない。前にもこんな匂いをかいだ覚えがある。どこだろうか？

考えているうちに、階段を降りきってしまった。

リビングの扉が半開きになっている。

しばしためらった後：沖田は足音をひそめて、そつと扉に歩み寄った。別にこここそする必要はないのに、そうしなければならぬような気持ちに襲われたのだ。

扉をそつと押し開け、中を覗き込もうとしたその時、

ペチャン。

足元で、液体質の音がした。

「……………」？

床を見下ろした沖田の目に飛び込んだのは、毒々しいばかりに鮮やかな紫色の液体でできた、大きな水たまりだった。

その中に、見覚えのある長い黒髪が、ぶかぶかと浮いていた、

黒髪だけだった。

「あら？変ねえ、鳴らないわ。」

酔乙女邸の立派な門の前で、お妙が困った声を出した。

定春をここまで連れてきたのはいいのだが、チャームを押してもう
んともすんとも言わないのだ。中から応答する声も聞こえてこない。
「故障かしら。まったくダメじゃないの、ちゃんと修理しとかなき
や…それでも金持ちなの？」

「仕方ないですよ、姉上。沖田さんがここに来てからは、それこ
ろじゃないでしょうし。」

お妙の機嫌が悪くなり出したので、新八は慌ててなだめにかかった。
定春は自らの治癒力のおかげで、だいぶ元気になっていた。今も新
八の後ろで、どすどすと（犬にはふさわしくない擬音かも知れない
が）足を踏み鳴らしている。傷はふさがったようで、もう大した治
療をする必要はなさそうだった。

しかし定春自身も、中に入れないことにイライラしていたらしい。
ものも言わずに突き進んでくると、巨大な門を頭でどんと押した。

予想もしなかったことが起きたのは、次の瞬間だった。

「あら…」

「あれっ？」

新八とお妙は、ほぼ同時に驚きの声を上げた。

門が重々しい音と共に、内側へと開いていく。つまり始めから、鍵
などかけられていなかったのだ。

いくら沖田がいい加減な性格だからといって、いつ敵が現れるかも
分からぬ時に、屋敷の門を開けっ放しにしたりするだろうか…。

「新ちゃん…」

同じことを考えていたのか、お妙も不安そうな顔になっている。

「姉上…」とりあえず、中へ入ってみませんか。沖田さんに何か起こ

つてるのかも……」

「……………」

「姉上？」

お妙はなぜか何も言わず、ただ新八の服のすそを強く引つ張った。見ると、門のてっぺん辺りをしきりに指さしている。

「え？何？」

指さされた方向を見た瞬間、新八ははつきりと目にした。『何』を。一瞬、自分が幻を見ているに違いないと思った。姉の瞳が恐怖で凍りついている理由が、すぐに分かった。

門の上に、誰かが腰かけていた……………子供だ。恐ろしいことに、どこからどう見ても風間トオル。そっくりの姿をしている。トオルは今幼稚園にいて、ここにいないはずなのに。だが最悪なのはその部分ではなかった。

その少年の腕は手の平から肘の辺りまでかけて、不気味な紫色に染まっていた。

そして彼の右手は、全身ずたずたになった酢乙女あいのニセモノの首根っこをつかんでいた。

「銀さん…」

耳元で囁かれた怯えの混じる声に、銀時は顔を上げた。

トオルは心底怯えた表情をしていた。おまけにそこには、わけが分からないという混乱の表情もあった。

戦いの形勢は、決して有利とは言えなかった。銀時の手傷は増え、左腕の肘の辺りからも血が滴っている。神楽でさえ、頬にわずかな傷を受けていた。

敵の　ボーちゃんの二セモノの鼻水攻撃は恐ろしく速かった。少しでも気を抜いたら、あとは心臓を貫かれるか喉を切られるかしかない。さすがの超人的な二人にも、ついているすぎがなかった。

「…何やってんだお前。おとなしく向こうに隠れてろ。敵の標的は、お前なんだからな。」

銀時は右手を強く振って、トオルをしんのすけたちが隠れている茂みの中へ追いやろうとした。

が、トオルは動かない。

銀時はトオルが、自分の傷ついた左肘を見つめていることにハツと気づいた。しかも、その目つきがおかしい。ぼうつとした、熱に浮かされた時のような視線で、いつものトオルとは別人のようだった。

そして、うわごとのように呟いていた。

「腕…腕が…僕のせいで…」

銀時は一瞬、トオルが敵に何かされておかしくなったのかと思った。胸の奥にひやりとしたものが走った。

「トオル？おいつ、大丈夫か！？」

敵の攻撃の危険をつかの間忘れ、銀時はトオルを激しく揺さぶった。幸い攻撃はもつぱら、神楽の方へ向けられていた。

トオルのぼやけた視線が元に戻った。数回瞬きして、トオルは銀時の顔を見つめた。

「ん…どうしたんですか、銀さん。」

いつもとごく変わらない彼の声にほっとして、しかし外面的には少々きつい口調で、銀時はトオルに背を向けて言った。

「どうしたんですかじゃねーだろ。さっさと隠れてろ、ガリ勉くん。」

ぎらぎらと光る鼻水の刃が、こちらめがけて飛んできた。

ちょうどその頃、春日部山の頂上辺り
所に、たたずんでいる人影があつた。 春日部が見下ろせる場

その人影はフードつきの、どう考えても季節外れな（しかも時代遅れな）長いコートをはおつて、フードも深々とかぶっていたので顔も身体もほとんど見えなかった。年齢も、性別すらはつきりしない。何とも不気味な印象を与える雰囲気を持ち主だった。

しばらくして、フードの中から忍び笑いが漏れ、しかも、低い声でした。

「覚悟してろよ、トオル。」

コートの人物はくるりと向きを変え、木々の間へと歩いていった。その拍子に、コートがめくれ上がって身体の左側がちらりと見えた。

腕がなかった。

左肩の付け根から下には、汚れた包帯が無造作に巻かれて、ひらひらとはためいているだけだった。

その拾伍：休みだからって昼寝で時間をつぶすな（後書き）

久しぶりのわりに短くて、申し訳ありません。本当は山崎とか土方のシーンも入れたかったんですが、ごちゃごちゃになりそうだったので（汗） 更新お休みの間も感想をくれた皆様、そしてこの小説を読んでくれる人たち全てに、心から感謝しています！次回は山崎と土方を焦点におき、コートの人物の目的と正体も明らかにする予定（！？）なので、どうぞお楽しみに！！

その拾六：車を運転する時は乗ってる人のことを一番に考える（前書き）

土方、山崎が登場！でももちろん銀時たちも登場するので、ご安心を（笑）

その拾六：車を運転する時は乗ってる人のことを一番に考える

ようやく敵が来なくなったのを確かめ、土方は刀を見下ろした。べつとりと紫色の液体にまみれている。無意識に顔をしかめて見回すと、周囲の壁や床も同じような有様になっていた。土方は後ろを振り返った。

「平気か？」

「ボー……………」

土方にびつたりとついてきている、鼻水を垂らした少年は、曖昧な返事をしてうなずいた。その足元でくんと不安げに鼻を鳴らしているのは、小さな白犬だ。奇妙なことに、野原家の愛犬・シロとそっくりな姿をしている。ただし目が空色であることと、首輪をしていないことだけが違っていた。

土方は壁の隙間に監禁されていた者たちを見て、驚愕した。縛り上げられていた鼻水の少年が、本物のボーちゃんなのだと悟ると（ボーちゃんはかなりきつくつねられて、相当痛い思いをした）、銀時たちに知らせるためにすぐ神楽を行かせたのだ。

そしてシロと瓜二つの犬のことを問いつめてみたところ、ボーちゃんはその犬がテルという名前で呼ばれていて、なぜかずっと一緒に閉じこめられていたのだと教えてくれた。

なぜこんな所に二人だけで閉じ込められたのかについては、ボーち

やんは何も知らなかった。分かっているのは、テルという名のその白犬が何とも不思議な力を持っているということだった。それが、いわゆる『テレパシー』だった。

この能力はやたら体力を要するらしく、そう気安くは使えないらしい。あの時土方の頭の中でした声も、まさにテルの仕業だったのだ。ボーちゃんもこの能力のおかげで、比較的テルと親しくなれたのだった。

しかしなぜ閉じ込められたのかについては、テルは決して話したがらず何も答えなかった。

二人がちゃんとついてきていることを確かめると、土方は声には出さず、手を下にぐいと向けてすぐそばにある階段を下りるように伝えた。ボーちゃんとテルもまた何も言わずに、こつくりとうなずいてみせた。

下に下りた途端に敵に囲まれるのではないかと予想していた土方は何も出てこないの但却って気味悪く感じた。今やマンションの中は、土方たち以外誰もいないかのように静まりかえっていた。土方にとつてはむしろ、お化け屋敷にいるような不気味な静けさよりも斬り合いの方が歓迎だった。

「……………離れるな。」

低く囁くと、刀をきつく握りしめ、土方は二つの小さな影を伴って廊下を歩き始めた。

「銀さん！大丈夫！？」

トオルが真っ青な顔をして、一番後ろの座席に寝ている銀時を振り返った。

「お前、何回同じ答えを言わせたら気が済むんだ。」

銀時が面倒くさそうに手を振った。

「どの傷もかすただけだ。目くじら立てるほどのことじゃねーだろ。」

確かに、心配されている当の本人は頭をボリボリ掻きながら、どこかに隠し持っていたらしいジャンプを読んでいる。実際銀時のことをこんなに心配しているのはトオルだけだった。

「風間くん、そんなに心配しなくても大丈夫だよ。」

トオルの隣に座っていたマサオが言い、そしてしんのすけたちに聞こえない程度の声で付け加えた。

「銀さんって、漫画でもすつごくタフなんだ。あれぐらいじゃへたばらないよ。」

銀時、神楽、ボーちゃんを除いた春日部防衛隊、そしてまつざか先生は、今ふたば幼稚園の送迎バスに乗っていた。

銀時と神楽は、このまま戦い続けていてもこちらが不利になるだけだと悟り、逃げる決意を固めた。とはいえ敵がそうあっさり逃がしてくれるはずもない。そこで二人が目をつけたのが、ピンク色で虎猫型の幼稚園バスだった。

しんのすけたちは一度、このバスで逃亡を計ったことがある。だからみんな奇妙な偶然だなと思ったが、実は偶然でも何でもなかった。銀時たちはその逃亡シーンを映画で見て、バスを利用することを思

いついたのだ。とにかく、敵の気をそらしながらトオルたちにバスに乗るよう合図するのが大変で、それから自分たちが乗り込むのはさらに大変だった。

しかし乗ってしまえばこっちのものだ。銀時は疲れたと愚痴をこぼしていたので、ハンドルを握ることにしたのは神楽だった。これはどう考えても未成年運転だが、そんなとを気にしている場合ではない。しかし神楽の運転が恐ろしく危なっかしいということは否定できなかった。事実幼稚園を出る際に、子供たちの二セモノのうち何人かが犠牲になったのは確かだった。

しんのすけは持ち前の脳天気さを發揮し、神楽の隣の助手席ではしゃいでいた。一方ネネは勇敢にも（と、トオルとマサオは思った）自分の席でぐっすり眠ってしまっていた。

そんな中でも、一番混乱した様子でいるのがまつざか先生だった。先生は銀時の豹変ぶりや神楽の出現に驚くばかりで、質問することもし忘れ、不安げに後ろの方に座って、あっちこっちへ目をやるばかりだった。

「ねっ、だから銀さんのことは心配しなくていいってば。」

マサオがもう一度、励ますように言つと、なぜかトオルは怒ったような口調で言い返した。

「でも、敵が毒を持っていたらどうするんだよ？」

「へ？」

マサオは完全に面喰らった。風間くん、一体どうしちゃったんだろ

う？

「何でそんなこと言うの？」

「だって……」

だって何なのか、結局聞けずじまいに終わった。トオルが何か言いかけた途端にバスが跳ね上がり、二人とも天井に嫌というほど頭をぶつけてしまったのだ。ほぼ同時に、少し後ろの方で

「きゃっ！」

という叫び声がした。ネネが目を覚ましたらしい。

「神楽、もうちょい身体と心とジャンプに優しい運転をしろ！」

一番後ろで怒った声がした。トオルが振り向いてみると、無防備な体制で寝ていた銀時が下に転がり落ちていた。そして彼の手には、さっきの衝撃でまっぴたつに破いてしまったジャンプが握られていた。

トオルは思わず吹き出した。それで胸を支配していた重苦しい気持ちがいやらや振り払われた。そうだ、今はそんなことを考えてる場合じゃない。それにしてもこんな時に『あのこと』を思い出してしまうなんて……。

マサオを見ると、なぜかひどくうつろな目つきをしていた。トオルは少し心配になった。さっき頭をぶつけた時、何かあったんだろうか？

「あの、マサオくん……大丈夫？」

「……えっ？何？」

マサオがきょとんとしてこちらを向いた。見るこのでできない目は再び正常な感じに戻り、うつろさなどみじんもなくなっていた。

トオルは慌てて、

「うつん、何でもない。」

と答え、窓に顔を向けた。ゴミバケツが一個、大きな音を立てては

ね飛ばされるのが見えた。

「うおっと！」

突然どこからともなく飛んできたゴミバケツを、山崎は間一髪でよけた。それと同時に、ピンク色の大きなものがすごいスピードで走り去っていくのが、隠れていた路地の隙間から見えた。

何だあれは………車？バスか？何であんなに慌てているんだろう。

山崎はため息をついて立ち上がった。なんとか敵をまいてここに隠れたものの、町中ニセモノだらけだし、いつここから出られるかと思うとかなり気が滅入った。副長か沖田隊長に連絡したいところだが、運悪く携帯をコンビニにおいてきてしまったので、彼らに助けを求めるすべもない。そのうち誰かがここにやってきたら………。

山崎の前に突然現れた三人の子供たちは、どうやらニセモノたちのリーダー格らしい、と彼は見ていた。彼らが一斉に迫ってきた時にはもうダメかと思ったが、幸い山崎は腕利きの隠密おんみつでもあった。何とかかんとか逃げ出し、今ここに隠れているというわけである。しかし、一つの場所にずっと隠れているのはまずい……移動するのなら、辺りに人気のない今がチャンスだ。

山崎が一步踏み出すか踏み出さないかのうちに、その右肩に後ろから手が置かれた。

山崎は全身の血が流れ去っていくような気がした。振り返るより先に、すぐ後ろで低い声がした。

「……ちょっと聞きたいことがあるんだが、いいかな？」

イリスは怒り狂っていた。

「あのクソ野郎！こざかしい真似をしゃがって……！！」

「ぎゃーぎゃーわめかないでちょうだい、イリス。そんなことをしてもあいつが見つかるわけじゃないのよ。」

「ぎゃーぎゃーなんか言ってねえよ。」

ルビーの冷たい言葉に、イリスがむっとした口調で答えた。

「大体リンドの奴はどこ行っただ？いつでもどこでも、ひょいっ
といなくなりやがって！」

彼らが探しているのは、当然山崎退だった。しかしルビーはともかく、イリスはこういう探索みたいなちまちました作業が好きではない。その上リンドもいつの間にか姿を消してしまい、イリスのイライラは頂点に近づきつつあった。

「リンドのことはほっときなさい。」
ルビーが冷静な口調で言った。

「今の最優先事項は山崎退を始末すること。いいわね？」

イリスはフンと大きく鼻を鳴らした。そんなことは言われなくても分かっているといわんばかりだった。

「それにしても……ただの気弱そうな奴だと思ってたのに、そんなことなかったのね。あたしたちから逃げ出すなんて。」

「一時的にだろ。」

イリスがまた怒りを秘めた口調で言った。

「あいつがたまたま、ちょっと幸運だったただけだ。どうせすぐ捕まるさ。」

「そう……」

ルビーの声は相変わらず無表情だった。イリスはさっきから辺りをしきりに見回していたが、突如何かを見つけたらしく、あつと声を上げた。

「おいっ、あれ……!」

「何？」

イリスの指さす方を向いたルビーが、少しだけ、ほんの少しだけ、目を見開いた。

イリスとルビーが立っている公園の向こう側の路地に、そろそろと消えていく人影があった。山崎ではない。人影は二つあり、一つは大人、もう一つは子供のものだろう、イリスとルビーぐらいの大

きさしかない。

大きい方の人影は、右手に何か長くてぎらぎらするものを持っていった。その後ろにぴったりくつつくようにして、子供が歩いていく。そしてよくよく見れば、子供の足元に小さな犬がいる。真っ白でフワフワの毛を持つ、わたあめみたいな犬だった。

公園の二人の視線は、この白い犬に向けられていた。

イリスが齒の間から、シートと怒りと嫌悪の吐息を漏らした。

「間違いいね、テルだ！あの鼻水のカキまで一緒にいやがる……くそっ、テルの奴助けを求めやがった！！」

「驚きね。昨日あんなに脅しつけてやったのに、まだ抵抗する気力があるなんて。感心しちゃうわ。」

「感心してる場合じゃねえだろ。早くあいつを捕まえなきゃ、リオ様に叱られちまうぜ。うまく手なづけりゃ、テルは使い勝手があるんだからな。」

ルビーはしばらくの間、路地の中に消えていく影を見つめていたが、やがて小さくため息をついた。

「いいわ……山崎退は後回しにしましょう。」

送迎バスでの旅の状況は、ちっともましにならなかった。それどころか神楽の運転のし方はますます荒つぽくなる一方で、銀時は少なくともあれから二回、バスの床に倒れ込んだ。

「僕、まだ生きてるのが信じられないよ。」

マサオが血の気の失せた顔でネネに言った。ネネはもうとても眠るどころではなく、タオルに席を替わってもらってからマサオの腕にしがみつきっぱなしだった。助手席にいるしんのすけも、さすがにはしゃぐ余裕がなくなっただのかももう何も言わない。まっさか先生

は前の座席の背もたれにしっかりつかまって、振り落とされまいと必死になっていた。

「まったく、いつまでこんなもんに乗ってなきゃいけないんだ！」

銀時がいまいましたに叫んだ。彼がこの恐怖のバスの旅を続けるよりも、敵との戦いの方がましだと考えていることは火を見るよりも明らかだった。

トオルはいえ、マサオとネネの座っている席の後ろで窓の外を眺めていた。全てが恐ろしい勢いで過ぎ去っていくので逆に酔ってしまいそうだったが、春日部がどんな状況になっているのか見たかったのだ。今のところ、襲ってくる敵の姿は見られなかった。

キキキキキーツ！！！

突然バスが急ブレーキを踏んで止まった。不意打ちを食らった乗客たちは、みんな座席から転がり落ちたり天井や前の座席の背もたれに頭をぶついたりして、声のない悲鳴を上げた。

「もうたたくさんだ！」

床から起き上がった銀時が、カンカンになって叫んだ。しかし神楽は別に、いたずらで急ブレーキを踏んだわけではなかった。ようやく座席に腰を落ち着けたみんなが前方のフロントガラスに目をやると、誰かがバスの真ん前で右手を振っているのが見えた。

よれよれの長いコートを着た、背の高い人物だった。フードをかぶ

っているので顔は全く見えない。

そしてその隣で、困ったような混乱しているような複雑な表情をしている山崎がいた。

「やあ、どうも。」

フードの人物が近づいてきて、運転席の開いた窓越しに神楽に話しかけた。さすがの神楽もこれにはどう対処していいのか分からず、ぽかんと口を開けるばかりだった。

「なんか大変なことなっちゃってるみたいだねえ？悪いけど乗せてくれないかな？」

陽気でハスキーで、フードをかぶった不気味なイメージとはかけ離れた声だった。そのせいか、それとも山崎がいるせいか、みんなが何か言うより早く、しんのすけがドアの開閉ボタンを押してしまっていた。

開いたドアから、コートの人物と山崎が乗り込んできた。山崎は銀時たちがいるのを見て狐につままれたような顔になったが、それは銀時たちの方でも同じだった。ただしコートの人物だけは、フードに隠れた顔をあっちこっちに動かしてきよろきよろ見回していた。

そして突然叫んだので、全員が飛び上がった。

「いた！」

そして神楽たちが何か言う間もなく、コート的人物は大股で歩いていき、後ろから二番目の席のすぐそばに立った。

ちょうど、トオルの座っている席に。

トオルは呆氣に取られて目の前の人物を見つめていたが、口が開いていることに気づき、慌てて閉じた。

「久しぶりだねえ……………トオル。」

そう言われてもまだ、トオルはわけの分らないという表情をしている。それに気づいたらしいコートの人物が、軽くため息をついてフードに手をかけた。

「やれやれ…あたしの顔を忘れたのかい、トオル。」

ぱさつと落ちたフードの中から現れたのは、なんと若い女性の顔だった。黒髪に、黒い瞳。白い透き通るような肌。くつきりした端整

な目鼻立ち。

すごい美人だ。それなのに、その顔を目にした途端トオルの顔がさ
っとこわばった。

「うっ…………みおり叔母さん…………！」

しばし、車内に愕然とした沈黙が満ちた。

「えええええーっ！叔母さん！？」

その拾六：車を運転する時は乗ってる人のことを一番に考える（後書き）

いやあ、とうとう出しちゃいました、ねつ造キャラ（汗）。風間くんって親戚とかいるのかなあって考えてたら、どうしても作りたくなってしまうして…（どんな理由だ）。風間くんの顔がこわばった理由は、次回明らかになります。お楽しみに！

その拾七：相手が電話に出るまで長いこと待たされるのって腹立つよね（前書き）
お待たせして申し訳ありませんでした。今回は銀魂側の創作（要は捏造）キャラが登場します！

その拾七：相手が電話に出るまで長いこと待たされるのって腹立つよね

憎い。

ずっと前から、あいつのことが嫌いだった。許せなかった。

どんな方法でもいい。とにかく傷つけてやりたくてたまらなかった。あいつの顔が苦痛に歪む瞬間を、命乞いをして泣き叫ぶ姿を、見たくてたまらなかった。

気の済むまで、思い切り痛めつけてやりたかった。

今、自分の手につかまれてぐったりしている、この役立たずにしてやったように……。

しかし最近、それだけではダメだということに気づいた。

あいつ本人を苦しめて殺すだけなら、それでおしまいだ。でもその前に、あいつの『大切なもの』をぶち壊してやるのはどうだろう？

そう、例えば。

考え込みながら下に目をやったその時、二つの人影がその場に凍りついて、こちらを見上げているのが目に入った。

突然、ズボンのポケットが震えた。

土方は思わずくりとしたが、そこに携帯電話を入れておいたことを思い出した。内心自分を叱りながら画面を見ると、酢乙女邸からの電話である。

後ろをちらりと見て、ボーちゃんとテルがついてきていることを確

かめる。そして土方が電話の通話ボタンを押して耳に当てるか当てないかのうちに、沖田の声が耳に飛び込んできた。

「土方さん、今どこにいるんですかイ？マンションの部屋にかけたのに出ねエもんですから……」

「外だ。」

土方は簡潔に答えた。今はごちゃごちゃ説明している暇などない。

「それより、何の用だ？」

「あア、それが、大変なんで……」

沖田はいつになく切迫した口調で、酔乙女あいの二セモノがいなくなったことを告げた。

しかも、彼女がいなくなる直前にいたと思われるリビングには、紫の液体と長い髪の毛が数本、落ちていたという。

「紫……だと？」

土方はマンションで斬り倒した二セモノたちの血も、紫色だったことを思い出した。それと同時にまた、あれと同じものを確かにどこかで見たような気がしてならなくなった。どこでだろう、もう少しで思い出せそうなのに……。

「…………土方さん、あいつのこと、覚えてますかイ？」

「……………あア？」

土方は沖田の問いの意味が分からず、顔をしかめた。

「何だと？」

「だからあいつでさア、ほら…」

魔^ま虞^ぐ蛇^だ博士のことですア。」

「……………！」

土方は微かに目を見開いた。その名前に心当たりがあったからだけではない。沖田のいわんとしていることに気づいたのだ。

「そつだ……………あの紫の液体は……………」

土方たちが江戸で、近藤らと共に真選組で働いていた頃、といつてもここに来てからせいぜい二ヶ月ぐらい前のことだが、あちこちで連続殺人が発生した。しかも犠牲者はそれぞれひどい殺され方をされており、江戸の人々は皆恐怖のどん底に叩き落とされることになった。

近藤はこれまでにないほど怒り狂った。真選組の目と鼻の先でこれらの事件が発生したからということもあつたが、何より彼を怒らせたのは、殺されたのが皆子供だったこと、そして死体が発見されてからすぐに、何者かに盗まれていることだった。その何者かが殺人犯であることはほぼ間違いない。なぜなら死体が消えた後に、『お子様はありがたく再利用させていただきます。ご協力ありがとうございました。』というふざけたメッセージが残されていたからだ。

何としても犯人を捕まえる。そう決心した近藤たちは、一週間懸命の活動を続け、遂に犯人を突き止めた。

そいつが、魔虞蛇博士だったのだ。

彼は「巨脳族^{きよのう}」という頭でつかちな天人^{あまんと}だった。この種族は大変頭がよいことで知られていたが、ひねくれた偏屈ものでほとんど他の種族と交流しない。それなのに巨脳族の彼が地球にやってきて江戸に住んでいるということは、それだけで驚きだった。

しかも同じ種族の仲間と違い、魔虞蛇博士は愛想よく、多くの人と

交流した。病気にかかった人のために薬を作ってやることもあったので、評判はなかなかいいものばかりだった。

しかしある夜、隠密の山崎が、博士の家のそばに張り込んでいた時、そこから子供の泣き声らしきものが聞こえてきたのだ。

当然山崎は驚愕したが、そこは真選組の隠密である。すぐさま博士の家を囲む塀に身を寄せ、じつと耳をすました。

すると今度は疑いようもなく、子供の泣き叫ぶ声が中から響き、しかしすぐに途切れた。

その日は死体は見つからなかったが、行方不明の子供が一人出ていた。しかもその子のいなくなった場所は、魔虞蛇博士の家のすぐ近くだった。

こうなつてはぐずぐずしてはいられない。山崎は携帯で仲間に応援を求めた。幸いにも、近藤・土方・沖田の三人がすぐ近くにいたので、突入隊はすぐに結成された。

そうして博士の家の中から、これまで犠牲になった子供たちの遺体と、まだ殺されてはいなかった行方不明の子供が発見されたのだった。不可解なことに、そして恐ろしいことに、子供たちの遺体は全

て冷凍保存されていた。

しかしその時部屋の奥の方へと逃げていく博士の姿が目撃されたにも関わらず、彼が捕まることはなかった。鍵をかけて閉じこもった自分の研究室の中から、消えてしまったのだ。どこかに秘密の扉や抜け穴でもあるのではと、土方たちはその部屋をそれこそ虱潰しに調べたが、何も見つからなかった。博士が書いた書類といったようなものも全てなくなっていた。

奇妙なことといえば、テレビがつけっぱなしになっており、それにへんてこな装置が接続されていたこと、そして床に小さなびんが転がっていたことだけだった。あの装置は今頃幕府の科学班に預けられ、綿密に調べられているはずだ。

そして床に転がっていたびんに入っていたのが……。

「確か、紫色のどろどろしたやつだったな。」

土方は今まで思い出すことのできなかった自分を内心呪った。

「土方さん、それで結局あれは何の液だったんですかい？」

「いや、知らねえ。あれもあの装置と一緒に、幕府で調べられているはずだ。」

それにしても、何で二セモノたちの血が同じような紫色をしていたのか。

土方はボーちゃんと、その足元でじっとしているテルを見つめた。

そして、魔虞蛇博士の失踪とこの映画の中で起きている異変には、何か関係があるのだろうか……。

「土方さん、俺ア………」

同じことを考えていたらしい沖田が、珍しく思索しているような口調で言いかけた。 しかし結局、最後まで言わずじまいに終わった。

悲鳴が聞こえてきたのだ。 甲高い、いわゆる『絹を裂くような』女の叫び声。

土方はさすがに一瞬ぎくりとしたが、顔色を変えるほどではなかった。 何と言っても血なまぐさい仕事に従事することが多い身として

は、この程度のことには動揺するわけにはいかないのだ。ボーちゃん
とテルの表情が変わっていないところを見ると、悲鳴は沖田側のもの
らしい。

「沖田……………」

「すいやせん土方さん、ちよつくら見に行つてきまσα。またすぐ
電話するんで。」

かかった時と同様に、電話は唐突に切られた。土方は舌打ちして携
帯を耳から離し、閉じてズボンのポケットに突っ込んだ。

「……………知り合いだ。」

ボーちゃんがもの問いたげに見ているのに気づいて、土方はぶつき
らぼつにそれだけ答えた。

そして、目にも止まらぬ速さで足元の石を拾い上げ、彼らが立って
いた場所から数メートルも離れていない所にある茂みに投げつけた。
すると茂みが叫んだ。

「いたっ！」

ボーちゃんの口がぼかんと開いた。茂みの中から、マサオそっくりの少年が頭をさすりながら転がり出てきたのだ。その姿を見た途端、テルが怯えたようなうなり声を上げ、ボーちゃんの足にぴったりと身を寄せた。空色の目がぴかっと光った。

「逃げるぞ！」

土方は怒鳴り、まだ啞然としているボーちゃんの腕を問答無用でつかむと走り出した。テルが飛ぶように走り、後に続く。

「この野郎！」

後ろの怒鳴り声が、次第に遠ざかっていった。

土方たちが近くに無造作に置かれていたゴミ箱のそばを走り過ぎたまさにその時（テルは匂いをかぐのが嫌らしく、息を止めているような顔をしていた）、土方のズボンのポケットがまた震え出した。土方は無視した。車に乗っているわけではないが、逃げ回りながら携帯で会話するなんて、それこそ自殺行為だ。後ろに殺気立った追っ手が迫っているとなればなおさらである。

沖田は相当辛抱強く待っているらしく、携帯はなかなか静かにならなかった。しかしマサオとネネそっくりな姿をした追っ手たちをまくことに成功し、ようやく一同が狭くてゴミだらけの路地に腰を下ろした時、震えが止まった。

土方は息をつき、そして今頃向こうはさぞカンカンに怒っているだろうと思いやりながら、携帯を取り出し、開き、不着信欄の最新項目を表示した。

それまで何の変化もなかった土方の顔色が、にわかになつと白くなった。目が画面に映し出された文字に、釘づけになっていた。

そこにあつたのは、まるで思いもしなかった五文字であつた。

『近藤勲携帯』

「まったく大変だったんだぞ、ここに来るまで……………」

再び走り出した送迎バスの中で、長いコートを脱ぎ捨てた女性が独り言のように呟いた。

女は左腕がなかった　それなのに今度は神楽に代わり、その女が右腕だけでハンドルを握っていた。彼女の運転のし方は神楽のスタイルに満ちたものと比べるとずっとおとなしく、乗客たちは比較的安心して座席に腰を落着けることができた。

そして助手席にいたしのすけも、今はトオルと交替していた。トオルは嬉しいような困っているような複雑な表情を浮かべ、運転席

の方に顔を向けずにじっとフロントガラスを通して見える前方の風景を見つめていた。

女がまたしゃべり出した。

「春日部に着いた途端に変な奴らに襲われてさ。そんで逃げ回ってたら路地の中でうろろしてるあの兄ちゃんが（と言いながら、すぐ後ろに座っている山崎を指さした）いたもんで、どうなったんのか聞いてみたわけ。でも彼もいまいち分かんないみたいだったし……しょーがないから二人で逃げてたのよ。そしたらさ、急にこのバスが飛び出してきて、しかもあんたの顔が窓から覗いてるのが見えたんだけ。だからとりあえず停めてみようと思って……」

一人でこれだけしゃべると、女はちらつと隣にいるトオルに目をやった。

「……………」

トオルは黙っていた。後ろにいるみんながこちらへ耳をそばだてているのは分かっていた。

今運転席に座っている女の名は、風間みおり。トオルの父親の妹で、つまりトオルの叔母に当たる人だ。しかし高校を卒業してから世界中を放浪しているため、トオルと会ったのは一回だけ、二年前のことだった。

トオルは今まで、友達にみおり叔母さんの話をしたことがなかった。ほとんど会ったことがないと、母親がみおりを嫌っているからということもあったが、何より一番の理由は、一度だけ彼女と会った時の記憶が思い出すのも苦痛なものだからだった。

みおりもそれを分かっていたようで、あれ以来春日部に来ることはおろか、電話をかけてくることすらなかった。

それなのにどうして、よりによってこんな時に、叔母さんはここにやって来たんだろう？

そしてトオルは、もう一つ考えた。確か叔母さんが来るなんてことは、銀さんたちから聞いた『あらすじ』の中にはなかったはずだけど…………。

「叔母さん、どうして急に春日部に来たんですか？」

深く考えもしないうちに、トオルの口から言葉が転がり出た。みおりがちよっとびくりしたみたいにトオルを見つめ、それからまたすぐに視線を戻した。

「さあ。」

返答を考えるのに困っているような、曖昧な口調だった。

「それが分からないんだ。何だかどうしてもここに来て、お前に会わなきゃならない気がしたんだ…………。」

今の悲鳴はどうやら、外から聞こえてきたようだ。

沖田はそう見当をつけ、急いで酢乙女邸の外に走り出た。すると彼の考えを裏づけるかのように、門の辺りからまた女の悲鳴が聞こえた。

沖田は一層足を速めたが、門の手前辺りまで来た時、はたと立ち止まった。

門は今や、大きく開き切っていた。その向こう側の、沖田に一番近

い場所に、紫色の液体にまみれた黒い塊かたまりが落ちていた。それが酢乙女あいの二セモノのなれの果てだと気づいた時には、さすがの沖田も背中に戦慄が走るのを感じた。

二セモノはシューシューと嫌な匂いのする煙を立てている。そして見る間に溶け、はつきりした形を失い、やがてはただの紫色の水たまりになってしまった。

そして、その向こうにはさらに恐ろしい光景が展開していた。

沖田はこちらに背を向けている人物を、信じられない気持ちで見つめた。まさか、こいつがここにいるはずがない。

だがしかし、ここ最近親しくしてきた人だ。後ろ姿とはいっても、見間違いようがなかった。

風間トオルとそっくり同じ姿をした人影が、こちらに背を向け、全身のあちこちを紫に染めて立っていた。

ただしこちらは怪我のためではなく、外から浴びたものらしい。酢乙女あいの二セモノを始末したのはこいつのようだ。しかし、それよりもっと差し迫った問題があった。

トオルそっくりの誰かの足元に、新八がうずくまっていた。そばに折れた棒が転がっているところを見ると、さっきまでそれを使って応戦していたのだろう。新八が苦しげに咳込むたびに、その口からポタポタと血が地面に落ちた。

そこからやや離れた所でお妙が、膨らんだ買い物袋を握りしめたまま、恐怖の表情を顔に貼りつかせて立ち尽くしていた。その脇でうなり声を上げているのは、定春だ。

沖田が次の行動に移る間もないうちに、新八を見下ろしていた少年がくるりとこちらを振り返った。

沖田は束の間息が止まり、動けなくなった。覚悟していた通り、そいつの顔もトオルと瓜二つだった。だが、目が違う。五歳の子供の目ではない。そこにあるのは……。

憎悪だ。

見ただけで人をすくみ上がらせてしまうような激しい憎悪の炎が、その瞳の中にはあった。顔の表情自体は笑みを浮かべていることが、それを却って一層恐ろしげなものにしていた。

「こんにちは。」

トオルそっくりの少年はにっこりした。そして沖田に一步近づいた。沖田は思わず後ずさりしそうになったが、気弱なところを見せまいとぐっとこらえた。

少年はさらにまた一步、こちらへ踏み出してきた。

「あなたも、風間トオルの友達ですか？」

沖田は顔をしかめた。

「それが、どうだってんでイ。」

トオルそっくりの少年の口元が、にやりと笑った……と思った瞬間、沖田は手にしていた刀を抜き放っていた。

全身に、泡立つような殺気を感じたのだ。真選組一番隊隊長の刀がほとんど目にも止まらぬ速さで動いた。

しかし。

ドッ！

(……………なっ!?)

沖田の刀が相手に襲いかからないうちに、彼の腹をすさまじい衝撃が襲った。内臓をやられたかと思うほど強い衝撃だった。

「トオルのお友達がこれで三人……ふふふ、ちょうどいいや。」

笑い声が、地面に崩れ落ちる沖田の耳に届いた。

そしてその後は暗闇に吞まれ　　もう、何も分からなくなった。

しんのすけたちの知らないうちに、壮絶な悪意を持つ者が、静かに行動を起こしつつあった。

そして、風間トオルと風間みおりの過去につながる悪夢も、また……。

その拾七：相手が電話に出るまで長いこと待たされるのって腹立つよね（後書き

恐るべき敵を前に、新八、沖田、そしてお妙の運命は！？そして土
方にかかってきた電話の意味は……………次回をお楽しみに！

その拾八：どんな女でも涙は大事な武器になる（前書き）

さあ、離ればなれになっている銀さんたち、果たしてそれぞれの行く末は！？更新いつも遅れて、すみません！m（――）m

その拾八：どんな女でも涙は大事な武器になる

気がつくと、どこか暗い場所にいた。

でも一人ではなかった。誰かが前にいて、自分の手を引いて歩いてくれている。

その人は、自分よりずっと背が高く髪も長い……女の人だ、と分かった。

やがて、狭い通路から突然、天井の高い広々とした空間に出た。

どこかの工場の中らしい。壁にはパイプが張り巡らされ、手すりのついた通路やそこへ上っていくためのはしごが設置されているのが、薄く灯^{とも}った工場の明かりの中にぼうつと見えた。

しかし、何より興味を引いたのは、部屋の真ん中の床に設置されている大きな筒みたいなものだった。

好奇心に突き動かされるまま、そばに近づいて筒の中身を覗き込むと、中は黒い液体で満たされていた。普通の水みたいに滑らかではなく、どろりとしている。何ともしやない異臭が鼻をついた。

半ば無意識に液体へ手を伸ばした時、女の人が気づいてこちらに歩いてきた。自分に向かって何か言ったようだが、なぜかよく聞き取れない。

自分の腕をつかんで引つ込めさせると、女の方は筒の空洞の中を満たす液体に目をやった。

ちらりと笑みを浮かべ、女の方はそつと左手をさしのべて黒くどろりとした液体に触れた。そして手の平に液体をすくい上げて揺らし、液体の感触を楽しむかのように目を閉じた。

が、突如目を開き、疑惑の表情を浮かべて左手の中に溜まったものを見つめた。

次の瞬間、女の人の手の中のものが
え上がった。

黒い液体が、ぼつ、と燃

そしてめらめらと揺れる青白い炎が、女の人の左腕をさあつと、生
き物のように這い上がった……。

ずん、と全身に重い衝撃が来て、トオルはハッと顔を上げた。

どうやら夢を見ていたらしい。ちょうどしんのすけが登場する悪夢を見て目が覚めた時のように、全身が汗ばんでだるかった。

トオルはため息をつき、額の汗をぬぐった。

何てことだ……この一年間、見ないで済んできたというのに、みおりに会ったことであの悪夢が蘇ってしまったようだ。

隣の運転席にいるみおりに目をやったのと同時に、トオルは自分がなぜ唐突に目覚めたのかに思い当たった。

バスは止まっていた。多分ブレーキを踏んだ衝撃が、トオルを目覚めさせたのだろう。どういうわけか、みおりは明らかに呆然とした表情を浮かべて前を見ている。トオルは前方の光景に視線を向けた。

そこにいたのは、定春とその背にしがみついたお妙だった。

あまりにも驚いたからだろう。土方はテルがけたたましく吠え出すまで、襲撃者の接近に気がつかなかった。

「！」

頬に熱気を感じたのと我に返ったのがほとんど同時で、土方は半ば無意識のうちにボーちゃんとテルをひつつかんで投げ飛ばし、自分

は地面に伏せた。頭上で爆発音が響いたのは、ちょうどその直後だった。

ついさっきまで、自分たちが座っていた路地の地面に、大きな火の手が上がっている。しかし見ているうちにそれは小さくなり、まるで最初から火などなかったかのように、跡形もなく消えてしまった。

そこへ、さっきまではずのネネとマサオそっくりの人影が、走り寄ってくるのが見えた。

ニセモノたち ルビーとイリスの二人とも、怒りの度合いが違うとはいえ、先ほど土方にうまく逃げられたことにはそれぞれ腹を立てていた。だから本来の狙いはテルなのだが、何よりもまず、攻撃の目標を別の男に決めていた。今、地面に倒れている一人の男に。

しかし二人にとっては不幸なことに、ルビーとイリスは考えるのと同じくらい、いやそれより速いスピードで行動できる男を相手にしたことがなかった。土方はいたずらに倒れていたのではなかった……伏せるや否や、既に次の行動へと移っていたのだ。

土方に飛びかかるか飛びかからないかのうちに、イリスは焼けるような痛みを右腕に感じてぎよっとなった。頬に数滴の液体が飛んできたのでとつさに横を見ると、ルビーの肩から紫色の血がしぶいていた。

二人が凍りついている間に、土方は刀を手に飛び起き、地面にわけ

の分からぬまま転がっているボーちゃんと恐怖の吠え声を上げているテルを左腕に抱え込んだ。

イリスは地面に転がっている自分の右腕と、逃げていく土方の背中を悪夢を見ているような気持ちで眺めていた。

しかしルビーの方は傷が浅いこともあり、そう長くぼんやりはしていなかった。今まで見たことのないような悪意のこもった視線を
そして力をこめた一撃を、逃亡者の憎い背中に送りつけた。

土方の背中に、炎の華が咲いた。

今しんのすけたち園児に銀時たち、そしてまつざか先生とみおりは、バスから降りてお妙と定春の周りに集まっていた。

みんな、それぞれ違った意味合いの驚きを顔に浮かべている。トオル、銀時、神楽、そして山崎は、なぜこの奇妙なコンビがこんな所に現れたのだろうと不思議に思っていたし、他の面々は定春の巨大さに啞然としていた。ただししんのすけは別で、彼はお妙のきれいな顔に目が釘付けになっていた。目の見えないマサオはネネに手をつながれ、一人どのような反応をすればいいのか分からないという表情で突っ立っていた。

やがて、神楽が彼女らしくもない、おずおずとした口調で話しかけた。

「あの、姉御……………何かあったアル力？」

すると まったく驚くべきことが起こった。

お妙がわっと泣き出したのである。

「お妙さん！」

「姉御オ！！」

トオルと神楽がそれぞれ仰天して叫んだ。お妙はさらに絶望的にすすり泣き、とうとう定春の首に顔をうずめてしまった。

「私……私、どうしたらいいか分からないの……お願い、助けて、お願い……」

トオルは銀時と神楽を見上げた。二人とも、トオルと同じようにお妙の様子から強い衝撃を受けたようだった。お妙は彼らの知っている女性の中で、最もしっかりした人物の一人なのだ。

「ど、どうしたんですか？ 姐さん、一体……」

山崎は動転のあまりつい、お妙のことを『姐さん』と呼んでしまっただが、お妙はまるで気づいていないようだった。

「大変なのよ……私、怖い。何が何だか、もう」

「何があつた？」

銀時が単刀直入に、普段使わないような鋭い声で問いただした。それに元気づけられたのか、それとも少し気持ちが落ち着いてきたのか、お妙は顔を上げた。

「私……し、新ちゃんと一緒に、買い物に行ったの。きよ、今日の、夕ご飯のおかずを買って、それで帰ろうとしたら、この子が

定春ちゃんが、来るのに会ったの。なぜか分からないけど、怪我をして血が出ていたわ。」

「怪我？」

神楽が聞き返し、慌てて定春の身体を調べ始めた。とうの定春自信

は黒い目をくりくりさせて、珍しそうにしんのすけたちを眺めていたが。

「どうしようか迷ったんだけど……結局、酔乙女邸に連れて行こうってことになったの。でも着いてみたら、チャームは鳴らないし、ドアも開けっ放しだし……もうその頃には、定春ちゃんも元氣になってただけだ。すごく嫌な感じがして、私は新ちゃんに、このまま定春ちゃんを中に入れて帰ろうって、言おうと思ったのよ。もしたら……」

お妙はここで、突然口がきけなくなったかのように言葉を切った。見ればその顔が、極度の恐怖で青ざめこわばっているのが分かる。何回か息を吸ったり吐いたりしてから、お妙は絞り出すようにして話を続けた。

「もしたら、ちょうど門の近くの地面に何かがあるのに気づいたの。水溜まりみたいだったんだけど、何だかどろっとしてて、しかも……紫色だった。変に思っ上を見上げたら　ああ、いたのよ、トオルくん。あなたにそっくりな子が、門の上にいたの。」

「えっ？」

トオルはびっくりしてお妙を見つめ返した。

「僕の……そっくりさんが？」

「それだけじゃないのよ。そいつは腕に、何かぼろぼろになった紫色のものを持ってたの。女の子のようだったけど、わ、私、あまりにもびっくりして、それに怖くて、動けなかった……もしたら、そいつがこっちを向いて

新ちゃんを打ち倒したのよ！」

「おいちよつと、ちよつと待て。」

銀時が少し慌てた様子で遮った。

「話の順序ってやつを間違えてねーか？そのトオルそっくりの奴は門のてっぺんにいたっていう話だが、そんならそこからどうやって下にいる新八を倒したってんだ。バズー力でも持ってたのか？」

「え…ああ、まあそうよね、ごめんなさい。」

お妙はそわそわと前髪をかき上げた。

「でも本当にあつという間だったのよ。門の上からこっちを見た、って分かった次の瞬間に、新ちゃんが血を吐いて倒れたんだもの。それに……………」

「新ちゃんって……………新八さんのこと？」

ネネが突然割って入った。ショックそのものの表情を浮かべている。

「あの…ネネを家まで送ってくれた人？」

その時しんのすけが目を上げ、明らかに怪訝そうな顔つきでネネを見たので、トオルは内心かなり焦った。しんのすけにはまだ、ネネが風間家の夕食に招待されたことを告げていない。隠していたことを知ったら相当腹を立てることは確実だ。

しかし幸い、しんのすけが何も言わないうちにお妙が話を再開してくれた。

「お腹を殴られたみたいだったわ。少しの血だったから、大したことなかったと思うんだけど……………それにしても、あいつはとっても恐ろしい奴よ。それにとっても強いわ。 沖田さんを一撃で倒したくらいだし。」

「沖田さんが！？沖田さんが、一撃で？」

山崎が叫んだ。信じられないという気持ちで、青い顔にありありと浮かべている。彼は普段から沖田のそばで働いているだけに、彼の恐るべき剣の腕はよく承知していたのだ。沖田を知る銀時と神楽も、同じく驚愕したようだった。

「そんで……お前はどくなったんだ。」

銀時がやつのことで訪ねると、お妙はなぜかうなだれた。

「沖田さんが屋敷の中から走ってきたけど、あいつがさつと動いた途端にぱったり倒れてしまって、私は何が起こっているのかさっぱり分からなかった。あのままあそこで突っ立っていたら、間違いなく私が次の標的になっていたでしょうね……でも新ちゃんが突然私に、『定春に乗って逃げろ！』って叫んで我に返ったの。でも私は新ちゃんたちを見捨てて行きたくなかった……だけど新ちゃん私の腕をつかんで、定春ちゃんの背中に突き飛ばしたのよ。いえ、投げ飛ばしたって言った方がいいかしら。その途端定春ちゃんが走り始めて、後は……ああ、後は分からないわ！」

ここまで一気にしゃべるとお妙は声をつまらせ、また定春の白い毛並みに顔をうずめてしまった。銀時たちはそれぞれ顔を見合わせた。

「この人が言ってること、本当なの？」

一番最初に切り出したのは、風間みおりだった。黒い瞳にやや疑わしそうな色を漂わせて、お妙と定春を見比べている。

「もちろんだよ。」

トオルが怒ったように言い返したので、みおりはちょっとびっくりしたようにトオルを見下ろした。

しんのすけとネネとまつざか先生は、定春に対して完全に気をとられていた様子だった。

「この犬、一体何なの？」

ネネがこわごわ手を伸ばし、定春の白く滑らかな毛並みに触れながら誰にともなく聞いた。

「えーっと、まあその……………」

まさか宇宙巨大生物だよ、と教えてやるわけにもいかない。トオルが返答に困っていると、またしてもお妙が話題をそらす助け船を出した。

「そういえば…あのトオルくんにそっくりな奴、変なことを言ってたわ。」

「変なこと？」

お妙はなぜか、トオルの顔をやけにじっと見つめ、そして口を開いた。

「君たちには風間トオルを苦しめるために協力してもらっ……………とか何とか。」

「何だと!？」

銀時がさつとお妙の方に視線を向けた。トオルは驚きのあまり飛び上がりそうになった。

神楽が言った。

「そういえば……ボーちゃんのニセモノも言ってたアルヨ。風間トオルを渡せて。」

「河村さんのそっくりさんは、風間くんを相手するのは自分たちじゃないとか言ってたかった?」
ネネがみんなに思い出させた。

「そうか…だとすると、誰かトオルを特別に狙ってる奴がいるってことになるな……」

「ちょっと待ってよ。」

みおりが少しイライラした口調で割り込んできた。

「トオルが誰かに恨まれてるとでも言うの?言っとくけど、この子がそんな人様に憎まれるようなこと、してるわけな」

みおりの最後の言葉は、ついに聞けずじまいに終わった。お妙が大きな悲鳴を上げて、みんなの背後を指さしたのだ。

振り返った瞬間、無人だったはずのバスが滑るように、こちらへ向かって進み出すのが目に入った。

運転席と助手席に、にやにや笑いを浮かべた野原ひろしと野原みさえの顔が見えた。

土方は激しく舌打ちし、焦げた上着を地面に叩きつけた。

「くそっ！」

携帯を落としてきてしまったのだ。さっき伏せた時、無意識のうちに放り出してしまったに違いない。せつかく近藤から連絡が来たというのに……。

それにしても、どうして突然かかってきたのだろうか？ 所謂いえば携帯電話を使って近藤たちと連絡するなんて、まるで考えてもみなかった。大体違う世界同士で電波がつながるなんて考える方がおかしい。実際向こうの世界からは、ずっと連絡など来なかったのだ。

土方、ボーちゃん、テルの三人は、春日部山の麓（ふもと）辺りまで逃げてきていた。

幸いさっきの火は、土方の肌に到達するには至らなかった。しかしあのネネのニセモノは、自在に火を点ける力を持っているのだ。相当心せねばならないだろう。

春日部山に逃げ込んだのも、そのせいだった。こんな所で火を起こすものなら、山火事になりかねない。いくら奴らでもそこまでする度量はあるまい。

しかしやはり、ここでもあまり安穩としているわけにはいかなかった。

「……たく、しつこいガキどもが。」

土方はいまいましげに呟いたが、その目はぎらぎらと獣のように光った。ボーちゃんとテルに隠れているよう合図し、ゆっくりと刀を抜き放つ。

目の前の茂みが、ガサリと揺れた。

いつもは平穏な春日部山の中に、凄まじい殺気が弾けた。

その拾八：どんな女でも涙は大事な武器になる（後書き）

風間くんをつけ狙う敵……土方にかかってきた近藤からの電話の意味とは？……状況が複雑になっていく中、次回は大展開を迎える予感！？乞うご期待！！

その拾九：犬って本当は色分らないんだよ、知ってた？（前書き）

今回は闘いのシーンがメインになってます。そういうのが苦手な人はご注意ください（＜|＞）

その拾九：犬って本当は色分らないんだよ、知ってた？

不自然な揺れ方をした茂みの中から現れた何かをはっきり視認するより速く、斜め右の方向から白い光が走った。

土方の刀がうなり、その光を弾き上げる。キインという金属音が響きわたった時には、土方の刀はもう弾き上げた勢いを利用して回転し、左から飛びかかってきた襲撃者に斬りつけていた。

（相手が三人に増えたか…）

土方は全く落ち着きを失わずに、こちらへ迫ってくる敵を見据えていた。さっきからしつこく襲ってきたルビーにイリス、そしてもう一人、ボーちゃんにそっくりな少年もいた。彼の姿を見た途端、土方の後ろで立ち尽くしている本物のボーちゃんの顔が色を失った。

右側にいるイリスが口を開いた。土方がさっき切り落とした腕は、もう再生している。

「こいつだよ、ギルザ……………このクソ野郎がテルとあのガキを助けたやつなんだ。」

その言葉は茂みから現れた、ボーちゃんそっくりの少年に向けられたものだ。ギルザというのは、どうやらこいつの名前らしい。その小さな目はぎらぎらと光り、凄まじいまでの悪意と殺意を秘めていた。

息づまるような沈黙がその場に満ち
土方は突然、うなじがぴりりとするのを感じた。

ボーちゃんとテルを突き飛ばし、土方は二セモノ三人から大きく飛びすさつて離れた。間一髪、さつきまで土方のいた所の地面に、ギルザの刃状化した鼻水が食い込んでいた。

三人が、無言のまま間合いをつめてくる。その間にもギルザの鼻水が飛んできて、土方は刀が刃こぼれしないよう気をつかいながら、それを跳ね上げた。

しかし、ギルザばかり相手にしているわけにもいかなかった。イリスの右腕がみるみるうちに変形し、大きな槍やりの形になるのを土方は見た。横から絶妙のタイミングで突き出されてくる鋭い先端を、なるべく最小の動きでよけていく。

油断した時か疲れた瞬間が、
土方の最期だった。

土方は後ろに下がろうとして、突き飛ばされたまま地面に倒れているボーちゃんにつまずき、仰向けに転びそうになった。慌てて体勢を立て直したが、大きな隙ができ、間髪入れず突き込まれた槍をころうじてかわした。しかしその結果ボーちゃんをまたぎ越えることになり、ボーちゃんは敵と土方の間に挟まれてしまった。

（まずい！）

さすがの土方もあせった。ボーちゃんは混乱と恐怖に捕らわれて動けないらしく、土方に突き飛ばされた時のままの格好でじっとして

いる。ギルザの鼻水がイリスの槍で一突きされたら、それで終わ
りだ。

一瞬、時間が凍りついたかのようだった……しかし次の瞬間、イ
リスはボーちゃんの上から身を乗り出すようにして、やはり土方め
がけて槍を突き出してきた。

土方ははっと気づいた。ニセモノたちには、春日部の住民を傷つけ
るつもりはないのだ。とりあえず、今のところは。しかし春日
部市民でない自分は、ただの邪魔者でしかない。

心に生まれた可能性に、土方は全てをかけることに決めた。

土方はボーちゃんを守るうとするのをやめ、ギルザめがけて飛びか
かった。予想外の動きに不意をつかれ、ギルザは身体を思い切りの
けぞらせたが、刀が額を深く切り裂くのをふせぐことはできなかつ
た。流れ出してきた紫色の血が目に入り込み、ギルザはうめいて動
きを止めた。土方はそのまま刀をふるい、イリスの肩に斬りつけて
ひるませると、左側にいるルビーに襲いかかった。

しかし、ルビーはさすがに油断していなかった。驚くほど素早く、

しかも最小限の動きで刃風をかわし、そのまま土方のふところに飛び込んだ。

ふところに入られてしまうと、特に相手の背丈が小さい場合は、刀が使いにくくなる。土方は焼けるような熱さと痛みが、胸の下から腹に走るのを感じて歯を食いしばった。

だがここで、さすがのルビーも警戒を緩めた。自分の手に炎の熱をこめて相手に斬りつける攻撃は強烈で、並の人間なら実際には大した怪我ではなくても激痛のあまり気絶してしまうほどのものだ。だから相手が反撃してくるはずなど、もうないのだった。

しかし、彼女は間違っていた。土方が並の人間ではないことを、失念していたのだ。……攻撃を受けることを覚悟した瞬間にもう、土方は反撃の準備にかかっていたのである。

土方は激痛をこらえて、刀の柄つかを両手で握りしめまっすぐに振り上げた。そしてちょうど顔を上げたルビーの額めがけて、柄の先端

石突いしづきを全力をこめて振り下ろした。

ルビーはぎくりとして首をひねった。が、よけられなかった。眉間みけんの少し上を石突に強打されて、あっという間に目の前が真っ暗になった。土方はルビーが倒れるのを見もせず、身をひるがえし、今度は顔を覆っているギルザの脳天を石突で殴りつけた。そして、一人残ったイリスに向き直った。

イリスは呆然としていた。いくら強い男でも、自分たち三人でかかれればあっさり殺せるだろうと思いついていたのだ。ことにルビーが気絶させられた時には、思わず自分の目を疑った。イリスもギルザも高い身体能力を誇っていたが、ルビーにはとてもかなわない。彼の知る限り、ルビーを敗北せしめることができる者はリンドとり

オルしかいなかった。

しかも自分たちは子供の姿をしているのだ。普通の大人なら、とても子供相手に本気で打ちかかっていくことなどできまい。それに斬られたというのにほとんどひるむことなく、すぐに攻撃へ移ったというのも信じがたいことだった。それができるということは、この男がいかに強い精神力の持ち主かということ、そしていかに命のやりとりに慣れているかということを示していた。

しかし、こいつは傷を負っている。ルビーが斬った傷はそれほど深くはないようだが、かなり出血しているし、痛みも相当あるはずだ……。イリスはそう考えると気が楽になり、槍を構えようとした。

ところが次の瞬間、土方は傷を負っているとは思えないほどの速さで走り出し、森の中へと飛び込んでしまった。

「あつ……………おい、待て！」

相手の意外な行動に驚き、イリスが後を追おうとした……………途端、すぐそばの木の陰から、土方が刀を振り上げて飛び出してきた。不意をつかれたイリスは、槍を突き出すのが一瞬遅れた。その隙を見逃さず、土方の刀が振り下ろされた。紫の血がしぶき、イリスの槍が真つ二つに斬り割られた。

目を見開いたイリスの右肩に、土方は刀を勢いよく突き刺した。イリスはうめき声を上げ、突き飛ばされたように仰向けに倒れた。刺さった刀を、土方がイリスの胸を踏みつけながら引き抜いた。

もう、イリスにも動く気力は残っていなかった。身体中から力が抜け、ゆっくりと視界が闇に吞まれていった……。

土方は激しくあえぎながら、その場に立っていた。

本当は、ここまでするつもりはなかったのだ。いくら鬼の副長と呼ばれていようと、子供を平気で傷つけられるわけがない。特にネネにそっくりな少女を殴り倒した時には、傷と無関係の痛みを心にした。

しかし手加減する余裕がなかったのだ。いずれも気を抜いたら殺される相手ばかりだったし、実際ルビーに斬られた時は本気で死ぬかと思った。少し身を引いたおかげで、幸い傷はルビーが狙っていたほどには深くないようだ。

「だ…大、丈、夫？」

背後で不安そうな声がしたので振り返ると、本物のボーちゃんが青ざめた顔をこわばらせて立っていた。

「……………ああ。お前は、どうだ？」

ボーちゃんは突き飛ばされて倒れた時に、膝をすりむいただけだったので、大丈夫だと答えた。そして、困った顔をして言った。

「テルが……………いなく、なっちゃった。」

「は？」

見回すと、確かに白い毛に空色の瞳をした犬の姿がない。さっきの戦いに怯えて、どこかに行ってしまったのだろうか。どっちにしろ彼を探しに行くのは、今の土方には無理だった。

「まあいい。あいつはほっとけ……………さっさと行くぞ。」

「ボ……………どこに？」

「山の中だ。決まってるだろ。」

土方は傷がズキズキ痛むことも、流れ出る血が足を伝い落ちていくことも無視して、戸惑うボーちゃんの手を引っ張り、森の中へと消えていった。

「逃げる！」

銀時の怒鳴り声で、全員はつと我に返り、一斉に逃げ出した。

さもなくばみんなバスにはね飛ばされていただろう。しんのすけがさすがにびつくりした顔をして、バスを振り返った。

「母ちゃんと父ちゃんが乗ってるゾ！でも、何で……………！？」

「ニセモノだよ！」

トオルは簡潔に説明すると、しんのすけの腕をつかんですぐそばの狭い道へ逃げ込もうとした。

しかし不運なことに、バスは二人のいる方向へやってきた。

ひかれる！

トオルはしびれるような恐怖を感じた。必死に走ろうとするが、どう考えても追いつかれそうだ。が、その時、思わぬ救世主が現れた。

トオルは突然、後ろの襟首をつかまれて宙に持ち上げられるのを感じた。びっくりする間もないうちに、トオルを持ち上げた誰かはすごいスピードで突進し、目指していた路地の中にさっと飛び込んだ。

まさに間一髪。ちょうど地面に下ろされた瞬間、トオルはバスが塀に激突したような音を耳にした。

トオルは自分の命の恩人を見るため、くるりと振り返った。

「定春！」

巨大な白犬が、嬉しそうにトオルを見下ろしている。すぐ横でうめき声がしたので見ると、しんのすけがなぜか、ひどくみじめな姿で地面に転がっていた。

「オラ、風間くんにいっぱい引きずられて痛かったゾ……………」

その言葉でトオルは事情を理解した。トオルはずっとしんのすけの

腕をつかみっぱなしだったのだ。そしてトオルが定春にくわえ上げられ、路地に運ばれた時もずっとつかまれていたので、結果的に地面を引きずられることになったわけであった。

悪いとは思ったが、トオルは吹き出しそうになった。

「ええと……とにかく、ここは狭いからもうバスは来ないよね。」
何とか普通の顔を取り繕いながら、トオルは言った。

「そうですな。……ところでこの犬、何でこんなに大きいのか？」
「でもいつ敵が来るか分からないしさ。早くどこかに隠れようよ。」
トオルは慌てて話題を変えた。

辺りを見回してみたが、自分たち意外の人影は見当たらなかった。どうやら銀時たちとはぐれてしまったらしい。彼らもどこかの路地へ逃げ込めたのだろうか。

「それじゃしんのすけ、定春を連れて……定春！！どこに行くの？」

定春はもう歩き始めていた。鼻を地面にくっつかんばかりに寄せ、くんくんと動かしている。しんのすけとトオルは顔を見合わせた。

「匂いかいであるみたいだゾ。」

「そうだね……ついてってみようよ。」

「オラと風間くんの、愛の逃避行ね。」

「気持ち悪いこと言うな！意味も知らないくせに！！」

二人は定春の巨大な尻にぴったりくっつく形で歩き始めた。定春は明らかに何かの匂いをたどっているらしく、迷うことなく進んでいく。時には定春には狭すぎるんじゃないかと思つくらい細い路地を、何とか通り抜けたこともあった。

そのうちトオルは、何だかえらく見覚えのある家々が立ち並んでいるのに気がついた。

「お？なんかここ、来たことあるようなないような………」

しんのすけも同じ気持ちらしい。不思議そうに周りをきよろきよろ眺め回している。

やがて定春は、一軒の家の裏手にある生け垣の前で止まった。

「オラん家だゾ……」

この時ばかりはしんのすけも呆氣にとられたらしい。それ意外何も言わずに、自分の家と定春とを交互に見比べている。

しかし定春の奇行は、そこで終わりではなかった。

「定春！！？」

トオルは仰天して叫んだ。定春が突然後ろ脚で立ち上がり、生け垣のてっぺんに前足をかけて寄りかかったのである。

見た目から分かるように、定春の体重は相当重い。そしてその重みをもろに受けた生け垣は、当然のごとく。

メリメリメリ…バキッ。

何とも不吉な音が辺りに響いた。

そして最後にドシン！と地響きを立てて、根本から折れた生け垣が、ごっそりと内側に倒れた。

トオルは定春の予想外の行動に、開いた口がふさがらなくなった。

「母ちゃんに怒られる！」

しんのすけはまるで場違いなことを叫んだ。

そんな二人にかまわず、定春は倒れた生け垣をぐいっと前足で押しやった。

「あっ！」

今度はトオルとしんのすけが、同時に声を上げた。ちょうど生け垣が生えていた所の地面に、大きな穴が開いていたのだ。人が五人ぐらい入り込めそうな穴だ。

「…………しんのすけ、お前こんな所に秘密基地でも作ったの？」

「オラ知らないゾ。」

しんのすけも啞然としている。こんなところに大穴が隠されているなんて、まるで気づきもしなかったのだ。

定春は穴に顔を寄せてしきりに匂いをかいでいるようだった。

と、不意に身を躍らせ、穴の中に飛び込んだ。

「定春、ダメッ！」

トオルが慌てて駆け寄って、定春の尻尾にしがみついたが…………。

彼一人で引き止めるには、定春はあまりにもでっか過ぎた。しかもさらに不運なことに、定春が飛び込んだ穴には底がなかった。

落ち始める瞬間、ズボンを誰かにつかまれたような気がしたが、それも一瞬だった。

トオルは定春の尻尾をつかんだまま、落下していった。暗闇の中を、
下へ下へと…………。

（ダメか…………）

土方は、立ち止まった。隣にいるボーちゃんが、心配そうにこちら
を見上げた。

時折気が遠くなる。歩いている自分の身体が、まるで別の人のもの
のように感じられた。このまま無理して動き続けたら、一分もしな
いうちに倒れてしまうだろう。腹の焼けつくような痛みも鈍くなり、
自分の感覚神経が麻痺しつつあるのが分かった。

土方は手近な木の根本に腰かけ、ボーちゃんをすぐ隣に座らせた。いつもの習慣で、ポケットから煙草とライターを取り出す。

「ガキ、よく聞け。…………お前、ちゃんと歩けるな？」

ボーちゃんはうなずいた。

「俺がいなくても、帰り道は分かるだろうな？」

ボーちゃんはやや不安げに土方を見つめたが、やがてためらいがちに首を縦に振った。

「じゃあ、すぐに山を降りて春日部に戻れ。そして幼稚園に行くんだ。そこに、あの銀髪野郎がいる。チャイナ服の小娘もいるかも知れねえ。とにかく、俺をここに置いてすぐに山を降りるんだ。」

ボーちゃんが真つ青になって首を激しく振るのを無視し、土方は言葉が続けた。煙草を持つ指が、頼りなく震える。

「いいか、なるべく木陰や茂みの中を選んで移動しろよ。あいつらがもう目を覚ましているかも知れねえからな。もし見つかったら、とにかく全速力で逃げろ。お前を傷つける気は、ない、はず、だから……………」

そこで限界が来た。土方は崩れ落ちるように倒れ、気を失った。口にくわえようとしていた煙草がぼとりと地面に落ち、その拍子に火も消えた。

ボーちゃんは泣きそうに顔を歪めて、しばらく土方を揺さぶっていたが、やがてその場にうずくまってしまった。

土方を置いて山を下る気には、到底なれなかった。敵がやってきたら、きっと土方はあっさり殺されてしまう。ボーちゃんは自分を助けてくれた人をむざむざ見殺しにできるような性格ではなかった。

しかしだからといって、土方を連れて山を下りることは、子供のボーちゃんには土台無理な話だった。ここにじっとしていても、いつか敵に見つけられるかも知れない。

ボーちゃんは完全に途方に暮れてしまった。

「キャンッ。」

すぐ後ろで犬の鳴き声がした。

ボーちゃんは文字通り飛び上がり、ぐるっと振り返った。白いふわふわの毛の小さな犬が、じっとこちらを見上げている。テルかと思っただ、よく見ると目は空色でなく黒だった。

「シ、ロ……………」

半信半疑で問いかけると、白犬　シロは嬉しそうにボーちゃんの脚に身をすり寄せ、そして少し離れた所にある茂みの前に立つてこちらを振り返った。

ボーちゃんが立ち上がって近づくと、シロは茂みと茂みの間に身体を滑り込ませた。ボーちゃんが同じように通り抜けるとそこに、シロがさつきと同じ姿勢で立っていた。

これと同じようなことが繰り返続いた。シロは少し先に立って歩

き、時折立ち止まって振り向いては、ボーちゃんがついてきていることを確かめた。ボーちゃんはシロの後を追うのに一生懸命で、これが畏かも知れないなどとはこれっぽちも考えなかった。

気がつくと、ボーちゃんは山の頂上はかなり近いところまで上ってきていた。

しかしシロは、頂上まで後数十メートルというところで突然向きを変え、木々の間に入り込んだ。ボーちゃんもそれを追って中に入った。と、突然、横から右腕をつかまれた。

ボーちゃんは心臓が止まるかと思った。しかしその時の驚きは、自分の腕をつかんだ者の顔を見た瞬間の気持ちに比べれば何でもなかった。

野原しんのすけの顔が、目の前にあった。

しかしその顔は、しんのすけのものとは思えないほど真剣で、緊張していた。声も出ないボーちゃんをじっと見つめながら、しんのすけもまた無言で手を離し、すっと森の奥の方を指さした。つられてそちらを見たボーちゃんは、息を呑んだ。

薄暗い木々の間に、明かりが見える。それだけでなく、話し声もする。

何も言わず、何も考えもしないうちに、ボーちゃんの足は明かりに向かって歩き出していた。

その拾九：犬って本当は色分らないんだよ、知ってた？（後書き）

ふと確認してみると、ユニークアクセスが5000を突破してました！超感謝です！これからも応援よろしくお願いしますm（| |）
m感想も待ってますね！

その貳拾：落下する時は時間がゆっくり感じられるらしい（前書き）

定春と共に、野原家の大穴へと落ちてしまった風間くん、そして銀さんたちの行く末は？読み終わったらぜひ感想をお寄せ下さい！！同じ人からの歓迎しますヨ（*^|^*）

その式拾：落下する時は時間がゆっくり感じられるらしい

どことも分らない薄闇の中で、密やかな話し声がしていた。

「本当にすみません、助けていただいたりして……………」

「いやいや、お礼などいりませんよ。あなたたちが無事で、本当によかったです。」

「それにしても、あの噂がまさか本当だなんて……………ねえ、あなた？」

「ああ。もしこの人たちが来てくれなかったら、どうなっていたか……………そうだ、それはそうと、あんたたちは一体誰なんです？」

「えっ？……………あ、ああ、それはその……………おや、若^{わか}、どうなさったのですか？」

「この赤ん坊が……………どうしても、僕から離れないんだ……………」

「たやーい！」

「あらっ、すみません！その子、かっこいい男の人に目がないんですよ。」

「さすが麗しき若、赤ん坊をもとりこになさってしまうとは、なんと素晴らしい魅力……………」

「お世辞はいいから、早くこの子を引き離してくれ！……………ん？」

「どうしました？」

「上から………何か………落ちてくる………！」
「うおおっ！何だあのでかいの！？」
「若ああああアアア！危なあアアい！！！」

何時間もの時が過ぎたような気がした。

トオルはまだ両手に、定春のふさふさした尻尾の感触をしっかりと感じていた。自分の服をつかんでいる、しんのすけの手にこもった力も。

最初は悲鳴とも歓声ともつかない変な大声を出しまくっていたしんのすけだったが、そのうちトオルと同じように落ち着いてきたのか、それとも叫び疲れてしまったのか、もう何も言わなくなっていた。

既に相当下まで落ちてきているらしく、空気がかなりひんやりしてきた。頬をなでる風が冷たい。手がかじかんできて、トオルは定春の尻尾をつつかり離してしまった。いつの間にか、しんのすけの手も服から離れていた。

そろそろ地球の中心に着いちゃうんじゃないかとトオルが思い始めた。ちょうどその時、落下の旅は唐突に終わった。

ドフツと鈍い音を立てて、トオルは何か柔らかい毛に覆われたものの上に落ちた。自分が着地したのが定春の身体の上だということに気づいた瞬間、少し遅れてしんのすけがすぐ横に落ちてきた。

トオルは急いでしんのすけを引っ張り、定春の上から飛び降りたが、これだけの深さを落ちた上に二人の子供に着地されたというのに定春のタフさは大したもの、ほんの五秒もたたないうちに平然と起き上がってきた。トオルは反射的に辺りを見回した。

「……………ここ、誰か人が住んでるみたいだ。」

トオルは思わず呟いた。自分たちが落ちた所は暗いことは暗かったが、真っ暗と言うほどではない。トオルの部屋より少し大きめで、天井にはついさっき落ちてきたらしい大穴が開いている。そこから空気が入ってくるからか、穴の中は少しもじめめていなかった。人が住んでいる、あるいは住んでいたのは、どう見ても明らかだった。穴の壁に寄せるようにして、布団が数枚、きちんとたたまれて置かれている。日本風の小さなタンスや物入れもある。そしてなんと、床には畳が敷き詰められていた。

「お？これ、何？」

しんのすけが、壁のくぼみの中から光が漏れているのを目ざとく見

つけ、手を突っ込んで中身を取り出した。質問しながら、取り出したものをトオルの鼻先に突きつける。

「ああ、それは提灯ちようちんだよ。お祭りとかでよく見るだろ。…そっか、中が少し明るいのはこれのおかげ……」

トオルの言葉は、結局最後まで言えずじまいに終わった。隅の方から、突如大きな叫び声が響いてきたのだ。

二人がぎょつとして向き直る間もないうちに、声のした方から黒い影がさつと飛び出してきた。

そして思いっきり、しんのすけを抱きしめた。

「やめろ！」

トオルが呆氣にとられて見ている前で、しんのすけはもがきながら叫んだ。そして。

「母ちゃん!？」

野原みさえが、息子の身体をしっかりと羽交い締めに抱きしめていた。

「しんのすけ! 一体……一体どうやってここに来たの!?! 心配で心配で仕方がなかった……それに、どうして風間くんが一緒なの

「あ……あの大きいのは、何？」

「みさえ、しんのすけが窒息しちまうぞ。」

今度は別の隅っこから、男の声がした。トオルが振り返ると、しんのすけの父・ひろしが苦笑を浮かべて近づいてくるところだった。ひろしもやっぱり、定春の巨大な姿にびっくりしていた。

「一体全体、こいつは何なんだ？」

ひろしは定春を指さしながら、トオルに尋ねた。定春はそ知らぬ顔をして、畳の上に寝そべっている。

「あ……………」

トオルが返答につまったその時

またもや別の声がかかった。

「ああ、それって新八くんやあの銀髪の男が飼っている犬じゃないか？」

「僕……………えっ？」

トオルは自分が何を言おうとしたのか忘れてしまった。いつの間にかすぐそばに、二つの人影が現れていた。

一人は茶色の長髪を垂らした男で、細い目をした、見るからにもの柔らかそうな風貌の人物だった。髪は長いが、その顔立ちや雰囲気からトオルは、この人は男だろう、と直感的に悟った。

もう一人も長髪だった。色が黒で、頭の上でポニーテールのように一つにまとめている。形よく整った顔をしていたが。

その左目に、黒い眼帯をしていた。

トオルは目の前の人々が誰なのかを悟り、愕然とした。まさか、銀さんたちだけじゃなく……この人たちまでが？

「と、東城さん？」

考えるより先に口から転がり出てきた言葉は、自分の声とは思えないくらいにかすれ、驚きでうわずっていた。

「九兵衛さん！？」

沖田はもつずいぶん長い間、闇の中にいた。意識が朦朧^{もろろ}として、深い海の中で沈んだり、浮かび上がったたりしているような気がする。どこかへ運ばれていたり、腹に激痛が走ってわめいた記憶もあった。

何回目かに眠りの中へ沈んだ時、沖田は夢を見た。

夢の中で、沖田は子供に戻っていた。まだ近藤や、土方と出会ったばかりだったあの頃に。

子供の沖田は畳の上に寝転がっていた。何だか全身がだるくて、起き上がる気になれない。ぼーっと天井を見るともなしに見つめているうちに、どこからか足音が聞こえてくるのに気づいた。足音が、すぐそばで止まった。

「そーちゃん……………」

（ああ…………姉上の声だ……………）

いつでも優しく、親代わりになって自分を育ててくれた姉・ミツバのことを、沖田は懐かしく思い起こした。ミツバはもう肺炎で亡く

なっているのに、沖田は彼女の声を耳にしても、なぜか全く不思議に思わなかった。

「そーちゃん…起きて……」

声が近づくと共に、姉が自分のすぐ横に座る気配を沖田は感じた。

「ほら、起きて、そーちゃん。ほら、早く……」

肩に手が置かれ、ゆっくりと優しく身体をさすった。ただなぜか、その手は恐ろしく冷え切っていた。

それを感じた次の瞬間、沖田はまた目の前の光景が闇に包まれていくのを感じた。

ここしばらくで初めてはつきりと目覚めた時、沖田は自分が今どうしてここにいるのかはもちろん、この世界に来てからのことすらも全く覚えていなかった。

目を開くと、まず天井が見えた。どうやらさっきの夢の中と同じような体勢で眠っているらしい。ただ夢の時とは違い、天井は味も素

つ気もない金属張りだった。

無意識に寝返りを打つと、天井と同じ金属質の単純な壁と、そこに寄りかかって座り込み、うつらうつら居眠りをしている若い男の姿が目に入った。

「……………や、まざき？」

思わず声をかけると、男がはっと目を覚ました。

「あ、お目覚めですか、沖田隊長。」

「……………俺、また土方にやられたのか？」

山崎は少し心配そうな顔になった。

「隊長、大丈夫ですか？怪我のせいで記憶が混乱してるんですよ、きつと。ほら、よく思い出して下さい……………」

山崎が言い終わらないうちに、青白い少女の顔が現れ、沖田の顔を覗き込んだ。

「……………ネネ……か？」

ネネの顔を見た途端、これまでの記憶がいつぺんにどっと蘇ってきた。沖田はがばと跳ね起きた。

「やべエ！そくだ、俺ア確か、タオルにそっくりな奴にやられて……………姐さんと新八はどこ行った？それに山崎、お前なんでここに……………」

一気にまくしたてた沖田を、山崎は慌てて片手を上げて制した。
「待って、待って下さいよ、隊長。そんなに急に起き上がったら、
また腹が痛みますから。」

言われて初めて、沖田は下腹部に鈍い痛みが走るのに気づいた。起きていると痛みが増すらしく、沖田はうめき声を上げてまた倒れ込んだ。沖田は薄っぺらい布団の上に横たえられていた。

「……………ここは？」

しばらく黙り込んだ後、沖田は突如ぶつきらばうに尋ねた。

「……………敵の、アジトです。」

山崎が、とても言いにくそうに告げた。沖田はまたしても起き上がりそうになったが、腹が痛いのでやめた。

「敵の……………！じゃ、お前ら捕まったってことか？」

「はあ……………申し訳ありません。」

山崎がますます言いづらそうな口調になった。まるで0点を取ったことを母親に報告する子供みたいだった。

「じゃ……………マサオは？それに、旦那は……………」

「銀髪の旦那も、マサオくんも捕まっちゃいました。今は隣か、そのまた隣の部屋にいるみたいですが……………あ、そういえば隊長。」

山崎の口調が、急に真剣になった。

「さつき、風間トオルくんにそっくりな奴にやられたって言っ
てま
したけど……………それ、やっぱり本当なんですか？」

「はア？」

沖田は顔をしかめて山崎を見た。しかし山崎は、なぜかそのことを
ひどく重要に考えているらしく、もう一度同じことを尋ねてきた。

「トオルくんにそっくりな子供に襲われたんですね？」

「あア…そうだ。」

沖田はさつきよりもつと顔をしかめ、渋々ながら答えた。できれば
あの時のことは、思い出さなくなかったのだ。

「そうですか……………」

山崎は、なぜか微妙に青い顔をしていた。

「俺たちも、トオルくんにそっくりな男の子にやられて、みんな捕
まっ
たんですよ。」

「……………へ？」

今度は腹の痛みも構わずに、沖田は身を起こした。

「マジですか？」

「はい…あの旦那ですら、まるで歯が立ちませんでした。」

「チャイナ娘も？」

「ダメでした。何しろ速すぎるんですよ。俺だって、身構えようと
した途端に目の前が真っ暗になっちゃったんです。何が起こったの

か、さっぱり分からないうちに……………」

「ふーん…じゃア結局、俺たち全員捕まっちゃったわけかい。」

「違うわ。」

その時、沖田が目覚めて以来初めて、ネネが口をきいた。山崎と沖田の二人に視線を向けられるとネネは真っ赤になったが、それでも言葉を続けた。

「ううん、そうじゃないわ。しんちゃんと風間さんと、あのおつきな白い犬だけが見つかってないって、マサオくんが　　マサオくんの二セモノが言ってたもの。」

「マサオのそっくり人間が？」

沖田が尋ねたが、山崎は別のところに強い関心を示した。

「ああ、そういえばあのトオルくんのそっくり人間、トオルくんが見つかからないからすごく不機嫌そうな顔してたな。これじゃ僕らを捕まえた意味がないとか言ってたし……………あれっ？」

山崎はふと眉をひそめた。

「そっぴいやお妙さんも、あいつが同じようなことを言ってたって……………」

沖田は全くその部分に興味を持っていなかった。

「マサオのそっくり人間がいたのか？」

また同じ質問を繰り返した。

「うん…ボーちゃんのそっくりさんもいたわ。　　あつ、そういえば二人とも、すごく怖がつてるみたいだった。誰かを逃がしたから怒られるとか、あたしたちを連れて行く間ずっとしゃべってた

「

他の二人がこの話について論じることが、とうとうなかった。ちょうどその時彼らのいた部屋の扉がスーッと開き（扉は壁と同じ色と質で、ほとんど違いが分からなかった）、ネネの残りの言葉が悲鳴に呑み込まれてしまったからだ。

そこに、マサオと全く同じ姿をした少年が立っていた。

沖田にも、彼が本物のマサオでないことはすぐに分かった。見た目は瓜二つなのに、何かが明らかに違う。目にある鋭い光のせいかも知れない。怒ったような険しい表情をしているせいかも知れない。とにかく、言葉で表しようのない何かが違うのだ。

しばらくの間、誰も一言もしゃべらなかった。

五分ぐらい経ったかと思われた時、マサオの二セモノが口を開いた。

「…ついてこい。今すぐにだ。」

お前ら全員を、リオル様の所へ

連れて行く。」

トオルは自分の目が信じられず、しばし啞然として立ち尽くしていた。

名前を呼ばれた二人は、びっくりして顔を見合わせた。が、ほんの一瞬のことだった。すぐに黒髪に眼帯の若者がちょっと笑顔になって、トオルの肩に手を置いた。

「そうか、君が風間トオルくんだね？」

トオルの名前を、もう知っている。

「君が妙ちゃんたちを家に住まわせてくれてたんだね？どうもあり

がとう。礼を言うよ。」

トオルは一瞬焦って、しんのすけたちの方を振り向いた。彼らに不審に思われたらどうしようと思ったのだ。しかし野原一家は感動の（？）再会中で、トオルと九兵衛との会話にまるで注意を払っていなかった。

「あの、どうして……………」

言いかけたトオルを、九兵衛は右手をさっと上げて制した。

「しつ。今はのんきに話している場合じゃない。ここは我が柳生家^{やぎゅう}に隠された、敵襲の時用の地下室の一つなんだが、うまいこと君たちのいる世界に繋げてもらったんだ……………でも、説明は後にしよう。

東城、急いで彼らの所へ行くぞ。」

「はっ。」

東城が、壁に立てかけられた戸棚の一つに手をかけた。何をするんだろうと見ていると、戸棚がスツと滑るようにして横へずれて、ぽっかりと大きな穴が口を開けたのだ。

ぽかんとしているトオルたちに向かって、東城がせかすように言った。

「さあ、早くこちらへ。」

「急いでくれ……………」

特に、君はね。」

わけの分からぬままに、トオルは九兵衛に手をつかまれ、壁の穴の中へと入っていった。

その貳拾：落下する時は時間がゆっくり感じられるらしい（後書き）

さて、銀さんたちも捕まってしまったようで、大変なことになって参りました。おまけに風間くんたちの前に九兵衛たちが突如現れ……。九兵衛を知らない人は、銀魂を読むなりして下さい。とても力ツコイイ人です 次回もお楽しみに！

その貳拾巻…大きい方がいいのか小さい方がいいのか分からなくなる時ってある

銀時たちは捕まってしまったものの、しんのすけ・風間くん・定春は無事だった。更になぜか九兵衛と東城が現れて……。大展開の予感！！？

その式拾巻：大きい方がいいのか小さい方がいいのか分からなくなる時ってある

沖田・山崎・ネネの三人が入れられたのは、これまでいた狭い部屋ではなく広々としたホールのような所だったが、金属質で無味殺伐むみさつぱつとした雰囲気は変わっていなかった。

そして中には、人が大勢詰め込まれていた。

ネネはすぐさま、知っている顔をいくつか見つけた。マサオは青ざめた顔をして、何かにしがみついているかのようにぎゅっと拳を握りしめている。まつざか先生はまるで寒さを我慢しているかのように、両腕を組んで自分の身体をきつく抱きしめていた。そのそばにはよしなが先生の白い顔も見える。さらに後ろの方に母親や父親の姿が見えることに気づいて、ネネは心が躍った。

しかし、すぐにその気持ちは失せてしまった。部屋の隅の方に寄せられるようにして、薄っぺらい布団とでも言うべきものがいくつか敷かれており、その上に人が寝かされていたのだ。全員青ざめた顔で、堅く目を閉じている。気絶しているらしい。

びっくりともしない新八の手を握りしめ、彼の枕元にうずくまったお妙が泣きじゃくっていた。神楽もいる。ただでさえ透き通るように白い肌からますます血の気が失せていたが、それでも愛用の傘はしっかりと握りしめていた。銀時は普通に眠っているようだったが、その髪の毛と同じような顔色だった。

「し、新、ちゃん……………」

大勢の人々が集まっているというのにほとんど誰も口をきかない中、

お妙の震える声だけが聞こえていた。

「新ちゃん……………」

突然、沖田たちの真正面にあった大きな扉が開き、誰かが入ってきた。

人々が怯えた様子でざわざわした。入ってきたのはマサオ・ボーちゃん・トオルとそっくり同じ姿をした三人組だった。

マサオとボーちゃんのそっくり人間の方は、怒っているというよりも怖がつているような表情をしている。しかもその目が時折ちらちらともう一人の連れの方へ向けられていることに、山崎は気づいた。トオルのそっくり人間は落ち着いているようで、むしろ涼しげな顔をしていたが、その目にある冷たい光には、背筋をヒヤッとさせるものがあつた。

かなり後ろの方で鋭く息を呑む音がした。振り返ると、一人の女性

が床にへたり込み、真っ白な顔でトオルのそっくり人間を見つめている。トオルの母親だ、とすぐに分かった。

トオルの二セモノはつかつかと入ってくると、固まっている人々をぐるっと眺め回した。そしてふふつと笑い、後ろに立っている二セモノ二人を振り返った。

「で？春日部にいた人たちはこれで全部なの？」

マサオとボーちゃんそっくりの二人は、本物のマサオと同じくらい青い顔になって、おまけに冷や汗を浮かべていた。

「どうなのさ、イリス、ギルザ。」

名前を呼ばれて、二人はびくつとすぐみ上がった。静かな口調で話しかけられているのに、まるで怒鳴りつけられたかのように見える。

「……す、すみません……。」

沈黙の後、口を開いたのはマサオの二セモノの方だった。

「風間トオルと……野原しんのすけが、あの……。」

「ああ、それは言わなくていいよ、知ってるから。」

トオルの二セモノが事もなげに遮った。

「だってあいつの友達をほとんど捕まえたのは、結局みーんな僕だったしね。僕が知りたいのは、別の人のことだよ。」

「べ、別の……？」

ボーちゃんの二セモノが、この部屋に入って以来初めて口をきいた。

「ほ、他の、人は、全員………」

「へえ、捕まえたの？」トオルのそっくり人間のしゃべり方に、面白がっているような調子が混じった。

「じゃ、土方十四郎はどこにいるんだい？」

沖田と山崎は顔を見合わせた。ネネも、マサオも、まつざか先生までがびつくりした顔になって辺りを見回した。そう言われてみれば、しんのすけとトオルだけでなく土方の姿もない。今日は幼稚園を休むということだったが、考えてみると、どうして休むのか理由を聞かされていなかった。

それにボーちゃんの姿も見えないことに、ネネとマサオは今更ながら気づいた。彼は二セモノに一ヶ月近く前から替わられていたという。それなら当然、ここにいなければならぬはずなのに……。

土方の名前を聞いた途端、さあつと血が引いていく音が聞こえるくらい勢いで、イリスとギルザの顔から色が消えていった。

「そ、それは、そ、その………」

「逃がしちゃったんだ、その人も。」

軽い調子でそう言って、トオルのそっくり人間は二人に向き直った。

「しかもさ、ギルザ。」

と、ボーちゃんのそっくりさんの方を向いて、

「その土方って人は、監禁されていた本物のボーちゃんとテルを連れてたって聞いたよ。本物はまあいいとして、テルを逃がしたのは

かなりやばいと思うけど?」

「そんなことまで……」

「僕は耳がいいからね。」

トオルの二セモノはにっこりした。

「本当なら、すぐここで君たちを始末しちゃってもいいんだけどね。」

「

山崎は冷たい指で、背中をなでられたような気がした。笑いながら言っているのが、余計に恐ろしいのだ。

「ま、もう一回だけチャンスをあけてもいいよ。」

その言葉に、イリスとギルザの二人は即座に反応した。

「ほ、本当ですか!？」

すがりつくような口調だった。

「うん。あ、でももう次はないからね。」

トオルのそっくり人間は素朴に言った。

「それじゃ、これから二人にやってほしいことを言わせてもらおうよ。」

こいつらから、トオルの居場所を聞き出すんだ。」

トオルの二セモノは、部屋の中で身を寄せ合っている春日部の人々を無造作に指さした。イリスとギルザが驚いたような顔になる。

「でも……こいつらに風間トオルの居場所が、分かるわけないでしょう?」

「バカだなあ、二人共。」

さげすむ様子もなくあっさりと、トオルの二セモノは言った。

「トオルをよく知ってる奴なら、トオルの隠れそうな場所もよく知ってるはずじゃないか。」

あ、と二人が納得したような声を上げた。

「でも、いくら問いつめてもしやべらなかつたらどうするんです？」

「何言ってるのさ。無理やりしゃべらせればいいだろ、痛めつけるなりなんなりして。」

明日のお天気の話をしているかのような話し方だった。

「まあそんなことしないに越したことはないけどね、多分。だからなるべく気弱そうな奴を選んだ方がいいと思うよ。例えばほら……」

あの子とか。」

トオルの二セモノが指さす先には 青ざめた、マサオの顔があった。

「着いた、ここだよ。」

トオルは自分の手を握りしめている九兵衛を見上げた。『ここ』と言われても、何がここなのかさっぱり分からない。ただ目の前を堅そうな岩壁が通せんぼしているだけだ。隣のしんのすけは、珍しいものでも見るかのように岩壁をしげしげと眺めている。首筋に生暖かい風が吹きつけてくるので振り返ってみたら、定春の鼻息だった。

「少しお待ちを。」

と言いながら、東城が岩壁の真ん中辺りをコンコンと叩いた。

トオルの口があんぐり開いた。岩壁の真ん中が、ボコンと後ろに抜け、ぼつかりと大きな穴が開いたのだ。普通の家のドアの、三倍近くの大きさがある。

「入れ。」

中から男の太い声がした。九兵衛と東城に続き、野原一家とトオルはおそろおそろといった感じで中に入っていた。

そして、啞然として立ち尽くした。

岩が削れてできた、天然の洞窟のような広々した空間が広がっていた。壁や天井と同じようなむき出しの岩床にゴザが敷かれ、十数人の人間がその上に座り込んでいる。全員男だ。

トオルたちが入ってきた途端、男たちの視線が一齐にこちらを向いた。トオルは恥ずかしくて顔をうつむけてしまったが、しんのすけは何のためらいもなく近づいていくと、お決まりの自己紹介を始めた。

「よっ！オラ野原しんのすけ五歳！好きなものはチョコビとおねいさんだゾ！」

「こら、しんのすけ！」

みさえが慌て、男たちに謝りながらしんのすけを引き戻した。男たちがざわざわと低い笑い声を上げる。

しかしトオルは突然あることに気づき、男たちから目が離せなくなつた。

彼らは全員、同じような黒い服を着ていた。刀を持っている者も多い。そしてトオルはさつきから、この格好に見覚えがあるような気がしてならなかったのだった。

しかし今、やっと思い出した。彼らの服装は、トオルと初めて会った時の山崎の服装と、そっくり同じなのだ。

「あの……」

皆さん、真選組の人たちでしょうか？」

今度も考えるより先に言葉が出てしまった。

「おう、俺らのことを知ってるのか。確かお前だな？うちの副長と一番隊隊長を家に住ませてくれたのは。」

男の一人に話しかけられ、トオルは黙ってうなずいた。どうして相手がそのことを知っているのかは分からないが、それなら土方が幼稚園の先生になっていたり、沖田が酔乙女家で働いて（？）いたことも知っているはずだ。二人にそんな仕事をさせやがってと怒鳴られるのではないかと、トオルは一瞬身構えた。

しかし男たちはまるで怒る様子もなく、トオルを心から歓迎しているようだった。それどころか、土方や沖田と一緒に暮らすのはさぞ大変だっただろうと同情されてしまった。そんなことないですとトオルが答えると、みんなへえっと驚きの声を上げた。

「風間くん……」

後ろで声がしたので振り返ると、しんのすけたち野原一家が当惑の表情を浮かべ、こちらを見つめていた。

トオルはしまったと思った。銀時たちがアニメの世界からやって来

たことはみんなに秘密にしていたのに、それをすっかり忘れてしまっていたのだ。しかしちょうどその時、男たちのうち一人が大声を上げたので、トオルはうまいこと言い逃れをせずにすんだ。

「おい、近藤さんから連絡が来たぞ！」

「…近藤さん？」

トオルは思わず呟いた。彼は漫画やアニメのおかげで、近藤勲のこともよく知っていた。真選組の局長　つまり、土方や沖田のボスだ。

トオルの反応に気づく様子もなく、男は何か無線機のようなものに話しかけ、無線機から聞こえる声に耳をすましている。トオルのいる所からは離れていたので、何と言っているかは分からなかった。しかし会話の雰囲気は伝わってきた。初めは何かいい知らせでもあったのか、男も無線機からの声もほっとしたような口調だったが、だんだんと深刻な内容になってきたらしく、しまいには言い争いの様相を呈してきた。男の声も無線機からの声も次第に大きくなってきていたので、トオルや野原一家は切れ切れの言葉を耳にすることができた。

「そうするしかないんですよ……………俺らには……………」
「…ダメだ、危険過ぎる……………」

「でもそれ以外にどうしろって……」

やがて、決着がついたらしく、男はようやく無線機から顔を上げた。
「局長がしぶしぶだが、許可してくれた。 風間トオル、野原しんのすけ、こっちへ来い。」

何だろうと思ひながら、男たちの足につまづかないように歩いていくと、男は二人にさっき自分が使っていたのと同じような無線機を渡した。

「いいか、お前らにやってもらいたいことがある。…この穴が見えるか？」

男に指さされて初めて、しんのすけたちは入ってきた所と反対側の岩壁に穴が開いているのに気づいた。二つ、地面に接する形で並んでいる。

男が説明した。

「ここはもともと、別の抜け道として敵が利用するつもりだった場所だった。それを俺たちが奪って、隠れ家に使うことにしたんだ。で、ここに曰くありげな二つの穴がある。明らかにこれは、自然にできたものじゃない。中に何かあるのか、それともどこかに繋がっているのか、とにかく秘密があるのは確かだと思うんだが、何しろ小さ過ぎるんだ。俺たちじゃとても通れん。」

トオルは穴を見つめた。なるほど、しんのすけとトオルでさえ少し身を屈めないと入れないくらいの大きさだ。大人が入るのは、どう考えても無理だろう。

「そこでなんだが……」

男が少しだけ、ためらうような表情を見せた。

「お前らに、中を探ってきてほしいんだ。」

「何ですって!？」

そう叫んだのは、みさえだった。

「冗談じゃないわ、何言ってるのよ!しんのすけたちを危険な目にあわすつもりなの!？」

「ああ、局長もそう言った。」

男がますます気まずそうな顔になった。

「でも他に方法がねえんだ!それに片方の穴からは、」
と、男は向かって左側の穴を指さした。

「女の声が聞こえてきたことも……」

「オラ、そっちに行くゾ。」

『女』と聞いたしんのすけが、すぐさま反応した。みさえとひろしが息を呑んだが、しんのすけはもう無線機を手に、穴の中へ入ろうとしていた。

「お、おい、ちょっと待て。」

男も慌ててしんのすけの腕をつかみ、引っ張り戻した。そしてトオルの方を向いた。

「わりイが、ここは一人ずつ行ってもらおうと思う。近藤さんも一度に二人を相手にするわけにいかねえからな。」

「ほうほう、じゃ、風間くん、じゃんけんで決めるゾ！」

今は後出しだったとか負けた方が勝ちだとかしんのすけがグダグダ言ったので、なかなか決まらなかったが、トオルが先に行くことになった。無線機と懐中電灯を手に、トオルは穴の中に入っていた。

心臓がバクバクする音が聞こえる。入ってみると、穴の中は意外と広がった。トオルなら楽に立って歩ける。でも大人だったら、四つんばいになって進まなければならぬだろう。頭をぶつけないように時折天井を照らしながら、トオルはそろそろと歩き出した。

そんなに経たないうちに、無線機から声がした。

「風間トオルくんかい？俺は近藤だ。」

トオルはもちろん知っていた。アニメで声は聞いている。しかしそんなことは当然言えないので黙っていると、また近藤が話しかけてきた。

「悪いな、こんなことをさせて。」

「……いえ、大丈夫です。」

真情のこもった言葉だった。この人が気難しやの土方や、ドSの沖

田にさえ慕われている理由が、トオルにはよく分かるような気がした。

「いいか。」

近藤がまた言った。

「何か怪しいもんを見たら、すぐに大声で叫んで逃げろ。」

「はい……」

トオルは息苦しくなってきた。緊張のせいだ。穴の奥へ進むにつれて、空気はますますひんやりとしてきた。

しかしそのうち、トオルは穴の中の空気が変わり始めたことに気がした。

匂いがするのだ。トオルが今までかいだことのない、不可解な匂い。しかも、何だか不快感を伴う匂い。

一体何の匂いだろう？

顔をしかめていたトオルはしかし、思っていたよりはるかに早く、匂いの正体を見つけた。

突然懐中電灯の光が、行く手をふさぐ岩壁を照らし出した。ここで終わりたい。何だ、何もなかったなと思いながら何気なく明かりを下に向けたトオルは、心臓がひっくり返るようなものを見た。

男が一人、倒れていた。奇妙な体つきで、小柄なのに頭が異様に大きかった。何と身体の半分を頭が占めているのだ。白衣を着ており、うつ伏せに倒れているので顔は分からない。

「どうした？」

息を呑む音を聞き取ったのか、近藤が鋭く聞いてきた。答えようとしたトオルはしかし、口を開いたまま何も言えなくなってしまった。

男の背中に、光るナイフが突き立ててあった。その部分だけ、白衣が黒っぽく染まっている。

男は死んでいた。

その式拾巻：大きい方がいいのか小さい方がいいのか分からなくなる時ってある

最後が少しショッキングだったかも知れませんが、すみません（謝）

。緊迫感が伝わっていただけなら、幸いです！風間くんが見つけた遺体は誰なのか……それは次回で明らかになります。あ、でももう見当つく方もいらっしゃるかも知れませんが、この小説を始めから読んで下さっていたら。とにかく、お楽しみに！！

その式拾式：カモフラージュって英語？え、フランス語なの？（前書き）

風間くんが見つけた死体……………指名（変な意味じゃないです）されてしまったマサオくん……………事態はいよいよ深刻さを増していく！
感想待ってます

その式拾式：カモフラージュって英語？え、フランス語なの？

あまりにも強いショックを受けると、逆に冷静になってしまう。頭が驚きについていけないから　　という話を聞いたことがある。

今のトオルは、まさにその状態だった。刑事ドラマや推理アニメなどでは、死人の第一発見者は決まって大きな悲鳴を上げているが、トオルは叫ぶどころか、声を出すことすらしなかった。ただ懐中電灯の光を足下に倒れる死体に向け、妙に冷めたような気持ちで見つめているだけだった。顔が見えなかったからか、それとも血がほとんど流れていなかったからかも知れない。目の前が暗くなるようなこともなかった。

「どうしたんだ？大丈夫か？」

返事がないので心配になったのか、近藤が無線機の向こうから、せき込むような口調で話しかけてきた。トオルは今、男のそばに膝を ついていた。

「…死体を見つけました。」

自分でも呆れるくらい、平静な声が出た。

「何だと!？」

近藤は明らかに動揺していた。声が裏返っている。

「男の死体か?それとも……………」

「はい、男です。」

答えながら、トオルは男をつぶさに観察していた。本当に変わった体型の人だ。それに何だか……………肌の色が……………。

トオルが死んでいる男の奇妙な体型のことを話すと、にわかに近藤の口調が緊張した。

「頭がでかい? まさか、肌が青みがかつたりしてないだろうな?」

トオルはびっくりして、手の中の無線機を見つめた。

「何でそんなこと分かったんですか?」

今度は驚きが声に出た。近藤は、何か考え込んでいるのかしばし黙っていたが、やがて低い声で、ほとんど呟くように言った。

「ここで話せるようなことじゃない。すぐに外へ戻ってくれ。」

「どうしました？局長。」

「……………」

「局長？」

「……見つかったらしい。」

「は？」

「魔虞蛇博士だ。殺されている。」

「ええっ!？」

「間違いない。あんな特徴的な容貌を持つやつなど、そうそういないだろうからな。」

「それにしても……………一体誰に……………」

「そうだな。ま、予想はついているが。」

「それに、奴はどうやって穴の中に入ったんでしょ？」

「俺が一番気にしてるのはそこなんだ。とにかく、トオルくんが戻ってきたらすぐに保護してくれ。そっぴやもっぴや出てくるはずだが……………」

「まだ足音とかも聞こえませんか。」

「心配だな。ちよっと連絡してみるか。」

「トオルくん？大丈夫か？」

「……………」

「どうしたんだ。さっきから足音が聞こえないが。」

実を言うと、トオルは死体を見つけた場所からまだ離れていなかった。男を発見した時と同じように、懐中電灯の光をあちこちへ遊ばせていたら、また大変なものを発見してしまったのである。

通せんぼしていた岩壁が、動き始めている　　ゆっくりと、上がり始めたのだ。まるでシャッターのように。
ただしシャッターと違うのは、音が全くしないことだった。

逃げなければならない。頭ではそう分かっているのに、動けなかった。

トオルの手から、無線機が落ちた。雑音と共に、通信がぷつりと切れる音がした。

なすすべもなく見守るトオルの目の前で、岩壁のシャッターが開き切った。

「沖田隊長！もうやめて下さい！！」

「うるせエ！早くしねエとマサオが…マサオが……！」

マサオが連れていかれてからずっと、沖田は金属製の扉を拳で叩きまくっていた。いくら真選組一の剣の腕前を謳われていても、素手で鉄の扉をぶち破れるはずはない。しかし手に血がにじんできても、沖田は扉を殴るのをやめなかった。それを他の人々が、目を見開いて見つめている。

「…るせえな……」

「う…うーん……」

部屋の片隅で、うめき声が上がった。半ば目を閉じて泣いていたお妙が、ぱつと顔を上げた。

「し、新ちゃん！？」

「う…姉上？」

「新ちゃん！」

新八たちが意識を取り戻したのだ。お妙はまた泣きながら新八を力いっぱい抱きしめ、新八は声が出せなくてモガモガ言った。

「何だ、ここ？」

銀時が半身を起こして、活気のない目をぱちぱちさせた。

「…もう晩飯アルカ。」

神楽はいまいち目が覚め切っていないらしい。

「旦那、覚えてないんですか？ほら、俺たちバスに追っかけられて、そこにトオルくんのそっくり人間が現れて、みんなやられて…」

「あー、そーいえばそんなこともあったな。で、ここどこ？」

「敵のアジトですよ。」

「捕まったのかよ！どーしてくれんだ、警察のくせによオ、この税金泥棒がアー！」

「いや、あの展開なら捕まるって予想できるでしょうが、大体警察関係ないし！！」

「こんなところに誘拐されて閉じ込めるなんて、セクハラアル！もうお嫁に行けないアル！！」

神楽のこの意見は全員に無視された。

「銀さん、山崎さんを責めたって始まらないですよ。」

ようやく姉の腕から解放された新八が、会話に参加してきた。自分の言葉に誰も反応しないので、ふくれっ面をしてそっぽを向いた神楽は、ふと扉の所にうずくまる沖田の姿を見つけた。

「あれ、お前も捕まってたアルカ。そんな所で何してるネ、小便アルカ？」

「神楽ちゃん、やめなよ…」

新八は慌てた。こんな所で神楽と沖田の鬨いが勃発したら困る。それは避けたい。

しかし、沖田はまるで反応しない。扉をじっとにらみつけたまま、血の出ている拳をぶるぶる震わせている。そのただならぬ様子に、銀時たちも何かあると感じいたらしい。

「…………お前、どうしたんだ？」

「実は…………」

山崎が、沖田の様子を伺いながら早口で、事情を説明した。話を聞くにつれて、三人の顔に衝撃の色が浮かんだ。

「そんじゃ、トオルの居場所をマサオから聞き出そうとしてるわけか？」

「まあ簡単に言えばそういうことになりますけど………実際はそんなに穏やかなもんじゃないでしょうね。」

「サイテールナ！」

「マサオくんは目が見えないのに！」

「目が見えないですって？」

突然割り込んできた声に、銀時たちはぎょつとして振り返った。

マサオの母親が、不審そうにこちらを見つめている。

「おばさん！おばさんがニセモノたちに捕まってる間にね、マサオくん、何か事故に遭ったの。それで目が見えなくなって」

ネネが助け船を出そうとしたが、マサオのママは銀時たちから目を離さない。あんまりじつと見つめるので居心地悪くなってきたその時、マサオの母親が突然叫んだ。

「思い出したわ！」

「……？」

わけが分らず目をぱちくりさせる新八たち。それには構わず、マサオママは続けた。

「あなたたち、さっきからどこかで見たことがあると思ったら……
…そうよ、マサオの好きな漫画に出てくる人たちと、同じ顔してる
じゃない！」

「あ……………」

銀時たちは思わず顔を見合わせた。そうだった。マサオは確か、『
銀魂』が好きでアニメもよく見ていると言っていた。でも母親が嫌
がるので、こっそり見ざるを得なかったとか……………。

そうだ。この中にだって、『銀魂』を見ている人がいるかも知れな
い。そして自分たちの姿をよく知っている人たちだって、何人かい
て当然なのだ。今までそれに気づかなかったとは、なんてうかつだ
ったんだろう。

新八が予測した通り、マサオのママの言葉に触発されたのか、人々
が一斉にざわめき始めた。

そうだ、確かにあいつらは、あの漫画に出てくる奴らと同じ顔をし
てるぞ、あいつなんか本物の銀髪だぜ、いやかつらだろ、でも漫画
に出てくる奴がこんな所にいるわけないよなあ、わけ分かんねえよ
。

ネネも風間みおりも青ざめた顔で、こちらを見つめている。新八は
ため息をついた。

「これは銀さん……いつぺん、ちゃんと説明する必要があるそうですよ。」

銀時は、自分たちに刺すような視線を向ける人々をざっと眺め回した。

「
だな。」

銀時の口から、新八のよりもっと重いため息がもれた。

「………そんなじゃあんたたちは、本当に『銀魂』っていう漫画の世界から来たっていうのかい？」

みおりが、これで何回目になるか分からない質問を繰り返した。

「本当に？」

「もっぺん同じことを言わせたら」

銀時は神楽の傘に手を伸ばしながら、大声を出した。いい加減うんざりしていた。

「お前の鼻の穴に突っ込むぞ。この……」

「確認しただけじゃないか。」

みおりは涼しい声でそう言って、大きくあくびした。

みおりはもともものに動じないタイプらしく、リアクションは拍子抜けするほど薄かったが、他の人々はそうもいかなかった。特に『銀魂』をアニメでよく見ていたり、漫画で読んでいたりしている人たちがそうだ。みんな混乱した顔で、信じられないという顔で、お互いに顔を見合わせている。

当然だろう。銀時たちには彼らの気持ちがよく分かった。わけも分からぬうちにこの映画の世界へと引き込まれてしまった時、全く同じような経験をしたからだ。

ネネは片手を頬に当てて、じっと目をつぶっている。そうやって今聞いた途方もない話を、頭の中で整理しているのかも知れなかった。

「あなたたちが本当に、その……『銀魂』の登場人物だって分かる方法があるとでもいうの？」

マサオの母親が声を張り上げた。

「ないね。」

銀時はあっさり答えた。

「ただ、分かってもらいたいのは、」

マサオママがあからさまに不快そうな表情を浮かべたので、新八は慌てて割り込んだ。

「僕たちが決して、敵じゃないということです。僕は皆さんの味方なんです。」

「何でそんなにはつきり言えるのよ？」

ネネの母親　桜田もえ子が、きつい口調を隠そうともせずと言った。

「まあ少なくとも同じ敵を持っているのは確かだ。そんで十分じゃねえか？」

「いいえ！あなたたちは信用ならないわ！！」

突然もえ子が大声を上げた。銀時たちも、春日部の人たちも、みんなびっくりしてもえ子を見つめた。

ネネが叫んだ。

「ママ！何を言ってるの！？」

「ネネ、あなたは黙ってなさい！」

「だって銀八……じゃなくて銀時さんは、最近ずっと幼稚園の園長先生だったし、土方さんはひまわり組の担任だったのよ！ママだって毎朝ネネがバスに乗る時、あいさつしてたじゃない！何でそんなに嫌うの！？」

もえ子はしばらくの間、何も言わなかったが、その目つきは相変わらず険しいままだった。それを見ているうちに、新八の頭に不意にひらめいたものがあつた。

「……………桜田さん。」

何と呼んだらいいかとしばし迷った後で、新八は言った。

「あなたが僕たちを嫌うのは……あなたが『銀魂』を嫌っているからですか？」

もえ子は一瞬、ぎくりとしたような表情を浮かべて新八を見たが、すぐにまた堅い表情に戻り、うなずいた。

「あなたたちには悪いですけどね。こうなったらはつきり言わせてもらいますわ。私だけじゃなくて、ほとんどの人たちの中でも、『銀魂』の評判はかなり悪いのよ。」

「どうしてアルカ。」

神楽の言葉だ。

「だって、下品な言葉とか出てくるし。」

「あーなるほど。」

と言いながら、銀時は神楽にちらつと目をやった。

「それにサディストな人もよく出てくるわ。」

「ふーん……」

銀時と神楽は沖田の方を、妙にこっそりと見た。

「斬り合いみたいな残酷なシーンまであるのよ。」

「あるな、確かに。」

「どっちかっていうと殴り合いの方が多いい。」「いや、あんたら何納得してんですか。」

こんな時でも新八のツッコミは健在だった。

「とにかく、あなたたちが本当に『銀魂』の登場人物なら………なるべく子供たちを関わらせたくないってことは、分かりますよね？」

最後の問いかけは、周りにいる大人たちに向けられたものだった。銀時たちにとっては何ともまずいことに、もえ子と同意見の親御さん方は多いらしい。そうだと賛同する声まで聞こえ始めた。

「私はそうは思いませんね。」

静かな声が割り込んできたのは、その時だった。

「えっ？」

みんなが振り返った先にいたのは、トオルの母親のみね子だった。

みね子は青ざめてはいたが、落ち着いた口調で言葉を続けた。

「この人たちのお話によると、トオルちゃんは私がない間、色々この人たちにお世話になっていているようですね。」

新八はやや足をもじもじさせた。どっちかという世話になっているのは新八たちの方で、トオルが住む所を提供してくれなかったら、文字通り路頭に迷っていたかも知れなかったからだ。

新八がそれを言うと、驚いたことにみね子はにっこり微笑んだ。

「そうですね。でもトオルちゃんがあなたたちを助ける気になったのは、あなたたちがニセモノからトオルを助けたからじゃありません？」

銀時たちが何も言えないでいるうちに、みね子は淡々と話を続けた。

「それにちゃんと働く所を見つけて、生活費を稼いでくれたそうですね。」

それを聞いた新八は、かなり複雑な気持ちになった。山崎はともかく、沖田が見つけてきた稼ぎ所は『仕事』と言えるかどうか……。

「ネネちゃん、一つ聞いてもいいかしら。」

急に呼びかけられたネネは、あからさまにびくつとしてみね子を見つめた。

「銀時さんと土方さんが先生だった時に、何か嫌なこととかあった？」

ネネはちよつとびくりしたみたいだったが、すぐにきつぱりと首を振った。銀時は彼女への感謝がこみ上げてくるのを感じた。

まつざか先生と、（眼鏡をかけ直して服も着替え直した）上尾先生も口を挟んできた。

「確かに言葉づかいが乱暴だったり、少しいい加減なところはありませんけど　あ、すみません、銀時さん　悪い人には見えませんでした。ええ、土方さんだってそうです。」

「土方先生は……一度、いじめをしている子たちを厳しく叱ってくれまして……最終的には『腹切りだ！』とか怒鳴って全員泣かせちゃったんですけど。」

そりや泣くだろう。こんな時だというのに、山崎は吹き出しそうになった。幼稚園の先生になってからも、鬼の副長だった頃の習性からは抜けられなかったらしい。

まあそもそも、土方が幼稚園の先生をやるということ自体が常軌を逸しているのだが……。

他にも双葉幼稚園の子供たちはたくさんいたが、皆まつざか先生たちに賛成の意を示した。中にはあんな奴大嫌いだと毒づく意地悪そうな男の子たちもいたけれども、あれはおそらく土方に泣かされた子供たちだろう。

しかし、桜田もえ子はまだ負けていなかった。

「幼稚園でいい人だったとしても、他のことは分からないわ。例えばもし、風間くんが本当はこの人たちに脅かされて住む場所を提供してあげてたんだとしたら、どうするの？」

これにはさすがに銀時たちも怒った。

「ひどいアル！そんなの嘘ネー！！」

神楽の大声に、もえ子は思わずびくつとすくみ上がった。それに追い打ちをかけるように、銀時が言葉が続けた。

「あんたたちが『銀魂』のことをどう思っているかが、そのせいで俺たちのことをどう思っているかが、俺は何とも思わねえ。

だが、トオルのことは別だ。そんな卑怯なことをした覚えは、金輪際ねえ。」

低い声だった。神楽のように、怒鳴っているわけでもなかった。

それなのに、銀時の声は、神楽の声よりもずっとすごみがきいて、迫力があつた。その場にいる数人が身震いしたのを、新八は見た。

もえ子は言葉を失ったようだった。青ざめた顔で、銀時たち一人一人を見回している。そんな母親の様子を、ネネはじっと見つめてい

た。

「……………あれ？」

張りつめて、重苦しい雰囲気が始めていた部屋の中で突然、間が抜けていると言っているほど場違いな呟き声が出た。

みんなが振り返った先では、いつの間にか扉の前から移動していた沖田が、左側の壁の一点に手を置き、なぞるように指を這わせていた。

「……………どうしました、隊長。」

重い空気から逃れたいという気持ちもあって、山崎はすぐさま沖田のもとへ駆け寄った。沖田は眉の間にしわを寄せ、扉と同じ金属製の壁をにらんでいる。

「違う……………」

「えっ？」

「音が違う。」

そう呟いて、沖田は自分が見つめている壁の一点を、曖昧に指し示した。

何気なく、沖田が示した場所を軽く叩いてみた山崎は、驚いて息を呑んだ。沖田の言う通り、叩いた場所から聞こえてきた音は、

壁の見た目とは違って金属質ではなかった。むしろ、堅い岩を叩いた時の音に近い。そこから少し離れた所の壁は、ちゃんと金属の音を響かせている。注意深く触れてみると、どうやら感触もわずかに違うようだ。

「どうしたアルカ？」

沈黙に耐えられなくなったらしい神楽が、苛ただしげに問いかけてきた。山崎は振り返った。

「壁のこの部分だけ、質が違ふみたいです。石か何かに塗装して、金属に見せかけてるみたいだ。」

銀時たち三人は一瞬、顔を見合わせたが、すぐに立ち上がって沖田と山崎のいる所へ走り寄った。お妙は少しだけ迷ったような顔をしたが、新八の後ろについてきた。

「本当だ………何だか、感じが違う。」

壁を触り比べながら、新八は呟いた。銀時は普段滅多に見せることのない、真剣に考え込む表情をしている。神楽は傘で壁をあちこちつつき回し、時折傘に隠された豆鉄砲で壁を撃つたりしてみているが、壁はまるでびくともしなかった。

「ここから………こう、ここまでが、違うのか。」

銀時が、指先で壁を慎重になぞっていきながら言った。それを見ていたお妙が、思わず口が出たというような感じで呟いた。

「長四角……まるで、扉みたいね。」

「え？」

「形が扉みたいだって言ったのよ。ほら、よくあるじゃない、壁に隠された隠し扉。」

銀時たちがこの意見に言葉を返せないうちに、神樂がひゃっと叫んだ。

「どーした神樂、踏まれた猫みたいな声出しやがって。」

「銀ちゃん、見て！」

切迫した神樂の声につられるようにして、銀時たちは言われるままに壁へ目を戻した。そして、自分たちの見ているものが信じられずに立ち尽くした。

さっき周りと質が違うことを確かめた部分の壁がそっくりそのまま、天井へ吸い込まれていくように上へと上がり始めたのだ。

まるで単純なシャッターが上がっていくかのようなだった。呆然とそれを見つめていた新八は、上がっていく部分のすぐ右側の壁に、神樂が豆鉄砲で撃つたらしい跡がついていることに気づいた。近づいてよくよく見ると、撃たれた部分の壁が小さな真四角にきれいに区切れ、しかも少しへこんでいる。

新八ははっと思い当たった。

(……そうか。)

お妙の言った通り、周りと材質の違う部分はやはり壁に隠された扉だったのだ。そしてやはり壁と同じようにカモフラージュされていたスイッチを、神樂がたまたま撃ってしまったのだろう。

そんなことを考えている間にも、扉はゆっくりと上がっていく。

みんな無意識のうちに一步下がった。特に話し合ったわけではなかったが、中に敵が潜んでいる可能性は充分過ぎるほどにあるからだ。あるいは、もっと恐ろしいものが。

しかし、扉が開ききつた向こう側に見えたものに、新八たちは思わず目を丸くした。

そこには、恐ろしげなものは何もなかった。 ただ、一組の男
女が、岩がむき出しの地面に座り込んでいるだけだった。

その貳拾貳：カモフラージュって英語？え、フランス語なの？（後書き）

扉が開いた先にいたのは……………！次回はついに、あのキャラが登場
！？乞うご期待っ！！

その貳拾参：回想もたまにはいいけどなるべくほどほどにしとけ（前書き）

サブタイトルは自分への叱責です……………（＜―＞）今回は魔虞蛇博士やニセモノたちについて、色々なことが明かされます！……………というわけで、回想シーンがやたら多いです。すみませんっ m（―）

その貳拾参：回想もたまにはいいけどなるべくほどほどにしておけ

扉のこちら側と向こう側にいる人物たちは、しばし呆気にとられて立ち尽くした。

「……………何なの、あなたたちは？」

岩床に座り込んだ二人のうち、女性の方が尋ねてきた。 その声を聞いた瞬間、銀時は深い驚きに打たれて息を呑んだ。

（……………まさか。）

間違いない。『踊れ！アミーゴ！』の中で何度も聞いた、あの女性の声だった。

「僕たちは……………」

言いかけて新八は、二人が手首と足首を縛られていることに気づいた。足首を縛っている縄は、床にしっかりと繋がれている。閉じ込められているのだ。

山崎が一瞬、ためらうようなそぶりを見せたが、扉の向こう側に入
っていった、ふところから小刀を取り出し、二人を縛っている縄を
慎重に切った。

「ありがとう。」

男性の方が、縛られていた足をさすりながら、呟くように言った。
しかしその目は相変わらず、銀時たちにじっとそそがれている。

その男性の方にも、銀時・神楽・沖田の三人は見覚えがあった。

「ジャッキーのパパアル。」

自分がしゃべったことにも気づいていないような表情で、神楽がぼ
つりもらした。

「おいっ、神楽………！」

銀時は慌てて神楽の口を押さえようとしたが、もう遅すぎた。二人
の不審そうな表情が、ますます色濃くなっていく。

「何で私たちの名前を知っている？」

銀時は思わず、ため息をついた。

また同じことを繰り返さなければならぬのかという気持ちの溶け込んだ、重いため息だった。

「やてと……………」

リオルが部屋の真ん中に置かれた椅子に腰を下ろすのを、イリスとギルザは緊張したまなざしで見守っていた。

マサオはリオルのちょうど向かい合う形で机を挟み、同じように椅子に座らされている。ただしリオルと違うのは、椅子に鎖でがんじ

がらめに縛り上げられていることだった。

イリスは内心驚いていた。佐藤マサオは泣き虫で、気弱な男の子だと聞いている。しかも今は視力を失っているのだ。それなのに、うつろな目を自分たちに向けてくるマサオの顔は、意外と冷静だった。怯えていることは確かだったが、取り乱してはいなかった。

リオルもそれに戸惑ったのかも知れない。ちょっと顔をしかめてマサオを見つめた後、左手で頬杖をつき、右手の人差し指と中指で、机をとんとんと軽く叩き始めた。

これが集中して考え込んでいる時のリオルの癖だということを知っているイリスは何も言わなかったが、それにしても妙な癖だと改めて思った。風間トオルにも同じような癖があるのだろうか、それとも。

リオルは机を叩くのをやめ、イリスとギルザに視線を戻した。

「……………それじゃ始めてよ、二人共。」

「……………銀ちゃん、新八！」

神樂の呼ぶ声に、説明に追われていた銀時と新八は、これ幸いとそちらへ逃げた。

「どうしたの？神樂ちゃん。」

「五百円玉でも拾ったか？」

銀時の問いを無視し、神樂は傘の先で壁を指し示した。
隠し扉のあった所から、三メートルと離れていない所だった。

「ここも、ちよつと変みたいアルヨ。」

そう言つて、神樂は壁を傘で叩いてみせた。返ってきたのは、金属なら響かせないような鈍い音だった。

「ほんとだ……………」

新八は呟き、ふと思い立って、その壁の周辺辺りを手さぐりし始めた。

探していたものは、すぐに見つかった。
質の違う壁のすぐ右側、ちょうど新八の目線ぐらいの高さの部分の壁に、ほとんど見えない真四角の区切れがうつすらと見える。銀時のそのことを伝える

と、彼は少し顔をしかめて言った。

「どうすんだ？……開けるか？」

銀時の考えていることは、よく分かった。新八とて、この扉を開ける勇氣はなかなかわいてこなかった。

しかしせっかく扉とその開け方を見つけたというのに、それをそのままにしておくというのは一層すっきりしないものであった。

「……………開けましょう。」

ささやくようにしてそう言うと、新八はそつとスイッチに手を伸ばした。後ろで誰かが　多分お妙だろう　はつと息を呑む氣配がしたが、新八は無視した。

新八の指に押され、壁が小さな真四角に、がくんとへこんだ。

壁がゆっくりと上がり始めた。

壁が開き切ろうとする寸前、数人の悲鳴が上がった。お妙や、ネネのも混じっていた。

男が一人、倒れている。それもただ倒れているのではない。死んでいた。うつ伏せになり、背中にナイフを突き立てられて。

異様に頭が大きく、そのくせ背は新八や神楽より小さい。肌にはやや青みがかっていた。

新八は目を細め、男を凝視した。

(……………まさか、あまんと天人?)

ありえないことだとは思ったが、目の前で死んでいる男の容貌は、人間とは言いづらいものだった。

それだけではない。少し前　　ここに来る前、こんな姿の男をどこかで見たことがある気がする。どうしてだろう？

しかし、新八がどこでどうその男を見かけたのか、思い出す機会は

結局失われた。

扉が開き切った瞬間、死体の倒れている向こう側の暗闇に立っている、小さな青い影があらわになったのだ。

銀時が、呆然と呟いた。

「トオル……………」

暗い部屋の中で、ルビーは冷たい床に座り込み、じっと虚空を見つめていた。

目覚めてからずっと、あの男に殴られた頭が割れるように痛かったが、心を占めている苦痛に比べれば、そんなものは何でもなかった。

どうしてあの時　　あの男の腹を切った次の瞬間に、とどめをさしてしまわなかったのだろうか？

自分の力を過信していたことは、よく分かっていて、でも本当はもっと別の理由があったのではないかと、今になって思い始めていた。

そう……あの男の顔を見た時から、何か自分の中で異変が起こったのをルビーは感じていた。

あいつと初めて対峙した瞬間、奴の顔に並ぶようにして、もう一人別の男の顔がぱつと心の中に浮かび上がったのだ。

それは稲妻がひらめくよりも速い、ほんの一瞬の出来事だった。しかしルビーは、外見は相変わらず無表情を装いつつも、内心激しく動揺していた。それは今まで一度も味わったことのない、奇妙な感覚だったからだ。

いや…本当にそうだろうか？

何だか前にも、こんな気持ちになったことがあるような気がした。

ずうつと昔、まだ記憶も定かでない頃に。それをたぐり寄せようとしてみても、すつと遠ざかってしまふ。でも確かに、そんなことがあつたような感じがしていた。

ルビーはこめかみを押さえ、目を閉じた。ばかばかしい。どうせ頭が混乱したことによる勘違いか何かだろう。自分は生まれた時からずっと、アジトから外と言えは春日部にしか行っていない。あんな物騒な男のような奴と知り合つたのは、後にも先にもあの時だけだ。

湧き上がる頭痛をこらえながら、ルビーはじつと考えをめぐらせていた。こんなに長い間、何もせずにじつとしているのは初めてのことだ。色々考えてみるにはいい機会だった。

ルビーは自分が生まれてからのことを思っていた。 自分に力を与えてくれた、あの頭でっかちな、変わり者の男のことを。

そして、リオルのことも考えた。

魔虞蛇博士は確かに天才だった。ルビーは博士がやって来る前に作り出された二セモノの一人だったので、彼が現れた時のことをよく

覚えている。

あの時、突如ルビーたちの前に出現した魔虞蛇博士は、自分に協力すれば強大な力と生命力、そして意思を与えてやると約束したのだ。あの時はただの操り人形だった自分たちにとって、『意思』は大して魅力のある言葉ではなかったが、『強大な力』にはみんなが心惹かれた。それはルビーも同様で、ニセモノたちは深く考えることなく、博士に協力することを決めたのだった。

ルビーたちは自分たちの生みの親であるアミーゴスズキを襲った。まさか自分が作り出した忠実な部下たちに襲撃されるとは思ってもしなかったアミーゴスズキは、呆気ないほど簡単に捕らえられ、いつの間にか魔虞蛇博士が作っただけらしい二つの隠し扉の向こう側に閉じ込められた。

魔虞蛇博士は約束を守った。 どうやったのか知らないが、ニセモノたちに力を与え、どうやったのか知らないが、意思をも与えた。自分たちに多大な変化をもたらしたこの贈り物がどうやってなし遂げられたものなのか、ルビーは今でも知らない。別に知りたいとも思っていないかった。魔虞蛇博士の方でも、わざわざ教えるような親切なことはしてくれなかった。自分のことを恩人として、畏怖すべき存在として、いつまでもあがめさせておきたかったのだろう。今ならそれがよく分かる。

実際、博士は自分がアミーゴスズキの二の舞にならないよう、細心の注意を払っていた。ニセモノたちの心臓部分は、常に博士が握っていた。反抗しようとした仲間の一人が呆気なく倒れ、死んでいく様を、ルビーはこの目で見たことがある。あの時はさすがに恐怖を覚えたものだ。

それほど巧妙に、二セモノたちを支配下に収めつつあった魔虞蛇博士を破滅に追い込んだもの。それは、風間トオルの二セモノ・リオルを作り出したことだった。博士は風間トオルの子供らしからぬ思考能力の高さを踏まえて、そのそっくり人間に二セモノ全体を指揮させようと考えていた。二セモノたちの数も膨大なまでに増え、一人で支配するのにはさすがに無理がでてきたからだった。だから魔虞蛇博士は、リオルに他の二セモノ全ての力を足しても余るほどの力を持たせることにしたのだ。

でもそのことが、必ずしも博士の命取りになったわけではないだろうとルビーは考えていた。

リオルは、最初に会った時から他の二セモノたちとは違っていた。言葉でどうと表現するのは難しいが、何かが違う。顔は笑っているように、どんな表情をしているように、その内面には何かひやりとするものが、いつも存在している。そんな雰囲気を持ち主だった。

何よりも、他の二セモノたちと違うところは、自分が入れ替わることになる本物の風間トオルに、強い悪意を抱いているらしいことだった。始めのうちルビーは、よりためらいなく強大な力を使えるようにと、博士がそのような感情をリオルに植えつけたのだと思っていたが、どうもそうではないらしい。博士が早く入れ替わって二セモノたちを指図しやすい立場につけと何度も言っているのに、リオ

ルが従わずにいる場面を幾度か目撃している。

そういう時リオルは、眉一つ動かさずに決まってこう答えた。

「ダメですよ。風間トオルを捕まえるのは一番最後です。お
楽しみは、最後にとつとくものでしょう。」

そして、ニセモノたちを指揮することになるリオルは、他のニセモノたちは教えてもらえない様々なことを博士から享受していた。

そしてとうとう博士は、ニセモノたちの製造方法まで詳しくリオルに教えてしまったのだった。

リオルが初めからああいうつもりだったのかどうかは、分からない。

リオルに聞いたって、本当のことは教えてくれまい。

ある日、ルビーが春日部の偵察から帰ってくると、博士の部屋から悲鳴が聞こえてきた。

はっとして、そこへ駆けつけた途端、床に倒れている魔虞蛇博士とそれを見下ろすリオルを目の当たりにしてしまったのだ。博士の背中にはナイフが深々と突き刺さり、もう動かなくなっていた。

凍りついているルビーを振り返ったリオルの端正な顔には、毛ほどの動揺すら現れていなかった。

『ああ、そういうことでルビー、これからは僕が一人で君たちを指揮するから。他のみんなにもそう言っというて。』

それだけ言っと、リオルは手を振って、ルビーを部屋から追い出したのだった。

あの死体をどう処分したのか分からなかったが、なぜリオルが魔虐蛇博士を殺したのかは薄々見当がついていた。ここ最近、特に風間トオルへの対処のし方について、二人は意見が対立しがちだった。でも命を握られているリオルは、結局は博士に従わざるを得なかったのだ。

それなのに、突然博士を殺害したということは……………。

そう、恐らくリオルは、博士が自分たちの生命力を支配しているその方法を、知ってしまったのだ。ひそかに探り出したのか、それと

も博士が自分の負担を減らしたいために、すっかり口を滑らせたのか。

いずれにしろ、それさえ分かればもう、博士を恐れる必要はない。

ルビーはふと、思考から意識を引き戻した。

隣の部屋が突然、騒がしくなった。……そちらは確か、春日部から捕まえてきた本物の人間たちが閉じ込められている大部屋のはずだが……。

次の瞬間に響いてきた、聞き覚えのある声を耳にした時、ルビーは思わず背筋を伸ばした。

そして顔をしかめて、目の前の壁をじっと凝視していた。

「トオル……………」

銀時が呟くと、笛のような細い音を立てて息を吸い込み、風間トオルは近づいてきた。

「銀、さん……新八さん……神楽さん……」
ささやくように言って、トオルは死体を慎重にまたぎ越え、こちらへ歩み寄った。

そしていきなり、むしゃぶりつくようにして銀時の腰辺りに抱きつ

いたので、新八はびっくり仰天した。トオルがこんなふうに感情をあらわにしたところなど、ほとんど見たことがなかったからだ。同じように驚きに打たれた人々が、後ろでざわめいているのが聞こえた。

銀時もまた、負けず劣らず驚いていた。 自分にしがみつки、

腰をつかんでいる手の震えと、その温もりが伝わってきて、銀時は思わず口元をほころばせ、トオルの頭に手を置いた。

「……………そうか、心配してたんだな。悪イ悪イ。」

銀時たちとはぐれてしまっただけで、トオルは彼らがどうなったのか気にし続けていた。たとえどんな形だろうと、再び会うことができ、トオルの中にため込まれていた感情が一気にあふれ出てきたのだ。

「風……………間、くん。どうしてそんなところに？」

我に返ったらしいネネが、おずおずと問いかけてきた。

どうやらその時初めて、トオルは銀時たちの後ろにいる人々に気づいたらしい。ぱっと顔を赤らめて、銀時から離れ、ぱつが悪そうに目をそらした。

「う……………うん。実はね」

トオルが語って聞かせる話を、銀時たちも、ネネたちも、みんな熱心に聞き入った。どうやらトオルの出現は、自分たちにとってプラスに働いたらしいと新八は見えていた。トオルが銀時たちと親しくしている様は、新八たちの言葉を裏づけるには十分な証拠だったに違いない。事実お母様方の自分たちに向ける視線が、明らかに柔らかめになった。トオルはいわゆる『優等生』タイプの少年だから、周辺の人々の間ではなかなか評判がいいのだろう。

「へえ……………定春が、そんなことを……………」

話を聞き終えた新八が、目をまん丸くしている。神楽も驚いているようだった。

「定春って誰ですか？」

酢乙女あいが、不意に口を挟んできた。

「ああ、僕たちの……………ペットだよ。」

新八は曖昧に言葉をにごした。定春のことは、説明するよりも実際に見てもらった方が分かりやすいだろう。

沖田はもつと別の部分に反応した。

「近藤さんと連絡を？無線機はどこにやったんでイ。」

「あつ、そうだった！」

トオルは慌てて隠し扉の向こう側に行き、無線機と、懐中電灯を手
に持って戻ってきた。さつき扉がいきなり開き始めたので、びつ
くりして落としてしまったのだ。

「いきなり切れちゃったから、近藤さん、心配してるかも……………」

「ほんとに近藤さんだったんだな？よし。」

と、沖田はトオルの手から無線機を取り上げ、そして山崎に突きつ
けた。山崎がきょとんとして沖田を見る。

「隊長、一体何を……………？……………あ、そうか！」

何か気づいたらしい山崎は、慌てて無線機を沖田から受け取り、電
源を入れた。

「言え！いい加減に何か吐けよ！！」

「だって………本当に何も思い出せないんだもん。」

「嘘をつくな！何か一つぐらいあるはずだ！！」

イリスはあせっていた。そのあせりが、声に出てしまっていることもよく分かっていた。

あせりは敵に、かえって余裕を与えてしまう。それを知っているのにどうしても心が急いでしまうのは、後ろでリオルが見物しているからだ。横にいるギルザも同様だろう。

二人は、リオルの手により作られた二セモノたちだったから、生まれつき他の二セモノたちに比べてより強い力を持ち、より凶暴な性格を有していた。リオルの前には何とかいう博士が二セモノを作り出していたそうだが、詳しいことは知らない。

リオルは強力な配下をそろえるために、恐ろしい手段を行使した。

自分が作った二セモノと、博士が作った二セモノとを対決させ、お互いに殺し合わせたのだ。

強力かつ凶暴なリオル側の二セモノたちは、博士側の二セモノたちを容赦なく襲い、殺していった。こうして二セモノたちは全て、リ

オルによって作り出された者ばかりとなった。

ただ、一人を除いては。

イリスは今でも、あの闘いをありありと覚えている。いや、ギルザも、他の二セモノたちも、もしかしたらリオルでさえも、あの時のことを脳に焼きつけてしまっているかも知れない。

もうその頃には、アジトはリオル側の二セモノばかりになっていた。そんな中、アジトの奥深くにある倉庫の中でひっそりと暮らしているとところを見つかり、リオルの前に引き出されてきたのが桜田ネネのそっくり人間　　ルビーだったのだ。

イリスはあの時、ルビーを捕まえて引き立てていった者の一人だった。ルビーは全く抵抗しなかったが、その目に見つめられた瞬間、イリスは思わず背筋を伸ばした。……そうせずにはいられない何かが、彼女の目の中にはあった。

リオルは自分が作ったネネの二セモノとルビーに、みんなが見てい

る前で闘うよう命じた。

その場にいる誰もが、ルビーが無惨に敗北して散るだろうと確信していた。しかもリオルは、彼女が放火能力を使うことを禁じた。

だからこそ、次の瞬間に展開された光景は、みんなの度肝を抜くものだった。

勝つ気満々で襲いかかってきた相手の攻撃を、ルビーは表情一つ変えずにかわしていった。しかも最小限の動きで回避しているのが、イリスにはよく分かった。

まずそれで激怒した相手は、すぐさま腕を変形して、ルビーの頭をまっすぐに狙った。一方ルビーは、武器として与えられた一本のボロ刀を、敵の顔に突き出した。

ルビーの左目の上辺りから、ぱつと紫色の血が飛んだが、敵は刀を余裕でかわし、奪い取り、へし折ってしまった。

これで勝負が決まった　と、その時誰もが思った。実際次の瞬間、相手の変形した腕が襲いかかり、ルビーはあっという間に肩を深々と切り裂かれた。

斬られたルビーは、ごく自然な動作で、ふわりと敵のふところに入った。傍目には、倒れ込んだように見えなくもなかったが……。

相手が首から血を吹き出して倒れたのは、まさにその瞬間だった。

その時の光景を理解するのにしばらくかかったことを、イリスは覚えていた。ルビーの手に折られた刀の破片があるのを見ながらも、ただ呆然としているばかりだった。

それはきつと、リオルも同様だっただろう。

敵の上にかがみ込み、息が絶えていることを確かめると、ルビーは全身を紫に染めたまま、刀の破片を拾い集めて出て行った。

それだけのことをする間、ルビーの顔には何の感情も浮かばなかった。
今と同じように。

背後でため息が聞こえて、イリスははっと我に返った。慌てて振り返ると、リオルが笑いながらこちらを見ている。

「やっぱりその程度じゃ吐かないみたいだね……………仕方ない、やり方を変えてみようよ。」

イリスとギルザは緊張した。『やり方を変える』ということは、手荒な方法に切り替えるということだ。

「でも……………相手は子供ですよ？下手をすれば、死んでしまいます。」

「最初は脅すぐらいでいいさ。例えば これなんかで。」

リオルがいつの間にか手にしているものを見て、イリスは目を大きく見開いた。

「バズーカ？ 一体…… 一体どこから、そんなものを！？」
「うん、これはね……」

バーン！

突然、けたたましい音を立てて扉が開いた。イリスとギルザは飛び上がって振り返った。

「誰だ……………！！？」

沖田総悟が、目を怒りに燃え上がらせて、そこに立っていた。

その貳拾参：回想もたまにはいいけどなるべくほどほどにしとけ（後書き）

銀さんたちは風間くんと再会し、そして危機が迫るマサオの元に、
沖田が駆けつける！次回は激闘の予感！！ 感想待ってます

その貳拾四：完全に表情を消せるのってよっぽど心の強い奴が狂人だけだと思

今回は闘いの前章………みたいになってます。真選組がこちらへや
って来た理由が明らかに！！？

その式拾四：完全に表情を消せるのってよっぽど心の強い奴が狂人だけだと思

「お前っ……………！」

イリスは言葉を失った。自分の目が信じられなかった。

嚴重に鍵をかけて、他の奴らと一緒に閉じ込めておいたはずの茶髪の青年が、今この部屋の中に立っている。齒を食いしぼり、目をぎらぎらさせて、彼は部屋の中を見回した。その視線が椅子に縛りつけられたマサオと、リオルが手にしているバズーカ砲に向けられると、青年の顔が凶暴な怒りに歪んだ。

「テメエ！汚エ手で人のものに触ってんじゃねエよ！！返せよ！！」

そう怒鳴るなり、沖田は刀を振り回してリオルに飛びかかった。

リオルはわずかに眉を寄せた以外、ほとんど表情を変えなかった。

沖田の怒りの一太刀をひらりとかわすと、テーブルの上を躍り上がってマサオの座っている側に降り立つ。それとほぼ同時に、リオルの座っていた椅子が真っ二つに斬り割られた。

沖田のバズーカ砲はまだ、リオルの手の中にあった。

「隊長！」

山崎が刀を手に、部屋の中へ飛び込んできた。それに続くようにして、黒服の男たちがぞろぞろと入ってきた。

「な！？なつ、何なんだよ、お前らはっ？」

イリスは思わず後ずさりして叫んだ。ギルザも目を見開いた。さっき捕まえて閉じ込めておいた奴らの中に、こんな男たちはいなかったはずなのに……一体、どこからわき出したと言うのだ？

男たちの後から、銀時・新八・神楽・お妙、ネネとトオル、さらには定春と野原一家までが部屋に入ってきた。

定春の足元には、二匹の白い犬がぴたつと寄り添っていた。両方ともお互いにそっくりな姿形をしているが、片方は首輪をしており、もう片方はきれいな空色の目をしている。

空色の目をした白犬の姿を見つけた途端、イリスの瞳がカッと見開かれた。

「テル……………！」

その声には、明らかに怒りと憎しみがこもっていた。ギルザも嫌悪

に顔をしかめて、テルをにらんでいる。テルは全く動じず、まるで身構えているような格好のまま、じっと二人を見つめ返していた。

リオルが、不意に笑い出した。

「あれ？なんか、急にお客さんが増えたみたいじゃないか。イリス、ちゃんと鍵かけとけて行っただろ。」

リオルに呼びかけられると、たちまちイリスはびくつと緊張した。

「い、いえ！ちゃんと鍵はかけたはずですよ！！」

「じゃあ何でこの人たちが外に出てるんだい？」

「俺のおかげだよ。」

「えっ
？」

何となく聞き慣れた声と共に、部屋の中にゆらりと現れた人影を目にして、イリスたちは凍りついた。リオルでさえ、明らかに驚いた表情をした。

イリスが震える声で呟いた。

「リンド……………」

頭のとっぺんから爪先まで、しんのすけとそっくりな姿をした少年がそこにいた。ただし、その顔に浮かべている表情には、しんのすけらしいところはなかった。いつもイリスたちがイライラさせられてきた、へらへらしたものでなかった。……………分かりやすく言えば、世話の焼ける子供を前に苦笑いしているような、そんな大人の笑みを口元に浮かべていたのである。

「リンド……………お前……………」

リンドはますます苦笑を深くして、イリスたちを見つめた。

「まったく……あの人たつてのお望みとあつて頑張つてきたが、色々大変だったぜ。バレないように情報も集めなきゃならないし、野原しんのすけらしく極力振る舞わなきゃならないし。」
口調まで、前までとはがらりと変わってしまったている。

その時ようやく、リオルが口を開いた。声が震えている。リオルがこんなに怒りをあらわにすると、イリスとギルザは初めて見た。

「貴様……ずっと僕たちを裏切つてたんだな？この恩知らずが！僕がいなきゃ、お前は今こうしてここにいないんだぞ！」

「残念だけど、そりゃ違うね。」

あっさりと言われて、リオルは一瞬口をつぐんだ。

「……違う？何が違うんだ？あの博士がいた時の二セモノは、もうルビーしか残っていない。ちゃんと確かめてあるんだ。だからお前は……」

リンドが薄く笑った。

「その通りさ、リオル。でも何しろ二セモノは数が多過ぎる。だからこつそり俺が紛れ込んで、お前側の二セモノのふりして博士側の二セモノを倒し、ずっとお前らのことを探ってたってことなんか、知る由もなかったってわけだ。」

「お、おい、ちょっと待てよ。」

イリスは我慢できなくなって割り込んだ。

「その言い方だと、お前は博士側のニセモノでもリアル様側のニセモノでもないってことになるじゃないか。でもそんなはずないぜ。」

俺たち以外にニセモノを作ってた奴がいたとすれば、別だが

……………」

リンドはいよいよ本格的に笑い出した。

「ご名答だよ、イリス。でも残念ながら、お前らが知るはずもないが、俺はどちら側でもないんだ。厳密に言えば、魔虞蛇博士に作られたのは確かだが……………」

「えっ、グダグダ博士!？」

ポカッ!

いきなり話の腰を折ったしんのすけは、みさえのげんこつを食らう羽目になった。

「黙って聞きなさい!」

しんのすけは頭を抱え、むすつとしてもう何も言わなくなった。

それにはかまわず、リンドは腕を組み、何か思い出すような口調になって話を続けた。

「俺は、博士がこちらの世界に来る前に作られた、ただ一つの成功作のニセモノなのだ。」

「局長、大丈夫でしょうか？」

「あいつのことか？大丈夫さ、ちゃんとやってくれるだろう。」

「そうですか……………」

「……………何だ、じつと見つめてきたりしやがって。俺の顔がそんなに面白いか？」

「いつ、いや、そんなわけじゃありません。ただ……………ちょっと……………」

「ちょっと、何だ？何でもいいから言ってみろ。借金と告白意外なら聞いてやる。」

「……………局長って……………本当に、お人好しですね。」

「魔虞蛇博士がなんでこんなことをしようと思ったのか、その辺のことは俺にも分からない。」

部屋は静まりかえっていた。空気までもが息をひそめ、リンドの話

に聞き入っているかのようにだった。

「ただ博士は 多分腕試しかなんかのつもりだったんだろうな

『踊れ！アミーゴ！』の映画を見て、それを参考に一体のニセモノを作り出した。」

それが俺だったんだと、リンドはしらけたような顔で言った。

「博士は俺も一緒にこちらへ連れて行くつもりだった。でもある日、俺はちよつとしたことで博士の機嫌を損ねちまって、地下の秘密部屋に閉じ込められたんだ。もちろん一日で出してやるつもりだったんだろうが……」

と、リンドはここでまた苦笑いした。

「ちょうどその日の夜に、こいつらが博士の家に乗り込んできたのさ。」

指さされた山崎たちは、ちよつとびっくりしてお互いを見つめ合った。

「俺は博士が子供殺しをやったことなんざ、これっぽちも知らなかった。だから地下室の中で、一体何が起こったんだって思ったのを覚えてるよ。突然足音がどやどやして、何かをひっくり返すような音もして……それからしばらくはずっと、上で色々ごそごそやってるのが聞こえてた。」

とにかく、このままではずっと閉じ込められっぱなしだ。リンドが監禁されていた場所にはトイレがあっただけで、出る方法を見つけなければ飢え死にするのは明らかだった。

「でも鍵のかかった上げ戸は天井にあって、とても俺の背じゃ届かない。それに鋼鉄製だったから、どっちみち壊すこともできそうになかった。もうダメだって覚悟を決めかけていた、ちょうどその時に……………」

……………近藤さんが、見つけて出してくれたんだ。」

「……………誰だつて？」

「ああそつか、お前らは知らないんだよな。魔虞蛇博士がここに来る前にいた世界では、ここでの警察みたいなことをやってる奴らがいてな、そのリーダーがあいつだったんだ。……………えっと、新星組だっけ？」

「真選組です。」

山崎が律儀に訂正した。

「魔虞蛇博士が前にいた世界？……あれのことか。」

「リオル様、知ってるんですか？」

「一度聞いたことがある。何とか言う漫画の世界から、特殊な道具を使ってここに来たって……。デタラメだと思って、聞き流してたんだけど。」

「でも残念ながら、デタラメでも何でもないんだよな、これが。」
リンドが笑った。

「だってこいつらも、その漫画の世界から来た奴らなんだぜ？」

「何だって……？」

イリスとギルザは目を見開いて、銀時たちを一人一人眺め回した。

しかし、リオルはそちらに目を向けようとしなかった。ただひたすらに、リンドをにらみ続けていた。

「……………それで。」

リオルの声が、もう一段階低くなった。

「面倒くさい話は抜きにして簡単に言ってもらおうか。その近藤とかいう奴に助けられてから、君はどうしたんだ？」

「ああ、そのことか。」

リンドは頭をかいた。

「まあ俺を作ってくれた博士を裏切ることになるのは確かだけどね、何しろあいつは俺を地下室に閉じ込めて、餓死させかけたような奴だ。その点近藤さんは俺をそこから出してくれたばかりか、ちゃんと飯まで食わせてくれたんだ。……だから俺は、博士がやろうとしていたことをあらかた近藤さんにしゃべったのさ。」

「それって俺たちがいなくなった後かい？」

山崎の問いに、リンドは首をかしげてしばらく考え込んだ。

「……うん。そうだ、確かそうだったな。近藤さんが、三人も人手が足りないから大変だっていうみたいなことを、誰かに話してるのが聞こえたし。」

山崎はうなずいた。それなら辻褃が合う。近藤はうまく隠し事をできるような性格ではないからだ。

「……それで、そいつは君に、こっちの世界に入り込んで僕たちのスパイになれて頼んだわけ？」

リオルがほとんど聞こえないくらい低い声でささやいた。

「あれ、何で分かるの？ 頭いいな、お前。」

リンドは屈託がない。

リオルは表情を消していた。でもその無表情さを透かすようにして、新八は彼の顔に、激しい怒りの色を読み取った。怒りと、そして…… 屈辱の色を。

「そうして俺から得た情報と、博士が残してった装置を元に、近藤さんたちはこちらの世界に潜入して仲間を助け出す作戦を立てた……でも、俺が聞いてたよりも早く襲撃が始まっちまってな。こいつらがアジトに連れて行かれるまでに間に合わなかったってわけさ。……ま、どっちにしろうまく抜け道を見つけられたからよかったんだが。」

リオルの顔から、わずかに残っていた色すら消え失せた。

「……………あの抜け道を、見つけたのか？」

「俺はお前の知らないところで、こっそりここの構造とかを探ってた。だから抜け道がありことぐらいはとつくのとうに知ってたよ。中に何があるかまでは、調べる暇がなかったんだが……」

そこまで言うと不意に、リンドの顔から笑みが消えた。

「…リオル、お前は俺が裏切ったことで相当怒ってんだろ？確かにちよつとずるかったかも知れないが…少なくとも、お前にどうこう言われる筋合いはないと思うがね。」

「……………」

リオルは何も言わなかった。代わりにずっと目を細くした。……………まるで心に浮かんだものをそこから読み取られることを、防ごうとするかのよう。

イリスが叫んだ。

「お前、一体何が言いたいんだ!？」

「なあ、お前さっき、俺に『恩知らず』って言ったよな？」

リンドはイリスのことを無視して続けた。

「さっき抜け道を通っていったら、そこで面白いもんを見つけたんだ。リオル、何だと思う？」

返事はない。

「俺に言わせりゃ、お前こそ本当の恩知らずだよ、リオル……………自分を作ってくれた博士を、自分の手で始末しちまうとはよお。」

その時ようやく、リオルがわずかに反応を示した。血の気のない顔に、微かな笑みが浮かんだ。……さっきまでのからかうような笑いととは全く違う、かみそりのように冷たく薄い笑みだった。

「僕がやったという証拠でもあるのか？」

「ないさ、そんなの。」

リンドが肩をすくめる。

「でも二セモノたちを博士と一緒に指揮していたのはお前だった。他に博士を殺して利益になる奴がどこにいる？」

リオルは答えなかった。イリスとギルザは今や、唇からも血の気を飛ばしてじつと見つめていた。……リンドでも、銀時たちでもなく、リオルを。

「それに比べりゃ俺がやったことなんざ、ずいぶんおとなしいもんだと思うぜ？少なくとも俺は、ちゃんと近藤さんの恩に報いてる。お前がやったようなバカなこととはやってなっ……………」

リンドはしゃべるのをやめた。

リオルが、沖田のバズーカをぴたりとリンドの顔面に向けている。指が少し震えているのが分かった。

リンドは少し顔をしかめた。……怯えているのではなく、ただたんに不快感を覚えたような表情だった。

「何だよ、危ないな。そんな物騒なもん、振り回すなよ。」

リオルの口が動いたが、声が小さくて何を言っているのか分からなかった。

「んん？悪いリオル、聞こえなかった。」

「……て…うな。」

「はっ？」

「バカって言うなって言ってたんだよ！」

イリスはびくりとすぐみ上がり、まるで珍しいものでも見るかのようになりオルをおそろおそろ見つめた。笑っていようが何をしていようがりオルが怖いことに変わりはないが、彼がこんなに激昂し、感情的になったところは見たことがない。……その瞳に燃える怒りの炎は、沖田に負けず劣らず激しかった。

リンドも驚いたようで、腕組みをしたまま何も言わず、リオルを見つめている。

「ああ、確かに魔虞蛇博士の奴は僕が殺したさ。でもそれは、あいつがバカだったからだ。あいつがもう少しまでも聞き分けがあったら、僕だって殺したりしなかった！僕はそんな奴でも、バカは嫌いなんだよ！見ているだけでむかむかする！特にバカなくせにかしこぶってるお前みたいな奴を見てると吐き気がしてくるんだよ！魔虞蛇の奴もそうだった。何回言っても僕の意見を聞こうともしないで、自分の意見だけ通そうとした！それでむかついたから、だから……！」

だから殺したんだよ。

リオルの言葉を聞きながら……自分そっくりの顔が怒りで歪むのを見つめながら、トオルは思った。もう少しで声に出して聞きそうになった。じゃあ君はどうなんだ？君は自分の意見を通すために、博士を殺した。自分の生みの親を殺した。結局君も、博士と同じことをしているんじゃないの？

それまでずっと、トオルの後ろで黙っていた九兵衛が、右目でじつとリオルをにらみつけながら、言った。

「君はどうして、風間トオルくんを狙うんだ？」

みんなびくくりして九兵衛を見上げた。ニセモノも本物も、その場にいる全員が九兵衛に視線を向けた。

リオルにとっても意外な質問だったのだろう。怒りの色が、束の間その瞳から薄れた。

九兵衛が、東城の制止も聞かずに、ゆっくりと一歩、踏み出した。

「リンドくんからの報告書に、君がトオルくんに格別な悪意を持っているらしいということが書かれていた。……………他のニセモノたちに、そういうことはないというのに。」

じつと九兵衛を見つめていたリオルが、突然ふつと笑った。

「そんなことまで知らされてたのか？それなら僕がトオルを憎んでる理由ぐらい、分かりそうなものだけどね。」

「？」

「知ったところでどうしようもないさ。ま、聞かれたって教えないけど。」

リオルがバズーカを持っている手を下ろした。

「君らはここで、死ぬんだから、さ。」

次の瞬間、殺気のかたまりが勢いよくリオル目がけて飛んだ。

その貳拾四：完全に表情を消せるのってよっぱど心の強い奴が狂人だけだと思

次回は沖田が、神楽が、そして銀さんが大暴れ！特に沖田が暴れま
くります。味方まで巻き込んでいます（笑）。お楽しみに！！

その貳拾伍：地味な奴って意外と粘り強いよな、やっぱ目立たないけど（前書き）
いよいよ闘い開始です！雑なところもありますが、そこらへんはどうか目をつぶって下さい（謝）。感想お願いします

その式拾伍：地味な奴って意外と粘り強いよな、やっぱ目立たないけど

「うおおおお！」

沖田がすさまじい殺気を身にまとうて突進してくるのを、リオルは冷静かつ冷ややかに見つめていた。

頃合いを見計らって素早く身をひるがえし、鋭い刃風を避ける。バズーカで撃退することももちろんできたのだが、せつかく手に入れたこの貴重な武器は、もっととっておきの時に使いたかった。

沖田はびつくりするくらい機敏に、素早く動いた。テーブルの上に移動したりオルに追いつが、勢いあまってテーブルを一刀両断してしまった。

「…………マジかよ。」

イリスは呆然と呟いた。テーブルはどっしりとした重いもので、しかも鉄製なのである。それを刀の一振りですべて両断してしまえるとは……。

同じく呆然としているギルザと共に立ち尽くしていると、リオルの

言葉が降ってきた。

「何ぼやばやしてるんだ！さっさとこいつを何とかしろ！！」

そう怒鳴りざま、リオルは沖田の刀の峰^{みね}に片足をかけて動きを止め、バズーカ砲で殴りかかった。沖田はさっと飛びすさつてよけた。

リオルに怒鳴られてはつと我に返り、イリスとギルザは慌てて闘う二人に駆け寄ったが、何しろ沖田の攻撃が激し過ぎるので入る隙がない。リオルでさえ、絶え間なく繰り出される斬撃をかくぐりながら荒い息をしている。

「ちっ！」

リオルは舌打ちして、バズーカで沖田の顔を突き、ぱっと飛び離れた。

沖田がなお刀を振り上げながら迫ってくる。嫌悪に顔をしかめて、リオルはバズーカをマサオの足元にほうった。これの重みが動きを鈍くしていると気づいたからだ。撃たないのならば、こんな重たいものを持ち歩く価値はない。

沖田がこちらに背を向けているのを見て、イリスは目をぎらりと光らせた。

しかし、まだ半歩も踏み出さないうちに、不意に目の前に差した影があった。

「隊長には手出しさせない。」

山崎が、ラケット　ではなく刀をかまえながら、言った。

それを見てイリスに近寄りかけたギルザの前にも、するりと中国服を着た少女が立った。傘を持ち、後ろに巨大な白い犬を従えている。

神楽が言った。

「お前には、私と定春が相手してやるネ。死ぬ気でかかってくるヨロシ。」

「く……………」

次々と現れる邪魔者たちに、イリスは歯噛みした。このままではこいつらを始末するのに手間取って、リオル様の機嫌をさらに損ねることになりかねない。

そして、リオル様を怒らせることは、すぐに自分たちの死に繋がる

……………！

しょうがない。 イリスは覚悟を決め、壁際にすうつと移動すると、そこに隠されていたボタンを強く押した。

けたたましい音が鳴り渡った。思わず耳を押さえてしまうほどの大音響だ。……………一体何が起こるんだろう？

銀時たちが入ってきたのとは反対側の壁に、すうつと隙間が開いた。

新八が目を丸くして見守るうちに、そこからニセモノたちが、水がわき出るようにして次々となだれ込んできた。

マサオがうつろたえ、怯え、青い顔をしているのが見える。

椅子に座らされ、しかも鎖でぐるぐる巻かれて縛りつけられているのもよく見える。ネネは今すぐにでもそばに駆け寄って、早くマサオの戒めを解いてあげたかった。しんのすけやトオルだって、同じ気持ちでいた。

だが、できない。部屋の中には大量の二セモノたちがいて、それぞれ闘いを繰り広げている。うっかりその中へ足を踏み入れたら、巻き込まれてしまうかも知れない。

しんのすけたち野原一家にトオル、ネネ、そして春日部の人々は、部屋の入り口でひしめき合い、中の闘いの様子を食い入るように眺めていた。

銀時たちと、真選組でここにいる者たちは、ほとんど皆残らず闘いに参加していた。新八は真選組隊員たちが持ってきた刀を貸してもらって闘っていたが、銀時と神楽はいつものように、木刀と傘しか手に持っていない。定春は身体の大きさと鋭い牙があれば充分だったから、何も武器はいらなかった。

一人だけ、『銀魂』メンバーの中で闘いに参加していない人物がいた。
お妙である。

お妙は、とてもさつきまで泣いていたとは思えない凜とした表情で、しんのすけたちの後ろに控えている。しかしその目から不安の色を隠しきることはできず、視線は常に新八や九兵衛を行ったり来たりしていた。

血みどろの激闘は、あっという間に始まった。

数から言えば敵の方が圧倒的に優勢だったが、幸いにもというか、こちらは闘いに関しては相当年期を積んでいた。

真選組などは、日々悪者を成敗しているのだから当然だ。それに引き替え、相手側は明らかに戦い方が稚拙で、未熟だった。自らが有する強大な力に自信を抱き過ぎて、技術の方がまるでなっていないのだ。攻撃するにもまっすぐにしかせず、かわすにもまっすぐ後ろに下がることしかない。その点だけ見れば、『銀魂』側の方が有利とも言えた。

銀時は、上尾先生を連れ去ったチーター川村のニセモノと対峙して

いた。

チーター河村のニセモノは、からかうようににやにや笑いながら銀時を見ていた。

「へへっ…………お前、幼稚園で園長をしてた奴だろ？その木の棒みたいな奴で、俺の仲間を叩きのめしてるのを見た時には、はつきり言っ**て**びっくりしたぜ。」

「……………」

銀時は答えない。河村のニセモノはかまわずにどんどんしゃべり続ける。

「俺には分かる…………分かるぜ！お前が相当できる男だ**っ**てことがよ**お**。」

河村のニセモノの瞳が、獰猛にキラリと光る。

「でも俺のスピード攻撃は、お前にも止められねえぜ**っ**！」

次の瞬間、チーター河村の二セモノの姿が消えた。

（あっ……………）

トオルは目を見開いた。

（あの時と同じだ……………）

上尾先生を連れていった時も、河村の二セモノはああやって消え失せてみせた。そうして次の瞬間には、全く別の場所に現れていたのだ。

眼鏡を外した状態の上尾先生をボロボロにしたような奴相手に、銀さん、大丈夫だろうか……………。

ガシイッ！

重い音が響いた。

背後に回り込んでいた河村の二セモノの攻撃を、銀時の木刀が受け止めた音だった。

河村の二セモノの顔に、驚きの色が少しだけ浮かんだが、すぐにやりと笑い崩れた。

「ほーう、やるじゃねえか！俺の攻撃を傷一つ負わずに受け止めたのは、今までの中ではリオル様だけなんだぜ！！」

河村の二セモノは、さっと大きく跳躍して銀時から離れた。銀時がゆっくりと動き、こちらへ向き直る。

「……………なっ、何あれ！？」

ネネが金切り声を上げて、トオルにしがみついた。河村の二セモノの姿が一瞬すうつと揺らいだかと思うと、次の瞬間、無数の河村の姿が銀時の周囲を回り始めたのだ。じっと見てみると、こっちの目まで回ってきそうだった。

「なんか、忍者とかが使う『影分身』とかみたいだね。」

トオルは思ったままのことを言った。

「ほんとね……………すごい……………」

ネネが感嘆の声を上げる。

「オラだつてあれぐらいできるゾ！」
と、しんのすけがぐるぐる円を描いて走り出したが、誰も見ていなかった。

「どうだ！？これが俺に与えられた力　『テレポート能力』だ
！お前もテレポートが何かぐらいは知ってんだろ？」

銀時はやはり何も言わない。銀さん、どうしちゃったんだろうとトオルは首をかしげた。いつもならこの辺で、気のきいた一言でも返しそうなもののに。そういえばさつきから、死んだ魚みたいな生氣のない目もほとんど閉じられているような……。

それに気づかない河村の二セモノは、大得意といった様子で続けた。

「ははっ、俺が本当はどこにいるか、まるで分からねえだろう。このままお前は俺に、一方的に攻撃されるしかないのさあ！」

次の瞬間に起こったことは、あまりに一瞬で終わってしまったので、闘いから目をそらさずに見ていたトオルでさえも、何があったのかさっぱり分からなかった。

河村の二セモノの身体が、銀時めがけて飛んだところははつきり
見えた。そして何とも形容しがたい鈍い音がしたのと、押し
殺されたようなうめき声があったのが、ほぼ同時だった。

銀時がすつくと立っている後ろに、河村の二セモノが大きな音を立
てて落下した。

トオルは銀時の手にある木刀と、鼻と口から紫色の液体を流しながら
無様に横たわっている河村の二セモノの姿をしばらく交互に見つ
めてから、ようやく銀時が河村の二セモノを殴り倒したのだという
ことを理解した。

他の者たちも驚いたらしい。突然闘いの音がやみ、敵も味方も、み
んなが目を見開いて銀時を見つめた。

「　　銀さん、さすがですね。」

長い沈黙の中、第一声を発したのは新八だった。

「珍しいな、ぱつつあん。お前が俺にお世辞使うなんてよ。」

銀時が言った。活気のない目はもう開かれている。

「…………お前、何してやがるっ！」

イリスの鋭い声が、突然空気を切り裂いた。……………みんなが今度はそちらを振り返った。

沖田がいつの間にか、他のみんなが銀時に氣をとられている間に、マサオの縛られている椅子に近寄っていた。その背後に回り、刀を使って何かしている。そばにいたはずのリオルもまた、真選組の人々と闘っているうちにマサオから離れてしまっていた。

見つかった途端に、沖田はすくつと立ち上がった。しかし何しろ突然のことだったので、刀をふるうのが一瞬遅れた。ちょうどそこへ襲いかかってきた、ギルザの鼻水をかわし切れず、沖田の肩から血

が噴き出した。

見ているトオルたちは思わず目をそらした。が、沖田は動きを止めなかった。さらに来る猛攻から、大きく横に跳躍して逃れる。そして体勢を建て直しざま刀をふるって、ギルザの鼻水をはじき返した。

沖田はマサオの足に巻かれた鎖を切るのには間に合わなかったが、手と上半身の鎖は切ってやれた。マサオがそろそろと手を動かして足を探り、鎖を自分でほどいていくのを、ネネはややほっとして見つめていた。

（ああくそっ！バズーカさえあれば……………！！）

沖田はこの闘いが始まってからずっと思っていたことを、再び心の中で吐き出した。

刀の腕で有名な沖田だったが、本人は刀で闘うよりもバズーカを使う方が好きだった。彼いわく、『気に食わねエもんを一気にぶっ飛

ばせるから』である。沖田といえばバズーカ、バズーカといえば沖田と言われるぐらい、沖田とバズーカは切っても離せぬ組み合わせなのだ。

それなのに、今愛用のバズーカが敵の手に渡ってしまっていると思うと、はらわたが煮えくり返る思いだった。

バズーカはリオルの足元に置かれていた。リオルは再び余裕の笑みを取り戻し、すでに真選組の隊員五名を撃退している。今はなんと、神楽のもとから離れた定春と向き合っていた。

リオルの笑みがますます深くなった。

「あれ？君つてもしかして、春日部山で僕の邪魔をしようとしたワンちゃんかな？」

定春は何も言わない。

犬なのだから、当たり前だ。

「あの時痛い目に遭わせてあげたっていうのに……まだ足りないのかな？」

リオルの言葉を耳に挟んだ神楽が、はっと振り返った。

「お、お前が定春に怪我させたアルカ！」

「うん、そうだよ。」

リオルはあっさりとうなずいた。神楽を見ようともしていない。

「許さないアル！」

神楽は傘をかまえてリオルに飛びかかろうとしたが、また別のニセモノたちに行く手を阻まれた。

「邪魔ネ！」

見事な傘さばき（？）で、神楽はニセモノたちを次々に殴り倒していくが、何しろ数が多過ぎる。いくら倒しても後から後からわいてきて、いつまでたってもリオルに近づけそうになかった。

他のメンバーたちも、それぞれ苦戦していた。それを横目で眺めながら、リオルはほくそ笑んだ。

「ふふ、みんな悪戦苦闘してるみたいだね……………あの茶髪の人も。」
と、リオルは沖田の方を指さしながら、こちらをにらんでいる定春に話しかけた。

「このバズーカさえあれば、すぐにケリをつけられるのに、とか思ってるんだろうな……………」

ようやく足の鎖を完全にはずし終わったマサオは、ため息をつき、鎖の跡がついた足首をさすりながら立ち上がった。

バズーカはまだ、リオルの足元に置かれていた。 しかしリオルは定春を見つめていて、そちらには何の注意も払っていなかった。

マサオが突然身をひるがえしてリオルに駆け寄り、バズーカをひつつかむと、近くにいた沖田に走り寄ってその手に押しつけた。

しばらくの間、しんのすけたちも、銀時たちも、リオルたちも、そしてバズーカを受け取った当の沖田までもが、ぽかんとして目をぱちくりさせていた。

「な、な。」

ようやくといった感じで沖田が声を発したが、目は足元のマサオに釘づけのままだった。なんとマサオは微笑んでいる。

「な、何だ？マサオ、こりゃ一体どういうことなんでイ？」

マサオは答えず、かわりにますますにつこりした。その目がまっすぐ自分の目を見つめていることに、沖田は今さらながら気づいた。

「お前、目が見えるようになったのか！？」

信じられない思いで問いかけると、マサオの笑みが滅多に見せないようないたずらっぽいものに変わった。

「うん、そうだよ。」

マサオは沖田から少し離れると、同じく呆氣にとられているトオルを振り返った。

「ほら、バスに乗ってて、僕が頭をぶつけた時があつたでしょ。その時のショックで、だんだん見えるようになってきたみたいなんだ。」

なんということだ。

「でも、見えないふりをしてる方が何か役に立つかも知れないなあって思つて……………」

リオルは凍りついたようになって立ち尽くしていたが、次の瞬間、定春を捨ててマサオに飛びかかった。

「このオニギリ、よくもなめた真似を……………！！！！」

しかし、沖田が吠えた。

「マサオに手エ出すな！！」

轟音と共に、バズーカが放射された。リオルは舌打ちして弾をぎりぎりのところでかわしたが、ちょうどその時飛びついてきた定春の頭突きを食らい、壁に叩きつけられてしまった。

神楽がかけ声を上げた。

「定春、そのままやっつけるアル！」
「アン！」

バズーカが沖田の手に戻ってきたことで、戦況は明らかに大きく変化していた。『銀魂』サイドは意気高揚し、逆にニセモノたちはいつドカンとやられるか分からない恐怖にとらわれて、闘うどころではなくなってきた。

そんな中、イリスとギルザだけはまだ戦意を全く失っていないかった。

山崎はイリス相手に大奮闘し、ところどころに傷を負わせていたが、何しろすぐに回復してしまう。イリスの手を変形させた槍の猛攻で、山崎の肩やわき腹に血がにじんでいた。

ギルザは今、新八と対峙していた。新八を初めて見た時は、ただの眼鏡をかけた地味でおとなしそうなガキだと思っていたのだが、どうしてどうしてその刀を使う手並みは堂に入ったもので、ギルザの鼻水をはじき、巻き上げながらじりじりと間合いをつめつつあった。鼻水をはじき返される音が響くたびに、ギルザの顔に浮かぶ嫌悪の色がますます濃くなった。

沖田は本領を発揮していた。バズーカをぶっ放し、それで混乱した敵をぶった斬り、予想外の暴れようにマサオも目を丸くするほどだった。

「沖田さんって……いつも、あんな感じなの？」
そばにいた真選組の隊員に、マサオはおそろおそろ尋ねた。

「まあな……でもさすがに、あんなに荒れてるところはみたことがないかな。」

（まずいな……）

イリスは山崎と押し合いながら、仲間が一人、また一人と倒れてい

くのを声もなく見つめていた。

銀時や九兵衛、東城も、部屋の中を駆け回って沖田に負けないくらいの数の敵を討ち取っていた。　　今や部屋の中のニセモノは、リオルを除いてイリスとギルザだけ、という状況になっていた。

沖田が自分に目を向けるのを見たイリスは、思わずぞっとした。

（やばい……………）

にやりとサディスティックな笑みを浮かべ、沖田が近寄ってくる。バズーカをまっすぐ、イリスの顔面に向けて……………。

（ちっ、仕方ない……………『あれ』を使うとするか。）

『あれ』はイリスだけに与えられている、大変特殊な能力だった。主立ったニセモノたちには、こうした特殊能力がある。例えばルビィは放火能力、ギルザは予知能力というように。　　もっとも今のギルザには、それを使う余地などないようだが。

そして、イリスが持つ特殊能力は……………。

突然イリスが後ろに下がり、腕を元の形に戻してそばに落ちている
刀を拾い上げたので、山崎は目を丸くした。

何をする気だ？

刀を拾い上げたイリスの目が、まっすぐに山崎の顔を見つめた。

山崎は目を見開いた。まばたきするほどの間にイリスの姿がかき消え、そして……………目の前に、自分そっくりの男が立っていたのだ。

顔も、背格好も、服装も、全て同じだった。おまけに身体に負っている傷まで一緒なので、傍目から見れば全く見分けがつかない。あちこちから驚きの声が上がった。

そう、これがイリスの特殊能力だった。一度見た人物の容姿や服装をコピーして、そっくりに化ける。いわば擬態能力とも言つべきものだ。

ちらりと沖田の方を見ると、やはりびっくりした顔をして、突然現れた二人の山崎を交互に見比べている。

（ふん……………どっちがどっちか、分からなくなったようだな。）

いくら乱暴者でも、仲間にバズーカを打ち込むようなことはできない。

……………しかし。

「…へっ、甘エゼ。」

「!？」

「そんなぐらいの小細工で俺をだませると思ってんのか？」

顔に出さないよう必死に抑えたが、イリスは動揺した。見破られたのか？バカな、リオル様でも分からないくらい完璧な、俺の擬態を………！

沖田はバズーカを下ろし、助走をつけるように超スピードで走ってくると、

「ロケットキック！」

と、飛び蹴りを食らわせた。

二人の山崎、両方に。

「ぐへへらば」

お腹にもろに食らった本物の山崎は、血反吐を吐いて床に倒れ込んだ。

「がつ……………」

イリスもあまりの衝撃に動けない。はずみで元の姿に戻ってしまった。

「どーでイ、ちゃんと見破ってやったぜイ。」

「いや全然見破ってませんよね、それ。」

こんな状況でもしっかりツツコミを入れる新八であった。

「くそ……………」

何とか起き上がったイリスは、ふとすぐ横で自分を見ている神楽に気づいた。周りには撃退されたらしいニセモノの残骸が散らばっている。

「…それならこいつでどうだ!」

イリスは再び一瞬にして、今度は神楽の姿に擬態した。

「イイヤツホオオイ！！！」

沖田が叫んだかと思うと、バズーカ砲が大炸裂し、無数の弾が二人の神樂めがけて飛びかかった。

「そ、そんな……俺の擬態は完璧なはずだ……何で見破られるんだ……」

（見破ってないんだよ……実のところ……）

トオルはボロボロになっているイリスと悶絶している山崎を見やりながら、心の中だけでそつと呟いた。

彼のそばでは、

「お前、何してるアルカ！もうちょっとで私までやられるところだったネ！殺すぞ、テメエ、死ねヨ！！！」

「るせエ！テメエが死ね！」

「お前がもつと死ね！」

「テメエがもつともつと……………」

味方同士の闘いが勃発していたのであった。

あの役立たずが……。

リオルはイリスの無様な姿を一瞥^{いちへつ}すると、すぐに目をそらした。

あんなザマで、僕の側近が務まるとでも思ってるのか？ せっかくチャンスを与えてやったというのに……。

ギルザも同程度だ。あんな眼鏡の地味くさい奴に手こずっている。

まあ僕だって、そう偉そうなことは言えないかも知れないけどな……。

定春は、前にやられたことでこりたのか、闇雲に突っ込んでくるようなことはしなかった。もっと賢く、用心深くなり、隙をみてはリオルの身体にのしかかろうとしたり、噛みつきとうしたりする。

いまいましく感じながらも、リオルはこの犬の存在を、少しばかり面白くも思っていた。

こんな奴がいるってことは、あいつらは本当に漫画の世界から来たのかも知れない。あのバカな博士の言っていたことも、まるっきりデタラメではなかったということになる。

それにしてもあいつ、厄介な奴らを味方につけやがったもんだな……。

リオルの視線の先では、自分とそっくりな姿をした少年が、不安そうに闘いのなりゆきを見守っていた。

その貳拾伍：地味な奴って意外と粘り強いよな、やっぱ目立たないけど（後書き）

沖田に暴れさせました。徹底的に暴れさせた結果、味方まで攻撃しちゃいました（笑）。次回も闘いですが、もうちょつと個人をクローズアップした感じになると思います。お楽しみに！

その貳拾六：どんな奴でも死ぬ気になれば十倍は強くなる（前書き）

今回はどっちかっていうと新八がメインです。リオルの主要配下の二人がどうなるのかも、注目しておいて下さい！ 感想お願いします

その貳拾六：どんな奴でも死ぬ気になれば十倍は強くなる

あれだけいた二セモノたちが、もうほとんどいなくなってしまうていた。

床にも壁にも銀時たちの身体にも、紫色のどろどろしたものが飛び散り、部屋の中にはたとえようもない強烈な異臭が立ちこめている。今、この部屋で闘いを繰り返しているのはたった四組になっていた。

イリスと九兵衛、ギルザと新八、リオルと定春……そして、まだケンカ中の沖田と神楽である。

東城は九兵衛の後ろで、いつでも助太刀に回れるような体勢をとり、銀時は木刀を左手でつかんで右手であごをなでながら、やんちゃな弟を見守っているような表情で神楽たちの激闘（？）を眺めている。山崎は仲間たちの手でしんのすけたちがいるのと同じ場所に運ばれたが、まだ意識がぼんやりしているようだった。

紫色の血しぶきを上げて、イリスの右腕が
腕が、斬り飛ばされて宙を舞った。

槍の形に変形した

(こいつ……………！)

強い。だが少し前に、同じように自分の腕を切り落とし、昏倒せしめたあの男とは別種類の強さだ。あの男には野獣が牙をむきだして飛びかかってくるような、そんな獰猛さを秘めた力強さがあつたが、今闘っている若者の動きはずっと整っており　しかも、無駄がない。

休む間も、息をつぐ間すらなく、九兵衛の神速の刀が襲いかかってくる。上から、下から、横から、正面から。

それに何だ？さっきから感じる、この妙な違和感は。こいつと闘い始めてから、ずっとその感覚が胸を押さえている。この若者と他の奴らとの間に、何か徹底的な差があるような気がしてならないのだ。

腕を斬られ、こちらが動きを止めざるを得なくなったところへ、上から刃風が迫る。ところが身をよじって逃げようともしないうちに、突如刀がイリスの頭上5センチぐらいのところまで止まった。

目を丸くして見上げると、九兵衛の顔が目に入った。

鼻筋の通った、きりつとした印象を与える整った顔立ち。鋭い光をたたえた右目。しかしその奥に、イリスはわずかにだがためらいの色を見て取った。そして、男にしては長く黒々とした髪の毛に、色白の肌……………。

……え？男にしては？

「お前……女、か？」

九兵衛の瞳が揺れた。
それが、イリスがこの世で見た、最後の光景となった。

九兵衛の刀とは違う、硬く鋭い何かが、背中から胸へと貫通した。

それはまっすぐに、イリスの心臓部分を深く貫いていた。

「.....
貴様。」

九兵衛は呆然としていた。何もできないまま、溶けていくイリスの身体と彼にとどめをさした者とを交互に見比べていた。

「なぜだ……こいつは、お前の仲間だったんじゃないのか!？」

「まあね。」

リオルが九兵衛の方を見ずに答えた。なんと、片手で定春の頭を押し、動きを止めている。

「じゃあ、何で殺したんだ？」

「あれ、さっき言わなかった？僕、バカは嫌いだって。そいつもバカだから殺したんだよ。闘いの最中に、腕を落とされたっていうのに再生しようともせずにはんやりしてるなんてさ。ま、人間一人片づけられない時点で処分決定だけど。」

今まで通りの軽い口調の中に、ひやりと冷たい刃が感じられるようになしやべり方だった。九兵衛は金縛りにあったようになって、リオルの顔を見つめていた。仲間をあんなふうに殺すなんて、彼には……いや、彼女にとっては考えるだに嫌なことだった。

それなのに、今そこにいる少年は小さな虫を踏みつぶすような軽い気持ちで、仲間を殺している。

「ああもう、いい加減にどいてよ。」

リオルが舌打ちして、定春の顔に蹴りを繰り出した。定春がぎゃつと叫んで後ろに下がった隙に、リオルは一瞬にしてそこから姿を消し、次の瞬間、今度はギルザのそばに姿を現した。

ギルザはイリスがやられた時から真っ青になっていたが、リオルの姿を間近で見た途端、唇まで真っ白になってしまった。

「ギルザ、分かってると思うけど。」

リオルが言った。ギルザが怖がっていることは百も承知らしく、からかうような薄い笑みを浮かべている。

「さっさとそいつを倒しちゃわないと………君も、イリスと同じことになるよ。」

新八は、ギルザの身体が震えるのを見た。 しかしその次の瞬間、顔を上げたギルザを見て、思わずぎくりとなった。

単純なのっぺりした顔に、激しい敵意がみなぎっている。普段ボーちゃんがそんな顔をしているところを見たことがないだけに、変化が余計はつきりと見えた。しかし一番新八の目を引きつけたのは、表情の変化ではなかった。

鼻水が、真っ黒に変わっていた。

リオルが手を打ち、弾んだ声を上げた。

「あはは、やーっと本気になってくれたみたいだね。 その黒い鼻水にちよつとでもかすったら、確かあつという間に毒が回って死んじゃうんだっけ。」

お妙が息を呑み、震える手で口を覆った。

「新ちゃん……………」

耐えがたい緊張をはらんだ沈黙が、広い部屋の中に、煙のように充満していった。

新八は、自分の喉めがけて、鋭い風が襲いかかってくるのを感じ、さつと身をかがめてよけた。瞬間、黒い鼻水が消えた……と、思った途端、下から鼻水がはね上がってきた。

反射的に刀で鼻水を弾きざま、新八はすくい上げるように刀を振り、ギルザの膝に叩きつけた。

ギルザは飛び上がって回避し、上から攻撃を繰り出してきた。何とか受け流したが、手がしびれるほどの激しく重い衝撃が来た。

（まずい…………）

全身が、氷のように冷え切っている。今まで何度となく危険な出来事に巻き込まれてきたが、これほど死を身近に感じたことはなかった。汗だくになって刀を振る新八の姿は、まるで舞をまっているように見えた。

が、それは気を抜いた途端に命を失う、命がけの舞だった。

新八は、攻撃を必死に受け流しつつ、じりじりと前に出た。

しんのすけたちも、沖田と神楽も、真選組の隊員たちも、ようやく目を覚ました山崎も、凍りついたように動きを止めて、お互いの生をかけた、すさまじい闘いを見つめていた。

振り下ろされてきた新八の刀を弾いて軌道をずらすと、ギルザの鼻水が新八の刀の刃にぐるぐると巻きついてきた。応戦する間もなくぐいっと引つ張られ、引き寄せられた新八の喉に、ギルザの手が伸びてきた。

首を強く締めつけられる前に、新八はぐいとあごを引き、ギルザの手首を思い切り噛んだ。一瞬ギルザがひるんだのを見逃さず、全身の力をこめてギルザを突き放すと、新八は刀をかまえ直した。

新八が噛んだ手首から、床に紫色の血がしたたっていたが、ギルザは全く表情を変えず、再び黒い鼻水を繰り出してきた。

わずかな動きで攻撃を弾き、軌道をずらすと、新八はギルザとの間合いをするりとつめた。

それから自分がやったことは、半ば無意識のうちにやったことなので、新八自身にもどのようなようにしてやったのかよく分からなかった。ただ、自分がもう無我夢中の心境でいたことは覚えている。

新八は自分の脇から襲いかかってきたギルザの鼻水を弾き、その勢いを利用してくりと刀の向きを変えると、刀の刃ではなく柄の方をギルザに向け、勢いよく跳ね上げてギルザのあごを下から叩いた。

刀を握る手に、鈍い衝撃が伝わってきた。

血を吐きながら、

ギルザはのけぞり、飛びのいた。

口からだらだらと紫色の液体を垂らし、ギルザはますますすさまじい形相になって、一気に飛びかかってきた。

二人の身体が交差した瞬間、ギルザの首から血がしぶいた。

それとほぼ同時に、新八がよろめいた。その左肘に黒く光る破片が深々と突き刺さっているのを、トオルは悪夢を見ているような気持ちで眺めていた。

ひと呼吸の後、ギルザが首を押さえてどさつと倒れた。新八も膝をつきそうになり、刀をつつかいぼうにして身体を支えながら、ギルザが動かなくなり、ただの紫色の水たまりになるまで見守っていた。敵を討ち果たしたのを確かめると、新八は腕に刺さったギルザの鼻水のかけらを、力をこめてぐいつと引き抜いた。……しかし、もう遅すぎるのは分かっていた。傷口が奇妙な具合にしびれ始め、それが次第に全身へ広がっていくのが感じられる。

僕は、ここで死ぬんだ……。

誰かが身体を抱きかかえてくれるのを感じた。顔を上げようとしたが、力が入らない。目がかすんできたらしく、眼鏡を通して見える風景に霧がかかり始めていた。すぐ近くで泣いているのは、お妙だろうか。

何だか眠かった。全てが霧に覆われている中、何か温かくて柔らかいものが怪我をした肘辺りに触れるのを感じたが、別に何とも思わなかった。

遠くの方から聞こえる声に包まれながら、新八はゆっくりと目を閉

じた。

お妙は、これで今日三回目の涙を流していた。

「嘘よ……………」

呟くようにして、そう言っている。

「嘘よ、こんなの……………嘘だわ……………」

「残念ながら、嘘じゃないよ。」

リオルがギルザの残骸に目を落としたまま、静かに言った。

「ギルザの黒い鼻水にほんのちよつとでも傷をつけられたら、それでもう終わりなのさ。毒が染み渡って息絶えるまで、多分一分もかからないだろうな。」

リオルがようやくこちらを向いた。その顔が嬉しそうに輝いているのを見て、トオルは自分の目を疑った。

「ちようどいいや。前にギルザが動物を殺したのを見たことがあるけど、人が死ぬところは初めてなんだ。ここでじっくり見させてもらうとするよ。」

楽しそうな口調から、しんのすけたちはリオルが本気で新八の死を楽しんでいるらしいことを知った。

トオルは激しい怒りがわき上がってくるのを感じたが……だから
といって自分に、何ができるだろう？ 沖田を一撃で倒したような相
手だ。イリスを呆気なく、見えない攻撃で殺したような相手だ。

人の死を、顔色一つ変えずに見ていられるような奴なのだ。

怒りが冷えていく中、突然不思議な気持ちに襲われた。

笑っている、リオルの顔。それと同じ笑みを、いつか、どこかで、
前にも見たことがある気がする。霧がかかったように曖昧で、ぼや
けた記憶の向こう側で、これと同じ笑顔が自分に笑いかけているの
を見た気がする……。

足元に柔らかいものが触れ、トオルは我に返った。

シロと、シロにそっくりだけど空色の目をした犬が　確か、テ
ルという名前だ　新八の近くに寄ってきていた。シロはじつと
新八の顔を見つめて動かなくなったが、テルは新八の怪我した腕に
身を寄せ、座り込んだ。

新八は、湿ったものが傷口に繰り返して触れるのを感じた。

目を細め、必死に焦点を合わそうとすると、白い小さな犬の姿が見え、またぼやけた。目が空色に光っているのが分かる。 テルが、腕の傷をなめているのだ。

始めのうちは、なめられるたびに鈍い痛みが走っていたが、次第に何も感じられなくなっていった。麻痺してきているのかも知れない。世界がぐるぐる回りながら、遠ざかっていくようだった。

これが死ぬってことなら、そんなに悪いことじゃない　新八は
そう思った。むしろ、これまでにないくらい、とてもいい気分だ……。

だが………これが本当に死なのだろうか？

霧の中に消えかかっていた辺りの光景が、またはつきりと見え出した。身体感覚も次第に戻ってくる。何気なく、自分の腕に目を下ろすと、テルがまだ肘をなめているのが見えた。

傷は、消えていた。

「どけ。」

突然、尖った声がした。トオルと同じ声だが、これはおそらくリオルのものだろう。

「聞こえないのか、このクソわたあめ。どけ！」

周囲の空気をビリビリと震わすような大声がした。テルはびくつと顔を上げ、再びシロと一緒に、しんのすけのそばへ戻った。

リオルは顔を真っ白にして、新八の左腕を見つめていた。彼は明らかに、しんのすけたちと同じぐらい驚愕しているようだった。

「テルの……唾液……」

リオルがかすれた声で、呟いた。

「そっだ……博士が言っていた……強力な……癒しの力……」

リオルが新八を見つめた。彼の顔にこれほどのショックが浮かぶところを、みんなは初めて見た。

しばらくして、リオルがまた呟くように言った。

「だがまあ、そんなことはどうでもいい。ギルザはどうせ殺すつもりだったし……お前らぐらい、僕一人で充分倒せる……。」

リオルが近づいてきた。神楽と沖田が齒を食いしぼり、傘を、バズーカを、そろそろとかまえる。真選組隊員たちもはつと我に返ったようになり、しんのすけたちを守るような体勢へと動き始めた。

起き上がろうとした新八は、姉に押さえられた。

「ダメよ、新ちゃん。さつき死にかけるほど頑張ったんだから、もうゆっくりしてなさい。」

リオルは何も持っていない。素手だった。それなのに、何のためらいもなく、刀をずらりとかまえる男たちの方へ歩み寄ってきた。

何が起こったのか、誰にも分からぬうちに、隊員の一人が吹っ飛び、くるくる回りながら壁に激突して動かなくなった。

沖田は脇をすり抜けていくリオルの髪を捕まえようとしたが、手に熱い痛みを感じて引っ込めてしまった。神楽がすつと動き、見事な身のこなしで飛び上がると、傘を滑らかな動きでリオルの頭に叩きつけた。

リオルはひょいと傘の下をかいぐり、信じられないような跳躍力で神楽の頭を越えそうなくらいにまで飛び上がった。そして、神楽に反撃する間を与えず、さっき打ち倒した隊員から奪った刀を、神楽の肩に突き刺した。

神楽がうめいた。リオルは宙に舞い上がったまま刀の柄に両足を乗せて体重をかけ、さらに刃を深々と神楽の身体に食い込ませた。

そして、刀を踏み台にして神楽を飛び越え、向こう側に降り立った。
トオルの、目の前に。

トオルは動けなかった。目の前で展開される、恐ろしい闘いを目の当たりにして、沖田の手や神楽の肩から血が噴き出すのを見て、身体がしびれたようになっていた。

リオルが自分を見て、また微かに笑った。その瞬間、雷に打たれたような感覚がトオルを襲った。

間違いない。僕は前にもこんな笑いを見たことがある。

「……………まずは、君からだよ。」

リオルの手が、トオルの喉へと伸びた。

風間くんが、やられる………！

しんのすけは今までに味わったことのない、激しい恐怖を感じた。
何もできないまま、目の前で友達が殺されるなんて、考えるだに恐
ろしいことだった。

しんのすけは我を忘れ、リオルの腕にしがみつこうとした。
その途端、顔を殴りつけられた。この細い腕にこれほどの力がある
のかと思えるほど強烈な一撃で、しんのすけは床に倒れ込み、そこ
でも強く頭を打って束の間息が止まった。口の中に、血の味がする。

「しんのすけ！」

ひろしが震える手で、とめどなく鼻血を流してぐったりしているしんのすけを抱き起こした。瞬間、何かが耳をシュツとかすめるのを、ひろしは聞いた。

リオルも何か感じたのか、振り返ろうとした……しかし、ろくに後ろを見ないうちに、何か細いものが背中に激突した。リオルは、しんのすけのように床に倒れ込みはしなかったが、完全に不意をつかれてよろけ、もうちよつとで膝をつきそうになった。トオルの首をへし折ろうとしていた手は狙いからそれ、その隙を見逃さなかった山崎はトオルの腕を引っ張って、リオルの手が届かないところへと連れて行った。

怒りと屈辱と動揺とで震えながら、リオルはゆっくりと振り返った。

銀色の髪をした男が、少し離れた所に立っていた。 その活気
のない死んだ魚のような目には、普段滅多に見せることのない光が
……鋼のような冷たさと鋭さを秘めた光が、宿っていた。

その貳拾六：どんな奴でも死ぬ気になれば十倍は強くなる（後書き）

書いている途中に、新八ってこんなに強かったっけってふと思ったんですが、ま、サブタイトルと同じような意味で受け流して下さい（おい）。イリス、リオルの二人も倒され、残るはリオルだけ……次回皆さんお待ちかね（？）、銀さんが大暴れます！！そしてリオルもとうとう本気を……！！？お楽しみに！！

その貳拾七：脇役があつてこそ主役はひき立つんだよな（前書き）

銀時とリオルの決闘……勝利は一体どちらの手に！！？今回はちよつとグロテスクな描写がありますので、ご注意下さい。

その貳拾七：脇役があつてこそ主役はひき立つんだよな

銀時はじつとリオルをにらんだまま、すつと前に一歩踏み出したかと思うと、一気に駆け寄ってきた。

飛びかかってくる気かと思つたりリオルははつと身構えたが、銀時はリオルの脇をさつと通り過ぎ、何かを拾い上げた。

木刀だった。『洞爺湖』と書かれているが、今までの闘いでべつとりと紫色に染まっているためにほとんど読めない。

銀時はこれを投げてリオルの気をそらし、トオルを救つたのだった。

「……………」

リオルは無言で、銀時をにらみつけた。燃えるような怒りが全身を駆けめぐり、かえって言葉を出なくさせているかのようだった。

どうして今日は、こんな邪魔ばかり起こるんだ？
リオルは心
の中で呟いた。

どうしてこんな奴らが、漫画の中からやって来たりしたんだ？

そうだった。こいつらがいたせいで、リオルが仕組んだ出来事が次々とご破算になったのだ。新八、山崎、沖田がいなければ、トオルの友達はずっと前に捕まえられていたはずだし、トオルを孤立させることも可能だった。土方がいなければ、本物のボーちゃんとテルが救出されることなく、結果的にテルが新八の命を救うことなどなかったはずだ。

いや、そもそも神楽に邪魔されなければ、トオルの母親のニセモノが、とつくのとうにトオルを捕まえていたはずだったのだ………！

全部、こいつらのせいだ　　そう思った瞬間、リオルの胸の中に渦巻いていた怒りと憎悪が、一気に噴き上がってきた。

（殺してやる………この世から、消えていなくなれ！）

銀時は心臓目がけて無数の殺気が飛ぶのを感じ、何を考える間もなく、思い切り飛びすさって逃げた。

と、今度は喉元めがけて、鋭く光るものが一直線に迫ってきた。

びくつと首をすくめた途端に、熱い痛みが走った。攻撃が、ほんのわずかにだが、首の横の皮を切り裂いたのだ。

深く息を吸い、木刀をかまえ直して、銀時は次の攻撃へと備えた。

リオルの武器は、自由に伸び縮みする爪だった。それだけだった。何だかイリスやギルザと比べても、ずいぶんオリジナリティに欠けている気がする。確かに自由にしなり、四方八方から襲いかかって

くる十の爪は、厄介ではあったが……。

爪にかすられながらもたじろがず、徐々にリオルに迫っていた銀時は、ふと目を上げて驚いた。

リオルの瞳が、真っ赤に光っている。

血の赤だった。危険を知らせる、不吉な赤だった。しかもその奥には、真剣な殺意と悪意がうごめいている。

銀時は気持ち悪くなり、目をそらそうとした。が、できなかった。不気味な力を秘めたその赤い光を見るうちに、奇妙な震えが腹の底からこみ上げてきた。

顔が冷たくこわばり、周囲の景色が白茶けて見え、無数の光の粒がちらちらと視界を覆っている。息が苦しかった。

倒れてはいけない。必死で気を保ち、体勢を立て直した瞬間、視界がさあつと晴れた。銀時は目を大きく見開いた。

自分の見ているものが、信じられなかった。

銀時は、果てしなく広がる野原の中にいた。薄暗い中を舞い飛ぶ鳥の羽音が聞こえ、胸の悪くなるような匂いが漂っている。そして地面には、とてもこの世のものとは思えない光景が広がっていた。

るいるいと、見渡す限りに死体が散らばっている。ほとんど全てが鎧よろいを身にまとい、刀を手に行っているものもあった。

矢が何本もつきたった死体。全身を無惨に切り裂かれた死体。ほとんど白骨化し、どくろの虚ろな眼窩がんかが宙をにらんでいる死体……。

そしてその中には、銀時がよく知っていた者たちに、よく似た死体もあった。

銀時はあえいだ。手足も首も顔も、全てが冷たい。胸に分厚い板を押しつけられているような気がした。

息苦しさの中、銀時の目に見えている光景から、色が消えていった。

「お、お前銀ちゃんに何したネ！」

神樂が、床に膝をついた銀時を見て金切り声を上げた。

「別に。なんにもしてないよ。」

軽い口調で答えるリオル。その目はまだ赤く光り、足元の銀時を見下ろしている。

「ただちよつと、僕の力を思い知らせてやつただけさ。」

「お前の……力……？」

新八が首をかしげて呟くと、リオルがようやくこちらを向いた。

その瞬間、新八は嫌な匂いでもかいだかのように気分が悪くなった。

走馬灯のように、色んな光景が目の奥にちらついている。どれも借金取りに苦しめられていた時に実際に味わった、つらい経験ばかりだった。

一瞬にして新八は我に返り、まるでマラソンをたった今走り終えたかのように、荒い息をしていた。

何だっただ、今のは？

「分かったかな？」

リオルは再び銀時に視線を戻した。

「僕のこの瞳をまともに見た奴は、みんな無理やりに記憶をひっかき回されて、最終的には最悪な記憶を目の前に突きつけられることになるんだ。」

リオルはしゃべり続ける。あざけるような、からかうような、軽い笑みを口元に浮かべて。

「君はそうでもなかったらしいけど、この銀髪の男の最悪の記憶は、どうやらひどいものらしいね。こんなにも動揺するなんて。」

ま、すぐにその苦しみからも解放してあげるよ。」

新八ははっと気づいた。銀時の木刀が、いつの間にかリオルの手の中にあつた。

銀時は木刀を奪われたことに、まるで気づいていないらしい。目をカッとばかりに見開き、顔から血の気を飛ばして、今やガクガク震え始めている。

その頭上で、リオルが木刀を振り上げた。

新八はしゃにむに立ち上がろうとした。神楽も傘をかまえようとした。沖田もバズーカを持つ手を上げた。だが、どう考えてもリオルの動きの方が早かった。

（間に合わない！）

新八は、血が出るほどに強く唇を噛みしめた。あの木刀が振り下ろされれば、全てが終わる……………。

その時、しんのすけが勇敢とも無鉄砲とも言える行為に出た。

リオルが大きく木刀を振りかぶった瞬間、しんのすけはみさえの制止を振り切って前に飛び出し、勢いよく右足を蹴上げた。　　リオルを蹴ろうとしたのではない。その顔面に、自分の靴を飛ばしたのだ。

さすがのリオルにも、これは予想外だった。はっとして、リオルがとっさに木刀で弾き上げたしんのすけの靴が、銀時の頭にこつんとぶつかった。

銀時の、焦点が合っていなかったまなざしに、不意に光が戻ってきた。束の間眉をひそめ、それからはっとなって、銀時は顔を勢いよく上げた。

意識がこちら側に戻ってきたのを感じた。さっき見た光景は、ただの悪夢に過ぎなかったのか……リオルが自分の木刀を手にしているのを、銀時は目にした。

リオルが次の攻撃を始める前に、銀時はこぶしをリオルの胸に叩き込んだ。

防ぐ隙を与えないよう、唐突に腕を突き出したので、銀時が与えた一撃は通常なら肋骨をへし折るほどの威力を持っていた。リオルは完全に不意をつかれてのけぞり、仰向けに倒れた。

しかし、さすがにそのまま倒れてはいなかった。見事な身軽さでぱっと跳ね起き、リオルは銀時と向かい合って、動きを止めた。

リオルは無言だったが、その真剣な殺意は言葉で聞くよりもはっきりと伝わってきた。もう瞳の赤い光は消えている。小細工など使わ

ず、今握りしめている銀時の木刀で、直接銀時を始末することに決めたようだった。

銀時は武器を持っていない。ざっと周りに目をやって、代わりになりそうなものが何もないのを確かめると、銀時はため息をつき、左手をすうつと顔の前に持ってきた。

銀時が何をしようとしているかに気づき、新八は全身に冷水を浴びせられたかのような気持ちになった。

（左手を犠牲にする気だ………）

それで相手が気をそらした隙に、飛びかかって木刀を奪うつもりなのだ。

リオルはそれに気づいているのかどうか、銀時をにらみ、再び木刀を振りかぶった。その瞳には笑みのかけらもなく、氷のかけらのように鋭く冷ややかだった。

左腕をやられた瞬間に、リオルの喉を右手で一撃する。そう銀時が心に決めた瞬間、リオルの顔にまた何かが飛んだ。しかし、今度飛んできたものは明らかに靴より小さく、しかも光っていた。

リオルが右手を上げたが、間に合わなかった。次の瞬間、リオルが恐ろしいわめき声を上げ、右目を押さえた。激しい苦痛を訴える叫びだ。

彼がそんな声を出すところを、初めて聞いた。

リオルが右目を押さえている、その指の間から見たのは、小さなコンパスだった。

その一瞬が、銀時の運命を変えた。銀時はさっとリオルに近づくと、その左手首に手刀を食らわせ、木刀をもぎ取り、その勢いを利用してリオルの肩からわき腹にかけて、斜めにすっぱりと切り裂いた。

リオルが再び叫んだ。今度は獣が吠えるような声だった。

紫色の血を全身に浴びながら、銀時は木刀を振り上げ、リオルの喉元に、まっすぐ突き込んだ。

リオルの口と首から、紫色の血が噴き上がった。それはまるで、グロテスクな噴水のようにも見えた。

リオルは白目を向き、今や本物の風間トオルとはかけ離れた形相となつてのけぞり、床に倒れていった。

「銀さん！」

「銀ちゃん！」

「旦那！」

新八や神楽、沖田たちが、叫びながら駆け寄ってきた。銀時は木刀をぶらさげたまま、ぼんやりと床に倒れたリオルを見つめていた。

リオルの顔は死ぬ間際にあつても、まだ怒りと憎悪の色を失つていなかった。喉の奥からごぼごぼと耳障りな音を立て、次第に人としての形を失つていきながら、リオルはふところをまさぐり、何かを取り出した。

ところが定春は、リオルの不審な行動を見逃してはいなかった。その巨体からは想像できないほどの速さで、さつとリオルの手からその何かをかすめ取り、ぽとりと床に落とした。

リオルが再び怒りと失望のわめき声を上げた。神楽が床に落ちたものを拾い上げる。

「……………何アルカ、コレ。リモコンみたいアル。」

突然はつと息を呑む音がした。そちらを見ると、外国人の男がこの映画の、本来の黒幕になるはずだったアミーゴスズキが、大きく目を見開いて神楽の手の中にあるものを見つめていた。

ジャッキーがその腕に手をかけた。

「パパ、それが何か知ってるの？」

「いざという時のために作っておいた、このアジトの自爆スイッチだよ。スイッチを押してから十分に起動する……………そうか……………これもそいつが持っていたのか……………」

沖田が半ば呆れたような、半ば感心したようなまなざしを、足元に広がるリオルの残骸に向けた。

「どうせ死ぬんなら道連れに、ってわけか……………まったく往生際の悪い奴でイ。」

「定春、お手柄アルネ。」

神楽はぽんぽんと定春の巨大な頭を叩いた。

銀時は、リオルが痙攣^{けいれん}し、やがて動かなくなり、ただの紫色の水たまりに変わっていくまで、目をそらさずに見つめていた。そしてようやく、しんのすけたちが固まっている方へと目を向けた。

しんのすけと目が合うと、銀時はちよつと笑みを浮かべてうなずきかけた。

「……………さっきは助かったぜ、野原しんのすけくんよ。」

しんのすけは頬を紅潮させて、銀時を見つめていた。

「先生、すごくカッコよかったゾ！」

銀時はふんと鼻を鳴らした。

「俺は先生なんかじゃねえ。だから、先生って呼んでもらう必要もねえ。……………まあとにかく、あの靴がなかったら正直俺は危ないところだった。どうもあんがとよ　トオル、お前もな。」

ぽかんと口を開けて、リオルのなれの果ての姿に見入っていたトオルは、え？というような声を出して銀時を見上げた。

「あれはお前だろ？コンパスをリオルの目に当てたのは。」

トオルの頬が、しんのすけと同じぐらい赤くなった。銀時から目をそらし、トオルは呟くように言った。

「ポケットの中にたまたま入ってて……でもまさか、あんなにまともに当たるなんて思ってたませんでした。」

「俺だってできねえよ。まぐれってのは恐ろしいねえ。」

そう言うってから、銀時はふと思いついてリオルの残骸のそばにいき、紫色の血だまりの中からあるものを拾い上げた。紫色に染まった、トオルのコンパスだった。

銀時はそれをつまむと、トオルを見た。

「こりゃあダメだ。汚過ぎて使えねーよな。」

トオルはコンパスを見て、思わずといった感じで笑った。

「そうですね……新しいのを買わなきゃ……」

「銀ちゃん。」

突然後ろから呼ばれたので振り返ると、目の前に神楽が立っていた。
なぜか妙にばつの悪そうな顔をしている。

「……どうした？」

尋ねると、神楽は手に持っていたものを、そつと銀時の方へ差し出した。

リオルから奪い取った、あのリモコンだった。

「コレ………いじってたらスイッチ押しちゃったアル。」

「こつちだ！早くこれに乗れ！！」

銀時は闘いの最中にも出さなかったような怒鳴り声を上げて、混乱した春日部市民たちを次々に簡易エレベーターのようなものに押し込み、上に運んではまた下げてを繰り返していた。

「まったく、神楽のバカやろうが！！ていうかずっと前にもなかったっけ、こんな展開？」

「銀さん、しゃべってる場合じゃないですよ。」

手伝っている新八が、釘をさした。

もう春日部市民のほとんどが、安全な外へと脱出していた。
あと残っているのは、しんのすけたち春日部防衛隊とその家族たち、
幼稚園の先生方、風間みおり、ジャッキー親子、そして銀時たちと
真選組だった。

「よし……………これで終わりだな。」

「あと三分五十秒ですよ。」

山崎が、やや神経質に言った。

「早く乗りましょう!」

みさえの声にせかされるようにして、一同はエレベーターのような
乗り物に足を踏み入れた。ぎゅうぎゅうづめで、何とかほとんどが
乗り込んだが……………。

「……………俺は乗れねーみてーだな。」

銀時が、ただ一人エレベーターの外に取り残され、頭をごりごりか

きながら言った。

確かにエレベーターの中はもうぎゅうづめで、もう一人乗れそうな余地は全くない。

みんなは顔を見合わせた。

「銀さん……………」

何か言いかけたトオルを遮るようにして、銀時が突然、エレベーターの上昇ボタンを強く押した。

「銀さん!？」

重たそうに上がり始めたエレベーターの上から、新八が叫んだ。銀時もまた、下からこちらを見上げて叫んだ。

「タイム・イズ・マネーだ!着いたらさっさと下りろよ!!」

まさかあの銀時に、『時は金なり』と諭さとされる時が来るとは思っていなかった新八だったが、言われるまでもなくエレベーターが地上

の倉庫のような所に出るなり飛び降りた。神楽などは慌て過ぎて、つまづいて沖田の腰につかまり、二人で派手に転倒した。

また大ゲンカを始めた二人を尻目に、新八たちはエレベーターが再び下がっていくのを不安げに見守っていた。とつさに腕時計を見て、トオルは青ざめた。

あと三十秒しかない。

エレベーターが下りていく音が、異様なほどゆっくりに聞こえた。トオルはぎゅっと目をつぶった。今まであんなに頑張つて闘ったのに……こんなふうに終わるなんて……そんなはず……。。

ドガアアアアン！

耳をろつする大音響が、春日部山中に響きわたった。

同時に爆風が吹き上がる。熱気が押し寄せてきたかと思うと、炎が高く高く燃え上がり、アジトの入り口になっていた小さな小屋を吹っ飛ばした。

爆風に髪をなぶられながら、タオルは涙を流していた。

銀時がどうなったか、考えるまでもなかった。

周りにいる全ての人々が、凍りついたように動きを止めている中、神楽がタオルと同じように涙を流しながら、前に進み出てきた。

「銀ちゃん！」

神楽はかすれた声で叫び、深く息を吸った。そして、さっきよりも大きな声でまた叫んだ。

「銀ちゃん！」

「……………うるせーな。山びこはやつほーだろうが。」

背後から聞こえてきたぶっきらぼうな声に、みんなは弾かれたように飛び上がり、一斉に振り返った。

坂田銀時が、木立の中に立っていた。

髪も服もボロボロだった。あまりにひどい様子なので、新八は一瞬幽霊になってでてきたのではないかと思ったほどだ。しかしところ

どころ焼け焦げた服と、身体中にくっついた木の葉を見て、新八は合点がいった。

爆発が起こった時、エレベーターで上がりかけていた銀時は、爆風によって一気に押し上げられ、地上へ飛び出したのだ。そして運良く、木の茂みの中へと落下した。

何ともみすばらしくなってしまった銀時の姿を見ているうちに、新八の視界が涙でにじみ始めた。

トオルはまた泣いていたが、さっきとは全く違う、喜びを押さえかねた涙だった。袖で目をめちやくちにこすりながら、銀時に近寄ろうとする。しかし、神楽の方が早かった。

「銀ちゃアアアん！」

叫びざま、神楽は銀時の身体にしがみつき、力いっぱい抱きしめた。

「
いてええええ!!!」
」

炎の明かりに照らされた春日部山に、
叫び声が響きわたった。

その貳拾七：脇役があつてこそ主役はひき立つんだよな（後書き）

銀時たちとしんのすけたちの冒険も、次の次ぐらいで一応の終結となる予定です。これまで応援して下さった皆さん、どうもありがとうございます。最後まで、どうかお付き合い下さい（o^_^o）

その貳拾八：別れ時には振り返るな（前書き）

サブタイトルからも分かるかも知れませんが、今回で銀時たちはしんのすけたちと別れることになります……。何で銀時たちがそもそもこの世界に來たのかも、ある程度明かされます！

その式拾八：別れの時には振り返るな

日が柔らかに注ぎ、あちこちで小鳥がチュンチュンとさえずっている。もうそろそろ暑くなってくる頃だというのに、春日部は春まっさかりのように穏やかな空気と天気に使われていた。

銀時たちが帰る時が来たのは、そんな日のことだった。

ニセモノ事件のせいで破壊された生け垣や塀が全て元通りになった中で、定春に倒された野原家の生け垣の一部はそのままになっていた。そこに隠されていた大きな穴も、今なおぽっかりと口を開けている。

「……………本当に、行っちゃうの？」

穴のそばに立っている銀時たちに、ネネが呟くように言った。

銀時はネネを見下ろして、少し笑った。

「ああ。……だいぶゆっくりしちゃったからな。」

ニセモノたちのアジトから出てきた時、銀時たちは身体の色んな部分に傷を追い、しかもニセモノたちの返り血を浴びたせいでそれぞれすさまじい有様になっていた。

特に銀時はひどく、全身紫色のネトネトまみれだった。この

まだまだとくさくてたまらないと神楽が言い出したので、真選組の隊員の一人がみんなを案内し、敵のアジトの入り口近くに設けられた真選組の陣地へと導いた。

陣地に入ったしんのすけたちは、驚いて声を上げそうになった。

土方が腹から胸にかけて包帯でぐるぐる巻きにされて横たわっているのにもびっくりしたが、何より彼らを驚かせたのは、土方のそばに影のようにして寄り添っているボーちゃんの姿だった。

そうして銀時たちは、土方が壁の隙間からボーちゃんとテルを助け出して逃げ、敵と闘い気絶するまでのいきさつと、その後の出来事を説明するボーちゃんの話聞いたのだった。

土方が倒れた後、シロとリンドに導かれてボーちゃんは真選組の元へと連れて行かれた。そして隊員たちはボーちゃんの話の聞くやいなや、すぐさま土方の救出と手当てを行い、ボーちゃんにはここから離れないようにと言いつけた。

ちなみにシロとしんのすけを除く野原一家は、ニセモノたちが現れる間に真選組と九兵衛たちの手により救出されていたのだ。

新八たちが一番知りたかったのは、九兵衛たちがどうやってこの世界にやって来たのかということだった。その答えはなんと、そもそもどうして銀時たちが突然、クレしんの映画の世界の中へ引っ張り込まれることになったのかということにも繋がっていた。

幕府は魔虞蛇博士の家のテレビに接続されていた機械を綿密に調べ、やがてこの装置が、テレビで放送している番組の中へと実際に潜入できるようにする機能を持つということ突き止めた。一緒に調査していた近藤はさっそく真選組駐屯所に帰り、そのことを土方や沖田に知らせようと思った。……………それが、ちょうど銀時たちがいなくなった金曜日の夕方のことだったのだという。

ところがここで、問題が起こった。他でもない、警察庁長官であり『破壊神』の異名を持つ、まったく松平片栗虎のせいだ。

何でも彼は、

「これさえありゃエロビデオの中にも入れるじゃねえか、めっけもんだな。」

とか言つて、それだけならまだしも装置を手の平でバンツと思いきり叩いたらしい。

案の定というか何というか、装置は奇妙な音を立てて震え、しかも……………光り始めた。

爆発するかも知れない　　そう考えた近藤たちは、反射的に部屋の外へ逃げようとした。しかしそうこうしているうちに、装置の光はみるみるおさまっていき、やがて震えも止まってしまった。

やれやれと冷や汗をぬぐった近藤たちだったが（松平はいつの間によら姿を消してしまっていた）、近藤はふとあることに気づき、不安になった。

調べていた時、装置の電力が急になったりしないよう、その機械は巨大な充電器に繋がれていた。そしてその充電器は、江戸の間たちが使う電気の供給源でもあるのだ。

そんな大切なものを一つの装置のために使ってしまうようなところに、松平片栗虎という男の性格が現れている。

それはともかく、その充電器は江戸中に電気を送っているのだ。さつき機械が変なことになった時に、何か有害な電波などがその中に混じったかも知れない。そう考えて、近藤は不安な気持ちになったのだ。

そして急いで帰ってきてみると……土方と沖田と山崎の姿が消えて、大騒ぎになっていたというわけであった。

その後の調べで、銀時たち三人に定春、お妙もいなくなっていることが判明した。しかも行方不明になった者たちが最後にいたと思わ

れる部屋ではテレビがつけっぱなしになっており、しかもクレしんの映画が流れっぱなしになっていたのだ。

こいつは何かある と考えた近藤は、ふと思い出した。

魔虞蛇博士の家に踏み込んだ時、あの装置が接続されていたテレビのDVDプレーヤーに、クレヨンしんちゃんの映画のディスクが入っていたのだ。名前は、確か……。

その映画の名と土方たちが見ていた映画が一致したことを知り、さらにあの装置の件のことも考え合わせて、近藤はほとんど確信した。

トシたちは、博士と同じように映画の世界に入ってしまったている！

「……………で、僕らがいなくなってから、どれくらい経つんですか？」

新八が我慢しきれなくなったように口を挟んだ。

「そうだな……………ちょうど一週間ぐらいだ。」

なぜすぐに助けに行けなかったのかと言うと、先の松平に食らった一撃のせいで機械が狂い、すっかり使い物にならなくなって、直さざるを得なくなったからだ。何しろ見たこともない機械なので、綿密に調べたとはいってもすぐに修理できるはずがない。しかしできるなら、早めに助けてやりたい。近藤のその気持ちをばねにしたかのように、修理は順調に進んで予定よりも三日も早く終わった。そうしてこの世界に、真選組の面々が投入されたというわけであった。

九兵衛はお妙がいなくなったと聞いていても立ってもいられなくなり、幕府から情報をつかむとすぐに近藤の元へ走って自分も連れて行ってくれるように頼んだ。

初め、近藤は首を縦に振らなかった。当然だろう。警察の仕事に、一般人を巻き込むなど論外だからだ。しかし九兵衛の滅多に見せない熱心さや、その剣術の腕を見込んで、最終的には協力してもらうことに決めた。

近藤はあの装置を慎重に操作して、クレヨンしんちゃんの映画に通じる道を何とか作り出した。その出口がなんと、定春が見つけた野原家の生け垣の下の大穴だったのだ。

入り口は目立たぬよう、九兵衛の家である柳生家の地下室に設置された。そこへ行って天井の大穴の下に立ち、装置のスイッチを押してもらえば一気にクレシンの世界へ直行というわけだ。

しかし、彼らが敵のアジトに通じる抜け道を見つけたり、陣地を作ったりと色々している間に、ニセモノたちの本格的な攻撃が始まってしまう。後はしんのすけやトオルが知っている通りだった。

ただ近藤は一度だけ、ここに來たことがあつたらしい。土方に電話がかかってきたのは、その時だったのだ。

土方は、アジトでの闘いのことを横たわつたままに聞いた。

つい先刻に目を覚ましたこともあつて、土方の顔は血の気がなく真っ青だったが、意識は驚くほどはつきりしていた。顔を山崎たちの方に向け、ボーちゃんの小さな手に右手を握られたまま、自分の部下たちがそれぞれ興奮した表情で闘いにどんなふうに関与したのか話すのを黙って聞いていた。

話がイリスとギルザについてのところまで來た時、土方は初めて口を開いた。

「……………マサオと、こいつのニセモノを……………倒した？」

「はい。イリスの方はリオルにやられたんですが……………」

「……………そして、そのリオルも、死んだわけか。」

「はあ……………」

副長がわずかに眉を寄せているのを見て、山崎は不思議に思ったが、多分自分が戦闘に参加できなかったのを不満に感じているんだろうなと考えて、何も言わなかった。そして服や身体に染み着いた汚れと匂いを落とすために、真選組の陣地に設置されたいくつもの五右衛門風呂の一つへ、向かっていった。

しんのすけたちは五右衛門風呂を珍しがり、面白がった。しんのすけは

「ネネちゃんも一緒にする？」

などと言ってみさえにげんこつを食らった。

風呂から出て身体をふき、いつの間にか用意されていた浴衣を着ると、タオルは陣地から少し離れた場所に立って、深々と息を吸い込んだ。

終わったんだ　　そんな思いが、何だかすがすがしい気分と一緒に胸いっぱい広がった。

怪我にもかかわらず、銀時たちはすぐにあの穴を通ってこちらの世界に戻るように言われた。

「急で悪いんだが。」

と、近藤は本当にすまなそうに言った。

「実を言うと、あの装置はまだ不完全で不安定なんだ。だいぶ早急に修理したんでな。いつまた故障して、穴がふさがっちまうかわからないんだ。」

そう言われた銀時たちは、しばらく考えた後に答えを返した。

三日だけ、こちらにいさせてほしい。四日目の朝になったらすぐに帰るから、と。

しばし迷った後、近藤は承諾した。

銀時たちは残された三日間を、昼は幼稚園で、夜はトオルの家で、ゆっくりと身体を休めて過ごした。特に怪我のひどい土方は、刀を手が届くところに置くこともなく、ただとろとろと居眠りしていることが多くなった。……身体が抜け殻になってしまったかのように、だるかった。

土方が幼稚園にいる時は、ボーちゃんがいつもそばにいた。二人は大した会話を交わすわけでもなかったが、ボーちゃんは土方のそばにただで満足らしく、いつも近くで集めた石をしげしげと眺めたり、鼻水芸の練習をしたりしていた。土方もまた、そんなボーちゃんを追い払おうとはしなかった。

沖田はマサオをそばに連れて、バズーカの撃ち方を教えようとして山崎にたしなめられていた。一方で山崎は、しんのすけとのミントンの試合に熱中していた。

ニセモノたちの暴走のせいで、あちこちの塀や家の一部が壊されていたが、主に神楽と定春の協力のおかげで、それらは驚くべきスピードで復旧されつつあった。神楽の力に春日部の人々が目を丸くし

ているのを見守りながら、新八とお妙はのんびりと散歩したり、話をしたりとゆったりした時を過ごした。

みおりはあの騒動が終わってから、一日だけ春日部に滞在しただけで、トオルのマンションの部屋の前に置き手紙を残し、さつさと旅立っていった。 今どこにいるか、それはトオルも知らない。

テルとリンドは、なんとジャッキーたちSRIに、彼女の父親と共に引き取られることになった。

ジャッキーも計画の初期のうちに捕まり、父親と共に監禁されていたのだ。ワゴンに乗って爽やかな笑みを浮かべながら去っていたジャッキーの顔を、しんのすけは今も心の中に焼きつけていた。

「あの二人を……処分する気にはなれないの。」

ジャッキーは肩をすくめてそう言った。

「いい奴みたいだし……なんか、調べてみたら面白いことが分かるかも知れないから。」

二日たつと、土方はもうほとんど元気を取り戻していた。そして銀時と顔を合わせた途端に早速、二人でいがみ合いを始めた。

「俺がネネの夫役をやってやる。だからお前はガキ役でもやってろ。」

「何言つてんだ、てめーは犬役だろーが。」

「じゃ、じゃあ二人共ネネちゃんの夫役になればいいんじゃない？」

マサオが慌てたように口を挟んだ。助け船を出したつもりだったのだろうが、とんでもない。

「何だお前は？こいつは俺の女だ、とつと出ていかねえと斬るぞ！！」

いつもにましてすごい内容のおままごとになってしまった。

「ああ、俺を斬るだあ？てめー誰に向かって口をきいてやがる、このマヨラーが。」

「うるせえ！マヨラー関係ねえだろうが！！」

ネネもどうやって割り込んだものか、困った顔をしている。

結局その日のリアルおままごとは、銀時と土方ののしり合いだけで終結したのだった。

「……つたく、あのマヨ野郎のせいでネネとの最後の時間が楽しめなかったじゃねーか。」

自分のことは棚に上げてぶつぶつ言っていた銀時の視線が、ふと少し離れた所に座って本を読んでいるトオルの姿をとらえた。

表情が明るくなっている。 それを見て、たとえうわべでは平気そうに装っていても、今までこの少年がいかに怯え、気を張ってきていたかがよく分かった。

不意に、視線に気づいたかのようにトオルが目を上げてこちらを見た。

銀時をみとめて、その大きく黒い瞳が、揺れた。

銀時は歩み寄ると、そっと手を伸ばしてトオルの頭に置き、呟いた。

「……………悪いな。」

トオルがげんそうにこちらを見上げる。そのまなざしを、銀時はまっすぐに受け止めた。

「勝手に上がり込んできたかと思ったら、また勝手に帰ることになったよ。」

トオルは顔を歪め、またあの時のように、銀時の腰に手を回して抱きしめた。

「俺らがいなくなっても、ちゃんと俺らの活躍は見守っとい

てくれよ。……俺たちも、そうするからな。」

トオルがうなずいた。

その腕から伝わる温もりを、銀時は長いこと感じていた。

最後にみんなで記念写真を撮って、その日の幼稚園は終わりになった。

気持ちよく晴れた日だった。

野原一家の穴のところへは、しんのすけたちはもちろん、幼稚園の先生やひまわり組のほとんどの園児が見送りに来てくれた。

ネネとマサオはおみやげにと、手作りのクッキーをみんなにプレゼントした。しんのすけは何もあげるものなど考えていなかったので困ってしまったが、悩んだ挙げ句に半ケツダンスを披露して、その場を大いにわかせた。

トオルは銀時たちのそばにより、銀時の袖をつかむようにして（銀時たちは『銀魂』の登場人物である時の服装に戻っていた）一言二言、さよならというようなことを呟いていたが、それだけですぐに身をひるがえし、しんのすけたちの間へと戻っていった。

最後にボーちゃんが、彼らしくもなく何だかもじもじしながら、そつと土方に何かを差し出した。それはボーちゃんの手の平よりも大きな、一個の石だった。

「……………あの……………これ、僕が拾った、とっておきの、石。土方さんに、あげる。」

心をこめて磨いたのだろう。その石は、まるでダイヤモンドのようにきれいに輝いていた。

さて副長はどうするだろうと山崎ははらしながら見つめていたが、土方は少し首をかしげてボーちゃんを見下ろし、ふん、と言って石をつかみ取るとそのまま着のポケットに突っ込んでしまった。そして、沖田と山崎を振り返った。

「……………行くぞ。」

もう他の真選組の隊員たちは、帰ってしまっている。お妙ちゃんが帰るまではここに残ると言い張っていた九兵衛も、東城の説得に負けてつい昨日、向こうに帰っていった。

今ここにいるのは、最初にトオルと会った七人と一匹だけ
万
事屋一行に真選組の三人、そしてお妙だけだった。

土方はもう穴の縁に立ち、中を覗き込んでいる。

「まずは俺たちからだ。それからお妙さん、万事屋の順に、それぞれの家の中へ直接送り届けてもらうことになる……………俺らが飛び込んでから穴が光ったら、すぐに飛び込めよ。
総悟、後ろで何してる。」

「いや、何でもありませんぜ、土方さん。」

沖田がさりげなく、しかしやや残念そうな目つきで手を引っ込め、

土方の隣に移動した。反対側の隣には、山崎が立つ。

「じゃあな、あばよ。」

まるでついでみたいに言われた一言に、トオルがはっと顔を上げると、三人の背中が穴の中へ消えていくところだった。すぐそばを誰かが通り過ぎたので見上げると、お妙だった。

「お別れね、トオルくん。」

「お妙さん……………」

声をかける暇すらない。穴の中が光ったかと思うと、お妙は何のためらいもなく、後ろを振り返りもせず、穴へ飛び込んだ。

今度は神樂が、定春に乗って進み出た。

「定春、みんなにバイバイするアル。」

神樂に言われ、定春は尻尾を振りながらつぶらな瞳でみんなを順々に見回していったが、突然身をひるがえし、さっきのお妙と同じよ

うに脇目もふらずに穴に飛び入った。

「神楽さ……………！」

新八が眼鏡をしっかりと押さえながら、悲しげな目でトオルを、みんなを見つめた。

「悪いけど、振り返らないよ……………別れが余計つらくなるからね。」

言い置いて、新八もさっと飛び込んだ。

穴の縁に、銀髪の男が一人だけ残った。

「銀さん！」

トオルは我慢できなくなって叫んだ。しんのすけもネネもマサオもボーちゃんも、ほとんどみんながそう叫んだ。

「銀さん！」

「銀八先生！」

銀時は、てんでに泣きそうな顔をしている子供たち組の園児たちを、一人一人眺め回してニヤツとした。

ひまわり

「じゃあな、園児諸君。」

そう言いながら、こちらに背を向け、するりと穴に歩み寄る。

「いい子ならジャンプはちゃんと、買って読めよ。」

銀時が穴の中に足を踏み入れた瞬間、視界が涙にかすんできて、トオルはぎゅっと目をつぶった。

ようやく目を開くと……そこには穴がなかった。生け垣は倒れた

ままだったが、穴があつた場所にはまっ平らな地面があるだけ。大きな穴など、どこにも見えなかった。大

銀時の姿もまた、見えなくなっていた。

トオルの話から、だいぶ長いこと落ち続けるんだろうと覚悟していた銀時だったが、闇の中の落下の旅はあっという間に終わった。

「……………あ、来ましたね、銀さん。」

少し先に立っていた新八が、振り返った。その横には定春を連れた神楽の姿も見える。

彼らが今いるのは、夜の暗闇にうつすらと包まれた町だった。

春日部のようにこぎれいな、きちんと整頓された場所ではない。居酒屋やら、キャバクラやらのいかがわしげな店や、ゴミが積み上げられた路地、雑多につめ込まれたように見える家々……………。

銀時たちのいた場所

そして、これからもずっといるべき町だ。

「帰ってきましたねえ……………」

呟くと、新八が首をねじ曲げて、銀時を見た。その目には、明るいそれでいて、わずかに悲しげな光があった。

新八は、微笑んだ。

「銀さんも、そう思うでしょう？ 帰ってきたなって。」

銀時は小さくうなずいた。

そう、自分たちの居場所はここなのだ。たとえ別世界に引き込まれたとしても、そしてその世界にいる人々のことを、どんなになつかしく思っているとしても、自分たちが本当にいるべき場所、いたい場所はここに他ならない。

そのことが今になって、胸にしみ入っていくような気がした。

暗くて狭くて人気がない路地を、新八たちはゆっくりと歩いていった。

やがて、家と家の隙間から見慣れた建物が見えてきた時、新八は胸に熱いものが突き上げてくるような気持ちになった。神楽も同じなのだろう。何も言わず、ぼうつとした顔をしている。

しばらくの間、誰も動こうとしなかった。そして不意に、銀時が顔を上げた。

「ん？」

袖の中で、カサカサと何かがすれるような音がわずかにする。無造作に手を突っ込むと、大きくて固めの紙片みたいなものが手に触れた。

引っ張り出してそれを眺めた銀時の顔色が、一瞬変わった。

そしてふっと笑い、新八と神楽の方にそれを差し出した。不思議そうに受け取った二人の顔にも、驚きと、自然な笑みが浮かぶ。

それは、昨日幼稚園で最後に撮った集合写真だった。

（そうか……）

トオルが銀時の袖をつかんだあの時　　そつと中に、この写真を忍ばせたのだ。そういえば集合写真を撮ろうと言い出したのも、トオルだった……。

（…バカだな、お前は。）

銀時は心の中で呼びかけた。

（こんなことしなくても、忘れたりしねえよ。）

写真の中のしんのすけたちは、笑っている。そのそばには銀時たちがいる。　　今も、これからも、ずっと。

ようやく写真から顔を上げて、もう一度前方の建物を見やった。

二階は電気が消えているが、一階は明るい。中からがやがやと、人の声もしてくる。今夜もスナックお登勢^{とせ}は、それなりに繁盛しているようだった。

銀時は後ろに新八たちを連れて、一階の入り口の戸に近寄り、手の平でバンバンと叩いた。

「おい、帰ったぜ、ババア。なんか食うもん用意してくれ。」

声をかけると、聞き慣れたぶっきらぼうな怒鳴り声が、返事を返してきた。

三人は顔を見合わせてちよつと笑い、定春も入れるように大きく戸を開け放つと、中に入っていた。

その式拾八：別れの時には振り返るな（後書き）

最後になって、銀時たちを彼らの世界へ帰すことができた時には、私思わず胸が熱くなっていました（笑）。話自体はこれで完結ですが、最後にエピソードみたいなものと後書きを兼ねた次回予告みたいなものを書いて終わりにしたいと思います。……長きにわたって私の書く未熟な話に付き合ってくれた皆さん、評価感想を下さった皆さん、本当にありがとうございますm（――）mこれからもよろしく願います

その貳拾九：夕陽を見てると昔のことを急に思い出したりする（前書き）

始めが銀魂だったので、終わりはクレしんということに……。エ
ピローグなので、特に読まなくても差し支えはありませんが、興味
があるなら読んで下さい（爆）。

その式拾九：夕陽を見てると昔のことを急に思い出したりする

夕陽が春日部を、一面の赤に染め上げていた。

その赤い光が降り注ぐ、狭い路地の中で、カスカベ防衛隊の面々はたたずんでいた。

「ねえ、風間くん…」

「ん？」

トオルは何だか焦点の合っていないような瞳で、少し離れた所の地面を見つめている。ネネが重ねて聞いた。

「何で急に、ここに来ようと思ったの？」

ああ、というような声を出して、トオルは少し笑った。

「…ここで、初めて銀さんたちと会ったんだよ。」

「そう…」

ネネは息を吞んでトオルを見つめた。マサオもボーちゃんも、普段

は全く空気を読まないしんのすけまで、みんな黙りこくってトオルの横顔を見つめていた。

今、トオルの視線の先には、初めて会った時の銀時たちの姿が見えているのかも知れない。

夕陽が傾いていく中、トオルはそばに銀時たちのいない、ぽっかりと心に穴の開いたような寂しさを感じていた。

銀時たちと共に暮らしたのはわずか一ヶ月にも満たない間だったというのに、その時にできた思い出はなんと多いことか……。彼らとここで出会ってからのことを一つ一つ、頭の中で確かめるようにしてトオルは思い出していった。

不意に出会い、また不意に別れることになってしまった人たち。これからは実在しない二次元の存在として、漫画やテレビを通してしか見ることでできない人たち……。もう二度と、ああやって実際に会うことはあるまい。

今銀時たちは、どこで何をしているのだろう。どんな思いで、どんな暮らしを営んでいるのだろう。……。もうその人生に、自分が関

わることはないのだ。そう考えると、ちくりと針で刺されたような鋭い痛みが、胸の中にうずいた。

（僕は結局、あの人たちに助けてもらったことしかできなかった…）

それでもいつか、トオルが彼らを思うのと同じような気持ちで、銀時たちが自分のことを思い返してくれる時が来るかも知れない。

本来なら決して交じり合うこともなく、知り合うことすらなかったはずの人たちが、運命の糸にたぐり寄せられたかのように引き合うことがある。……しかしそれでも結局別れ、自分たちの生活へと戻らなければならない時は必ずやって来る。銀時たちは向こうの世界に、そして自分たちは春日部でのいつも通りの生活に、帰らなくてはならなかったように。

（…ああ、またみんなでごはんを食べれたらな。）

夕陽を見上げて、トオルは微笑んだ。

オレンジ色の光が作る五つの影が、長く、長く、路地の中に伸びていた。

その式拾九：夕陽を見てると昔のことを急に思い出したりする（後書き）

これにてクレしんと銀魂の融合作品は、一応の終了です。

…さて、次は後書きと次回作の発表というわけですが、ここで一つ、勝手に思いついたことがあります。

私一人で回想をグダグダ述べるのもアレなので（笑）、読者の皆様から質問を取りたいと思っております。

ただし質問の内容はこの作品に限るもので、例えば

・あなたは何歳ですか？

みたいな個人情報とか（爆）次回作についての質問には答えません。それと答える質問は先着10個までです。だから質問は、一人一個ということをお願いします。…まあそれだけ質問が来るとも限りませんけど。

多分後書きを書き始めるのが明後日ぐらいになるので、期限は短いですが、明日の真夜中までとします。日付が変わるまでならオッケ―です。感想・評価の所に送っちゃって下さい。

…なんか急ですいませんが、皆さんのご協力を、どうぞよろしくお願いします（礼）。

そして次回作の情報も、どうぞお楽しみにっ！

終わり…これでしょっしょ！っちょっとすくくない？（前書き）

意外な事実が明らかになります！……………あれ、後書きなのに前書き書いていいんだろっか（爆）。

終わり…これでちょうど30!？ちょっとすくくない？

終わった……。何だか、そんな気持ちでいっぱいです。

書き始めた当初は、どのようなストーリーになるのか詳しいことは何も考えていませんでした。本当に、その時その時に頭に浮かんできた内容を書きつつあっていただけです。こんなふうに進めていった小説を完結させることができたのも、ひとえに皆様のおかげだと思います。

……さて、最終話の後書きで募集した質問ですが、やはり急過ぎましたね……。というわけで、とりあえず集まってきた質問だけでも取り上げさせていただきたいと思います。

まずヴァイスロンド様のご質問『リオルはなぜ風間くんを憎むのか?』ですが、残念ながらここではお答えできません……。最初っからごめんなさい(^^;)

実はこの質問……。次回作のメインテーマともなってくるのです……。 (いきなりネタバレ御免)。

さて、では次へ参りましょう。

鯨に太鼓様からのご質問 『映画での二セモノはコンニャクでできたクローンだったが、この小説ではどうだったのか?』

確かに、あまりこの部分については追求していなかったのも、戸惑った方も多かったかも知れません。

魔虞蛇博士は、ニセモノたちに力と意志を与えたわけですが、そのニセモノたちを始めに作り出したのはもちろん、アミーゴスズキです。よって博士もニセモノ製造のやり方に関しては、基本的にアミーゴスズキと同じ手段をとっているのです。

つまりニセモノを作り出す技術はアミーゴスズキのもの、それにさらに改造を施したのが魔虞蛇博士、といえば分かりやすいでしょうか。

つまりニセモノたちは、基本的にはコンニャクローンと同じものだというわけです。

……………分かりにくいですか？だったらすみません（汗）。

そして、次は最後の質問（早っ！）。

B様のご質問 『26話がハリー・ポッターと秘密の部屋のラストに似過ぎてないか？』

……………はい、確かにまるで意識しなかったと言ったら嘘になります。ごめんなさいm（――）m
私の小説には、私の好きな本の内容が反映されてしまうことがあるので……………確かにあれはそのまんま過ぎでしたよね。次回は気をつけようと思ってます。

というわけで、質問コーナー、あっという間に終わっちゃいました（笑）。

ではこれから、本格的な後書きへと移ることにいたしましょう。

銀魂とクレしんを融合させるという、無謀な挑戦を行ったわけですが、そもそもこの小説を書き始めたのが去年の12月。なんとセクター試験の直前、受験シーズンの真っ只中！その時点で既に、かなり無謀な試みだったというわけです。

それでもちゃんと大学に入れたというのですから……これから何が待っているかと思うと、何だか逆に怖くなってきます（汗）。

そして、執筆の中で大変だったことといえば　もちろん執筆自体が大変でしたが　何と言っても、一話ごとのサブタイトルを考えることでした。

銀魂の漫画やアニメのものと同じように、教訓ばいものにしようと考えたのですが、それを毎回ひねり出すのが大変で………おかしいのも多々あったと思います。

話番号には古い漢数字を使うというような工夫もしてみました。

そんな中、感想を下さる皆様の言葉がどれほど助けになったことか………最後にはほとんど一日一回のペースで更新することができましたが、お待たせしたこともあったと思います。本当に感謝の気持ち

ちでいっぱいです。

それではそろそろ、皆様お待ちかね（？）の次回作発表に移りたいと思います。

次回作は本作品の続編となる作品です。皆様お気づきになっているかと思いますが、本作ではいくつかの謎が、まだ残ったままになっています。

例えば、

・魔虞蛇博士はニセモノたちに、どのようにして力と意志を与えたのか？

・定春に呼びかけてきた女の声は、誰のものなのか？

・ルビーが土方の顔を見て、思い浮かべた男とは誰か？

などです。

それらの中でも重要なのが、ヴァイスロンド様もおっしゃっていた

この謎。

・リオルはなぜ、風間くんを憎んでいるのか？

そしてもう一つ……。

皆さん、リオルの闘いのシーンからラストまで読んで、何か引っかけりませんでしたか？

リオル、イリス、ギルザは倒されました。リンドは味方だったと分かりました。ところが、これら二セモノたちの中枢の中で一人だけ、闘いに参加していない者がいます。

……そう、ルビーです。

彼女はその式拾参の回想シーン以来、闘いに顔を出すどころか、ぶつつりと姿を見せていません。ルビーは一体どうなってしまったのか？

爆発に巻き込まれてリオルたちの後を追ったのか？それとも……。

これらの謎を全て解き明かすのが、次回作の続編となるわけです。

そしてもう一つ、大変重要なお知らせがあります。

本作同様、次回もしんのすけたちと銀さんたちが大暴れするのですが……実はもう一つのアニメが、次回作には参入します。

そう、なんと三作品のクロスオーバーとなるのです！

でも驚くことはそれだけではありません（ニヤリ）。

……話は変わりますが、私が書いているもう一つの小説、『クレしん&ドラえもんズ』の小説を読んでらっしゃる方はいますか？

あれももう完結済みですが、最終話の後書きで、続編を書くということをちらりと言いました。

そして、本作『クレしん&銀魂』の続編に参入するのは、なんと……

ザ・ドラえもんズの皆さんです。

もう分かりましたか？（イラストときたらすいません）

そうです、次回作では『クレしん&銀魂』と『クレしん&ドラえもんズ』の二つの小説が、融合するのです！！！（一人で興奮）

……正直言つて、これらの小説を書き始めた時にはそんな発想はありませんでした。でもこの三つのアニメを融合させたら、面白いかも知れないぞと思ったのです。

よってドラしんの方も気になる終わり方をしていますが、それも次回作品の伏線だと思っただけならば……………。

それでは、あらすじ紹介と題名発表へ。

あらすじ

事件は終わったと、誰もが思っていた。 しかし本当の事件は、まだ始まってすらいなかった……………。

『銀魂』の世界ではここ最近、クレヨンしんちゃんが放送休止になっていた。気になった銀時たちは近藤にこねて、彼らを春日部に送ることになった魔麈蛇博士の二次元転送装置をひそかに借り、春日部へと再び訪れる。

再会を楽しみにしていた彼らを待ち受けていたのは、胸をえぐられ

るようにつらい知らせだった……………。

「トオルが……………死んだ？」

あまりのことに茫然自失とし、為すすべを知らぬ銀時たち……………しかし彼らがトオルの部屋を訪れた時、突如事態をひっくり返すような出来事が起こる。

「トオルは生きてるよ！」

トオルの机の引き出しから飛び出してきた黄緑色のロボットは、出てくるなりそう叫んだ。しかもトオルは何者かに、命を狙われているという。そして隠されたトオルからの手紙を読んだしんのすけたちは、愕然とする。あの事件はまだ、終わっていないのだ……

…！

姿を消したトオルの後を追ひ、『銀魂』メンバーたちとネコ型ロボ
ット、そしてカスカベ防衛隊の、決死の攻防が始まる！！

……とまあ、こんな感じです。なんか映画のあらすじ紹介みたい
になっちゃった……（笑）。

ちょっとした気になるなら、読んでいただきたいです。今回の始め
辺りでは、実際に風間くんが登場するシーンがほとんどないですが、
物語はやはり、彼を中心に回っていきます。しんのすけも大活躍さ
せたいと思ってます。

またお登勢とか桂とか、新しい銀魂キャラも多々登場します。ドラ
えもんズでは、ドラパンなども出す予定です。

前作で残された謎を知りたい方、どうぞ次回作にご期待を！！！！

……あ、そういえば、題名を発表してませんでした（爆）。

銀魂は一応江戸時代の話なので、『過去』。
クレしんは『現代』。

ドラえもんズは『未来』、というわけで…。

『過去』？『現代』？『未来』！？大爆風を呼ぶ三つともえ大合戦！……！

内容もめちゃくちゃなら、題名もめちゃくちゃであります（汗）。

近々、連載開始の予定です。こんな私、虹純晶の小説を、これから
もよろしく願いますっ！

4月24日（木） 虹純晶

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1846d/>

～銀魂しんちゃん～ 大嵐を呼ぶ！踊る暇がありゃ映画を救え！！

2011年8月3日01時46分発行